

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第140集

的 場 遺 跡

平成12年度 都市計画道路沼津三島線緊急地方道路整備事業(街路B)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第140集

的 場 遺 跡

平成12年度 都市計画道路沼津三島線緊急地方道路整備事業(街路B)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



的場遺跡出土土器集合写真

序

今回報告する的場遺跡の調査は、都市計画道路沼津三島線緊急地方道路整備事業（街路B）に伴い平成12年12月から平成13年3月にかけて実施された。本遺跡が所在する長泉町は、伊豆の玄関口に当たり、古来より交通上の要衝に位置する。町の中央を流れる黄瀬川は御殿場市に源を発し、現在はほぼ直線的に狩野川に注いでいる。

本遺跡は、この黄瀬川が形成した河岸段丘上に立地し、周辺には「土狩五百塚」と呼ばれるように多くの後期古墳群が分布する。中でも下土狩地域は伊豆凝灰岩製の家形石棺を採用する無袖式の大型石室墳が点在し、駿河東部地域内でも有力な古墳群である。駿河中部地域の首長墓である賤機山古墳にも伊豆凝灰岩製の家形石棺が置かれており、当地域との首長間交流があつたと考えられる。

調査の結果、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡が発見された。残存状況は良好ではないが、堅穴住居跡23軒、掘立柱建物跡7棟が検出された。隣接地域でも同様の住居跡が発見されており、集落規模としては比較的大規模であったと考えられる。特に、カマドの構造にバラエティがあり、集落内でカマド構築に関する規範が存在するとともにカマド構造の時期的な変遷が辿れるのではないかと考えられる。また、カマド内から手捏土器、柱穴より鉄鎌が出土しており、これらの出土状況はカマド祭祀あるいは住居の建築儀礼を示唆するものと推定される。さらに遠江型甕や信濃地域からの搬入須恵器、甲斐型壺などが出土しており、遠隔地との交流が活発であったと考えられる。

本遺跡をはじめとした最近の調査によって、黄瀬川流域で古墳時代後期～平安時代の集落の実態が明らかにされつつあり、古墳群と集落の結合関係や奈良・平安時代の集落の性格を考える上で貴重な資料を提供できたと思われる。

最後に、調査並びに報告書作成に当たっては、静岡県教育委員会文化課、静岡県沼津土木事務所、長泉町教育委員会等の関係諸機関各位の御支援・御協力に感謝するとともに、現地調査に参加した調査員・作業員の労苦をねぎらいたい。

2003年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例　言

1. 本書は、静岡県駿東郡大泉町下土狩字薄原所在の的場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都市計画道路沼津三島線緊急地方道路整備事業（街路B）に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成12年12月～平成13年3月まで実施した。資料整理は平成13年10月～平成14年3月・平成14年12月～平成15年3月まで行った。

3. 調査体制は次のとおりである。

平成12年度 所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 伊藤友雄

総務課長 杉木敏雄 会計係長 大橋 薫

調査研究部長 佐藤達雄 調査研究部次長 及川 司

調査研究二課長 篠原修二

調査研究員 勝又直人 井鍋誉之

平成13年度 所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 条田徳幸

総務課長 本杉昭一 会計係長 大橋 薫

調査研究部長 佐藤達雄 調査研究部次長 栗野克己 及川 司

調査研究二課長 飯塚晴夫 調査研究員 井鍋誉之

平成14年度 所長 斎藤 忠 副所長 飯田英夫 常務理事 条田徳幸

総務課長 本杉昭一 会計係長 大橋 薫

調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長 栗野克己

調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三 調査研究員 井鍋誉之

4. 現地での基準点測量、景観写真撮影、写真測量を㈱バスコに委託した。

5. 本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

S B 竪穴住居 S D 满状遺構 S F 土坑 S H 挖立柱建物 S X 不明遺構

S P 小穴

6. 遺物実測図の縮尺は土器、金属製品、石製品などすべて1/3で統一した。

7. 鉄製品の保存処理は当研究所保存処理室（室長 西尾太加二）が実施した。遺物の写真撮影は当研究所写真室担当者が行った。

8. 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管する。

9. 本書の執筆は、調査研究員井鍋誉之が行った。

10. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

目 次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	3
第Ⅱ章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3節 基本層序	12
第Ⅲ章 遺構と遺物	14
第1節 1区の調査	14
1 1-1区の概要	14
竪穴住居跡	14
掘立柱建物跡	55
2 1-2区の概要	56
3 1-3区の概要	56
竪穴住居跡	56
掘立柱建物跡	65
土坑	67
第2節 2-1区の調査	74
1 2-1区の概要	74
土坑	74
溝状遺構	74
第3節 3-1区の調査	86
1 3-1区の概要	86
不明遺構	88
第4節 攪乱・包含層出土遺物	89
1 須恵器	89
2 土師器	89
3 土製品	93
第Ⅳ章 まとめ	107
第1節 遺構と遺物の変遷	107
1 集落の変遷	107
2 的場遺跡における土器の推移	111
第2節 東駿河地域の古墳時代後期～平安時代の鉄製品	117
1 竪穴住居内における鉄製品の所有	117
2 竪穴住居内出土の鉄鎌	118
3 出土状況からみた鉄鎌	118
第3節 手捏土器を用いるカマド祭祀	119
1 竪穴住居内出土の手捏土器	119
2 手捏土器の分類	121
3 手捏土器を用いるカマド祭祀	122

挿図目次

第1図	長泉町位置図	1	第49図	1-1区 SB19出土遺物実測図(3)	52
第2図	遺跡位置図	2	第50図	1-1区 SB20出土遺物実測図	52
第3図	路線配置図	3	第51図	1-1区 SH-1実測図	53
第4図	グリッド配置図	6	第52図	1-1区 SH-2実測図	54
第5図	周辺地質図（沼津市史）	7	第53図	1-1区 SH-3実測図	55
第6図	古墳分布図	9	第54図	1-2区・1-3区 全体図	57
第7図	奈良・平安時代遺跡分布図	11	第55図	1-3区 SB1実測図(1)	58
第8図	基本土層図	13	第56図	1-3区 SB1実測図(2)	59
第9図	1-1区 全体図	15	第57図	1-3区 SB1カマド実測図	60
第10図	1-1区 SB1実測図	16	第58図	1-3区 SB1出土遺物実測図(1)	61
第11図	1-1区 SB1出土遺物実測図	17	第59図	1-3区 SB1出土遺物実測図(2)	62
第12図	1-1区 SB2実測図	18	第60図	1-3区 SB2実測図	63
第13図	1-1区 SB2出土遺物実測図	19	第61図	1-3区 SB2出土遺物実測図	63
第14図	1-1区 SB3～6実測図	19	第62図	1-3区 SH-1実測図	64
第15図	1-1区 SB3実測図	20	第63図	1-3区 SH-2実測図	65
第16図	1-1区 SB3出土遺物実測図	21	第64図	1-3区 SH-3実測図	66
第17図	1-1区 SB4・5実測図	22	第65図	1-3区 SH-4実測図	67
第18図	1-1区 SB4出土遺物実測図	23	第66図	1-3区 土坑実測図(1)	68
第19図	1-1区 SB6実測図	24	第67図	1-3区 土坑実測図(2)	69
第20図	1-1区 SB6出土遺物実測図	25	第68図	1-3区 土坑実測図(3)	70
第21図	1-1区 SB7・8実測図	26	第69図	1区 ピット・土坑内出土遺物実測図	70
第22図	1-1区 SB7出土遺物実測図	27	第70図	2-1区 全体図	75
第23図	1-1区 SB8出土遺物実測図	28	第71図	2-1区 土坑実測図(1)	76
第24図	1-1区 SB9カマド実測図	28	第72図	2-1区 土坑実測図(2)	77
第25図	1-1区 SB10実測図	29	第73図	2-1区 土坑実測図(3)	78
第26図	1-1区 SB10出土遺物実測図	30	第74図	2-1区 SD1実測図	79
第27図	1-1区 SB11実測図	31	第75図	2-1区 SD2実測図	80
第28図	1-1区 SB11出土遺物実測図	32	第76図	2-1区 SD3～5実測図	81
第29図	1-1区 SB12・13実測図	33	第77図	2-1区 SD6～8実測図	82
第30図	1-1区 SB12出土遺物実測図	33	第78図	2-1区 SD9～12・14実測図	83
第31図	1-1区 SB13出土遺物実測図	34	第79図	2-1区 SD13・15・16実測図	84
第32図	1-1区 SB14実測図	35	第80図	3-1区 全体図	86
第33図	1-1区 SB14出土遺物実測図	36	第81図	3-1区 SX-1実測図	87
第34図	1-1区 SB15実測図	37	第82図	3-1区 SX-1出土遺物実測図	88
第35図	1-1区 SB16実測図	38	第83図	1区・2区 出土須恵器実測図	90
第36図	1-1区 SB16出土遺物実測図	39	第84図	1区・2区 出土土師器実測図(1)	91
第37図	1-1区 SB17実測図	40	第85図	1区・2区 出土土師器実測図(2)	92
第38図	1-1区 SB17出土遺物実測図	41	第86図	1区 放乱出土土製品実測図	93
第39図	1-1区 SB17～20実測図	42	第87図	竪穴住居跡変遷図	108
第40図	1-1区 SB18・19実測図	43	第88図	竪穴住居主軸方位図	109
第41図	1-1区 SB18カマド実測図	44	第89図	的場遺跡におけるカマド変遷模式図	110
第42図	1-1区 SB18出土遺物実測図(1)	45	第90図	的場遺跡における土器の推移(1)	113
第43図	1-1区 SB18出土遺物実測図(2)	46	第91図	的場遺跡における土器の推移(2)	115
第44図	1-1区 SB19掘り方実測図	47	第92図	奈良・平安時代穴住居土製品集(東駿河地域)	117
第45図	1-1区 SB19カマド実測図	48	第93図	富士市東平遺跡129号住居鉄製品出土状況図	118
第46図	1-1区 SB19出土遺物実測図(1)	49	第94図	三島市反畠遺跡1号住居手捏土器出土状況図	119
第47図	1-1区 SB19出土遺物実測図(2)	50	第95図	手捏土器分類図	121
第48図	1-1区 SB18・19出土遺物実測図	51	第96図	手捏土器集成図(東駿河地域)	121

挿表目次

表1 調査工程表	5	表14 土器観察表(3)	96
表2 遺跡地名表	11	表15 土器観察表(4)	97
表3 1区 穫穴住居跡計測表	71	表16 土器観察表(5)	98
表4 1区 挖立柱建物跡計測表	71	表17 土器観察表(6)	99
表5 1-1区 土坑計測表	72	表18 土器観察表(7)	100
表6 1-3区 土坑計測表	72	表19 土器観察表(8)	101
表7 1-1区 ピット計測表	73	表20 土器観察表(9)	102
表8 1-3区 ピット計測表	73	表21 土器観察表(10)	103
表9 2-1区 土坑計測表	74	表22 土器観察表(11)	104
表10 2-1区 溝状遺構計測表	85	表23 土器観察表(12)	105
表11 2-1区 ピット計測表	85	表24 土器観察表(13)	106
表12 土器観察表(1)	94	表25 石製品計測表	106
表13 土器観察表(2)	95	表26 鉄製品計測表	106

図版目次

図版1 1 1-1区 全景（西より）	2 1-1区 全景（南東より富士山を望む）
図版2 1 1-1区 穫穴住居全景（西より）	2 1-1区 全景（北東より）
図版3 1 1-1区 SB1全景（南より）	2 1-1区 SB1カマド完掘状況（南より）
図版4 1 1-1区 SB2全景（西より）	2 1-1区 SB2カマド全景（南西より）
図版5 1 1-1区 SB3全景（西より）	2 1-1区 SB3カマド全景（南より）
図版6 1 1-1区 SB4・5全景（北より）	2 1-1区 SB4カマド全景（北より）
図版7 1 1-1区 SB6全景（南より）	2 1-1区 SB6カマド全景（南より）
図版8 1 1-1区 SB9全景（南より）	2 1-1区 SB9カマド全景（南より）
3 1-1区 SB9カマド袖内手捏土器出土状況（南より）	
図版9 1 1-1区 SB10全景（南より）	2 1-1区 SB10カマド全景（南より）
図版10 1 1-1区 SB11カマド全景（南西より）	2 1-1区 SB13全景（南西より）
図版11 1 1-1区 SB14全景（南より）	2 1-1区 SB14カマドと貯蔵穴（南西より）
図版12 1 1-1区 SB16全景（南より）	2 1-1区 SB17全景（南より）
図版13 1 1-1区 SB17カマド全景（南東より）	2 1-1区 SB18～20全景（南より）
図版14 1 1-1区 SB18貯蔵穴内土器出土状況（東より）	2 1-1区 SB18カマドと貯蔵穴（南東より）
3 1-1区 SB18カマド内土器出土状況（南より）	4 1-1区 SB18床面土器出土状況（南東より）
5 1-1区 SB19全景（南より）	
図版15 1 1-1区 SB19カマド全景（南西より）	2 1-1区 SH-1完掘状況（南より）
図版16 1 1-2区 全景（南東より）	2 1-3区 全景（西より）
図版17 1 1-3区 SB1完掘状況（南より）	2 1-3区 SB1カマド全景（南東より）
図版18 1 1-3区 SB2完掘状況（北西より）	2 1-3区 SH-1・SH-2全景（西より）
図版19 1 2-1区 全景（東より）	2 原分古墳全景（富士山を望む）
図版20 1-1区 SB1～4出土土器	
図版21 1-1区 SB4・SB6出土土器	
図版22 1-1区 SB7・SB9・SB11・SB14出土土器	
図版23 1-1区 SB14・SB16～18出土土器	
図版24 1-1区 SB18・SB19出土土器	
図版25 1-1区 SB19・20・1-3区 SB1出土土器	
図版26 1-3区 SB1・1-3区 SX-1・攪乱出土土器	
図版27 1区 攪乱出土土器	
図版28 1区 攪乱出土土器・鉄製品・石製品・土製品	
図版29 1 石製支脚集合写真	2 1-1区 SB19土器集合写真

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

静岡県東部地域は、新幹線を利用すれば首都圏から1時間以内の距離であり、近年、ベッドタウン化が進んでいる。人口も増加の一途を辿っており、そのような状況に伴う沼津—三島間を結ぶ主要地方道三島富士線（根方街道）は、幅員狭小のうえ、線形も悪く、慢性的な交通渋滞を引き起こし、歩行者の安全を脅かしている。そのような問題解消の一環として計画されたのが、都市計画道路沼津三島線である。

都市計画道路沼津三島線は、三島市市街地中心部と沼津市北部市街地を結ぶ主要地方道三島富士線のバイパス道路として整備するものであり、路線計画は三島駅北口から黄瀬川を渡り、沼津市岡一色に至る道路である。この道路は、静岡県東部地域の中核都市である沼津市と三島市を結ぶ地域骨格道路として位置づけられ、交通の緩和による安全確保と環境の改善が期待される。

その路線箇所内において、平成11年10月～12月に長泉町教育委員会により遺跡の確認調査が行われ、その結果、本格的な調査の必要が生じた。これを受けて平成13年度に調査委託者の静岡県沼津土木事務所と調査指導機関の静岡県教育委員会、地元の長泉町教育委員会及び当研究所による遺跡の取り扱いについての協議が実施された結果、静岡県教育委員会の指導のもと当研究所が発掘調査を実施する運びとなつた。なおI区以東の調査区は長泉町教育委員会が発掘調査を実施した。

第2節 調査の方法

平成11年度に長泉町教育委員会が実施した確認調査の結果を受けた、的場遺跡の本調査は、東西に長く、南北に狭い範囲を対象とし、大きく3箇所に分けられる。調査区は東側から1区、原分古墳の東側部分を2区、JR御殿場線の西側部分については3区とした。特に1区は道路や生活排水路などで区切られているため、さらに細分し、東から1-1区、1-2区、1-3区に分けた。その対象地区内にグリッド設定を国土座標に基づき、10m四方の方眼を設定した。国土座標値は旧日本測地系を用い、グリッドは、数字とアルファベットの組み合わせで表示した。北西隅（X=-97340, Y=36190）を起点とし、北から南にかけてA・B・C、西から東に向かって1・2・3とした。

表土除去及び排土処理作業はバックフォー及びクローラーダンプを使用し、包含層・遺構掘削はすべて人力による手掘りで行った。また、調査で排出された土は、路線内において仮置きし、調査終了後埋め戻した。

遺構平面図の作成は、光波測定器を使用し、縮尺1/20を基本とした。竈の平面図など詳細図が必要な場合は、縮尺1/10で実測を行った。また、住居の完掘状況の段階で全体測量及び地形測量はバスコに委託し、写真測量を行った。遺物の取上げは光波測定器を使用し、座標（X・Y）標高（H）を記録した。ただし、土器片・石製品は、残存状態が良好なもの



第1図 長泉町位置図



第2図 遺跡位置図 (1/25,000)

の以外は、各グリッドの出土層別に、一括して取り上げるか、遺構を単位として取り上げた。遺物番号は原則1点ごと付けたが、グリッド、遺構一括で取り上げた遺物は取り上げた単位で付番し、遺構の標記は、例言に示したとおりである。なお、今回1区の調査において調査区全域に攪乱が及んでいるため包含層及び攪乱から出土した遺物はすべて一括で取り上げた。

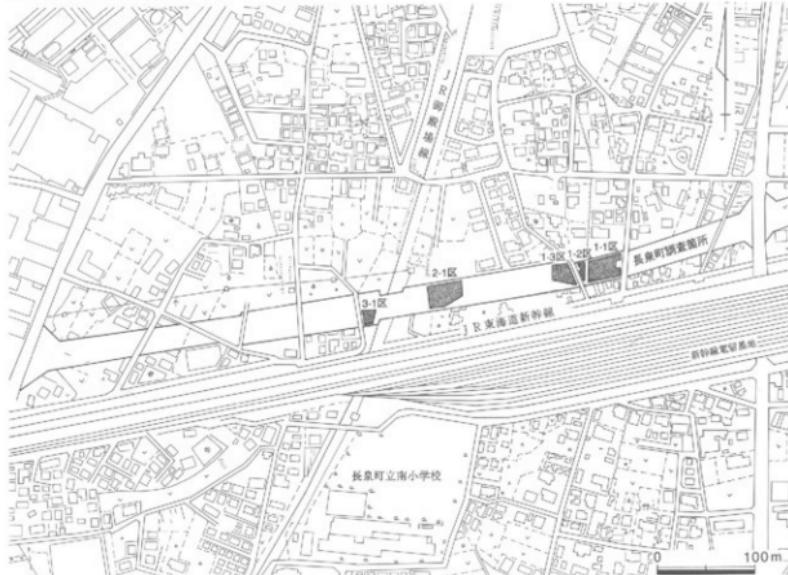
遺構写真撮影は4×5判（モノクロ・カラーリバーサル）を基本とし、作業工程記録用に35mm判（カラーネガ）を使用した。遺構全景写真是、ローリングタワーとラジコンヘリを使用して撮影した。現地調査と併行して現地事務所にて遺物洗浄、遺物注記作業等の基礎整理作業を行った。

第3節 調査の経過

平成12年度 的場遺跡本調査

平成12年12月1日より準備工に入り、作業員の確保、資機材の準備等を行った。また、1区と2区の間には旧駿豆線があった場所であり、そこにプレハブ、駐車場を設置した。また、周辺は住宅地が密集しているため、調査区内に防塵ネットを設置した。

12月第1週より2区から調査を始め、バックフォーとクローラーダンプを使用して、表土除去及び路線内へ排土の搬出を行った。表土除去後、包含層であるIII層及びIV層を人力で掘削し、下層のV層上面で遺構検出を行い、併せて調査区内に基準杭、グリッド杭を打設した。遺構は古墳時代後期～奈良時代の土坑、溝状遺構、小穴を確認した。西側には原分古墳が現存しており、周辺で同様の横穴式石室墳が想定されたが、確認されなかった。また、当路線内には原分古墳が含まれており、今後、移築復原のための調査が予想される。そのため、原分古墳の現況の地形測量を㈱バスコに委託し、古墳調査の基礎資料である現況の墳丘測量図(1/50)を作成した。



第3図 路線配置図 (1/5,000)

I区は舗装された狭い生活道路、側溝により区切られているため、分割して調査を行った。排土の搬出にクローラーダンプを使用するため、道路、側溝に鉄板等を敷いて崩落防止に努めた。2月第2週よりII区東半部分の調査に取りかかり、バックフォーによる表土除去、クローラーによる路線内へ排土搬出を行った。ベルトコンベアを調査区に設置し、包含層であるIII層・IV層を人力で掘削した。調査区全域に擾乱が及んでいるため遺構の検出は困難であったが、I-1区では竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡3棟、土坑、ピットを検出した。I-1区の調査終了後、I-2区、I-3区の調査に3月第1週よりとりかかった。人力で包含層を掘削し、I-3区では竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟を検出した。このようにI区は、7世紀後半～9世紀前半にかけての集落跡であることが確認された。3月第3週にはラジコンヘリによる景観写真撮影、写真測量を行い、撮影後、竈等の解体作業を行った。同時にJR御殿場線西側部分の3区の調査を行い、狭い調査範囲であったが、不明遺構1基を検出した。奈良時代以降のものと推定され、周辺には集落遺跡が広がっていたと考えられる。

また、プレハブ内において出土した土器の洗浄、注記作業、現地で撮影した写真整理等の基礎整理作業を現地調査と併行しながら行った。3月第4週には調査区の埋め戻し、フェンス、防塵ネットを解体し、遺物の搬入、資機材の片づけを行い、3月23日で全調査を終了した。

平成13年度　的場遺跡資料整理・原分古墳確認調査

11月からの場遺跡の資料整理作業を開始し、12月から1ヶ月間、原分古墳の墳丘規模の確認調査を実施した。確認調査は平成12年度に作成した1/50の原分古墳の測量図を元に、石室の主軸に合わせ南北に幅1mのトレチナ4本を設置した。実際は、樹木が植えられているため、若干、位置をずらしながらのトレチナ設定となった。トレチナ調査は、作業員4名による掘削で行われた。確認調査の結果、墳丘は径23～24mの円墳で墳丘の高さ1.9mが残存しており、石室規模は長さ約10m、石室開口部での幅2m、高さ約1.8mの無袖式の石室と推定される。これは東駿河地域でも首長クラスの大型無袖式石室であるといえる。資料整理作業は報告書に掲載する遺構図の版下作成作業を行い、遺物は土器の接合・復元作業を中心に実測可能な土器を抽出し、土器・鉄製品・石製品実測作業を実施した。併せて鉄製品の保存処理作業を行った。

平成14年度　的場遺跡資料整理

12月より報告書刊行に向けて遺構図・遺物図のトレース作業、遺物写真撮影作業、原稿執筆、編集作業を中心に行った。これらの一連の作業が終了したものについて遺物はテンパコに収納し、報告書に掲載された遺物は挿図番号順に、それ以外は登録番号順に収納した。併せて収納台帳を作成し、必要に応じて検索できるようにデータベース化をはかった。



1-1区　遺構検出作業



土器注記作業

表1 調査工程表

月	平成11年度			平成12年度			平成13年度					平成14年度					
	10	11	12	12	1	2	3	10	11	12	1	2	3	12	1	2	3
的場遺跡 確認調査	<hr/>																
的場遺跡 本調査				<hr/>													
原分古墳 確認調査									<hr/>								
的場遺跡 資料整理									<hr/>					<hr/>			



第4図 グリッド配置図

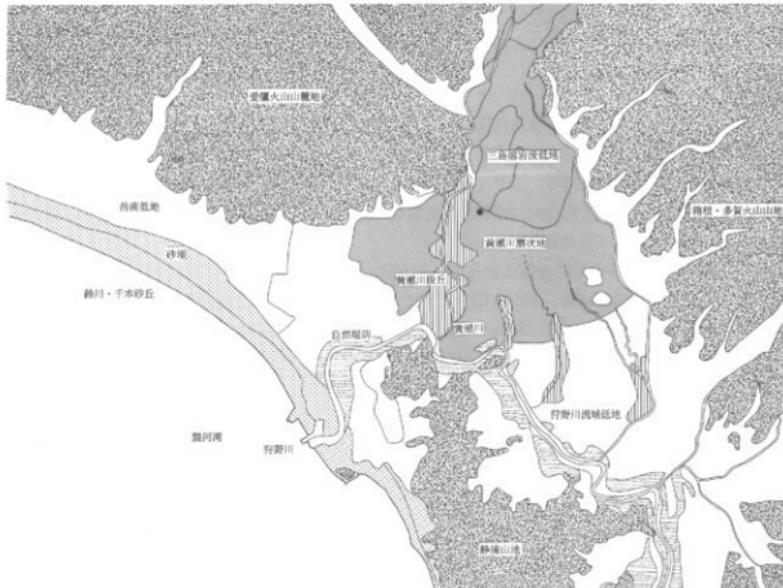
第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

的場遺跡が立地する長泉町は、東に境川をもって三島市、北に裾野市、西に沼津市、南に竹原を境に清水町に接し、駿東郡の南部に属する。長泉町全体の形は西北から南東にかけて細長い紡錘形をなしている。

富士山の南に位置する愛鷹山は、富士火山帯に属し、その発生は古く、第四紀洪積世前半代の火山活動によるものといわれている。南東麓山頂から派生した尾根が、背稜部が平坦部に移行して、末端部に近づくと平坦な丘陵を形成している。このあたりは、愛鷹ロームが最も堆積する地域であり、丘陵上には主に旧石器時代から古墳時代前期の集落が分布する。

黄瀬川扇状地は、愛鷹山と箱根山麓に挟まれ、南の静浦山系に囲まれた地域である。14000年前に新期富士火山の噴火による玄武岩質の溶岩により扇状地の原形が形成されたものとされ、裾野市平松付近を扇頂とし、清水町柿田を末端とする広大な扇状地で、北半部は溶岩性、南半部は砂礫性の扇状地となっている。黄瀬川扇状地の表層を構成しているのは、富士火山起源の御殿場泥流堆積物であり、その表層が、本遺跡の遺構検出面になっている。近年の調査で黄瀬川の河岸段丘上に立地する長泉町大平II遺跡において竪穴住居跡が1軒検出され、弥生時代前期末の土器が出土している。そこで検出された炭化物の¹⁴C年代値は 2350 ± 25 (山形2001) を示しており、現段階では当遺跡が扇状地上の最古の遺跡であると考えられる。



第5図 周辺地質図 (沼津市史より一部改変1999)

この扇状地の東縁には大場川が南流しており、扇状地の東方には末端部より湧水が溢流し、河川化した御殿川、源平川がある。そして、扇状地中央部には駿河国と伊豆国との国境となった境川が貫流して、鳥状に並列する地形を成し、この小河川の微高地上には弥生時代中期～平安時代の集落跡が数多く分布する。

黄瀬川は、富士山南東麓の標高520m付近に流れを発し、上流では箱根山麓に沿って南流するが、次第に西寄りに流路を変え、下流では愛鷹山の山麓に沿って流れている。狩野川に合流するまで約30kmの流路であり、河床に溶岩が露出し、滝や渓谷などの名勝が多い。この黄瀬川の鮎塗の滝以南は、明瞭な2段の河岸段丘が発達しており、上位の段丘と下位の段丘の比高差は1～3m程度ある。これらは黄瀬川の流路跡を示しており、この段丘の縁辺部に分布する土狩古墳群は、「土狩五百塚」と呼ばれ、東駿河地域最大の群集墳地帯となっている。水利に恵まれず、農耕に不向きであったため、生活の場より墓域として利用されたことを物語っている。

的場遺跡はその黄瀬川扇状地上に立地し、標高36～34mの範囲に位置する。地形は全体的に南東方向に向かって低く傾斜している。特に原分古墳西側には黄瀬川の段丘面が発達しており、3m程度の比高差がみられる。原分古墳はこの縁辺部に位置し、単独で立地している。周辺の古墳時代後期～奈良時代の集落遺跡の分布状況は、的場遺跡よりも標高の低い南側に多く展開しており、これは黄瀬川扇状地の先端部に近く、小河川の開析作用により生じた起伏に富む水利に恵まれた地形を好んで選地したものと考えられる。

第2節 歴史的環境

的場遺跡は調査の結果、古墳時代後期～平安時代にいたる集落遺跡であることが判明した。当地域が黄瀬川流域の古墳群に含まれることから、ここでは後期古墳群と周辺の奈良時代～平安時代の集落を中心概観していく。

古墳時代

三島・沼津市域に分布する古墳時代後期の横穴式石室を主体とする古墳は、地形で区分すれば大きく黄瀬川流域、箱根山西麓、愛鷹山南東麓、静浦山地に分布している。中でも黄瀬川の段丘縁辺部に分布する土狩古墳群は「土狩五百塚」と呼ばれていたように東駿河最大の群集墳地帯とされる。この地域の石室の特徴は無袖式と地下式構造で開口部に段を有する石室がみられ、石室内に組合式箱式石棺又は家形石棺を採用していることである。

中でもJR御殿場線下土狩駅周辺に分布する下土狩古墳群は、最も密集した群構成を成し、副葬品も優品が多い。その古墳群には、家形石棺を有する下土狩西1号墳、山の神道古墳、新屋後一号墳、組合箱形石棺を有する土狩長塚古墳、御蔵上一号墳、御蔵上三号墳などが存在する。

下土狩西1号墳は、昭和40年に宅地造成中の緊急調査であり、古墳の規模、構造等について細かな計測はできなかったようであるが、約20mの円墳であるとされる。主体部は無袖式の横穴式石室で、石室長10m、幅2mを測る。石室内では家形石棺が安置され、棺身で長さ2.5m、幅1.1m、高さ0.6mを測る。棺蓋の一部が残存しており、切妻式屋根をした家形石棺とされる。出土遺物は豊富で、頭椎大刀(1)、銀装大刀(1)、鐵鎌(20)、轡(1)、輪鎧(2)、刀子(3)、丸玉(11)、棗玉(1)、切子玉(1)、耳環(5)、須恵器は摘み蓋(1)、有台付环(1)、無蓋短脚高环(1)、平瓶(2)、脚付罐(1)、短頸壺(1)、フラスコ形瓶(2)、土師器碗(1)、环(1)など多くの副葬品が出土し、築造時期は7世紀前半に比定される。このように墳丘・石室規模が大型で、石室内に家形石棺を有し、副葬品も豊富で、優秀なものを含むことから、この古墳の被葬者は黄瀬川段丘上の古墳群の中でも、階層的に上位に位置づけられている。



第6図 古墳分布図 (1/10,000)

また、昭和44年には本宿上の段古墳群の3基の石室が調査された。1号墳は石室長5.45m、幅1.25mを測り、周溝を有する直径15mの円墳である。2号墳は石室残存長7.05m、幅1.2mを測り、石室内には組合せ箱形石棺が2基検出されている。3号墳の石室は、残存状況は悪く、周溝の一部を検出するととどまっている。遺物は1号墳より耳環(1)、真珠(1)、鉄鎌(4)、大刀(1)、須恵器は壺蓋(1)、壺身(5)、短頭壺(1)、魁(2)、横瓶(1)、提瓶(1)、甕(2)が出土している。2号墳は、耳環(4)、勾玉(7)、算盤玉(1)、管玉(6)、切子玉(7)、小玉(10)、丸玉(9)、鉄鎌(8)、刀子(1)、鎧(2)、大刀(1)、鉄具(2)、帶金具(6)、須恵器は高壺(2)、平瓶(1)、台付長頸壺(1)、壺身(1)、壺蓋(1)で、土師器壺(2)、などが出土している。築造時期は1号墳、2号墳共に6世紀後半～末葉と考えられ、当地域で最初に石室が導入された古墳である。

家形石棺は、静岡県東部を中心に9例ほど確認され、不明確なものを含めると12例が存在する。この12例のうち6例が黄瀬川段丘上の古墳群に集中している。また駿河山古墳、駿河丸山古墳からも伊豆凝灰岩製の家形石棺を採用しており、当地域と石材を産出する田方平野南部地域そして駿河中部地域と3地域による交流があったと考えられる。

原分古墳はJR下土狩駅から南へ500m、東海道新幹線と御殿場線が交差する地点にあたり、黄瀬川の河岸段丘上に立地する。県遺跡地図によれば原分古墳は、的場古墳群の一群に属し、長泉南小学校付近を中心とし長泉町指定文化財である麦原塚古墳、的場1号墳～4号墳の合計6基からなる古墳群とされる。平成12年度に原分古墳の墳丘規模等の確認調査が行われ、墳丘はおよそ23～24mの円墳で墳丘裾に外護列石を有することが判明している。現況で天井石は5枚確認されており、石室長約10m幅2m高さ1.9mと推定され、駿河東部地域を代表する大型の石室であるといえる。

奈良・平安時代

長泉町内における黄瀬川扇状地上の奈良・平安時代の遺跡は少なく、今回調査を行った的場遺跡、竹原遺跡、天神原遺跡などが挙げられる。特に天神原遺跡では平成6年に長泉町教育委員会による調査が行われ、住居跡6軒、「大」「長」「東口」「円」と記された墨書き土器、須恵器窯、転用窯、壺Gなどが出土している。遺跡の約1km東には伊豆国分寺が存在し、西側には西海道という地名も残っていることからこの周辺には伊豆国分寺に通じるルートが存在していると思われ(佐野2001)、伊豆国と駿河国の国境付近の交通上の要衝に天神原遺跡は立地していると考えられる。

三島市市街地周辺での大規模な調査はあまり行われていないが、三島大社境内遺跡では古墳時代後期の竪穴住居跡2軒が検出されている。他にも周辺で平安時代の竪穴住居跡も発見されており、7世紀後半～10世紀にかけて散在的に小規模な集落遺跡が発見されている。

田方平野では流域ごとに集落が存在し、御殿川流域には三島市中島上舞台・下舞台遺跡が存在する。中島上舞台遺跡では竪穴住居44軒、掘立柱建物跡7棟が検出され、金沢遺跡は古墳時代～平安時代の住居跡が35軒確認されている。大場川流域には老町田遺跡が挙げられ、古墳時代前期～平安時代にいたる集落遺跡で23軒の住居跡が検出されている。

黄瀬川下流域の主な遺跡は沼津市の豆生田遺跡、下石田原田遺跡、台畠遺跡が挙げられる。豆生田遺跡は弥生時代中期～奈良時代後半の遺跡で古墳時代後期の住居跡4軒、奈良時代の住居跡11軒が検出されている。特に竪穴住居は長さ5.8mの正方形プランを有し、当地域では大型住居の部類に属する。

台畠遺跡は黄瀬川と狩野川の合流する周辺に位置し、古墳後期から平安時代前期の集落遺跡である。その北側には銅鏡、水瓶などを有する宮下古墳、西に1kmの地点に日吉庵寺が存在し、地形的条件から交通上の要衝に位置していると考えられる。

沼津市下石田原田遺跡は黄瀬川右岸に位置し、竪穴住居跡150軒、掘立柱建物跡96棟が検出されている。6間×5間の総柱の掘立柱建物跡などの大規模な建物群が存在し、土馬、鈴、帶金具、獸足付短頭壺などが出土していることから官衙に関連する集落遺跡と位置づけられている。周辺には御幸寺遺跡、上の



第7図 奈良・平安時代遺跡分布図 (1/50,000)

表2 遺跡地名表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	の場遺跡	9	市ヶ原廃寺	17	道下瓦窯	25	桶田遺跡
2	竹原遺跡	10	上才原遺跡	18	金沢遺跡	26	長伏六反田遺跡
3	天神原遺跡	11	奈良柄川向遺跡	19	中島上舞台遺跡	27	外屋遺跡
4	四通り遺跡	12	玉川塚田遺跡	20	中島下舞台遺跡	28	瀬戸川遺跡
5	長塚遺跡	13	古木遺跡	21	柏根田遺跡	29	上長沢遺跡
6	伊豆国分寺	14	鶴喰遺跡	22	閼宮川向遺跡	30	台郷遺跡
7	三島大社境内遺跡	15	御園川遺跡	23	安久川崎原遺跡	31	豆生山遺跡
8	国分尼寺	16	壹町山遺跡	24	多呂ノ前遺跡	32	高田第六天遺跡
						33	日吉廢寺
						34	杉崎町遺跡
						35	下石田原田遺跡
						36	二ツ谷遺跡
						37	山王台遺跡
						38	御幸町遺跡
						39	藤井原遺跡
						40	清水瓦窯

段遺跡などの拠点的な集落が分布しており、これらも官衙関連の集落遺跡とされる。また、下石田原田遺跡で「東」、藤井原遺跡で「南」、千本遺跡で「西」といった方位を示した墨書き器が出土していることから官衙を補完する機能が分散していた可能性がある。

第3節 基本層序

的場遺跡の地形を概観すると2-1区の標高36.5mあたりでここを頂点に西に東に緩やかに低く傾斜している。2-1区では住居跡や建物跡は検出しておらず、遺構の密度は低い。西側には原分占領が存在しており、古墳は見晴らしの良い高位の段丘面に選地していたと考えられる。古墳時代後期～奈良時代の集落域である1区は3区より比高差0.7m以上あり、1区と2区の間は旧駿豆線の線路跡地で削平されてしまつて不明であるが、2区と1区には異なる段丘面が存在していた可能性もある。つまり、高位の段丘面には古墳群、東側の低位段丘面には集落域と領域が分けられていたとも考えられる。この調査区の東側では長泉町が調査を行い、同時期の集落が展開している。これらの範囲を合わせると東西150mの範囲で集落は広がっていると推定される。3区では調査面積は狭かったが、不明遺構1基が検出され、奈良時代の土器が出土していることから、別の集落域が広がっていると考えられる。

I-1層は2-1区で確認されており、畑作による耕作土である。I-2層は宅地造成に伴うものであり、基本的にはI-1層と同一の黒褐色土である。II層は2-1区で厚く堆積しており、近世～近代にかけての陶磁器片がわずかに採集されている。III層は3-1区、2-1区、1-1区で確認され、奈良時代の遺物を中心に包含層を形成している。IV層は1区から2区にかけて堆積しており、古墳時代後期の遺物を中心に包含層を形成している。特にI-1区は40～50cm程堆積しており、東側に向けて厚く堆積している。遺構面はV層上面で検出した。V層は砂質土をベースにしており、非常にしまりが弱く、乾燥すると遺構が自然に崩壊するような状態であった。VI層はしまりが強く、岩盤状になっており、いわゆる黄瀬川のマサ上である。

扁状地に堆積する基本層序の各層の特徴は以下のとおりである。

I-1層 耕作土

畑作による耕作土である。粘性・しまりは弱く、黒褐色を呈する。

I-2層 捣乱土

宅地造成に伴う捣乱土である。1-1区、1-3区で頗著に認められ、調査区の人半がV層まで掘り込まれていた。

II層 黒褐色土

近世から近代にかけての遺物が採集されている。粘性・しまりは弱い。

III層 黒褐色粘質土

奈良時代の遺物包含層である。1-1区、2-1区、3-1区で認められる。粘性・しまりは弱い。

IV層 黒褐色砂礫土

古墳時代後期の包含層に相当する。1-1区、1-3区で厚さ30～40cm程堆積しており、しまりは弱い。

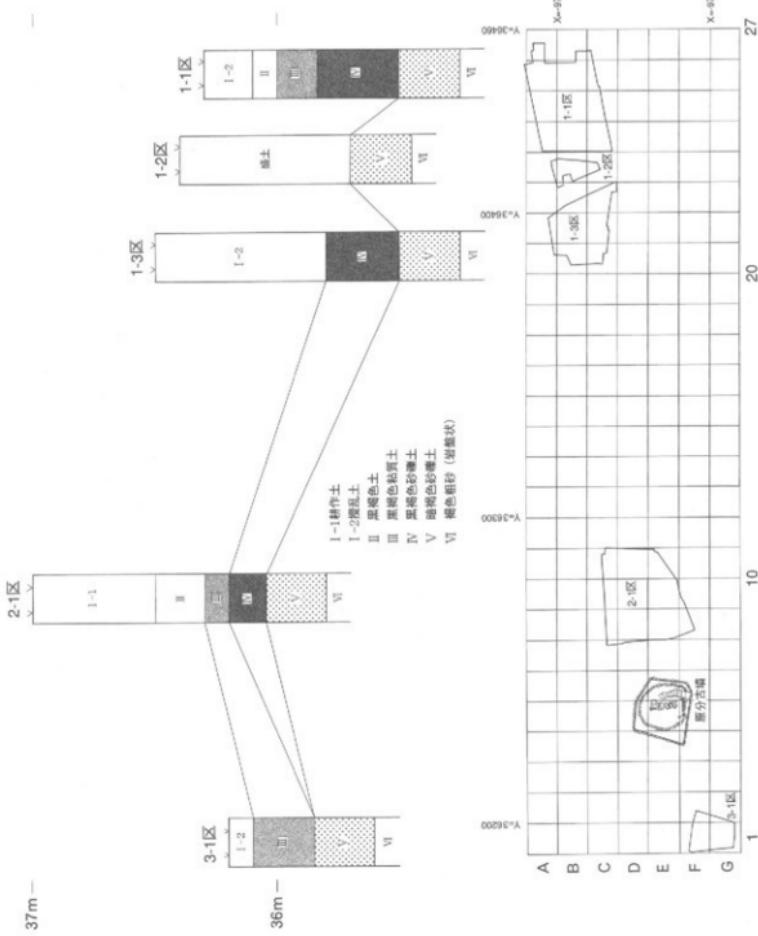
V層 暗褐色砂礫土

遺構面はV層上面で検出した。粘性・しまりは弱い。赤色、橙色粗砂を基に小砾が多量に含まれる。

VI層 褐色粗砂土（岩盤状）

しまりは強く、岩盤状になっている。大型の砾をやや含む。

37m—



第8図 基本土層図

第III章 遺構と遺物

第1節 I区の調査

1 1-1区の概要

的場遺跡では便宜上調査区を3区に区分し、道路・水路部分に挟まれた調査区については1-1区I-2区とさらに分割して調査を行った。I-I区では東西幅35m、南北幅21mの狭い調査範囲であったが、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡3棟、土坑、ピットを検出した。竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの所属時期は7世紀後半～9世紀初頭に及び、おおよそ2軒～4軒ほどの切り合い関係が認められる。検出面の標高値は35.8～35.1mであり、原分古墳の存在する2区の高位段丘面より比高差は最大で1mほどある。全体的に地形は東へ向かって低く傾斜していることから、I段低い段丘縁辺部に集落が立地していたと考えられる。1区東側部分では長泉町が調査を行っており、これを合わせると東西約150mの範囲にわたり集落が展開していたと考えられる。

今回の調査における遺構検出面は第V層上面である。その上面である第IV層の黒褐色粘質土やⅢ層の黒色土は遺物包含層であるが、調査前は宅地であったため、調査区全域にわたり攪乱が及んでおり、基本土層が残る部分はごく一部であった。そのため遺構数の把握は困難であったが、包含層より出土した遺物はテンバコにして30箱ほど出土しており、本来は竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構がより多く存在したと考えられる。

竪穴住居跡は調査区全域に及び、特に、A25・26～B26にかけて複数の住居跡が切り合いながら密集している。7世紀代の住居跡は8軒確認している。5m前後の規模を有し、カマドは北壁に設置される。主軸方位は北に約10°～30°西に傾いており、住居配置に一定の規制があったことが伺える。8世紀代の住居跡は前代よりやや小型化を呈し、カマドは北壁、西壁、東壁に設置されるのが特徴である。8世紀前半に比定される住居跡は少なく、8世紀後半以降になると再び住居数は増加している。I区東側では長泉町が発掘調査を行っている。詳細は不明であるが、奈良時代から平安時代の住居が確認されており時期差により、集落内で移動している可能性がある。

カマドは袖に構築材として礫を使用し、7世紀代には片方の袖に球胴状の甕を構築材として入れる例がみられる。8世紀代にはカマドの焚き口付近の両袖に1個ずつ礫を使用するもの、両袖に複数の礫を入れているものもあり、次第に礫を多用するようになる。石材は砂岩と黄瀬川流域で採取される玄武岩が認められる。支脚はすべて焼成を受けているが、石材は砂岩で面取り加工されている。

貼床はやや砂質の黒褐色土であり、厚さはおよそ5cm前後である。この貼床を除去して柱穴等の検出作業を行ったがSB1、SB18でそれぞれ1個検出したにすぎず、その他は検出されなかった。

掘立柱建物跡は3棟が確認されているが、規模がわかるものはSH-1とSH-2のみである。SH-1はSB14を切って構築しており、時期は8世紀後半以降と推定される。この他の掘立柱建物跡の所属時期は不明であるが、竪穴住居跡の検出例に比して少ない傾向があり、セット関係は見出しあり。

土坑、ピットなどの遺構はSH-1やSH-2の周辺、A26グリッド近辺で検出されており、覆土は1層の黒褐色土で粘性・しまりは低い。覆土による時期差は見出せず、遺物は土師器、須恵器の細片であり、時期を限定することはできないが、古墳時代後期以降～平安時代の所産であろう。

竪穴住居跡

SB1 (第10図 図版3)

SB1はA27グリッドで検出され、調査区の最北東部に位置する。住居の北壁と西壁の一部を検出した

第9図 1-1区 全体図 (1/200)

23

25

26

27

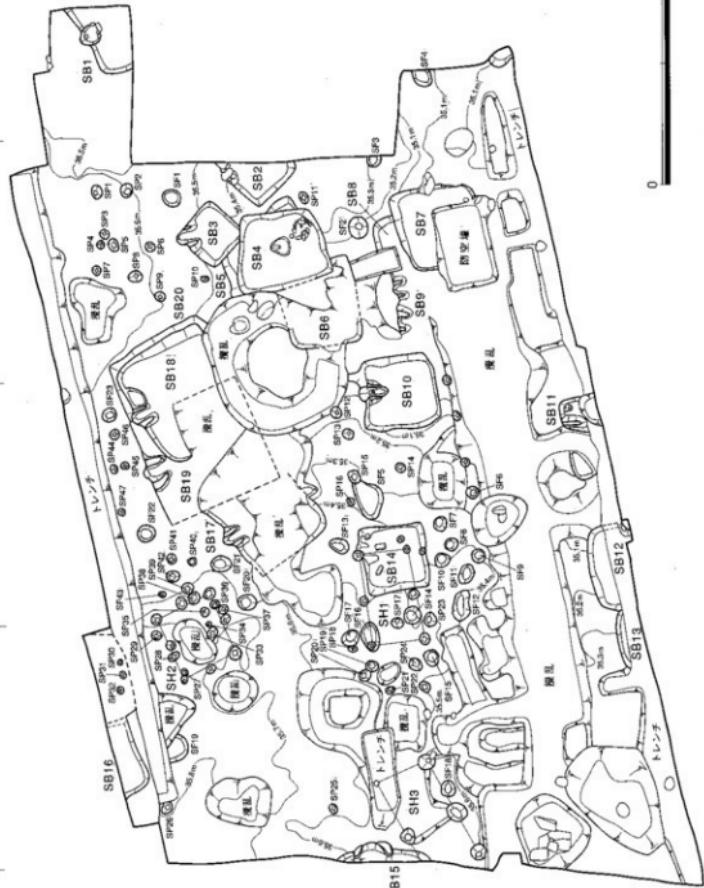


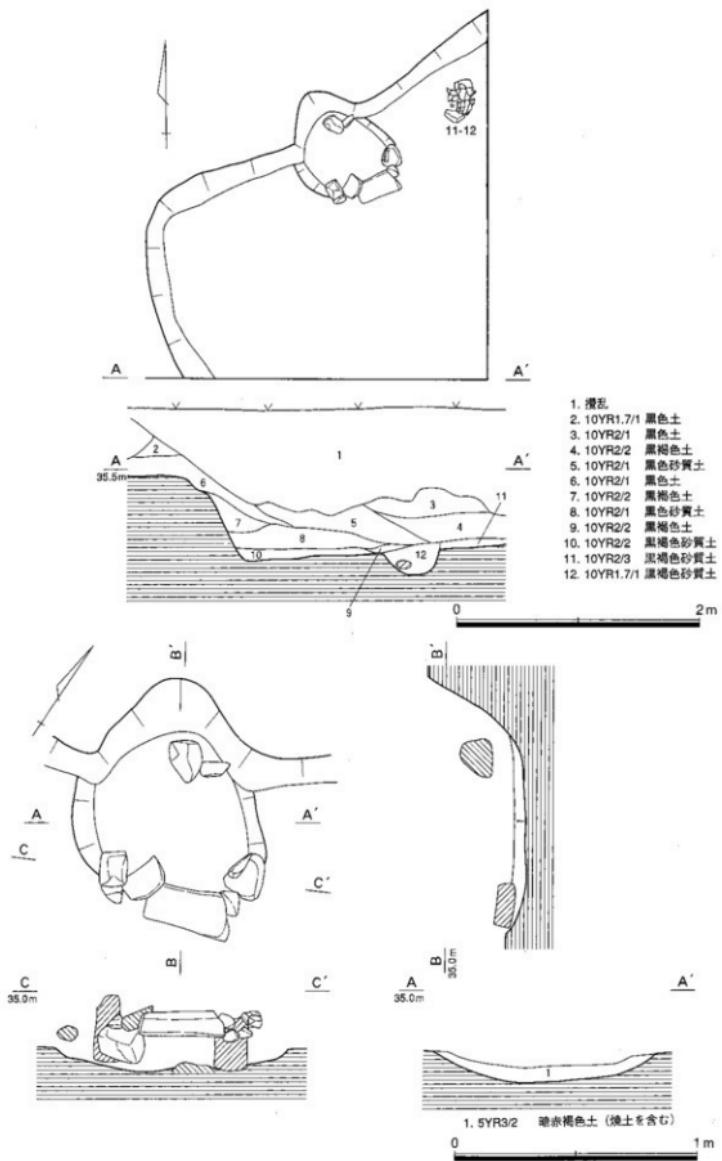
C

B

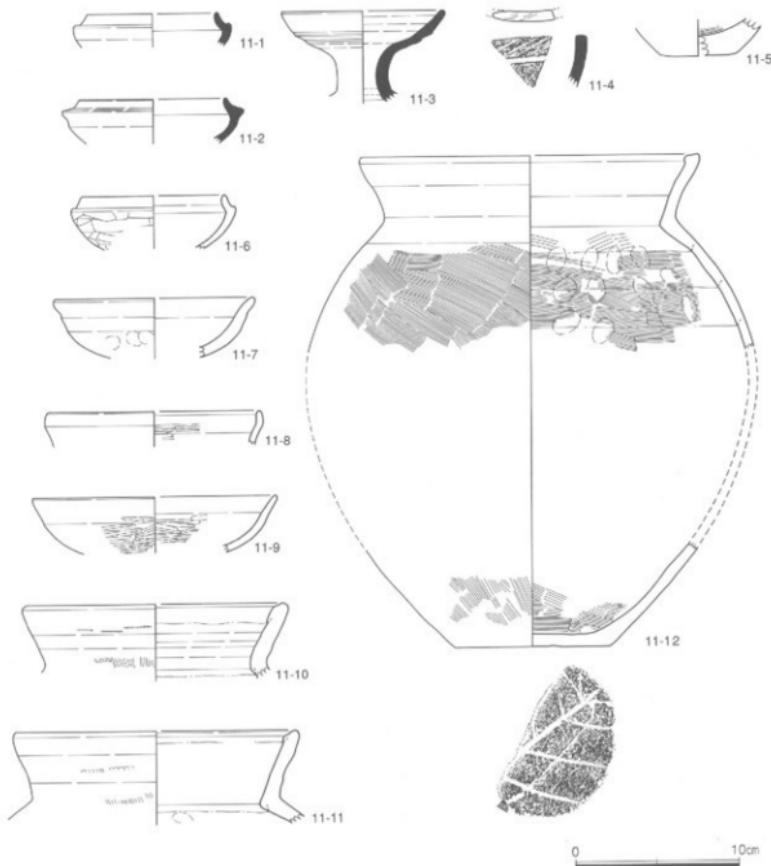
A

Y=36460
Y=36450
Y=36440
Y=36430
Y=36420
X=97340
X=97350
X=97360





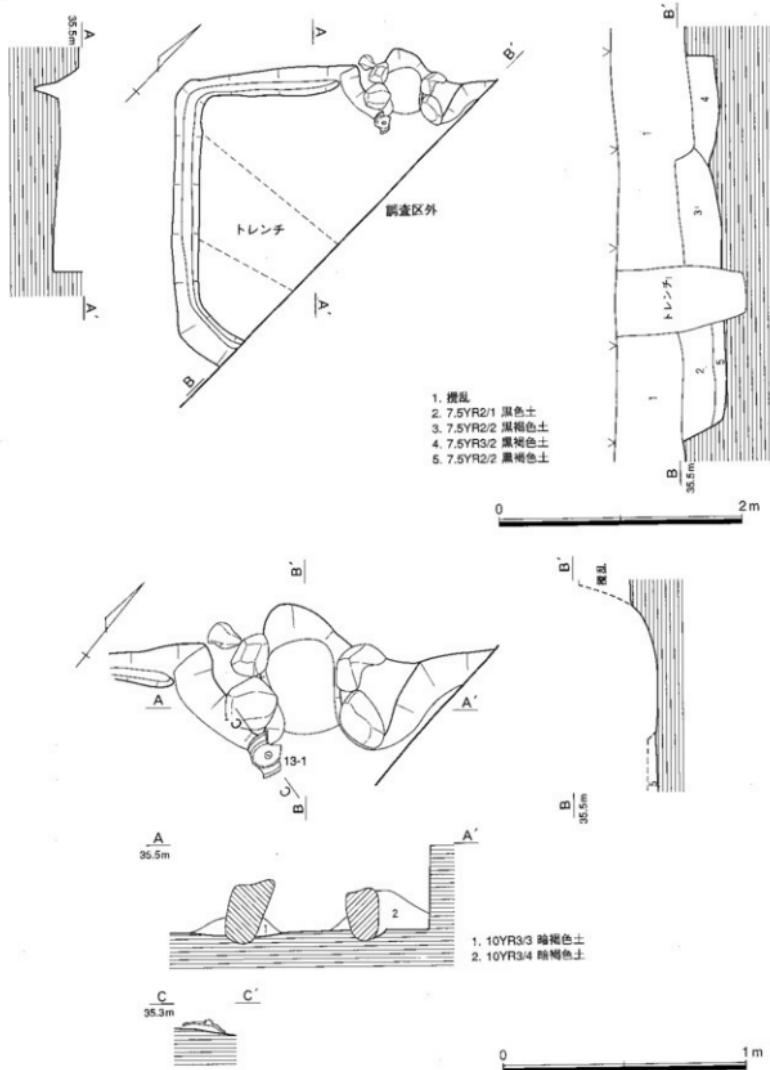
第10図 1-1区 SB1実測図 (1/40・1/20)



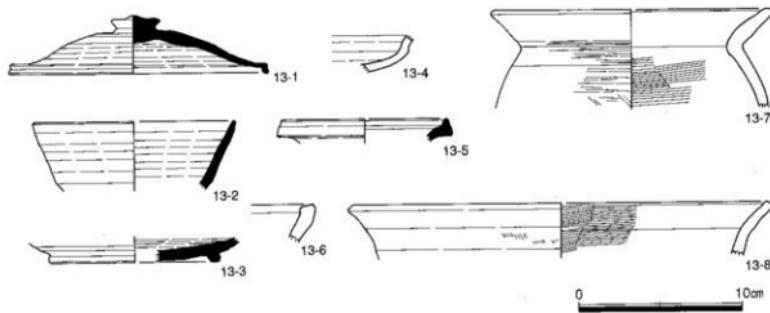
第11図 1-1区 SB1出土遺物実測図 (1/3)

にすぎない。主軸方位はN-33°-Wを示し、カマドは北壁に設置される。住居の平面形は方形と推定される。規模は残存長2.5×2.6mである。壁溝、貯蔵穴は確認していない。貼床は厚さ5cmほど認められるが、あまり堅緻ではない。主柱穴は平面的に確認していないが、南壁の土層にかかっている。カマド構築土は流出しており、袖石、天井石が残存していた。これらの石材はすべて砂岩である。床面からはカマドの東側脇で駿東型の甕が出土している。この遺物から所属時期は7世紀中葉～後葉と考えられる。SB1出土遺物（第11図1～12 図版20）

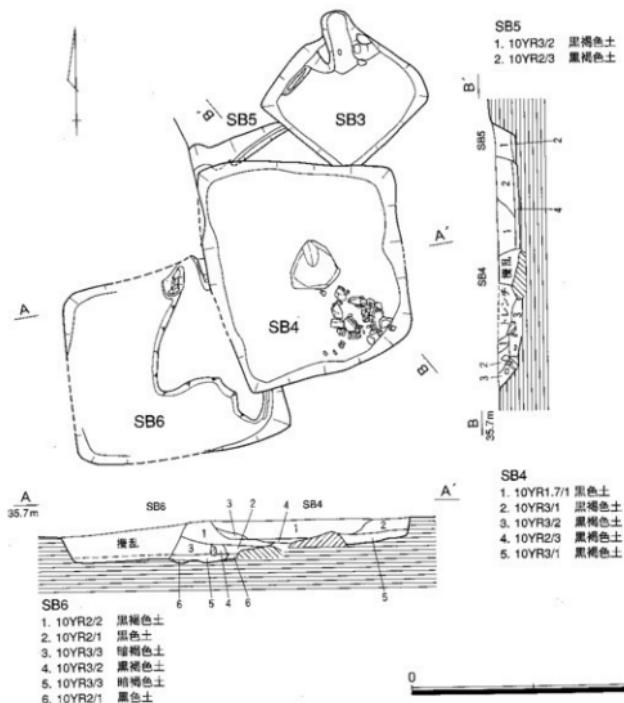
11-1・2は須恵器壺身である。3は須恵器甕である。4は3の甕の颈部と考えられるが、端部は摩耗しており、底面が確認される。土器片の側面部を砥石として転用したものであろう。6は須恵器を模倣した土師器壺身で、外面はケズリ調整が施される。7は口縁部が横位のナデ調整によりやや外方向に屈曲する。8・9は屈曲口縁環で、内外面ともに黒色化しており、ミガキ調整が認められる。10～12は駿東型の



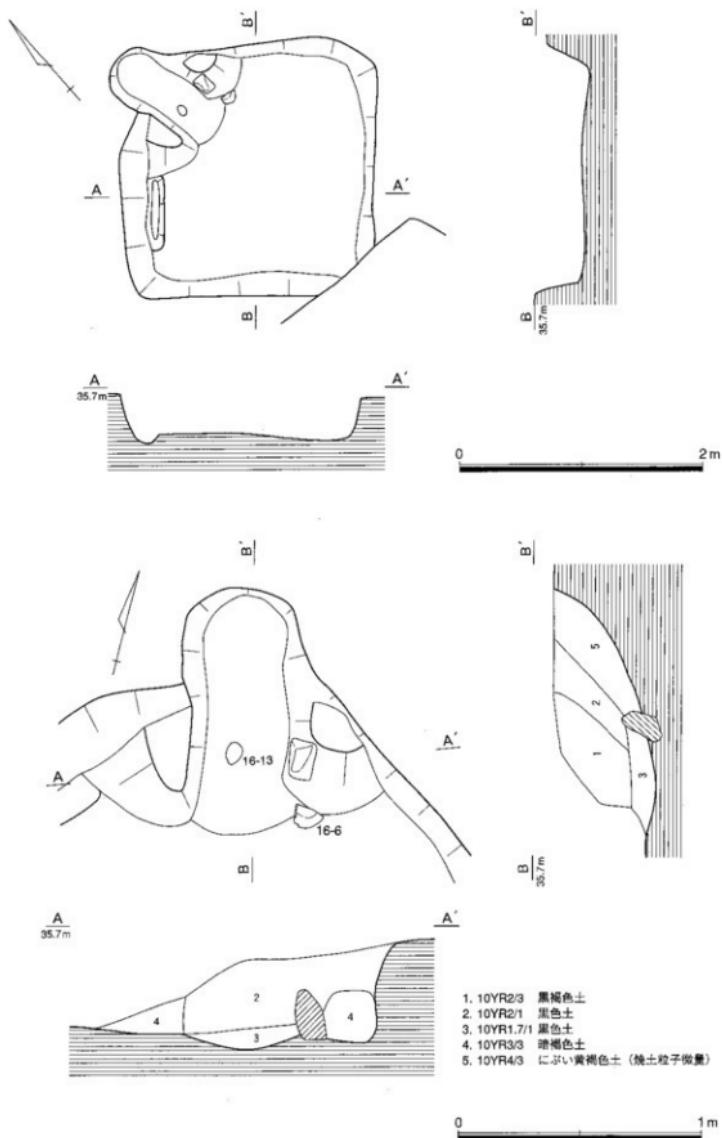
第12図 1-1区 SB2実測図 (1/40・1/20)



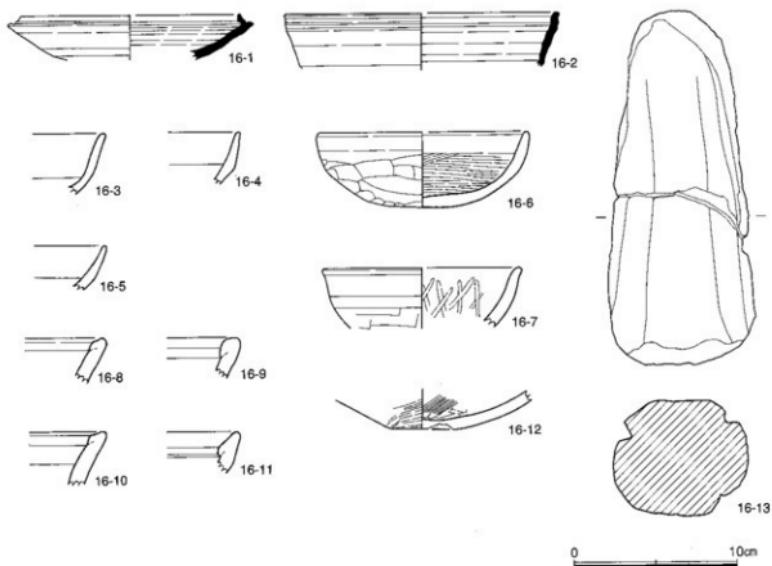
第13図 1-1区 SB2出土遺物実測図 (1/3)



第14図 1-1区 SB3~6実測図 (1/80)



第15図 1-1区 SB3実測図 (1/40・1/20)



第16図 1-1区 SB3出土遺物実測図 (1/3)

球胴状の壺である。12は胸部中位よりやや上に最大径がくるものであり、外面はハケ調整、内面は横位のハケ調整が施される。端部は内側に肥厚し、突出する。

SB2 (第12図 図版4)

SB2はB26グリッドで検出され、調査区の東端に位置する。住居の西壁、北壁の一部を検出したにすぎない。主軸方位はN-38°-Wを示し、カマドは北壁中央に設置されていたと推定される。住居の平面形は正方形と考えられ、主柱穴は確認していないが、壁溝は西壁で確認している。深さ0.15mでV字形を呈する。カマドは袖部が残存しており、構築材に礫が使用される。遺物はカマド前方の床面から須恵器摘み蓋が出土している。時期は8世紀中葉と推定される。

SB2出土遺物 (第13図1~8 図版20)

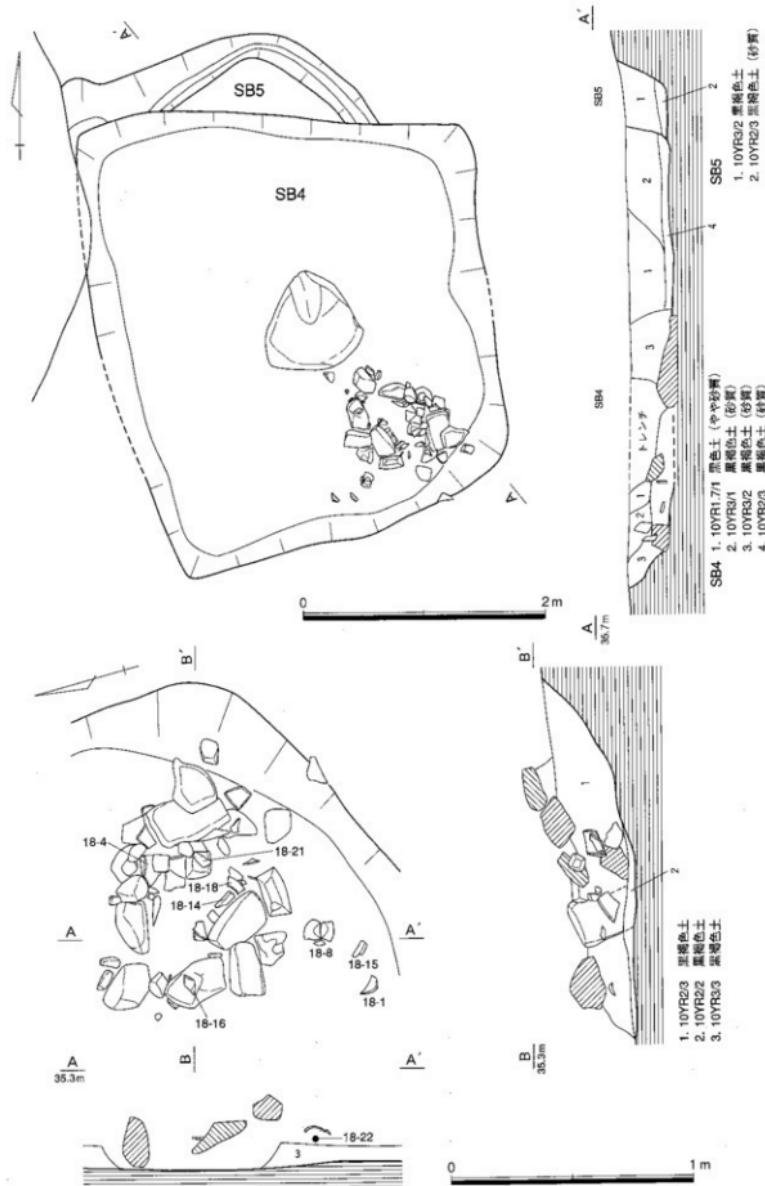
13-1は須恵器の摘み蓋である。2は須恵器の壺である。3は須恵器の高台付壺の底部である。4は土師器の壺である。5は須恵器の壺の口縁部である。6は球胴状の壺で7・8は長胴状の壺の口縁部である。

SB3 (第14・15図 図版5)

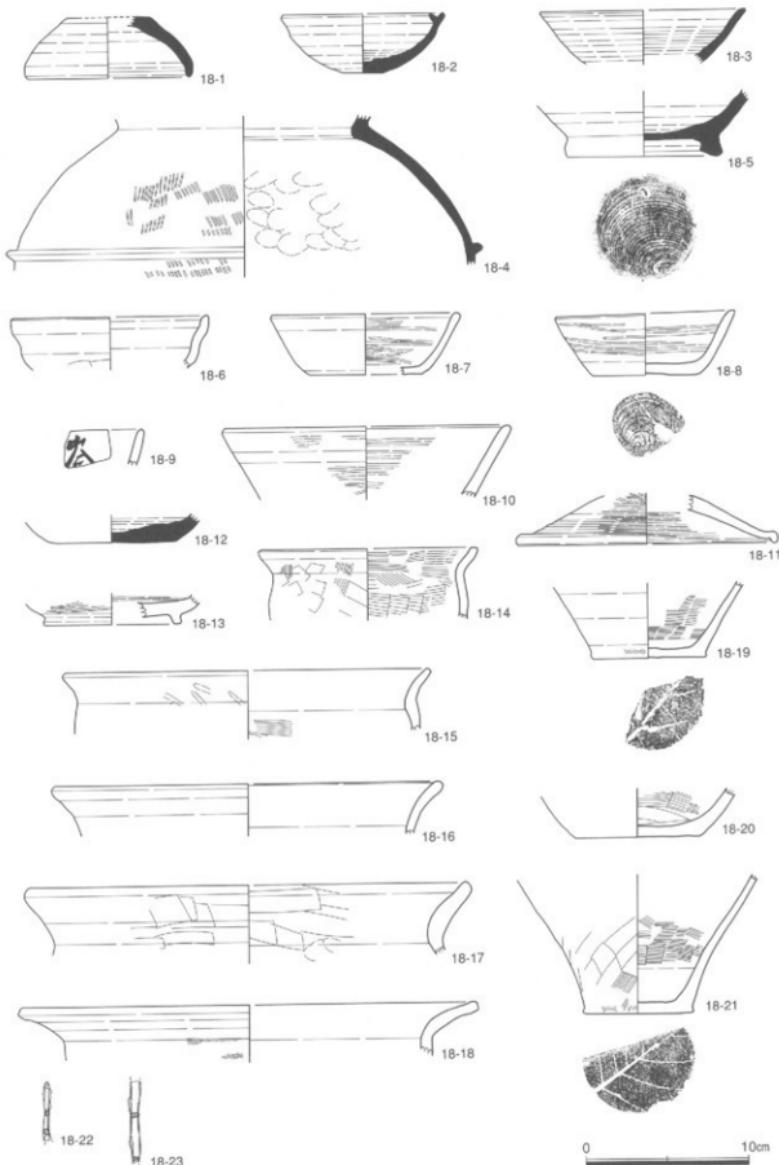
SB3はA26グリッドに位置する。SB4により南西隅が削平されているが平面形は正方形を呈し、規模は2.1×2.1mを測る。検出面からの深さは0.4mを測る。主軸方位はN-10°-Wを示し、カマドは北東隅に設置される。壁溝は北壁の一部で認められたが、柱穴は確認していない。住居の床面積に対してカマドの規模は大きい。袖部は良好に残存しており、左の袖部には構築材として礫が認められた。燃焼部には石製の支脚が設置されていた。遺物はカマド前方で土師器壺が出土している。この遺物より時期は8世紀前半と推定される。

SB3出土遺物 (第16図1~13 図版20)

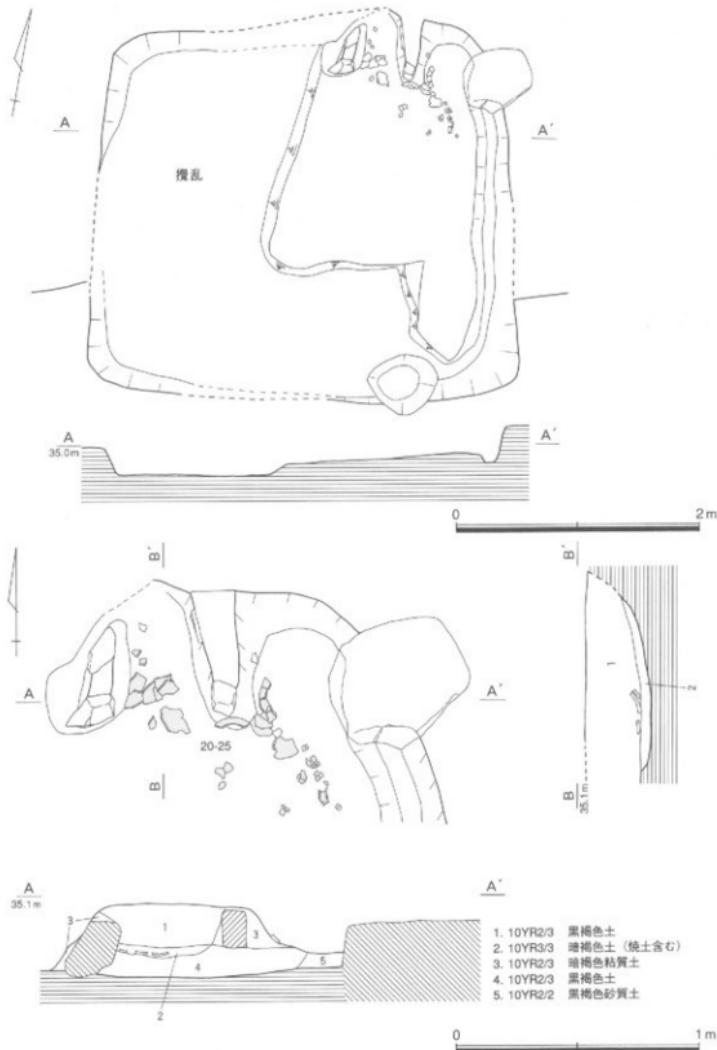
16-1は須恵器壺身で、2は須恵器壺の口縁部である。3~7は土師器の壺である。8はカマドの前方部で



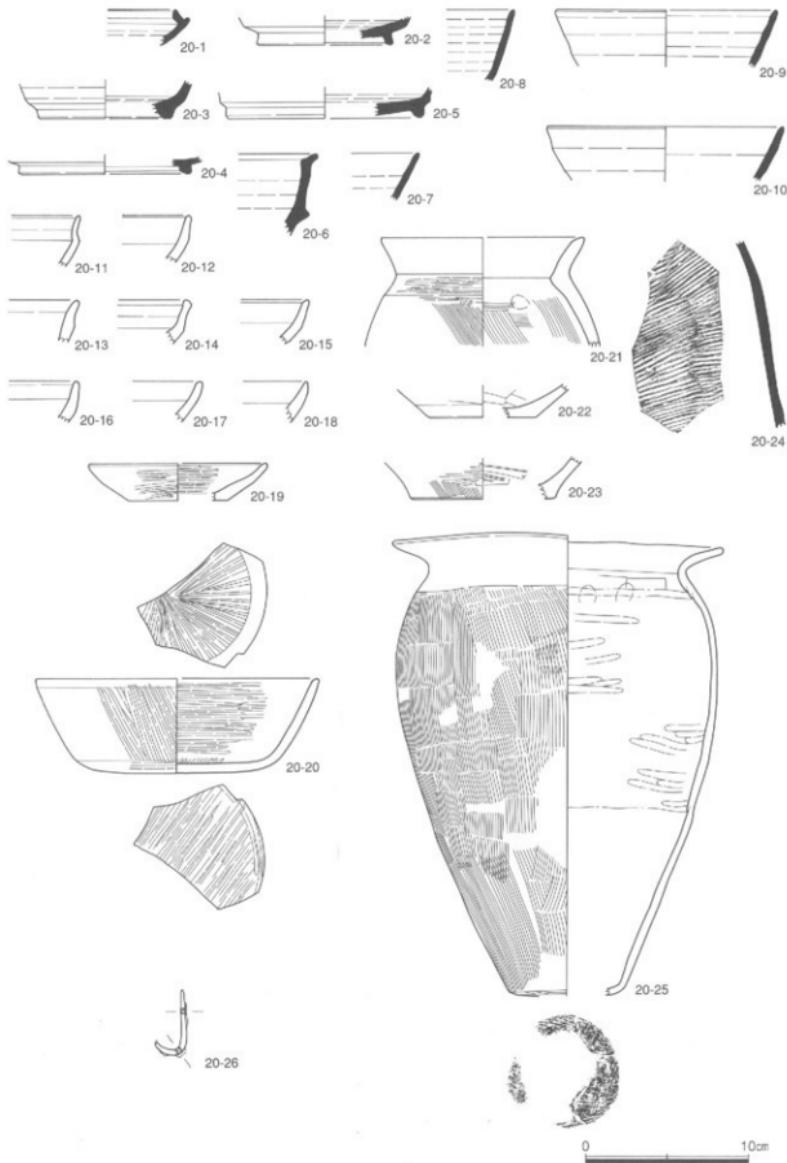
第17図 1-1区 SB4・5実測図 (1/40・1/20)



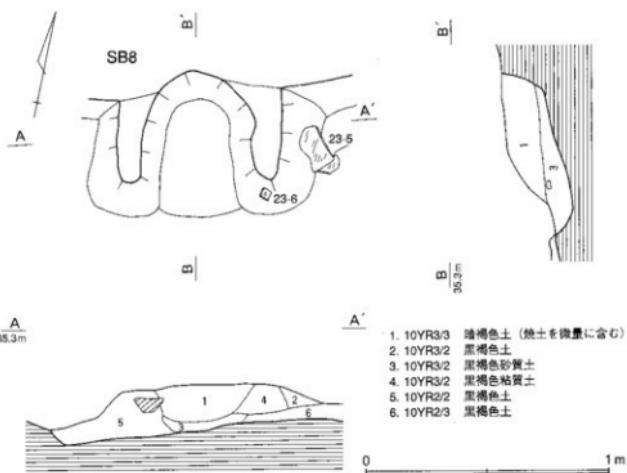
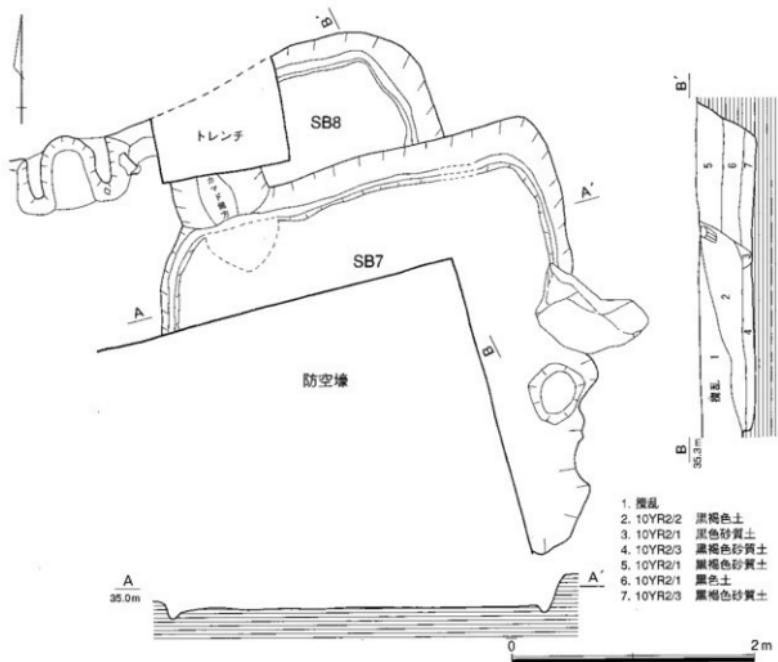
第18図 1-1区 SB4出土遺物実測図 (1/3)



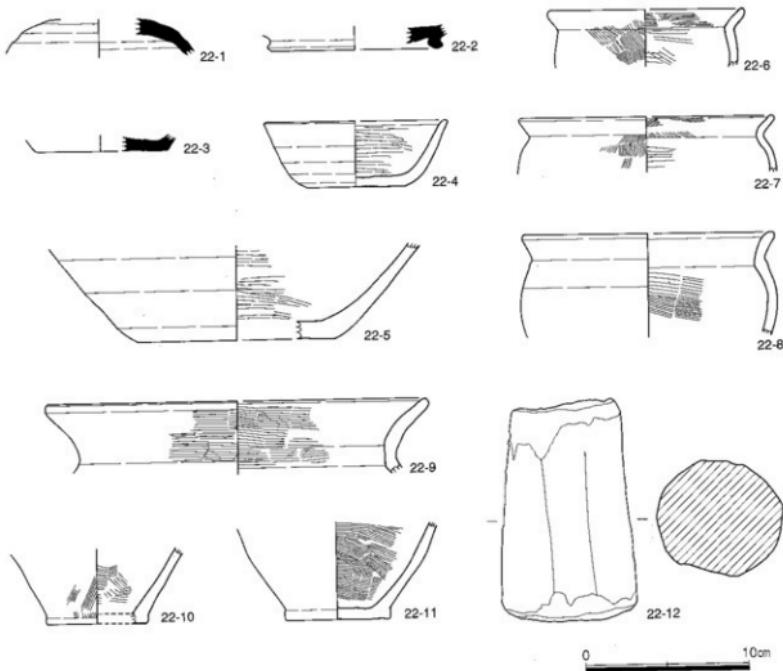
第19図 1-1区 SB6実測図 (1/40・1/20)



第20図 1-1区 SB6出土遺物実測図 (1/3)



第21図 1-1区 SB7・8実測図 (1/40・1/20)



第22図 1-1区 SB7出土遺物実測図 (1/3)

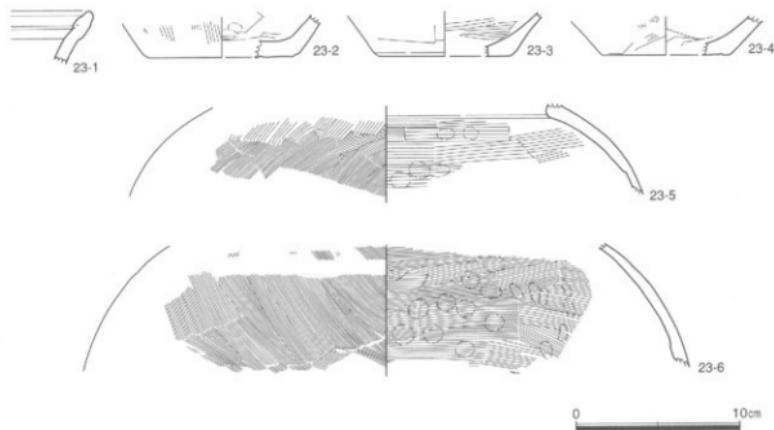
出土している。やや平底を呈し、内湾しながら立ち上がる。外面はケズリ調整が施される。内面は黒色化している。7は口縁端部がやや外反し、内面は縦位のミガキ調整が交差して施される。8~11は球胴状の甕の口縁部で、12は甕の底部片である。13は石製の支脚で、残存長21.7cmで基部から先端部にかけて細くなる。側面は4面の面取りが施されており、石材は中粒砂岩である。

SB4 (第14・17図 図版6)

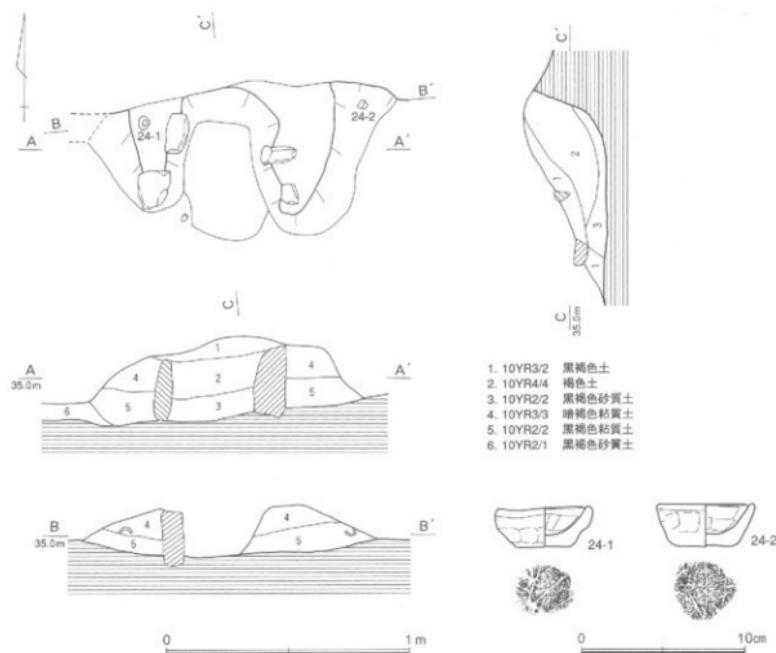
SB4はB26グリッドに位置する。規模は3.6×3.2mを測り、平面形は台形状を呈する。主軸方位はS-80°-Eを示し、カマドは南東隅に設置される。煙道は住居の外にのびていない。カマドを構成する粘土は流失しており、構築材としての石組が認められる。この石組みの両袖には礫が3個ずつ縦位に残存していたが、天井石は燃焼室内に崩落していた。袖部の礫は安山岩が使用され、天井は砂岩である。カマドの貼床は4層の黒褐色土で、粘性・締まりは弱い。住居中央の礫は地山礫であり、貼床面では埋没していたと考えられる。カマド内より須恵器、土師器、墨書き土器、鉄製品などが出土している。壁溝、柱穴などは検出されていない。出土遺物から8世紀末葉~9世紀初頭に推定される。

SB5 (第14・17図 図版6)

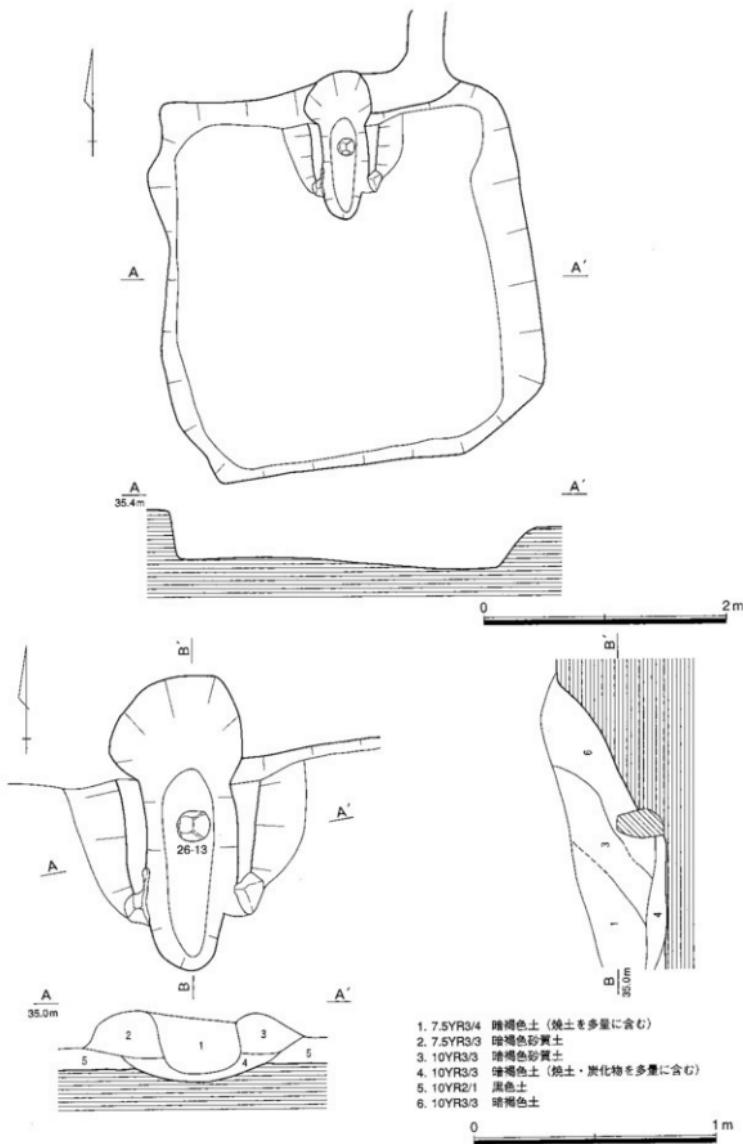
SB5はカマド掘方と住居の北東隅を検出したに過ぎない。主軸方位は推定でN-14°-Wを示し、カマドは北壁に設置される。北壁で壁溝が一部確認された。切り合ひ関係から7世紀代と考えられる。



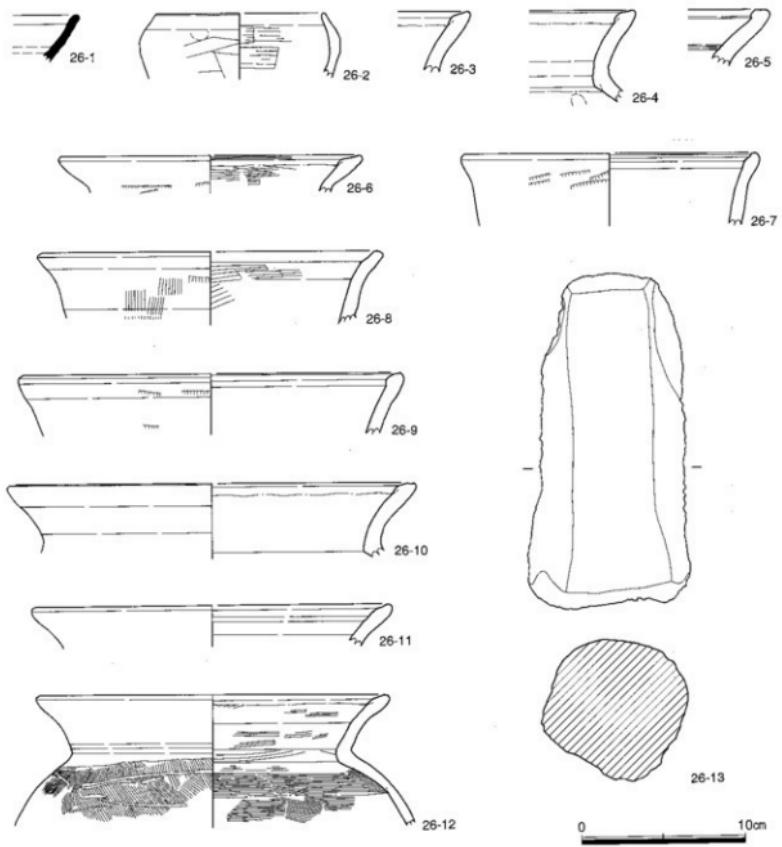
第23図 1-1区 SB8出土遺物実測図 (1/3)



第24図 1-1区 SB9カマド実測図 (1/20・1/3)



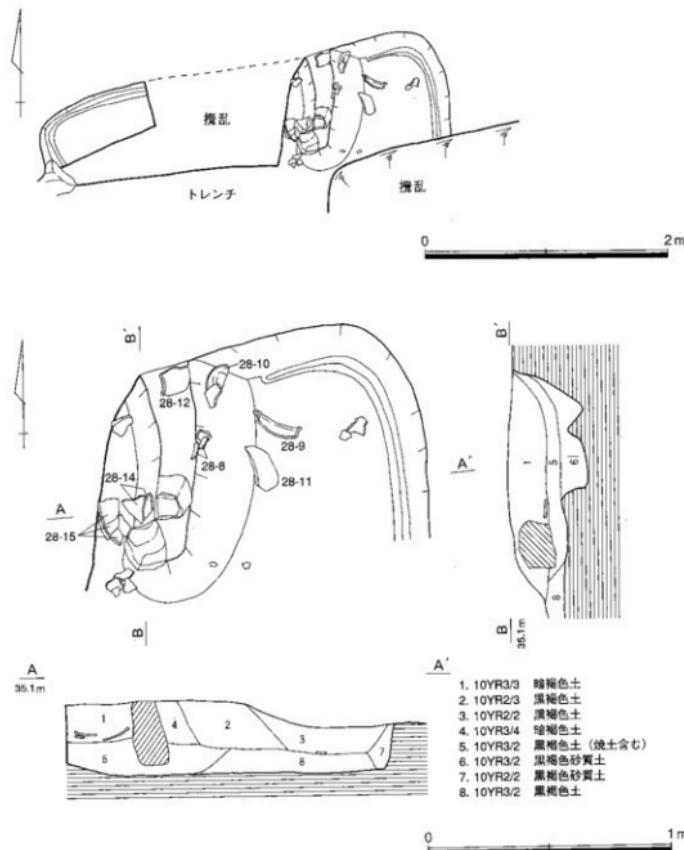
第25図 1-1区 SB10実測図 (1/40 - 1/20)



第26図 1-1区 SB10出土遺物実測図 (1/3)

SB4出土遺物 (第18図1~23 図版20・21)

18-1は須恵器環蓋で、天井部は回転ヘラケズリ調整が施される。2は須恵器環身で、口縁部は短く内傾し、受部と口縁部の高さはほぼ同じである。3は須恵器の環の口縁部でやや外反する。4は凸帶壺の胸部片で、肩部と体部の境には、長さ0.6cmほどの凸帶が1条巡っている。肩部から胴部の外面には平行タタキの痕跡が残り、内面は指頭圧痕が残る。5は須恵器長頸壺の底部で、断面三角状の高台がつき、糸切痕が残る。外面には自然釉が付着している。7・8は駿東型の環である。7は内面に横位のミガキ調整がみられる。8は内外面に横位のミガキ調整が施され、底部中央は糸切痕が残存し、この周囲はヘラケズリ調整が施される。9は駿東型の环の外面に「岑」と記された墨書きが施される。10は駿東型の大型の环で、内外面にミガキ調整が施される。鉢の可能性もある。11は土師器の摘み蓋である。内外面とともに横位のミガキ調整が施される。12は須恵器環で、左方向の回転ヘラケズリ調整を施す。14は小型の甕で、外面は板ナデ調整、外面は横位のハケ調整が施される。15~18は土師器の長胴状の甕の口縁部片である。

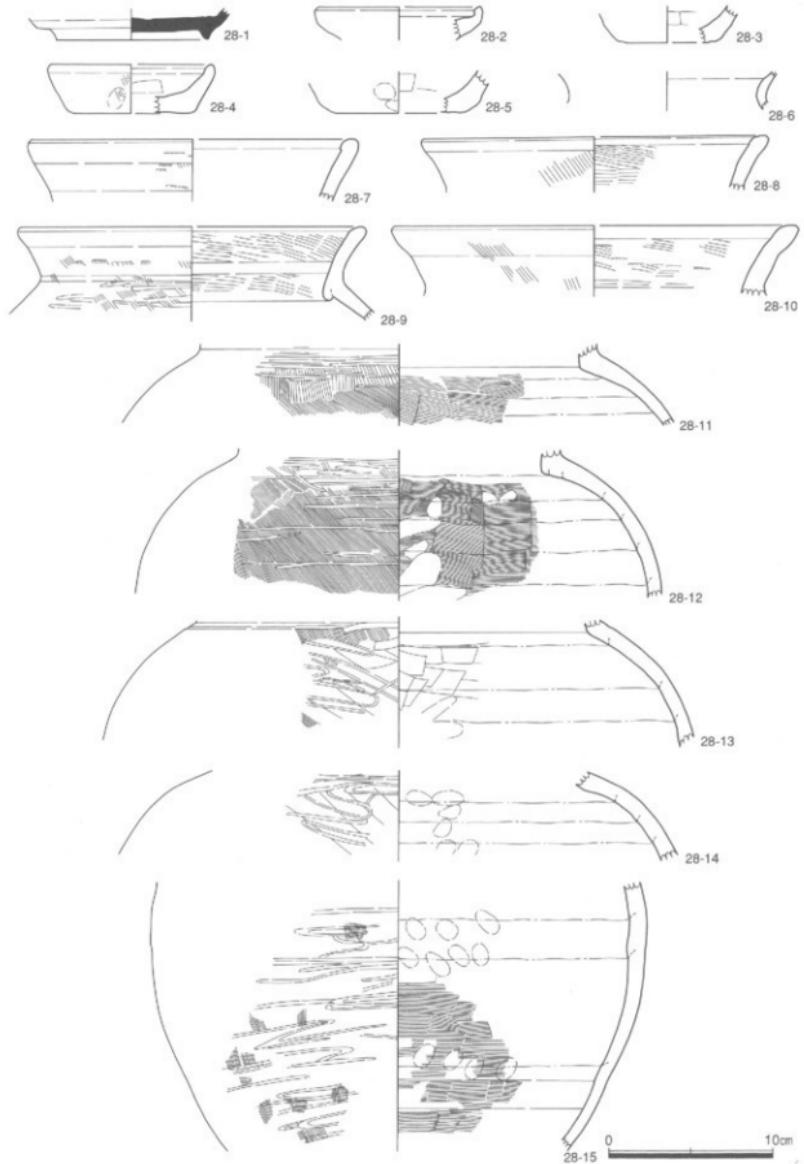


第27図 1-1区 SB11実測図 (1/40・1/20)

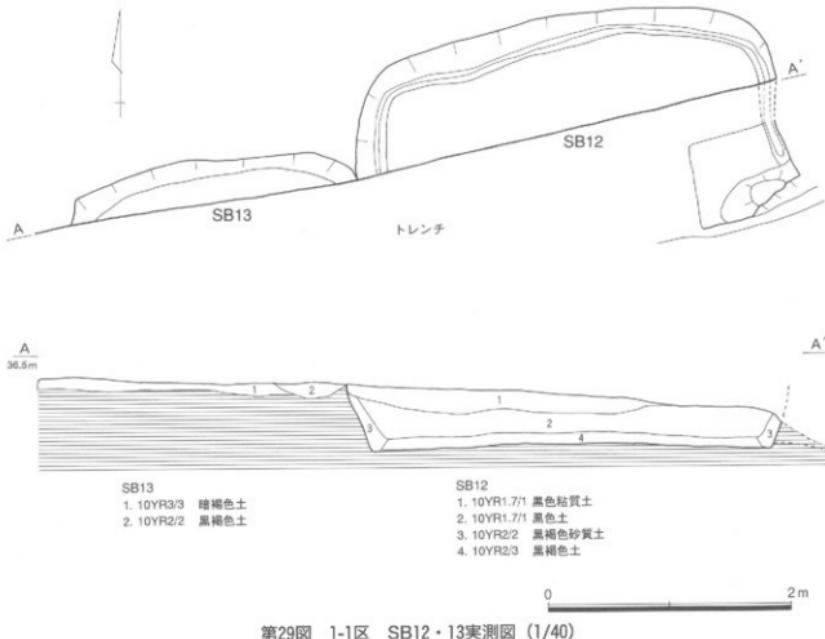
19~21は壘の底部片である。21は長胴状の壘の底部片で、底部に木葉痕を残す。底部から外反しながら立ち上がる。外面は板ナデ調整、内面は横位の細かいハケ調整が施される。22・23は不明鉄製品の破片である。23はU字状を呈し、断面は方形である。

SB6 (第19図 図版7)

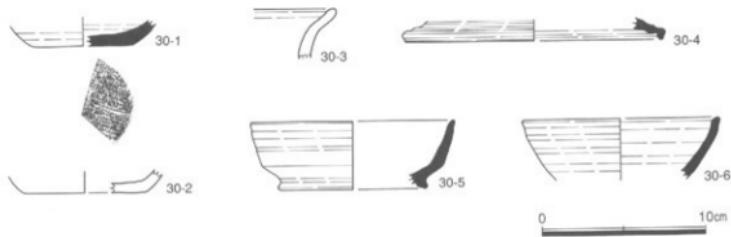
SB6はB26グリッドに位置する。攪乱により、住居の一部は破壊されていたが、平面形はほぼ方形を呈し、規模は3.0×3.3mを測る。カマドは北壁やや東寄りに設置され、主軸方位はN-16°-Wを示す。壁溝は深さ5cmで東壁のみで検出された。カマドの袖部は残存しており、両袖には粘土と構築材として礫が認められる。特にカマドの袖の先端部に礫が縦位に設置されていた。カマド内から遠江系の水平口縁を呈する壘の破片が出土した。出土遺物から8世紀末葉~9世紀初頭と考えられる。



第28図 1-1区 SB11出土遺物実測図 (1/3)



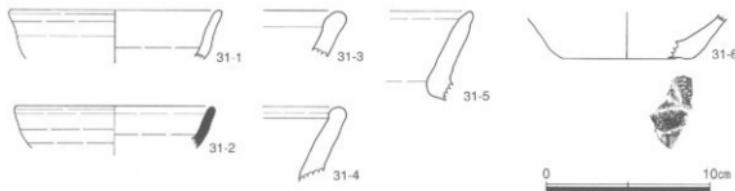
第29図 1-1区 SB12・13実測図 (1/40)



第30図 1-1区 SB12出土遺物実測図 (1/3)

SB6出土遺物 (第20図1~26 図版21)

20-1は須恵器壺身である。2~5は須恵器高台付壺である。7~10は須恵器壺の口縁部片である。11~18は土師器の口縁部片である。11は口縁部が強く屈曲し、斜め上方へのびる。12~15は口縁部が横位のナデ調整によりやや屈曲するものである。16~18は口縁部がやや内湾するものである。19は皿状を呈する駿東型の壺で、内外面にミガキ調整が施される。20は甲斐型の壺で、大型である。外面は精緻な縦位のミガキ、底部外面には斜位のミガキ調整が施される。内面は横位の精緻なミガキ調整で、底部内面は放射状のミガキ調整が施される。21は小型の甕で、外面にはハケ調整、頸部には横位のミガキ調整が施される。22・23は甕の底部片である。24は須恵器の甕の破片である。25は長胴を呈する遠江系の水平口縁の甕で、カマド周辺の床面から出土している。口径19.85cm底径6.0cm器高28.3cmを測る。外面は縦位



第31図 1-1区 SB13出土遺物実測図 (1/3)

のハケ調整、内面は横位のナデ調整が施される。頸部は強く屈曲し、口縁部は外方にのびる。26は鉄製の釣針である。断面は方形で、端部にかえりはつかない。

SB7・8 (第21図)

SB7・8はB26グリッドに位置する。住居の切り合い関係はSB8がSB7を切っている。SB7は防空壕により切られているが、おおよそ方形を呈するものと思われる。カマドは完全に破壊され、北壁西寄りに設置されており、掘り方のみの検出であった。主軸方位はN-20°-Wを示し、壁溝は西壁から北壁、東壁の一部で検出された。支脚は取り出されており、北壁側の覆土から出土している。住居内のピットは1箇所確認されているが、柱穴であるかは判然としない。SB8はカマドと北壁の一部を検出したに過ぎない。カマド主軸方位はN-11°-Wを示し、壁溝は北壁から東壁にかけて検出された。カマド内には遺物は検出されず、右袖の前方で甕の破片が出土した。出土遺物からSB7は8世紀末葉～9世紀初頭、SB8は7世紀末葉と推定される。

SB7出土遺物 (第22図1～12 図版22)

22-1は須恵器の环身で、天井部はヘラケズリ調整が施される。2は須恵器高台付环である。3・4は駿東型の环である。4は口径11.0cm底径6.0cm器高4.0cmを測り、内面に横位のミガキ調整が施される。5は駿東型の大型の环で、鉢の可能性もある。内面に横位のミガキ調整、底部外面にケズリ調整が施される。6～8はやや小型の甕である。6・7は球胴状を呈する。9は長胴状の甕の口縁部で、口縁部内外面に横位のハケ調整が施される。10・11は長胴状の甕の底部片で、木葉痕が残る。11の外面はナデ調整、内面に横位のハケ調整が施される。12は石製支脚で、上端、下端とも欠損しており、残存長13.55cmを測る。断面形は10～12面ほどある多角形状を呈し、面取りが施されている。石材は凝灰質砂岩で、細砂を多く含む。熱を受けているため非常に脆い。

SB8出土遺物 (第23図1～6)

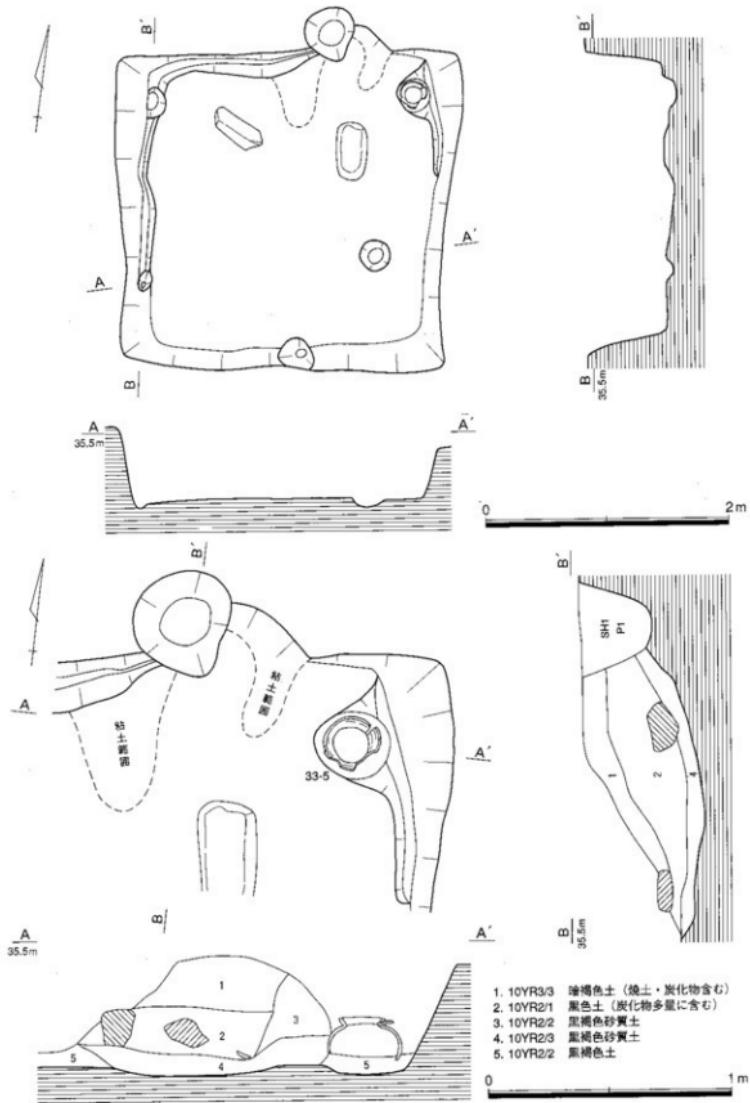
23-1は甕の口縁部で、端部は低い凸帯がつき、外面はやや肥厚する。2～4は甕の底部片で、いずれも木葉痕が残る。5・6は甕の胴部片であり、球胴状を呈する。外面に斜位のハケ調整、内面に横位のハケ調整が施される。

SB9 (第24図 図版8)

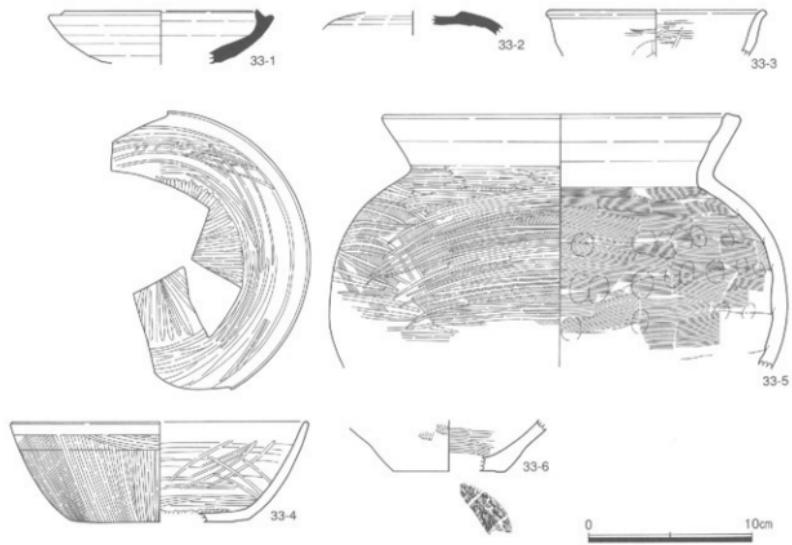
SB9はカマドのみの検出であった。カマド主軸方位はN-6°-Wを示す。カマドは両袖部分が残存し、構築材として礫が使用される。礫は広口面を燃焼室内側に向け、縦位に設置されている。カマドの袖内から正位・逆位に手捏土器が出土した。カマド廃棄時に燃焼部内に手捏土器を設置する例はカマド祭祀として知られているが、この出土状況と手捏土器が出土していることからカマド構築時による祭祀行為を考えたい。出土遺物から8世紀前半～中葉と推定される。

SB9出土遺物 (第24図1・2 図版22)

SB9から出土したものは手捏土器の2点のみである。この手捏土器は平底を呈し、底部外面には木葉痕が残る。外面はナデ調整、内面は板ナデ調整が施される。明確な時期は不明であるが8世紀以降の所産であろう。



第32図 1-1区 SB14実測図 (1/40・1/20)



第33図 1-1区 SB14出土遺物実測図 (1/3)

SB10 (第25図 図版9)

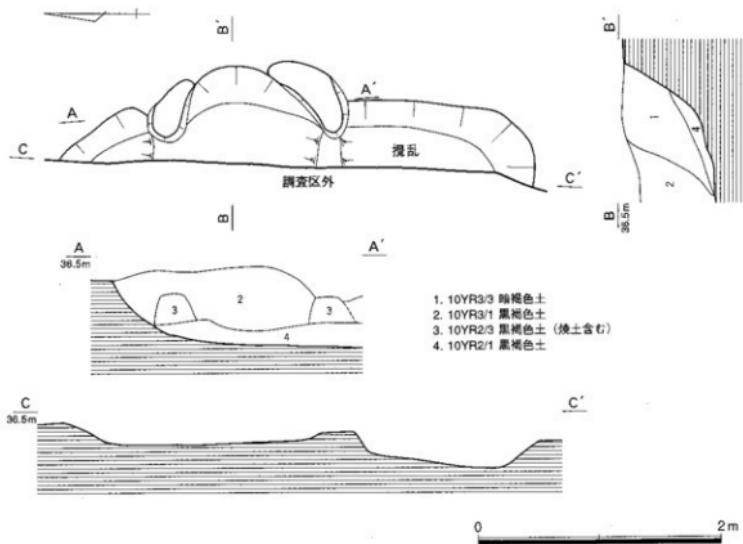
SB10はB25グリッドに位置する。平面形はほぼ正方形を呈し、 $3.1 \times 3.05\text{m}$ を測る。主軸方位はN-3°Wを示す。カマドは2基検出され、新カマドは北壁中央に設置される。旧のカマドは煙道のみの検出であり、住居外にのびる。新カマドは両袖部分が残存し、支脚は燃焼室に残置された状態で検出された。支脚は石製で面取りされている。カマドの両袖内の先端部には礫が構築材として使用されている。柱穴・壁溝は検出されていない。出土遺物から時期は8世紀前半～8世紀中葉に推定される。

SB10出土遺物 (第26図1～13)

2-1は須恵器壺の口縁部片である。2は口縁部が内湾する塊で、外面はケズリ調整、内面はハケ調整が残る。4～12は球胴状の壺の口縁部片である。4～6は端部内面に低い凸帯がつき、肥厚する。7は端部内面に沈線が巡る。8～10は口縁端部内側に低い凸帯が付き、肥厚する。ナデ調整により、外方へのびる。11はやや外方へ屈曲する。12は体部外面に横位のミガキ調整、内面は横位のハケ調整が施される。口縁端部内側はやや肥厚する。13は石製の支脚で、長さ20.6cmを測る。上端部の平面形は方形を呈していることから側面は面取りされていると考えられる。側面上端部は被熱で赤化している。

SB11 (第27図 図版10)

SB11はC25グリッドに位置する。住居の平面形は調査区外にのびていることやトレンチにより切られているため不明であった。カマドの袖部分のみの検出であった。主軸方位はN-12°Wと推定される。カマドの袖は長さ0.98m幅0.65mを測る。袖の構築材として礫が使用されている。壁溝は北東隅で検出された。遺物はカマド袖内、袖部で出土しており、時期は8世紀前半～8世紀中葉に推定される。



第34図 1-1区 SB15実測図 (1/40)

SB11出土遺物 (第28図1~15 図版22)

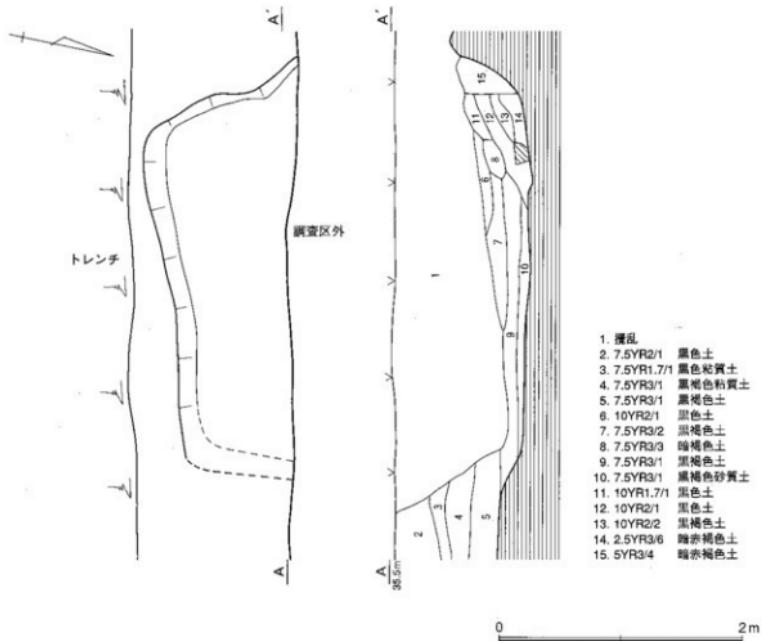
28-1は須恵器高台付坏である。底部は左回転のヘラケズリ調整が施され、高台は断面三角形状を呈する。2~5は手捏土器と思われる。2は口縁部が内湾し、3は底部に木葉痕を残す。4は底部に木葉痕を残し、外面は指頭痕を残す。5は外面に指頭痕を残す。6は外面に朱塗りが施されている。7~10は球胴状の壺の口縁部片である。7は端部が内側に肥厚し、丸みを帯びる。8は端部が内側に肥厚し、緩やかな段を有する。内面には斜位、横位のハケ調整が施される。9は頸部と胴部の接合痕が明瞭に残り、頸部外面にはハケ調整後、横位のミガキ調整が施される。端部は内側に肥厚し、ハケ調整が施される。10の端部は肥厚し、横位のハケ調整が施される。11~15は球胴状の壺の胴部片である。11はハケ調整後、頸部に横位のミガキ調整を施す。12は斜位のハケ調整後、横位のミガキ調整が施される。13はハケないしナデ調整後、曲線状にミガキ調整が施される。14は外面に横位のミガキ調整が施される。

SB12・13 (第29図 図版10)

SB12・13はC24・25グリッドに位置し、並列して検出された。ともに北壁部分のみの検出であったが、SB12では東壁に設置されるカマドが認められる。主軸方位はN-90°-Eと推定される。このカマドは片方の袖部分の検出であるが、構築材として礫・土器は使用されていない。壁溝は北壁から東壁にかけて検出し、4層の黒褐色土は厚さ8cmで貼床の構築土と考えられる。SB13は北壁の一部であり、残存長2.2mを測る。遺物は床面からは出土していないが、覆土中の遺物からSB12は8世紀後葉で、SB13は7世紀末葉に推定される。

SB12出土遺物 (第30図1~6)

30-1は須恵器の环である。2は腹東型の环の底部片でケズリ調整が施される。3は長胴状を呈する壺の



第35図 1-1区 SB16実測図 (1/40)

口縁部である。4は須恵器の蓋で、端部は短く立ち上がる。5は須恵器高台付环で、体部下位は屈曲する。高台は低く三角形状を呈する。6は須恵器杯の口縁部片である。

SB13出土遺物 (第31図1~6)

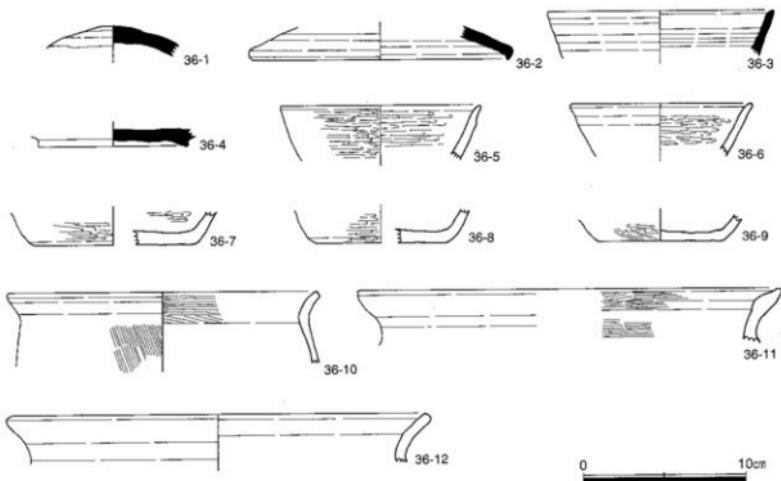
31-1は土師器杯で口縁部はやや外反し、内外面ともに黒色化している。2は須恵器杯である。3~5は球胸状の甕の口縁部片である。3・4の端部は内側にゆるやかに肥厚する。5の端部は、ナデ調整により先細りする。6は底部片で木葉痕が残る。

SB14 (第32図 図版11)

SB14はB25グリッドに位置する。住居の平面形は正方形を呈し、規模は2.6×2.7mを測る。カマドは破壊されており、粘土の範囲からおおよその位置が推定できる。主軸方位はN-10°-Wを示し、カマドは北壁のやや東寄りに設置したものと考えられる。また、袖の構築材として砂岩製の切り出された石材が2点住居内に廃棄されていた。カマドの右脇には球胸状甕の下部を打ち欠いて上部のみが設置されていた。通常、カマドの脇には貯蔵穴が設置されている例があるが、今回の出土例では壁溝に接し、土坑状の掘り込みが見られ、そこに土器を設置しており、食料貯蔵という性格とは違う用途があった可能性を指摘できる。住居内には柱穴が1基、壁溝内より北壁、南壁で小ピットが検出されている。時期は8世紀前半～中葉に推定される。

SB14出土遺物 (第33図1~6 図版22・23)

33-1は須恵器杯身で、外面は右方向のケズリ調整が施される。2は蓋で、天井部は欠損しているが、



第36図 1-1区 SB16出土遺物実測図 (1/3)

摘みがついていたと思われる。3は端部が外へ屈曲する土師器坏で、口縁部は横ナデ調整、体部外面はケズリ調整、内面は横位のミガキ調整が施される。4は甲変型の坏である。口径17.9cm底径10.6cm器高6.1cmを測る。外面は縦位にミガキ調整が精緻に施され、底部にもミガキ調整がみられる。内面は横位のミガキ調整、放射状のミガキ調整が施される。端部には横ナデ調整がみられる。5は球胴状の壺でカマドの右脇より正位の状態で出土している。端部内面はわずかに張り出し、接合痕がみられる。口径20.8cm、胴部最大径は27.8cmで中位にくる。斜位のハケ調整後に弧を描くようにミガキ調整が施され、頸部には横位のミガキ調整がみられる。内面は横位のハケ調整が施され、肩部に接合痕が残る。6は球胴状の壺の底部片で、木葉痕が残る。

SB15 (第34図)

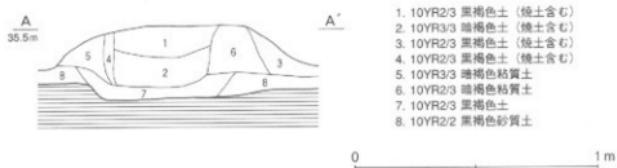
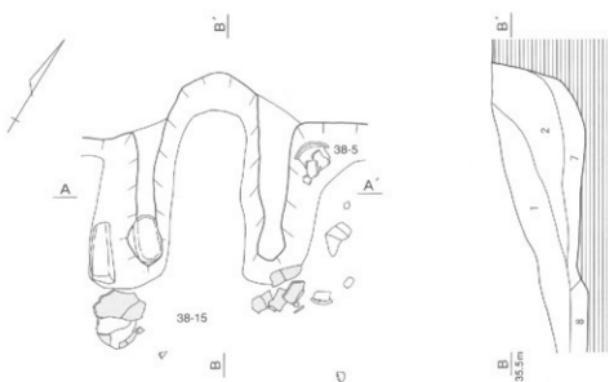
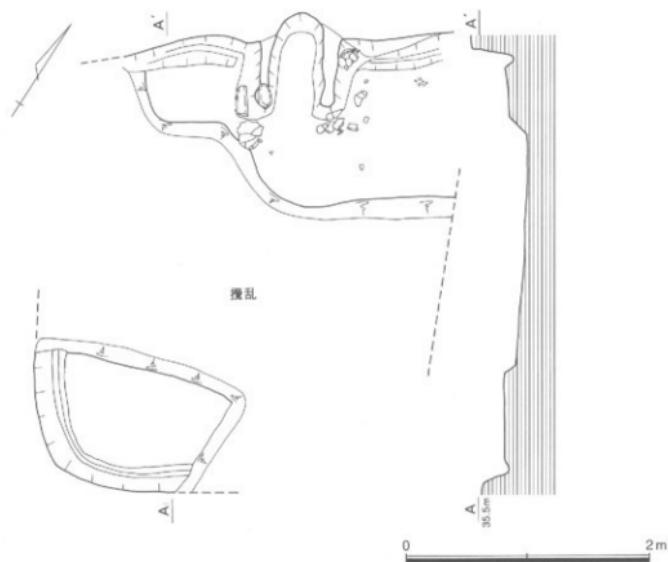
SB15はB24グリッドに位置し、カマドのみの検出である。平面形は調査区の西に広がるが、カマドは東壁に設置されたと推定できる。カマド主軸方位はN-91°-Wを示す。カマドは両袖が残存しており、粘土で構築されている。遺物は土師器の細片が出土したにすぎないが、カマド主軸方位から8世紀以降のものであろう。

SB16 (第35図 図版12)

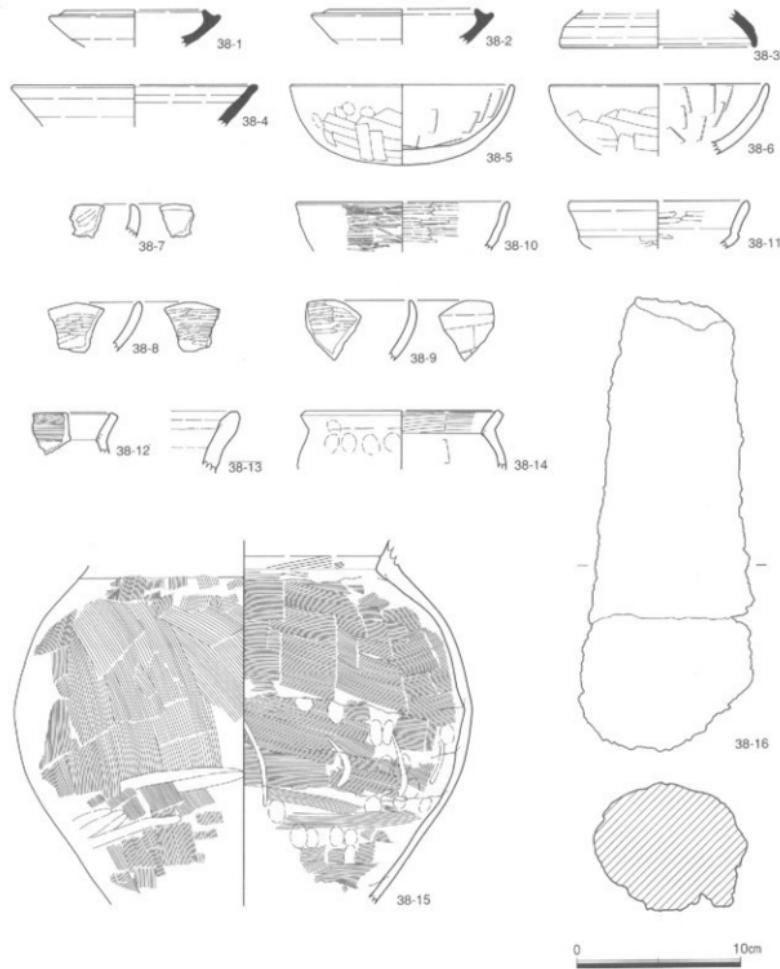
SB16はA24グリッドに位置し、住居は全体の1/2を検出したにすぎない。カマドは調査区断面にかかるており、袖部は残存していないため平面形は不明である。主軸方位はN-91°-Eと推定され、カマドは西壁に設置される。本遺跡で西壁に設置されるカマドはこの住居だけである。残存長は東西で3.35mを測る。覆土の遺物から8世紀後葉と考えられる。

SB16出土遺物 (第36図1~12)

36-1は須恵器坏蓋で、天井部は回転ヘラケズリ調整が施される。2は蓋で、外面には回転ヘラケズリ調整が施される。端部の立ち上がりは低い。3は須恵器坏の口縁部片で、4は須恵器高台付坏である。底部は高台よりも突き出し、低い三角形状の高台がつく。外面はヘラケズリ調整が施される。5~9は駿東型の坏である。5は内外面に横位のミガキ調整が施される。6は口縁部がやや外反し、内面に横位のミガ

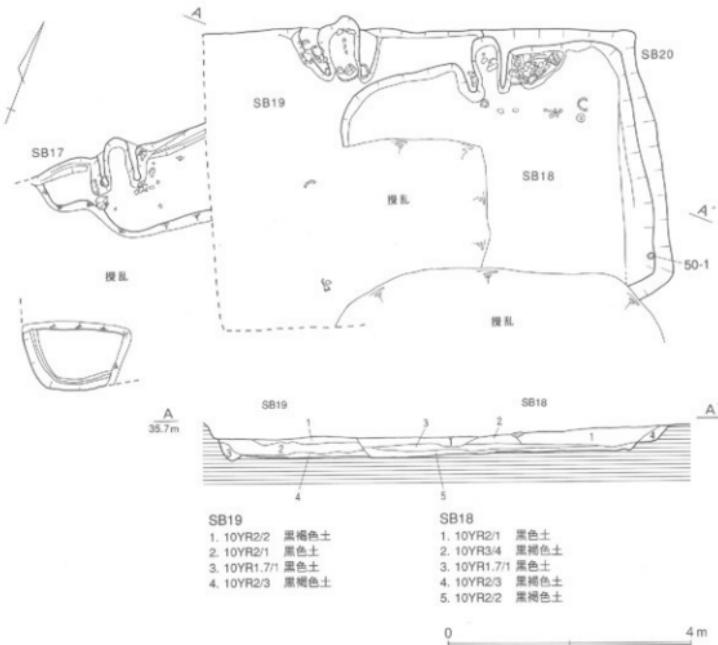


第37図 1-1区 SB17実測図 (1/40・1/20)



第38図 1-1区 SB17出土遺物実測図 (1/3)

キ調整が施される。7は内外面に横位ミガキ調整、底部はヘラケズリ調整が施される。8の底部外面はヘラケズリ、外面に横位のミガキ調整が施され、内面は表面が剥がれており、調整は不明。9は外面に横位のミガキ調整、底部内面は放射状のミガキ調整が施される。10は壺の口縁部で、外面は斜位のハケ調整、口縁部内面に横位のハケ調整が施される。11は球胴状の壺の口縁部で、端部は肥厚し、ナデ調整により段を有する。12は長胴状を呈する壺の口縁部片である。



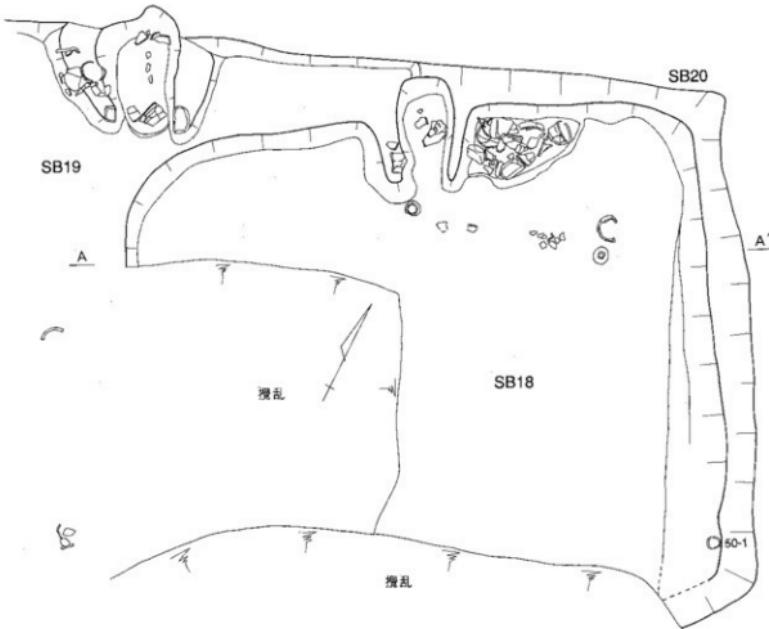
第39図 1-1区 SB17~20実測図 (1/80)

SB17 (第37・39図 図版12・13)

SB17はA25・B25グリッドに位置する。住居の中央部分は攪乱で破壊されているが、カマドと南西隅からおおよそ方形状を呈していると推定される。カマドは北壁に設置され、主軸方位はN-25°Wを示す。壁溝は北西隅、カマド周辺で検出されている。カマドは両袖とともに残存しており、袖の先端部に切石が構築材として設置されていた。遺物はカマド内の燃焼部からの出土ではなく、袖部周辺から甕などが出土している。カマド周辺の遺物から時期は7世紀末葉と推定される。

SB17出土遺物 (第38図1~16 図版23)

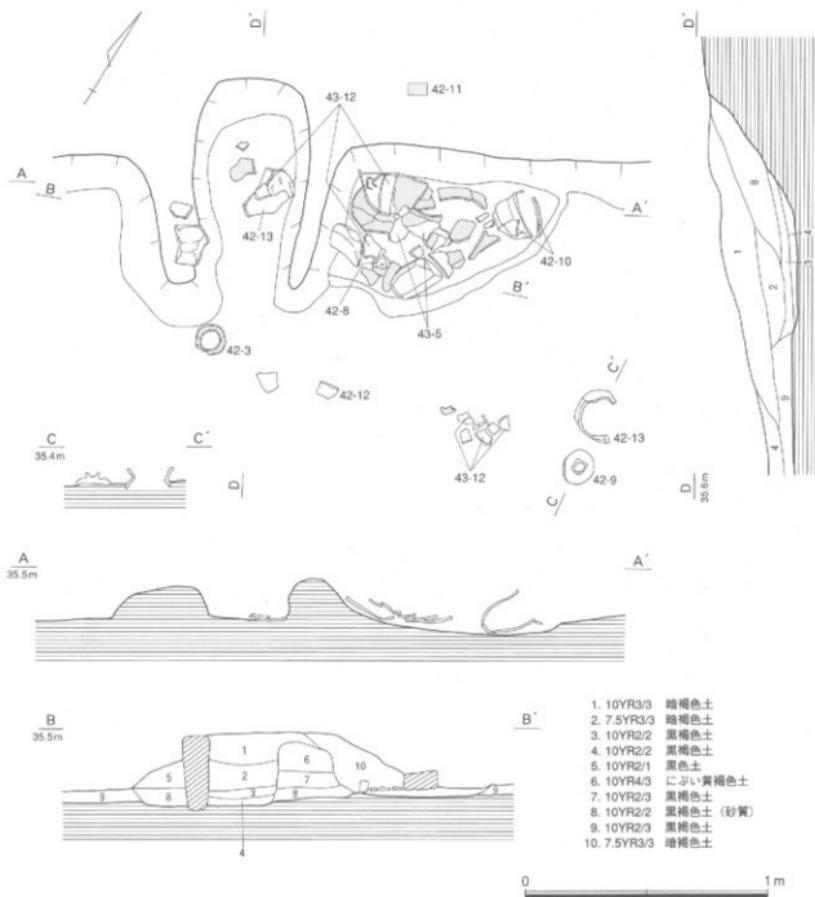
38-1・2は須恵器環身で、外面にケズリ調整が施される。3は須恵器環蓋で、4は須恵器環の口縁部である。口縁部は外反する。5・6は土師器の环で丸底を呈し、やや内湾しながら立ち上がる。内面は黒色化し、外面にはケズリ調整、内面はヘラ状工具によるナデ調整がみられる。7・9は内湾口縁の环で、外面に横位のミガキ調整が施される。9は内面のみ黒色化している。8は手捏土器である。10は駿東型の环で、内外面に横位のミガキ調整が施される。11は屈曲口縁の环でやや外反する。内面は横位のミガキ調整が施され、内外面ともに黒色化している。12は小型の甕の口縁部である。13は球胴状の甕の口縁部で、端部は肥厚する。14は小型の甕で、体部外面は指頭痕が残り、内面には横位のハケ調整が施される。15は球胴状の甕で縦位のハケ調整、下位にナデ調整が施される。内面は横位のハケ調整がみられる。16は石製の支脚で、基部から先端部にかけて細くなっている。残存長は27.75cmである。断面は円形を呈する。材質は凝灰質砂岩で径1cmほどの礫が含まれ、熱をうけているため非常に脆い。



第40図 1-1区 SB18・19実測図 (1/40)

SB18 (第39~41図 図版13・14)

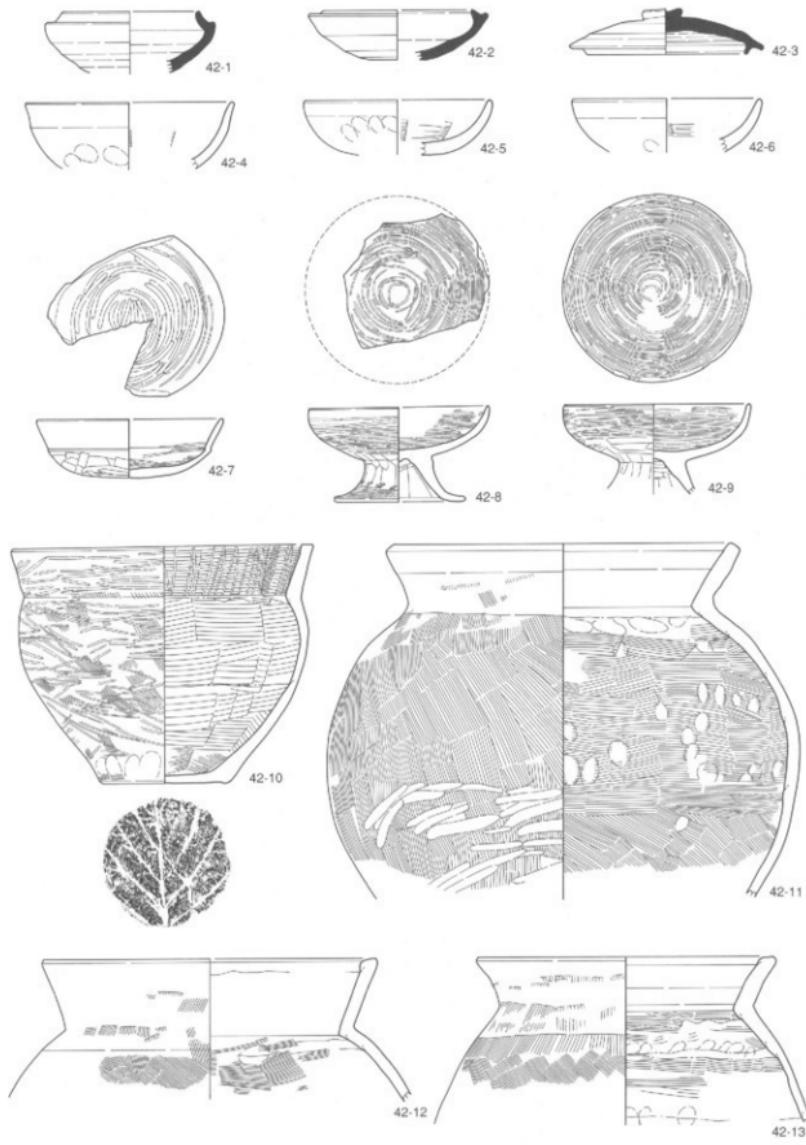
SB18~20はA25・26グリッドに位置し、3軸ほどが切り合っている。構築順序はSB20→19→18である。SB18は南壁、西壁が擾乱により破壊されているが、ほぼ正方形を呈するものと思われる。カマドは北壁中央に設置され、主軸方位はN-24°-Wを示す。残存長(3.6)×4.8m²で、壁溝、柱穴は確認していない。カマドは両袖が残存しており、左側の袖の先端部には切石が縦位に設置されていた。カマドの脇には不整形な貯蔵穴が設置され、この内には瓶、甕、小型甕、高坏、土師器壺が廃棄された状態で出土した。床面からは甕、高坏、須恵器壺の蓋が出土している。カマド内と貯蔵穴から出土した土器が接合することから住居廃絶後に土器を破碎し、カマド内と貯蔵穴に甕の破片を分置していた可能性もある。カマド内、床面、貯蔵穴内から出土した土器から時期は7世紀末葉~8世紀初頭と考えられる。



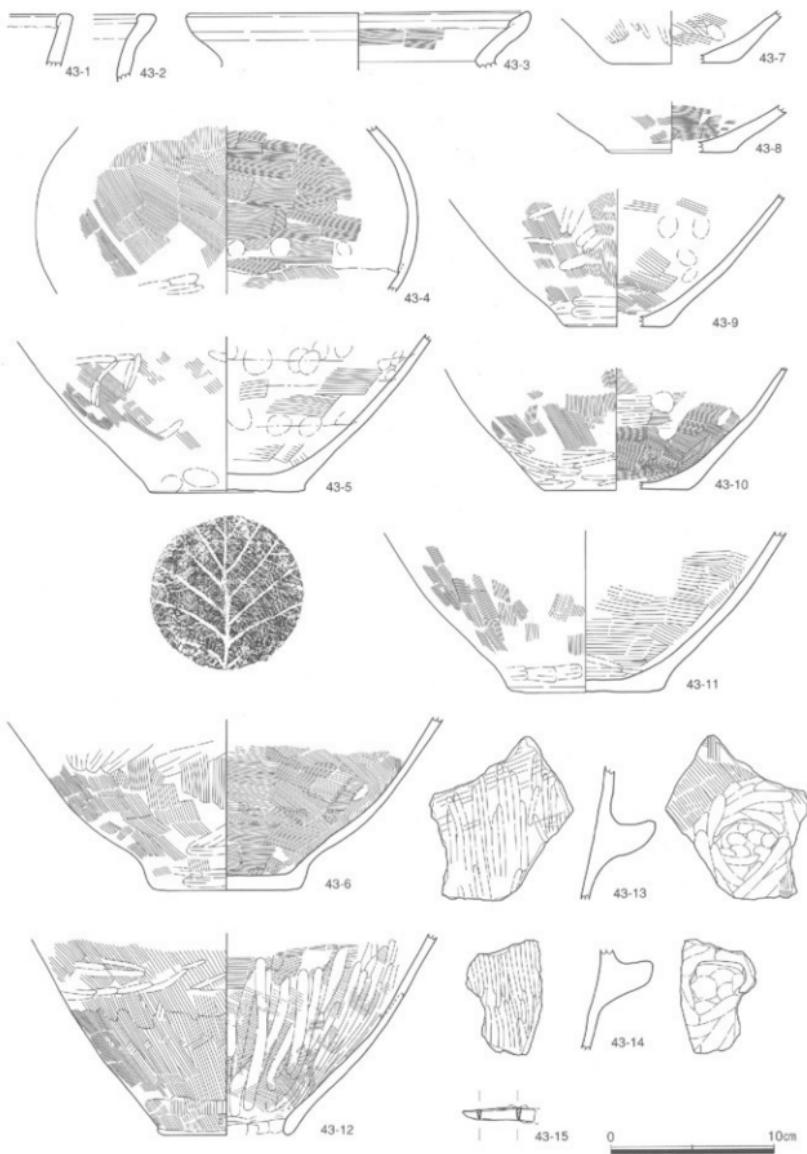
第41図 1-1区 SB18カマド実測図 (1/20)

SB18出土遺物 (第42・43図 図版23・24)

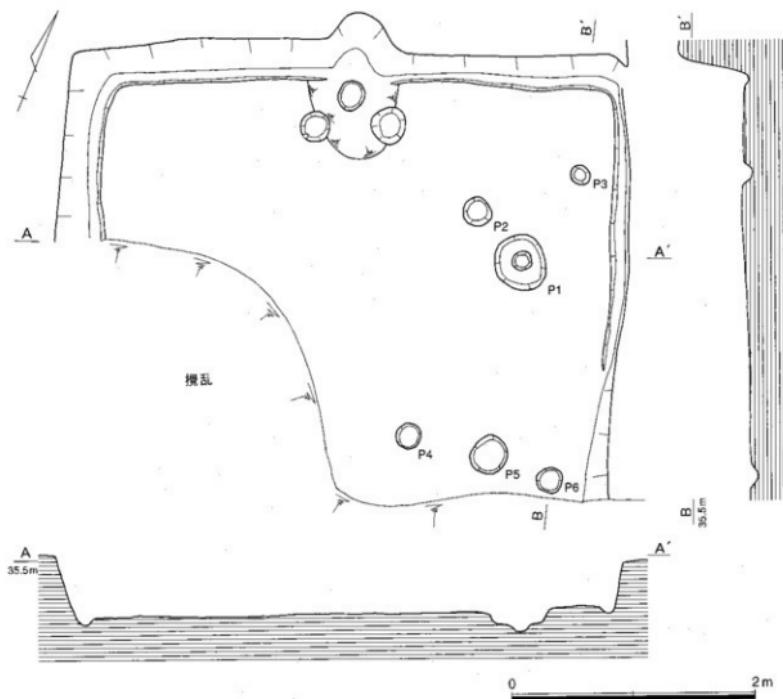
42-1~2は須恵器壺身である。3は長頸壺の蓋と考えられ、扁平な摘みを有し、口径9.6cm受部径11.95cm器高2.8cmを測る。外面は全面に自然釉が付着する。4は口縁部がやや屈曲し、外反する。5・6は内湾する口縁部で、横位のナデ調整が施される。7は口縁部と体部に稜をもち、口縁部は外反する。体部はケズリ調整が施され、内面には同心円状にミガキ調整が施される。8・9は高杯で、低い脚部がつく。8の脚部は端部が外方へ屈曲し、壺部と接合する部分は縦位のケズリ調整が施される。壺部は内外面に丁寧なミガキ調整が施される。10は小型の甌で、口径17.15cm底径7.3cm器高14.5cmである。底部から湾曲



第42図 1-1区 SB18出土遺物実測図(1) (1/3)

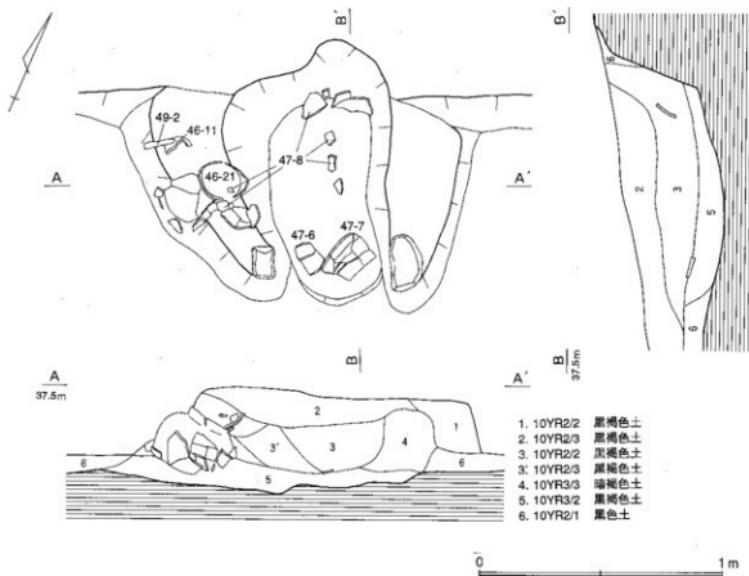


第43図 1-1区 SB18出土遺物実測図(2) (1/3)



第44図 1-1区 SB19掘り方実測図 (1/40)

しながら立ち上がり、胸部最大径は胸部の上位に位置する。口縁部と頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は外方に広がる。端部は平坦である。外面はハケ調整後に横位のミガキ調整が全面に施される。体部外面は横位の粗いハケ調整で、口縁部にはジクザグ状のミガキ調整が縦位に施され、装飾的である。底部には木葉痕が残る。IIは球胸状の壺で、口径20.5cm残存高21.6cmを測り、最大径29.8cmが胸部中位にくる。下位にはナデ調整が施される。体部内面下位には斜位のハケ調整、中位から上位にかけて横位のハケ調整が施される。口縁端部は平坦である。I2は球胸状の壺で、口縁部と頸部の屈曲が明瞭である。端部は内側に凸帯がつき、肥厚する。内外面ともにハケ調整。I3はやや長胸状を呈する。口縁部は肥厚し、端部はやや内側に張り出す。外面は斜位のハケ調整が施され、内面は横位のハケ調整、指頭痕が残る。43-1～3は球胸状の壺の口縁部である。4は球胸状の壺の胸部片で外面はハケ調整、下位にはナデ調整が施され、胸部最大径は中位にくるとと思われる。内面は横位のハケ調整。5～IIは球胸状の壺の底部である。6は底部から胸部にかけて屈曲が強い。IIは底部外面に横位のケズリ調整が施される。I2は甑でI3とI4と同一個体である。外面はハケ調整、内面は横位のハケ調整の後に縦位のミガキ調整が施される。孔は1穴で、底径は推定で7.5cmを測る。端部は肥厚し、内面は横位のケズリ調整が施される。I3・I4は甑の把手で水平にのびる。内面は縦位のミガキ調整が施される。I5は刀子片である。



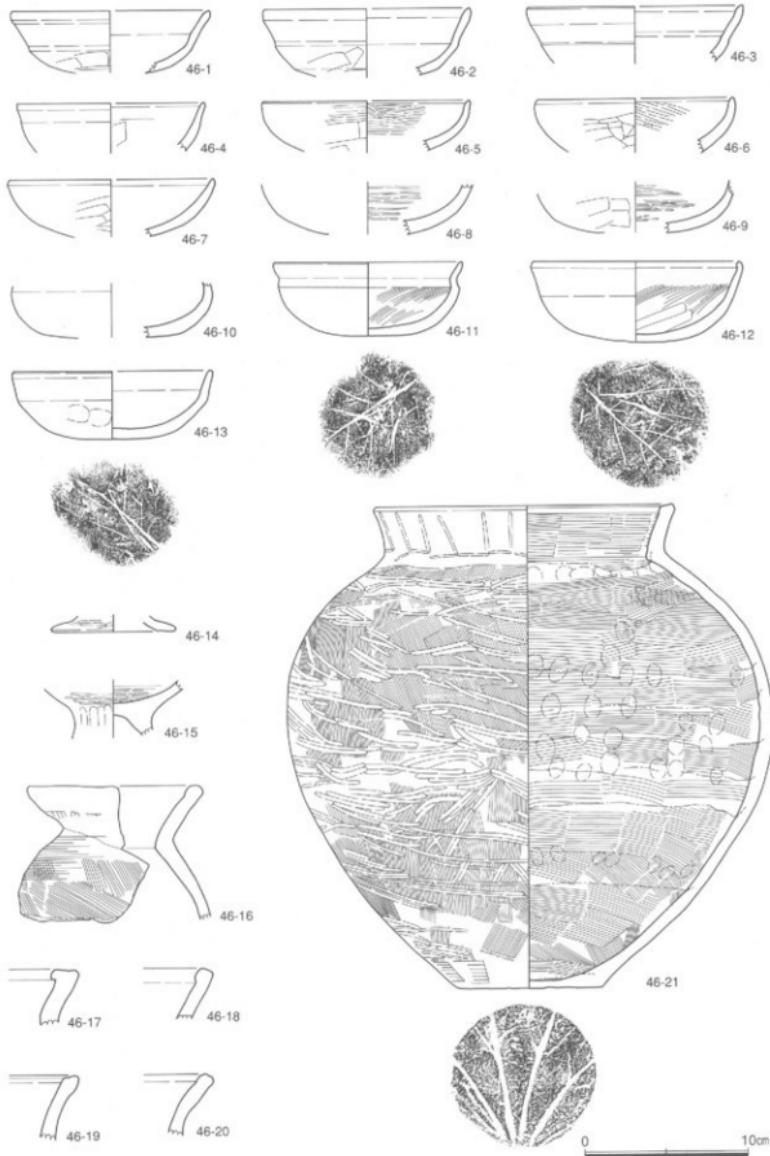
第45図 1-1区 SB19カマド実測図 (1/20)

SB19 (第39・40・44・45図 図版13~15)

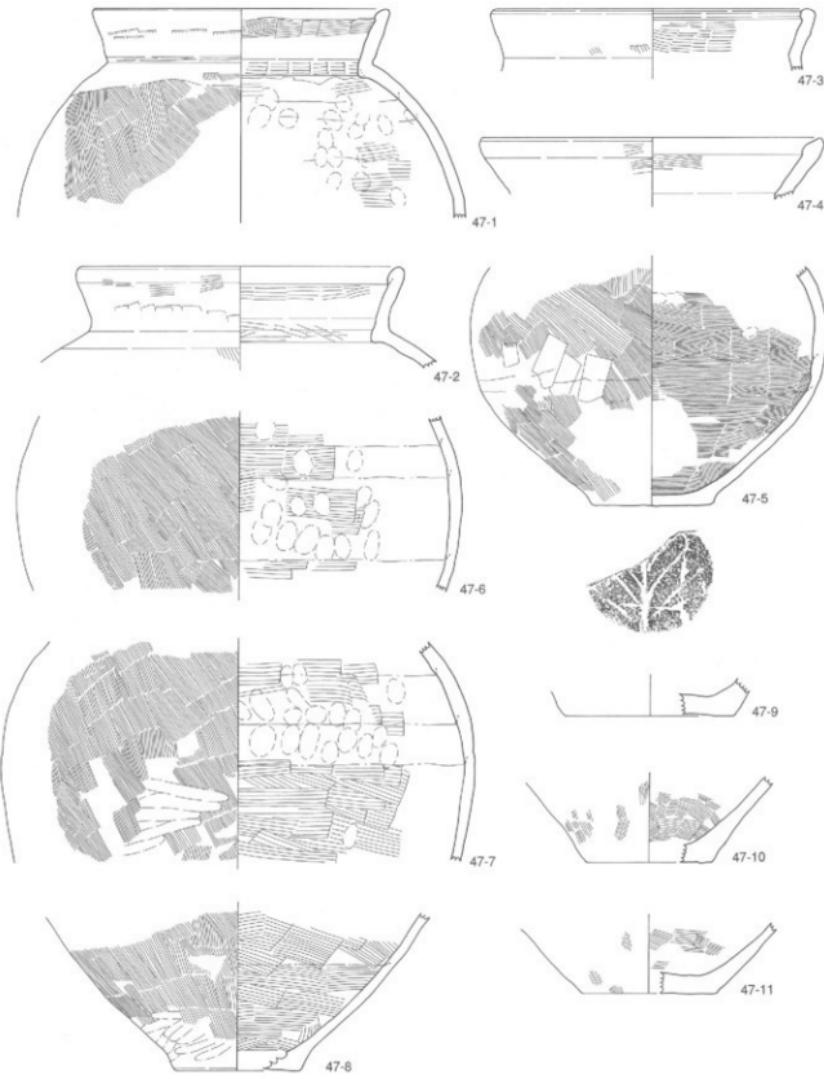
SB19の平面形は方形を呈し、残存長4.7×(3.3)mを測る。カマドは北壁中央に設置され、主軸方位はN-23°-Wを示す。カマド右側の袖はまっすぐにのび、左側はやや湾曲しながら構築されている。袖の先端部にはこの周辺で採取される砂岩を用い、縦位に設置していた。また、左側の袖には土師器の壺を構築材として使用していた。遺物はカマド内から壺の破片、袖部からは土師器壺、刀子などが出土している。構築材としての壺やカマド内の遺物から時期は7世紀末葉と考えられる。

SB19出土遺物 (第46~49図 図版24・25)

46-1~3は屈曲口縁の壺である。1は丸底を呈し、弱い稜を持ちながら口縁部は外反する。底部外面はケズリ調整が施され、内外面とも黒色化している。2は弱い稜をもち口縁部は外反し、端部は肥厚する。内外面とも黒色化している。3は弱い稜をもち、端部はやや内湾する。色調は赤褐色を呈する。4~10は内湾口縁の壺である。4の口縁部は横位のナデ調整が施され外反する。橙色を呈し、二次焼成を受けている。5は口縁部がやや外反し、体部にはケズリ調整が施される。6は体部外面はケズリ調整、内面はミガキ調整が施される。8は内面に同心円状のミガキ調整が施される。9は内面に横位のミガキ調整が施され、黒色化している。体部外面はケズリ調整で、橙色を呈する。10は丸底を呈し、底部に木葉痕を残す。橙色を呈しており、二次焼成を受けていると考えられる。11の口縁部は強く屈曲し、外方にのびる。口径11.4cm器高4.5cmを測り、静岡平野を中心に多く分布する壺である。内面は斜位のミガキ調整が施される。丸底を呈し、底部に木葉痕を残す。12は端部が内折し、内面はナデ調整、斜位のミガキ調整が施される。内面は黒色化している。丸底を呈し、底部に木葉痕を残す。13はやや平底を呈し、口縁部は屈曲し、上方に立ち上がる。口縁部は横ナデ調整、体部には指痕痕が残る。底部に木葉痕を残す。14・15

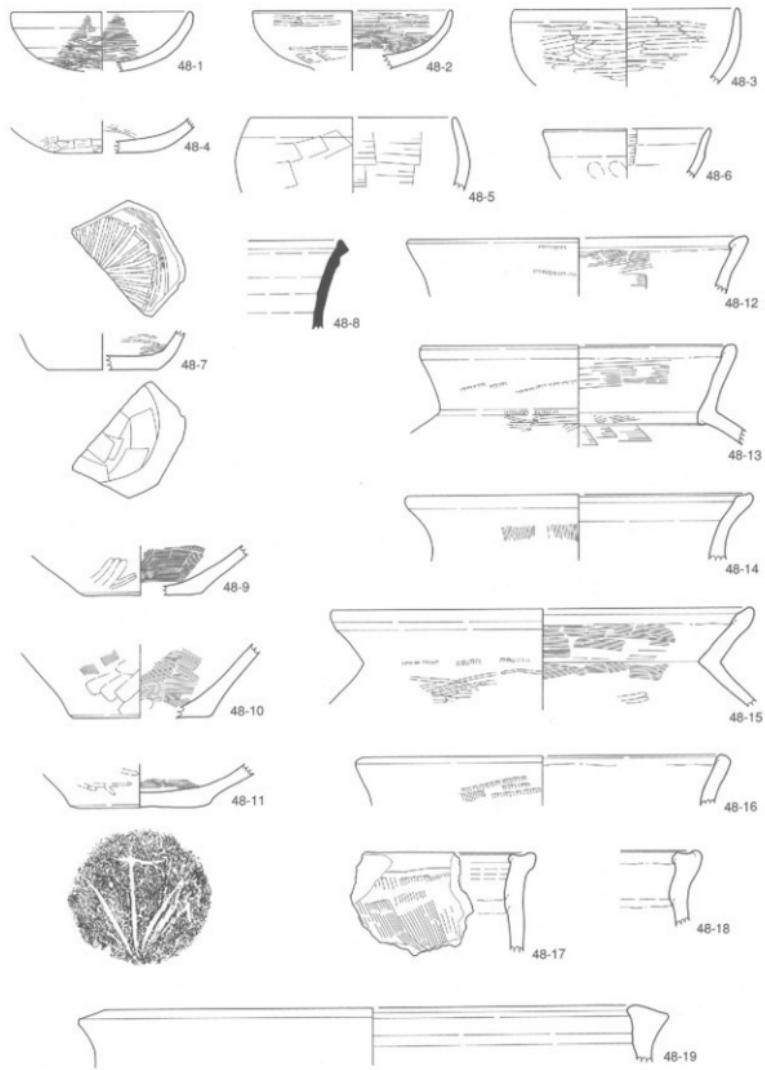


第46図 1-1区 SB19出土遺物実測図(1) (1/3)



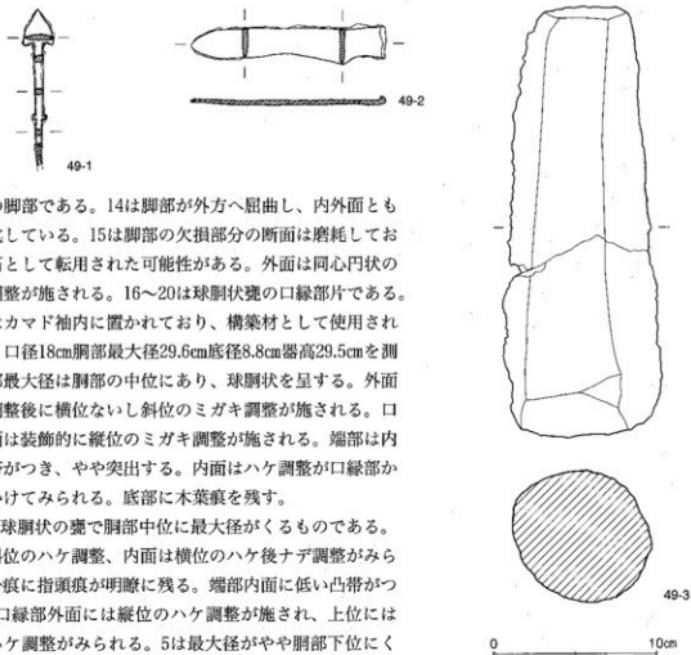
0 10cm

第47図 1-1区 SB19出土遺物実測図(2) (1/3)



0 10cm

第48図 1-1区 SB18・19出土遺物実測図 (1/3)



第49図 1-1区 SB19出土遺物実測図(3) (1/3)

は高坏の脚部である。14は脚部が外方へ屈曲し、内外面ともに黒色化している。15は脚部の欠損部分の断面は磨耗しており、砥石として転用された可能性がある。外面は同心円状のミガキ調整が施される。16～20は球胴状壺の口縁部片である。21の壺はカマド袖内に置かれており、構築材として使用されていた。口径18cm胴部最大径29.6cm底径8.8cm器高29.5cmを測る。胴部最大径は胴部の中位にあり、球胴状を呈する。外面はハケ調整後に横位ないし斜位のミガキ調整が施される。口縁部外面は装飾的に縦位のミガキ調整が施される。端部は内面に凸帯がつき、やや突出する。内面はハケ調整が口縁部から胴部かけてみられる。底部に木葉痕を残す。

47-1は球胴状の壺で胴部中位に最大径がくるものである。外面は斜位のハケ調整、内面は横位のハケ後ナデ調整がみられ、接合痕に指頭痕が明瞭に残る。端部内面に低い凸帯がつく。2の口縁部外面には縦位のハケ調整が施され、上位には横位のハケ調整がみられる。5は最大径がやや胴部下位にくくるものでやや無花果形を呈する。外面はハケ調整で、内面は横ハケ調整が施される。胴部下位に輪積み痕、底部に木葉痕が残る。6・7は球胴状の壺の胴部片である。7は外面にハケ調整、下位にナデ調整が施される。8は球胴状壺の底部片である。外面は底部との境にナデ調整が施され、縦位のハケ調整が施される。内面は横位のハケ調整。9～11は壺の底部片である。

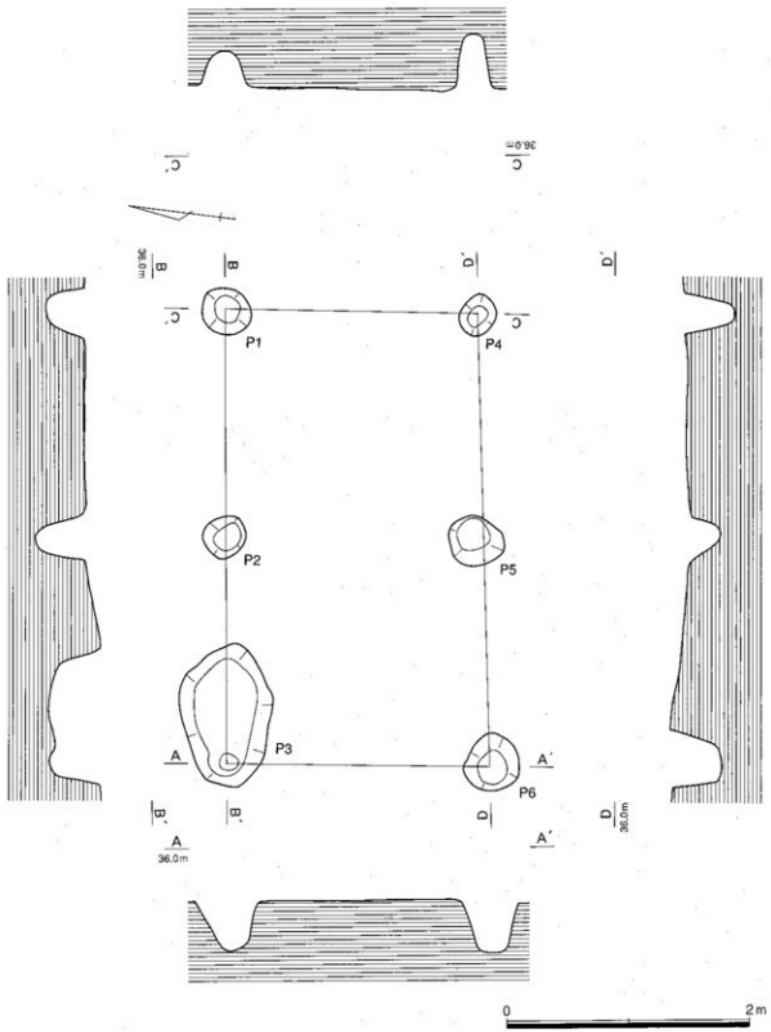
49-1は広根系盤抉三角形鎌でややふくらが張り、五角形に近い形態をとる。全長9.5cmで棘状闊を有する。茎部に木質が残る。2は鉄鎌である。基部には着装のための折り返しがあり、先端部は尖らずや丸みをもつ。棟は直線を基調とし、平坦である。刃部と柄の部分の区別が明確で、刃部の湾曲は弱い。長さ11.9cmで基部の幅1.7cm長さ2.6cmを測る。3は石製の支脚で、残存長26.45cmを測り、基部は欠損している。中央部の断面は円形であるが、先端部は方形状をなす。石材は粗粒砂岩である。

SB18・19出土遺物 (第48図1～19 図版25)

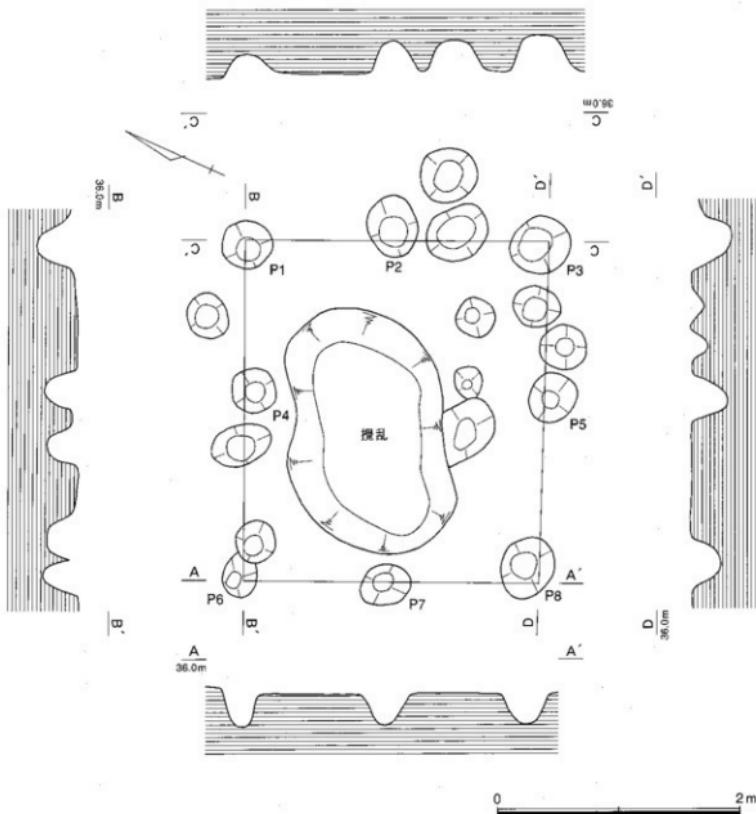
SB18～20の大部分は擾乱が及んでおり、遭墳ごとに判別できなかったものをここに含めた。48-1・2は内湾する口縁壺で、1は内外面に横位の細かいミガキ調整が施される。2は内面に横位の細かいミガキ調整が施される。5は内湾する碗で外面はハケ調整、内面はハケ調整が施される。6は屈曲口縁壺である。7は駿東型の壺で、底部外面はヘラケズリ調整、内面は放射状のミガキ調整が施される。8は須恵器の壺の口縁部であ



第50図 1-1区 SB20出土遺物実測図



第51図 1-1区 SH-1実測図 (1/40)



第52図 1-1区 SH-2実測図 (1/40)

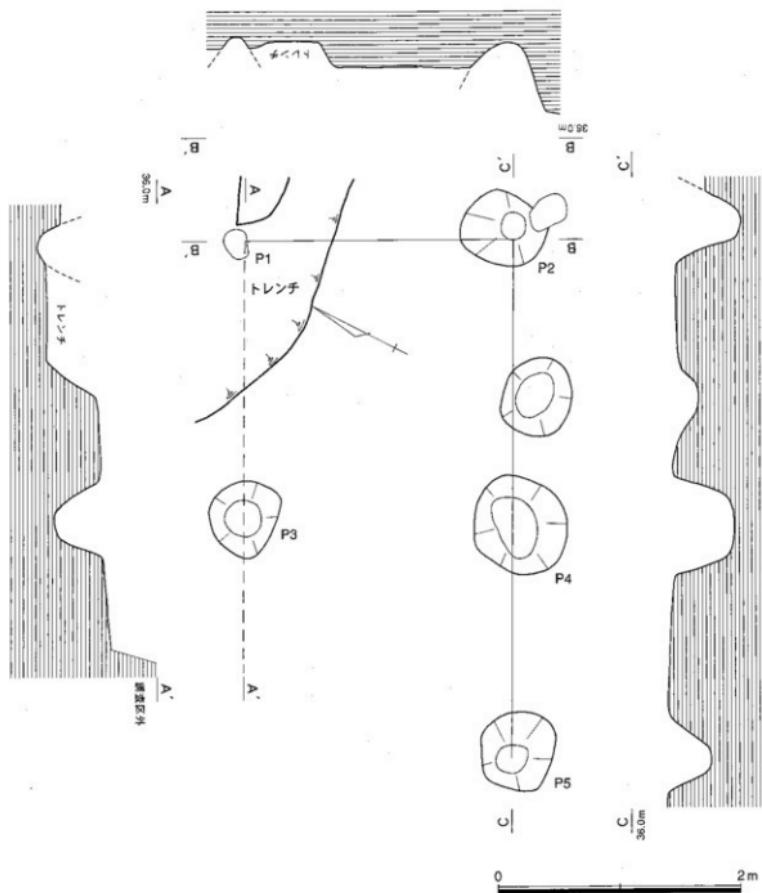
る。9~11は壺の底部片である。12~16は球胸状の壺の口縁部片で、端部内側に凸帯がつき肥厚するもの(12・13) 内面は横ナデ調整により外方へややのび、低い凸帯状をなすもの(14・15) 端部上方に凸帯がつき、三角形状をなすもの(16)がある。15は外面にミガキ調整が施される。17~19は堀形土器である。17・18は口縁部内側に粘土を貼り付け、内側に突出している。端部は外方にのび、端部上面にはナデ調整による沈線が巡る。19は断面三角形を呈し、外方へと突出する。端部の幅は2.8cmを測る。

SB20 (第39図)

SB20は3軒の住居が切り合っているため東壁のみの検出であり、残存長4.9mを測る。東壁南側の床面から須恵器壊身が出土している。時期は7世紀後半と推定される。

SB20出土遺物 (第50図1 図版25)

50-1は須恵器壊身で口径8.5cm受部径10.2cm器高3.1cmを測る。外面底部にはヘラケズリ調整が施される。



第53図 1-1区 SH-3実測図 (1/40)

掘立柱建物跡

SH-1 (第51図 図版15)

SH-1はB24・25グリッドに位置する。梁間1間×桁間2間の側柱建物跡で、梁総長2.1m、桁総長3.25mを測る。面積は7.15m²で、建物方向は長軸でN-82°-Eを示す。梁柱間寸法は、2.1~2.2m、桁柱間寸法1.9mを測る。柱穴は円形を呈し、深さは0.35~0.4mで、底面の標高は35.2~36.1mを測る。柱穴からは遺物は出土していないが、切り合ひ関係からSB14より先行するため、8世紀後半以降のものであろう。

SH-2 (第52図)

SH-2はA24グリッドに位置する。梁間2間×桁間2間の側柱建物跡で、梁総長2.5m×桁総長2.8mを測

る。面積は7m²で、建物方位は長軸でN-65°-Eを示す。梁柱間寸法は1.25~1.3m、桁柱寸法1.3mと1.5mがみられる。柱穴の覆土は黒褐色土で粘性は弱い。径0.5mの梢円形、不整形を呈する。深さは、0.3m~0.4mを測り、底面標高は35.35~35.4mである。時期を示す遺物は出土していないが、覆土や周辺の遺構から古墳時代後期以降と推定する。

SH-3 (第53図)

SH-3はB24グリッドに位置する。P1は攪乱のため下部のみの検出となつたが、梁間1間×桁間2間の側柱建物跡と推定される。建物方向は長軸でN-64°-Eを示す。梁柱間寸法は2.2m、桁柱間寸法は2.3~2.0mを測る。柱穴の深さは0.4~0.3m、底面標高は35.35~35.0mである。柱穴からは遺物が出土していないため、時期は不明である。

2 1-2区の概要 (第54図 図版16)

1-2区は生活道路と排水路に囲まれた三角状の区域であり、以前は墓地として使用されていた。そのため、調査区の大半がすでに削平・造成が行われており、Ⅲ・Ⅳ層の包含層は残存していないかった。遺構検出作業は地山であるV層の褐色砂礫土上面で行った。標高35.8m辺りで土坑2基、ピット2基などを検出し、この部分の標高は35.8m辺りで隣接する1-1区の地形につながる。遺物は出土していないが、古墳時代後期以降の遺構であろう。調査区南側では南北方向にのび、調査区南端で東に向く溝状遺構を検出したが、遺物は出土していない。1-1区で検出している集落域と検出レベルが最大30cmほどの比高差があることや遺物が出土していない点、この遺構の覆土は住居跡、土坑などの覆土と違う点などから該期のものではないだろう。

3 1-3区の概要 (第54図 図版16)

1-3区では竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡4棟、溝状遺構、土坑・ピットを検出した。古墳時代後期～奈良時代の遺構に比定される。V層上面で遺構検出作業を行った。全体の地形は北西から南東側に向かって低く傾斜しており、南東部分は包含層が厚く堆積していた。調査区の西側は駿河線の線路があつた場所であり、包含層やV層は削平されており、遺構の検出状況から集落の規模はさらに西側に広がっていたと考えられる。

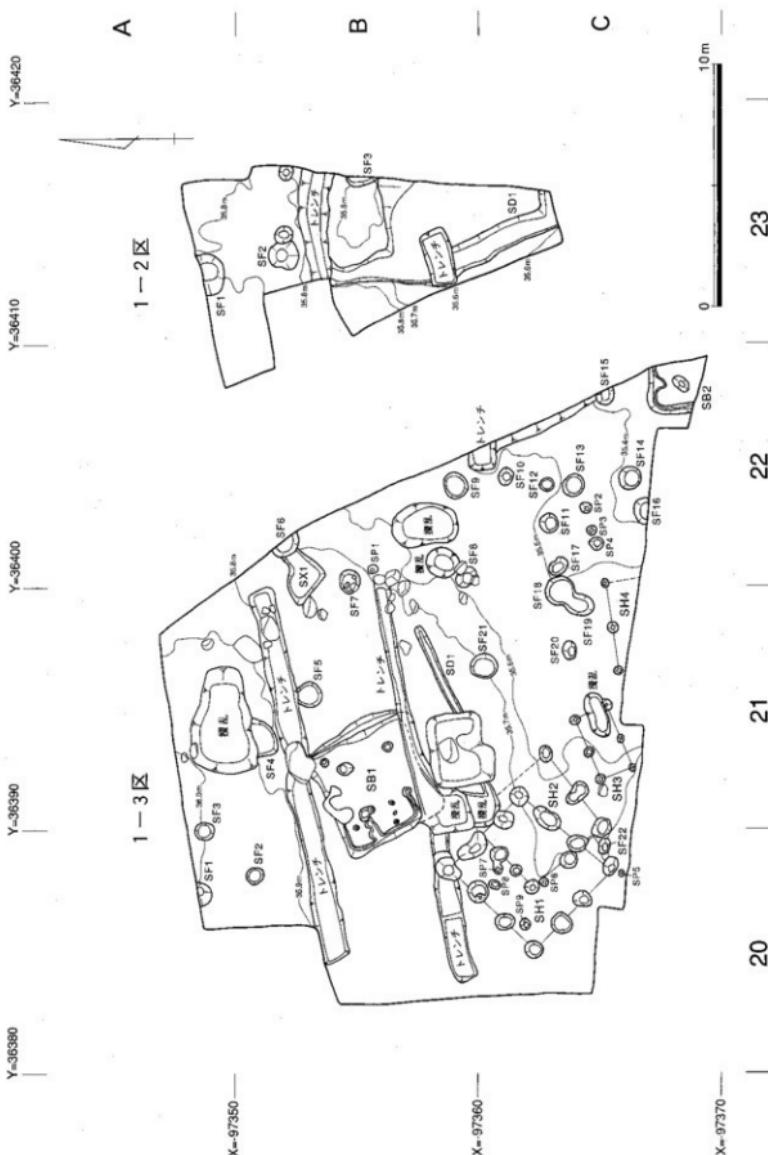
1-1区と同様、以前は宅地であったため、調査区内には所々で攪乱が及んでいた。SB1は調査区の中央のやや北寄りで、SB2は調査区南東隅で検出された。掘立柱建物跡は調査区の南西側で集中して検出されている。柱穴内からは土師器の細片のみで時期を明確にできないが、配置状況から数時期に分離できると思われる。掘立柱建物跡などの遺構はさらに南側に展開すると考えられる。竪穴住居跡と掘立柱建物のセット関係は判然としない。

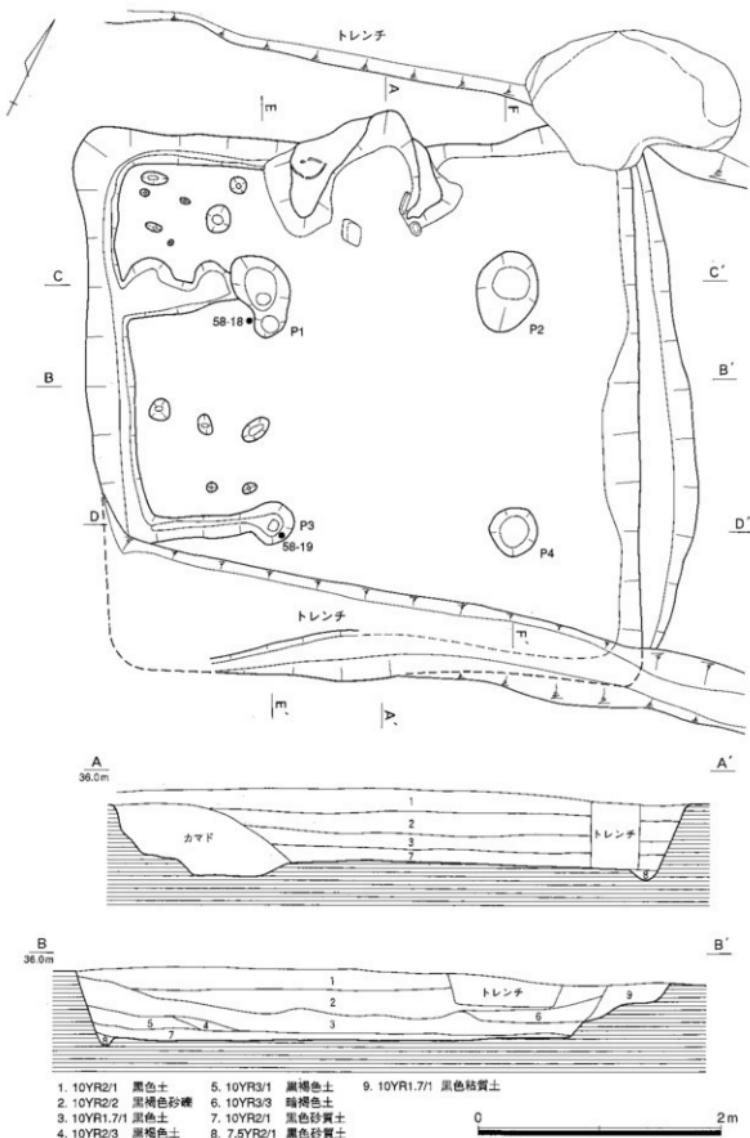
竪穴住居跡

SB1 (第55~57図 図版17)

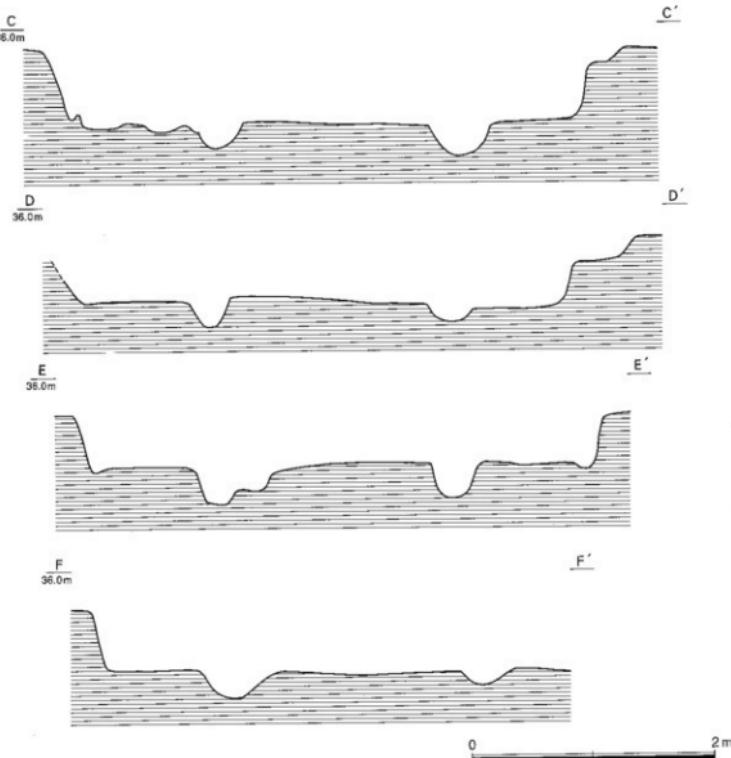
SB1はB20~21グリッドに位置する。住居の南壁はトレンチにより削平されているが、正方形を呈するものと思われる。規模は推定で4.5×4.8m測り、面積はおよそ21.6m²である。主軸方位はN-25°-Wを示し、北壁中央に設置される。住居の南側にはカマドの南壁に平行する残存長7.5m幅0.2mの溝状遺構が検出されているが、この住居に関わるものかは不明である。カマドの袖は両側とも残存しており、カマド先端部に礫を配していることから本来は、このあたりまで袖の粘土が巡っていたと考えられる。左側の袖内には構築材として球胴状の甕が完形品として使用されていた。住居の北東隅には長さ2m幅1mの巨礫があり、地山の礫であることから、すでに構築段階時に住居の北東隅として利用していたことが伺える。なお、この周辺の覆土からは土器、不明鉄製品が出土している。貼床を除去した後に柱穴は4基確認した。柱穴間隔は1.9~2.0mを測り、西半部の柱穴から西壁の壁溝にかけて仕切溝が検出された。P3の底部に礫が設置されており、根石の可能性もある。また、この覆土から鉄鎌が1点出土した。他に

第54図 1-2区・1-3区 全体図 (1/200)





第55図 1-3区 SB1実測図(1) (1/40)

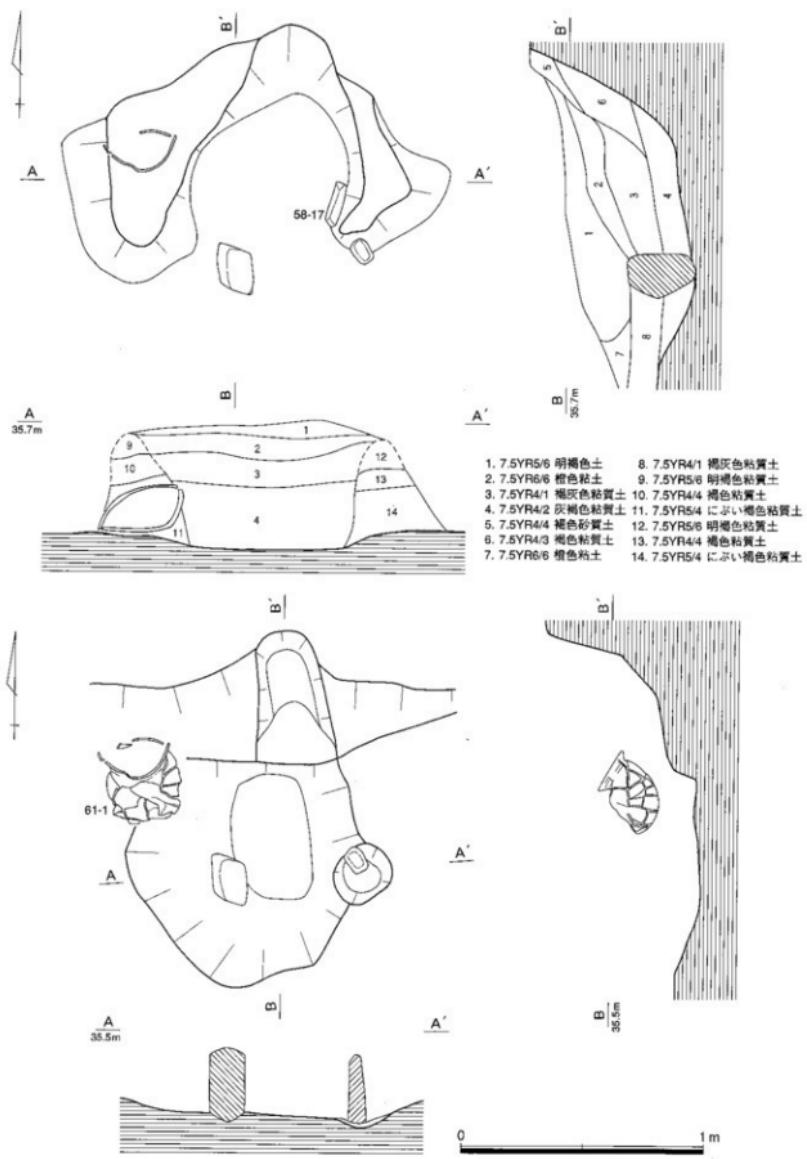


第56図 1-3区 SB1実測図(2) (1/40)

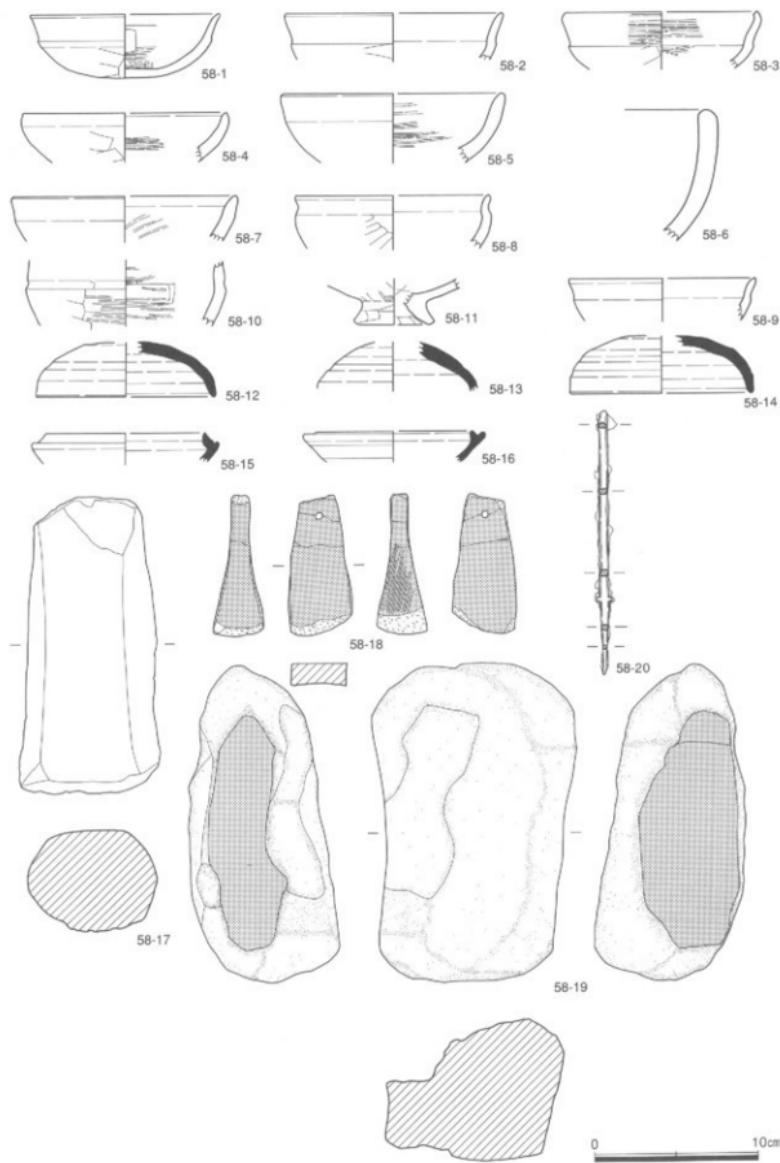
も貼床下の北西の柱穴付近から砥石が出土している。柱穴の抜き取り穴が検出されていないので判然としていないが、この鉄鎌の出土状況から住居構築時あるいは柱を抜く時など建築儀礼に関わる性格を持つ可能性があることを指摘しておきたい。構築材の甕とカマド周辺出土の遺物から7世紀末葉と考えられる。

SB1出土遺物 (第58・59図 図版25・26)

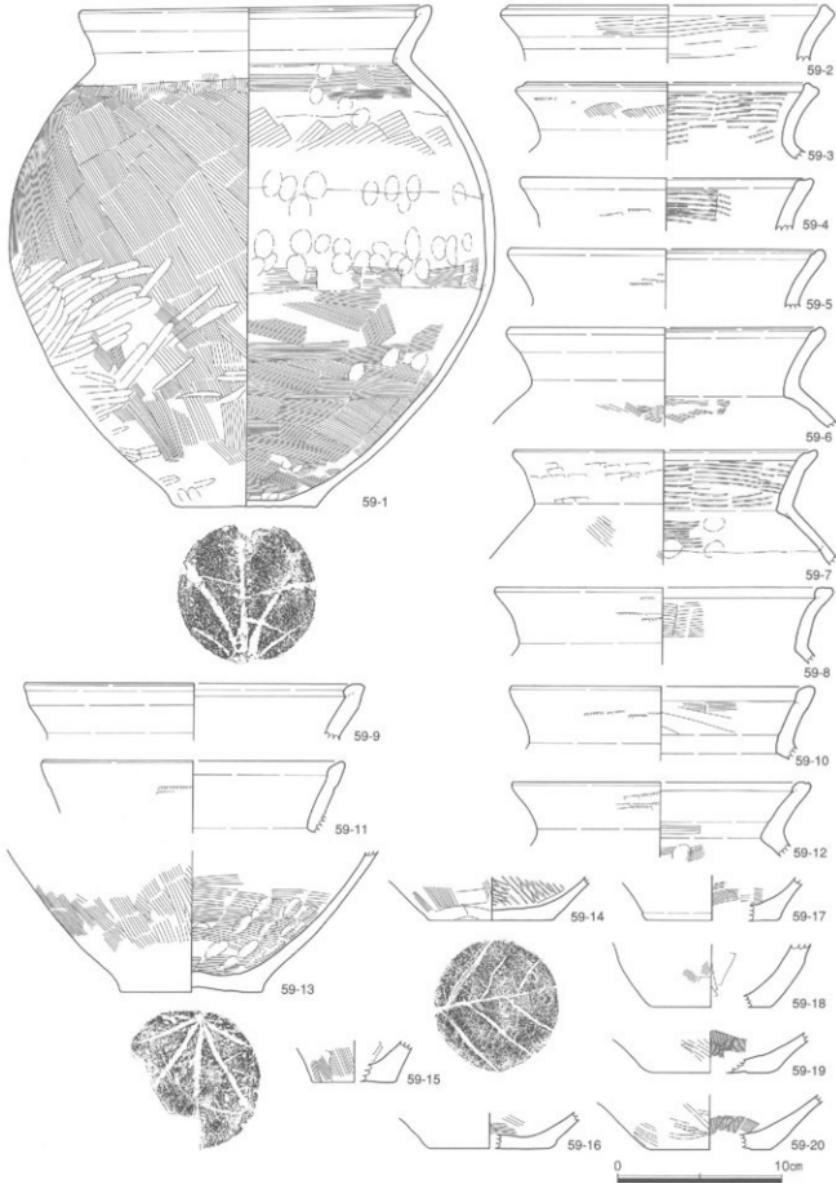
58-1~3は屈曲口縁の壺である。4は内湾口縁の壺で、内面にミガキ調整が施される。8は口縁部が屈曲して外方へのび、外面はケズリ調整が施される。11は高壺で、低い脚部を有する。脚部にはケズリ調整が施される。12~14は須恵器の壺蓋で、15・16は須恵器壺身である。17はカマドの石製支脚で、カマドの燃焼室から倒位の状態で出土している。側面は3面の面取りがみられるが、本来は断面が方形状を呈していたと考えられ、石材は凝灰質砂岩である。上端部は平坦で径6.7cm、残存長18.15cmを測る。18は砥石で、掘り方の北西柱穴の周辺で出土している。砥面は4面確認される。径4mmの円形の孔が穿たれ、側面部には細かい線状痕が斜方向にみられる。材質は流紋岩である。19は砥石である。砥面は2面確認され、ともに側面部である。砥石の平面形は長方形状を呈するが、両側面部の中央部は研ぎ減りによりややへこむ。材質は黄瀬川で採取される多孔質玄武岩である。20は細根系盤箭鎌である。鎌身部の長さ



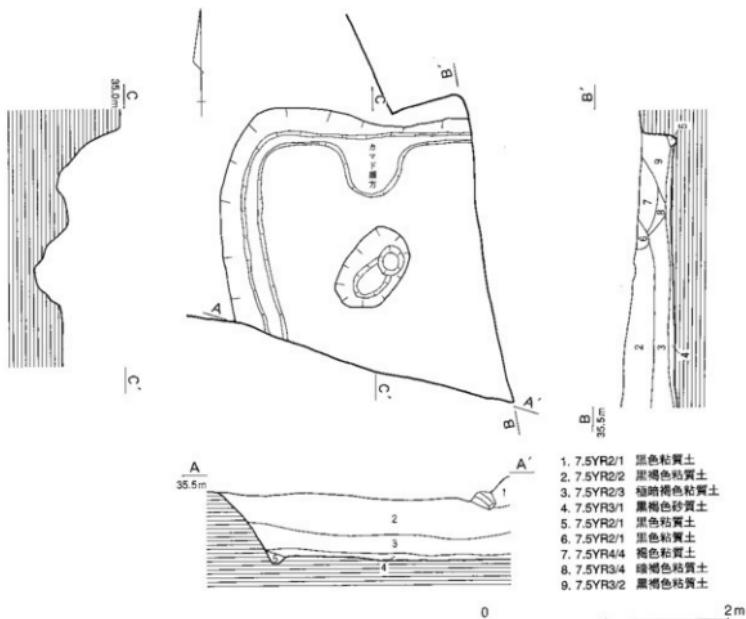
第57図 1-3区 SB1カマド実測図 (1/20)



第58図 1-3区 SB1出土遺物実測図(1) (1/3)



第59図 1-3区 SB1出土遺物実測図(2) (1/3)

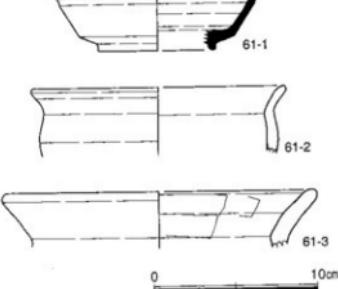


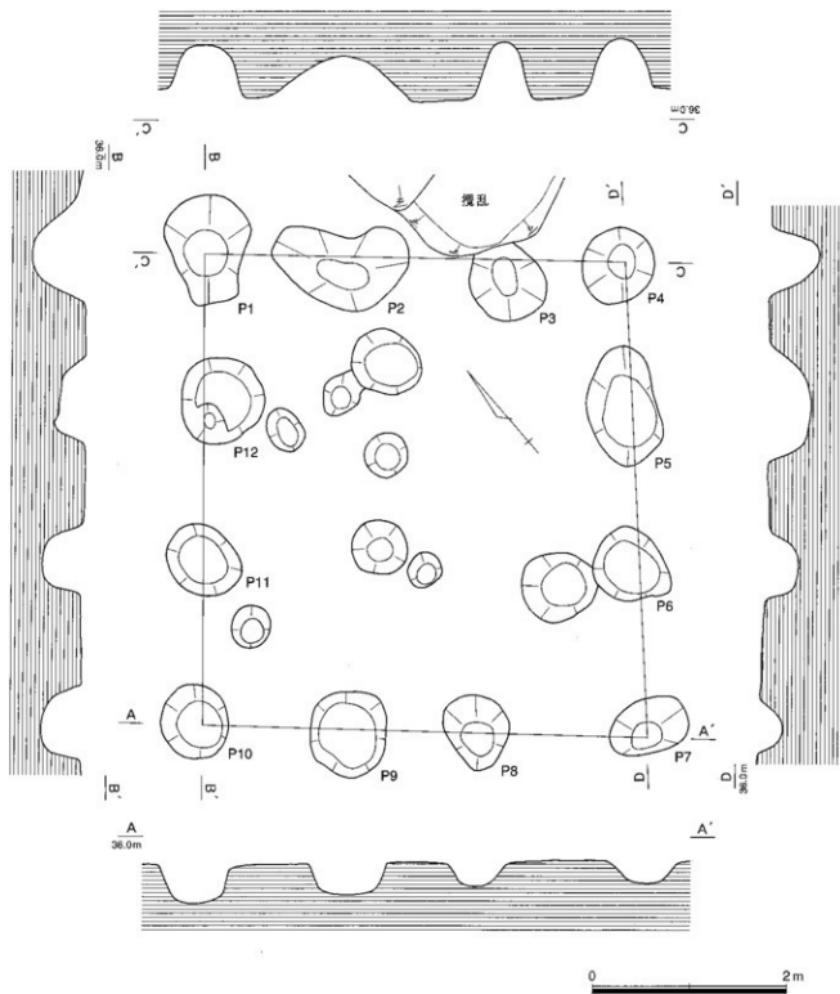
第60図 1-3区 SB2実測図 (1/40)

は16cmで、刃部は片丸造である。棘状闊を有し、茎部は4.7cmを測る。59-1はカマド袖内の構築材として使用されたものである。口径20.9cm底径8.5cm器高30.65cm胴部中位に最大径29.4cmを測り、胴部の半分は二次焼成を受けている。外面は斜位のハケ調整が施され中位から下位にかけてナデ調整がみられる。内面は中位から下位にかけて横位のハケ調整、中位の接合部に指頭痕がみられる。口縁端部は、内側に断面半円状の凸帯が巡り、肥厚する。底部には木葉痕が残る。59-2~12は駿東型の球形状壺の口縁部片である。口縁端部の形態はさまざまなものがあり、端部内側に凸帯を巡らせて肥厚し、端部を上方につまみあげて断面が三角形状を呈するもの(2・3)横位のナデ調整により沈線状を呈するもの(5・6)横位のナデ調整で端部をさらに外方へのばすもの(7)内側の肥厚はぶく、断面は半円状を呈するもの(8~10)などがある。

11は端部上面に接合痕を残し、沈線状を呈するものがみられる。59-13~20は壺の底部片である。13は上げ底状を呈しているが、それ以外は平底で木葉痕を残す。14

第61図 1-3区 SB2出土遺物実測図 (1/3)



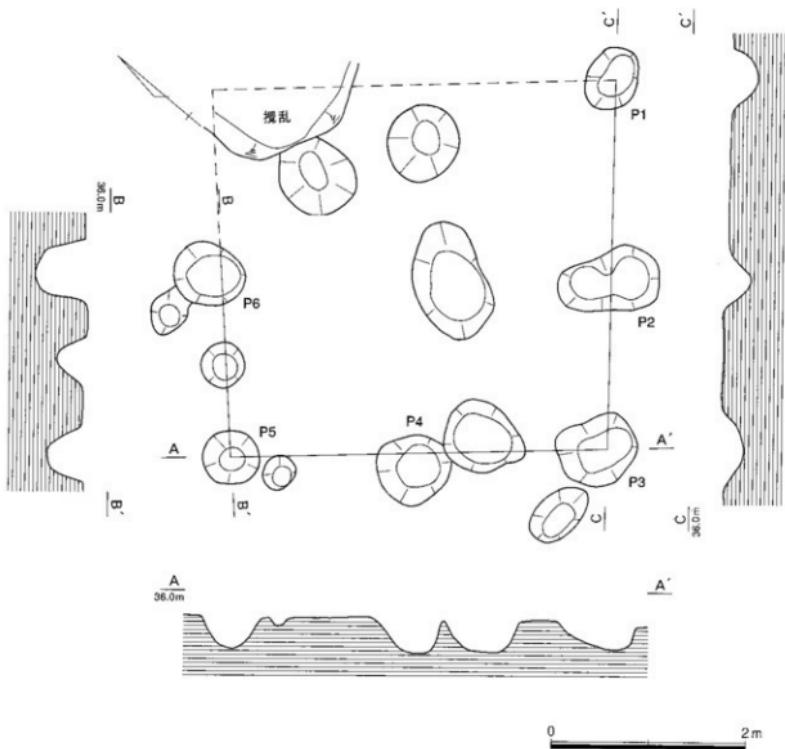


第62図 1-3区 SH-1実測図 (1/40)

の底部外面にはケズリ調整が施される。15は小型甕の底部片で、18は底部から急激に立ち上がり、器壁は厚い。19・20は底部外面にミガキ調整がみられる。

SB2 (第60図 図版18)

調査区の南東隅で検出した。カマドは袖、天井部は破壊されており、掘方のみであった。住居の平面形は北西隅の一部分を検出したに過ぎないため不明である。主軸方位は真北を示すと思われる。貼床は



第63図 1-3区 SH-2実測図 (1/40)

厚さ5cmで粘性・しまりの弱い土がみられ、硬化面は認められない。住居の掘方は褐色砂礫土を掘り込み、岩盤の上面で掘り方底面を形成している。壁溝は西壁から北壁にかけて検出されている。柱穴と思われるピットを1基検出した。覆土の遺物から時期は8世紀後葉と考えられる。

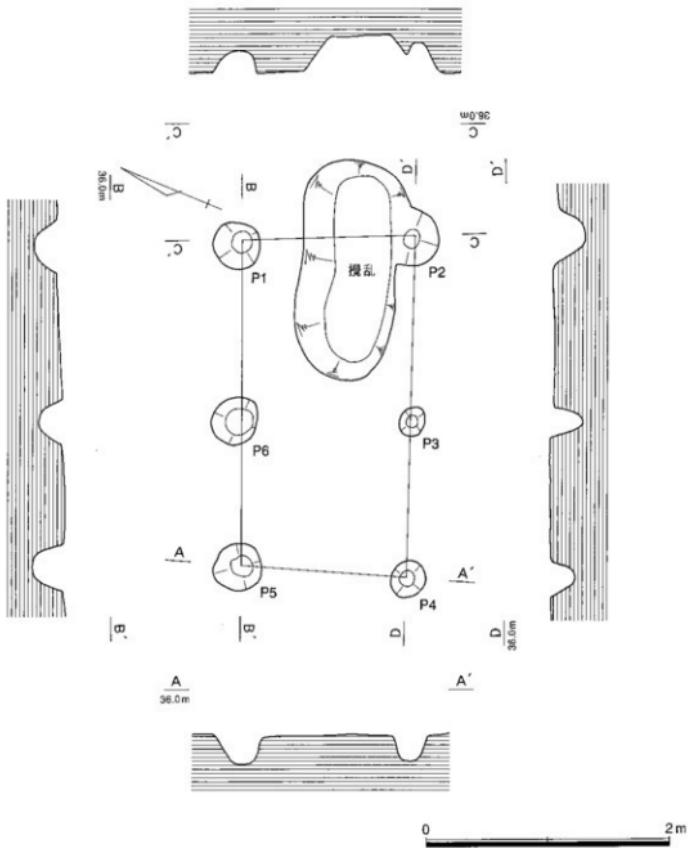
SB2出土遺物 (第61図1~3)

61-1は須恵器高台付耳である。底部から明確に稜をなして屈曲し、外方にのびる。口縁部はやや外反する。高台は断面四角形をなす。2は小型の甕である。口縁部内面に横位のハケ調整がわずかに残る。3は駿東型の球洞状の甕の口縁部である。

据立柱建物跡

SH-1 (第62図 図版18)

SH-1はC20グリッドに位置する。梁間3間×桁間3間の側柱建物跡で、梁総長4.6m×桁総長4.85mを測る。面積は22nfで、建物方位は長軸でN-41°-Eを示す。梁柱間寸法は1.1~1.4m、桁柱間寸法は1.2~1.4mを測る。柱穴の掘り方は円形あるいは不定形であり、直径0.7~0.9mとばらつきがある。深さは0.3~0.5m、底面の標高は35.2~35.5mを測る。柱穴の覆土は黒褐色土でしまりは弱い。遺物は出土し



第64図 1-3区 SH-3実測図 (1/40)

ていない。

SH-2 (第63図 図版18)

SH-2はC20～C21グリッドに位置する。梁間2間×桁間2間の側柱建物跡で、梁総長3.8m×桁総長3.85mを測る。面積は14.6nfで、建物方位は長軸でN-41°-Wを示す。梁柱間寸法は1.8m、桁柱間寸法1.9mを測る。柱穴は円形ないし楕円形で径0.8m～0.6mを呈する。深さは0.3m～0.2m、底面標高は35.4m～35.5mを測る。柱穴の切り合い関係からSH-1より時期的に古いと考えられる。遺物は土師器の細片が出土している。

SH-3 (第64図)

SH-3はC21グリッドに位置する。梁間1間×桁行2間の側柱建物跡で、梁総長1.35m、桁総長2.65mを測る。面積は3.58nfで、建物方位は長軸でN-69°-Eを示す。梁柱間寸法は1.4m、桁柱間寸法は1.35mと

1.5mがみられる。柱穴は黒褐色土でしまりは弱い。径0.2~0.4mの円形、楕円形を呈し、深さは0.2m、底面標高は35.35~35.50mを測る。遺物は柱穴より出土していないため時期は不明である。

SH-4 (第65図)

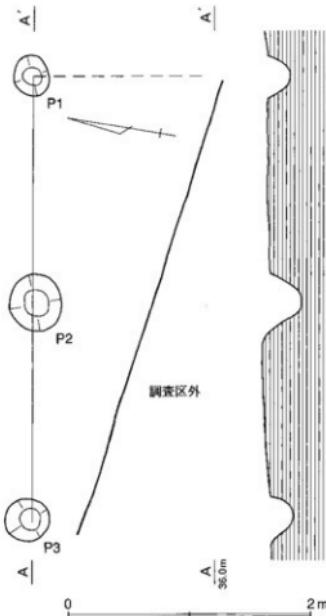
SH-4はC21グリッドに位置する。南側は調査区外のため全体は不明であるが、柱穴は3個確認し、柱間はともに1.8mを測るため、建物跡とした。柱穴は円形を呈し、径0.4~0.35mを測る。柱穴は黒褐色土で深さ0.16~0.25m、底面標高は35.3~35.45mを測る。遺物は出土していない。

土坑 (第54図)

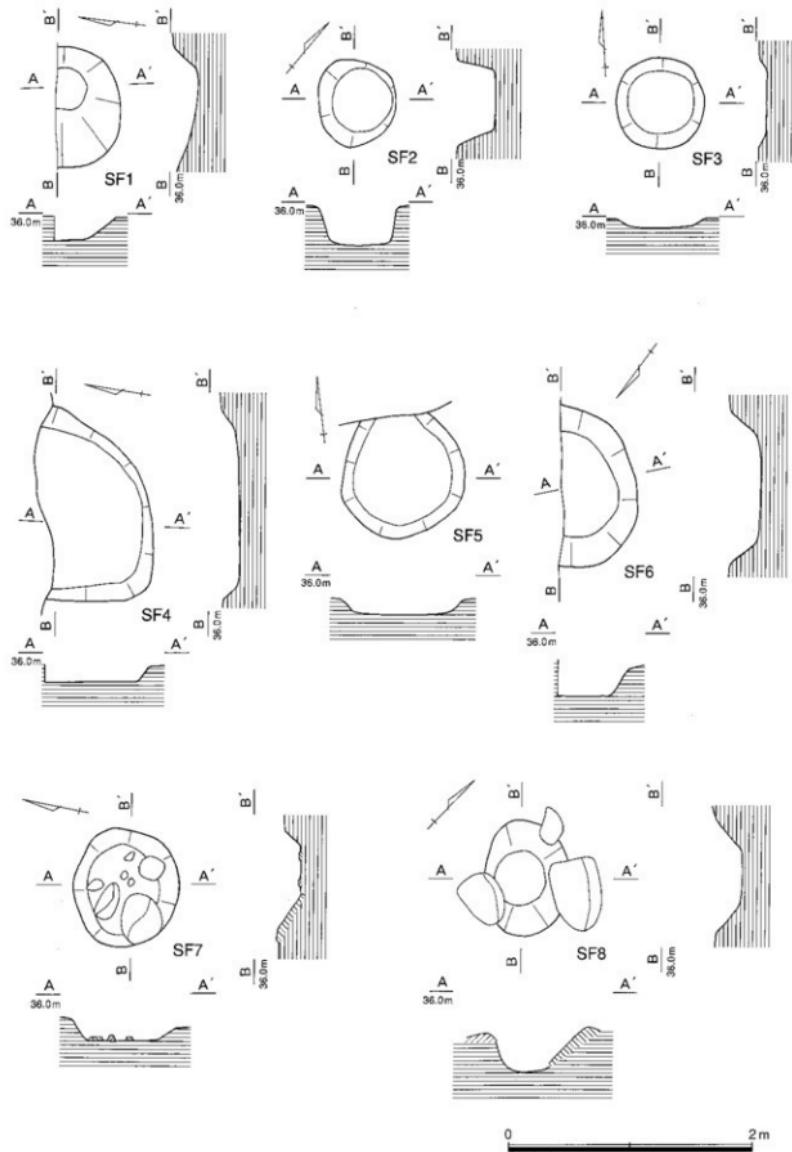
1-3区では21基の土坑が検出されている。円形を呈するものがほとんどを占める。覆土は1層でほとんどが黒褐色土で粘性・しまりは弱い。遺物は土師器の細片のみで時期判断は困難であった。SF18・19は切り合っているため、これらの遺構には若干の時期差があったと思われる。2-1区では円形、長楕円形の2種類の土坑がみられるが、ここではほぼ円形、楕円形であり、長楕円形はみられないことから集落域の土坑と異なる性格を有しているのかもしれない。また、SF20、SF17、SF12、SF14は3.5m間隔で並列している。南側は調査区外となっており、判然としないため、今回は土坑として扱った。

1区SF・SP出土土器 (第69図1~14)

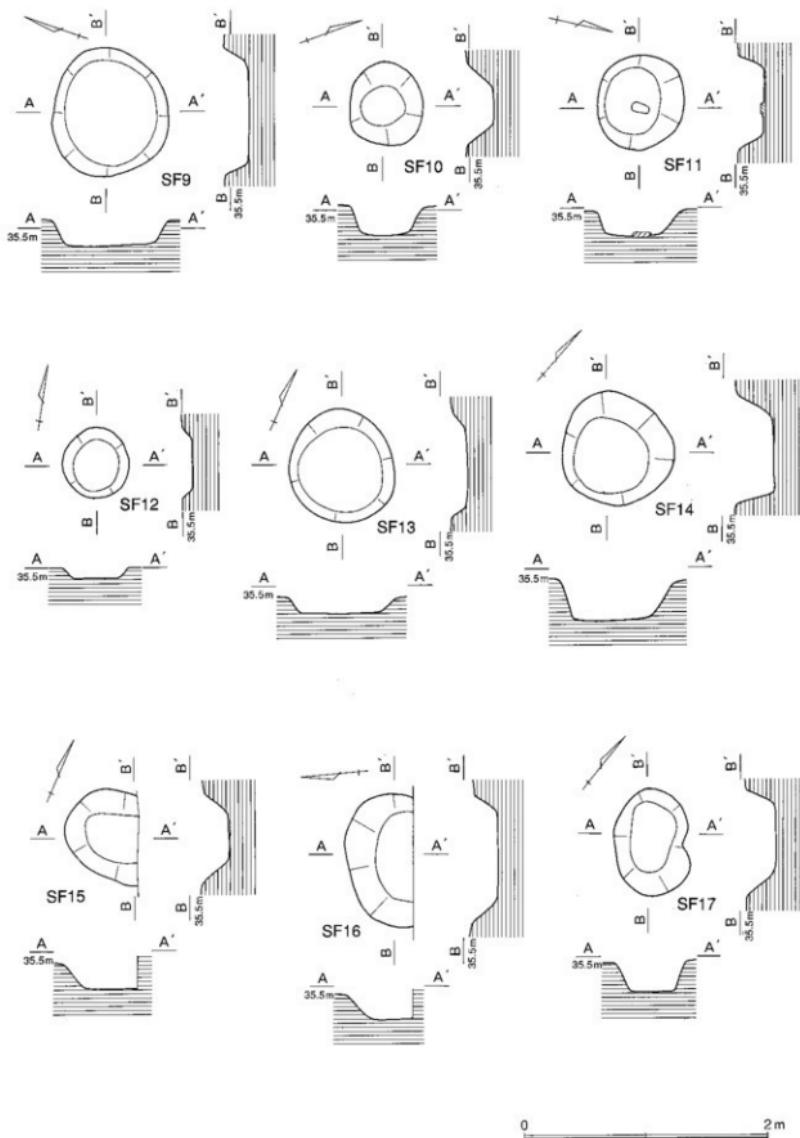
69-1は内湾する土師器壺で、口縁部には強い横位のナデ調整が施される。2は球胴状壺の口縁部片である。端部は内面にわずかに突出する。3は長胴状壺の口縁部片である。球胴状の壺より胎土は硬質で褐色を呈する。4は口縁部が外方へ屈曲し、横位のナデ調整が施され、小型の壺ではないかと考えられる。5は球胴状壺の口縁部片で、端部の肥厚はにぶく、幅広である。6は屈曲口縁の壺で、内外面とも黒色化している。稜をもち、口縁部はやや内湾する。7は駿東型の壺で、口縁部はやや外反する。外面は横位のミガキ調整で、内面は横位のミガキ後、縦位のミガキ調整が施される。8は球胴状壺の口縁部片で、断面は0.9cmと厚い。9は須恵器壺の口縁部片である。10は球胴状の壺の底部片で、木葉痕が残る。11は屈曲口縁の壺で、赤褐色を呈する。弱い稜をもち、口縁部は肥厚しながら内湾する。12は球胴状壺の底部片で、木葉痕が残る。13は小型の壺で、端部は斜め上方につまみ上がる。器壁は薄い。14は球胴状の壺で、端部の肥厚はにぶい。



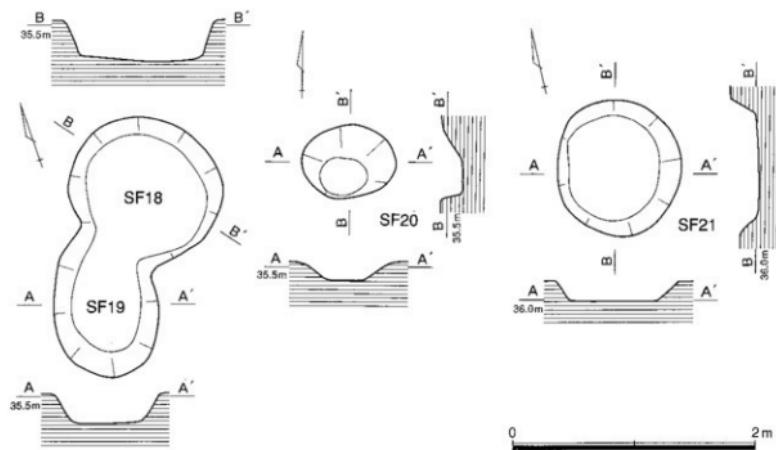
第65図 1-3区 SH-4実測図 (1/40)



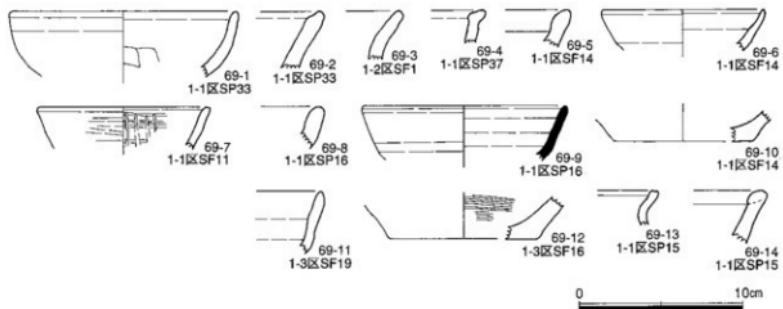
第66図 1-3区 土坑実測図(1) (1/40)



第67図 1-3区 土坑実測図(2) (1/40)



第68図 1-3区 土坑実測図(3) (1/40)



第69図 1区 ピット・土坑内出土遺物実測図 (1/3)

表3 1区 穴住居跡計測表

調査区	グリッド	住居番号	面積(南北×東西m)	平面プラン	堆積物(t/t)	主軸方位	主柱穴	カマド位置	支脚	壁構	主 要 遺 物	備 考
I-1区	A27	SB1	(2.5) × (2.6)	方形?	—	N-33°-W	1	北壁	—	—	土師器破片・甕・壺	一部調査区外
I-1区	B25	SB2	2.2 × (1.6)	正方形?	—	N-58°-W	—	北壁中央	—	アリ	須恵器残渣・長胴甕	一部調査区外
I-1区	A26	SB3	2.1 × 2.1	正方形	4.41	N-10°-W	—	北東隅	○	アリ	土師器破片・甕	—
I-1区	B25	SB4	3.6 × 3.2	台形	11.52	S-80°-E	—	西南隅	—	—	凸沿甕・須恵器・較大型环	—
I-1区	B25	SB5	SB3・SB4と切り合う	?	—	N-14°-W	—	北壁	—	アリ	—	—
I-1区	B25	SB6	(3.0) × (3.3)	方形?	—	N-15°-W	—	北壁東寄り	—	アリ	甲斐型杯・達江系長胴甕・鉢形鋤針	複雑
I-1区	B25	SB7	(0.9) × (3.4)	方形?	—	N-20°-W	—	北壁西寄り	—	アリ	鍍金型环・長胴甕	一部トレンチ
I-1区	B25	SB8	(3.5) × 3.8	長方形?	—	N-11°-W	—	北壁西寄り	—	アリ	甕	—
I-1区	B25	SB9	カマドのみ	—	—	N-5°-W	—	北壁	—	—	手掘土壁	—
I-1区	B25	SB10	3.1 × 3.05	正方形	9.61	N-3°-W	—	北壁中央	○	—	甕	カマド作り替え
I-1区	C25	SB11	(2.0) × 3.5	—	—	N-12°-W	—	北壁	—	アリ	手掘土器・甕	一部トレンチ
I-1区	C24	SB12	(1.2) × (3.5)	—	—	N-50°-E	—	東壁	—	アリ	須恵器环甕・高台付坪	—
I-1区	C24	SB13	東西(2.2)	—	—	—	—	—	—	—	土師器杯	獨立のみ
I-1区	B25	SB14	2.6 × 2.7	正方形	7.02	N-10°-W	1	北壁東寄り	—	アリ	甲斐型环・長胴甕	カマド確定・鉢穴
I-1区	B24	SB15	南北(3.9)	—	—	N-91°-W	—	東壁	—	—	—	カマドのみ
I-1区	A24	SB16	(1.25) × (3.35)	—	—	N-91°-E	—	西壁	—	—	難観型环	一部調査区外
I-1区	B25	SB17	南北3.7	方形?	—	N-25°-W	—	北壁	○	アリ	須恵器环甕・土師器杯・球形甕	複雑
I-1区	A25	SB18	(3.6) × 4.8	正方形?	—	N-24°-W	—	北壁中央	—	—	須恵器环甕・轟・土師器高环・瓶	鉢窓穴
I-1区	A25	SB19	4.7 × (3.3)	方形?	—	N-23°-W	—	北壁中央	○	—	甕・土師器杯・砾石・鉢甕・鐵錠	—
I-1区	A25	SB20	SB12・SB13と切り合う	—	—	—	—	—	—	—	須恵器环甕	—
I-3区	B21	SB1	(4.5) × 4.8	正方形	21.60	N-25°-W	4	北壁中央	○	アリ	須恵器环甕・土師器杯・砾石・鉢甕	一部トレンチ
I-3区	C22	SB2	(2.0) × (2.1)	—	—	N	1	北壁	—	アリ	須恵器高台付坪・甕	一部調査区外

表4 1区 据立柱建物跡計測表

調査区	グリッド	番 号	方 向	形態	桿間数	桿總長	桿柱間寸法	梁間数	梁総長	梁柱間寸法	面積(m ²)	備 考
I-1区	B24・25	SH-1	N-82°-E	側柱	2	3.25	1.90	1	2.10	2.10~2.20	7.15	—
I-1区	A24	SH-2	N-65°-E	側柱	2	2.80	1.35~1.50	2	2.50	1.25~1.30	7.00	—
I-1区	B24	SH-3	N-64°-E	側柱	2	—	2.35~2.00	1	—	2.30	—	—
I-3区	C20	SH-1	N-41°-E	側柱	3	4.86	1.20~1.40	3	4.50	1.10~1.40	22.00	—
I-3区	C20・21	SH-2	N-41°-W	側柱	2	3.85	1.90	2	3.80	1.80	14.60	—
I-3区	C21	SH-3	N-69°-E	側柱	2	2.65	1.25~1.50	1	1.35	1.40	3.58	—
I-3区	C21	SH-4	N-80°-E	—	—	—	—	—	—	—	柱穴3個・柱間1.8m	—

表5 1-1区 土坑計測表

調査区	グリッド	直角番号	平面形	主軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	断面形	備考
I-1区	A26	SF1	横円形	N-10°.E	0.71	0.66	13	皿状	—
I-1区	B26	SF2	円形	N-83°.E	0.88	0.84	32	皿状	—
I-1区	B26	SF3	不整形	N-88°.E	0.57	[0.50]	10	皿状	調査区外
I-1区	B27	SF4	不整形	N-61°.E	0.74	[0.74]	17	皿状	調査区外
I-1区	B25	SF5	不整形	N-65°.E	[1.60]	1.05	29	皿状	—
I-1区	B25	SF6	横円形	N-17°.E	0.51	0.50	22	皿状	—
I-1区	B25	SF7	椭円形	N-48°.E	0.62	0.65	19	皿状	—
I-1区	B25	SF8	椭円形	N-61°.W	0.57	0.52	36	皿状	—
I-1区	B25	SF9	横円形	N-35°.E	0.80	0.53	38	皿状	—
I-1区	B25	SF10	椭円形	N-64°.W	0.64	0.57	31	皿状	—
I-1区	B25	SF11	長横円形	N-78°.W	0.84	0.59	19	皿状	—
I-1区	B25	SF12	長横円形	N-85°.W	1.22	0.66	32	皿状	—
I-1区	B25	SF13	長横円形	N-15°.E	0.78	0.62	28	皿状	—
I-1区	B25	SF14	横円形	N-11°.W	0.70	0.67	46	皿状	—
I-1区	B25	SF15	横円形	N-42°.E	0.67	0.62	28	皿状	—
I-1区	B24	SF16	長横円形	N-81°.E	[0.90]	0.75	38	皿状	SH1と切り合う
I-1区	B24	SF17	横円形	N-37°.W	0.75	0.58	25	皿状	—
I-1区	B24	SF18	椭円形	N-85°.E	0.65	0.60	28	皿状	—
I-1区	A24	SF19	不整形	—	1.13	[0.90]	13	皿状	機械に切られる
I-1区	A25	SF20	椭円形	N-6°.E	0.76	0.69	35	皿状	—
I-1区	A25	SF21	椭円形	N	0.72	0.65	28	皿状	—
I-1区	A25	SF22	椭円形	N	0.69	0.67	14	皿状	—
I-1区	A25	SF23	椭円形	N-15°.W	0.80	0.53	16	皿状	—

表6 1-3区 土坑計測表

調査区	グリッド	直角番号	平面形	主軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	断面形	備考
I-3区	A20	SF-1	不整形	N-41°.E	0.98	[0.54]	17	皿状	調査区外
I-3区	B20	SF-2	椭円	N-42°.W	0.73	0.63	28	皿状	—
I-3区	A20・A21	SF-3	円形	N-3°.E	0.76	0.72	7	皿状	—
I-3区	B21	SF-4	不整形	N-76°.E	1.60	[0.90]	14	皿状	機械に切られる
I-3区	B21	SF-5	不整形	N-5°.W	1.04	[1.00]	9	皿状	レンジに切られる
I-3区	B22	SF-6	不整形	N-38°.W	1.32	[0.62]	22	皿状	調査区外
I-3区	B22	SF-7	横円形	N-79°.E	0.95	0.86	10	皿状	複合む
I-3区	B22	SF-8	横円形	N-45°.W	1.14	1.05	12.7	皿状	—
I-3区	B22	SF-9	横円形	N-57°.E	1.03	0.95	19	皿状	—
I-3区	C22	SF-10	横円形	N-70°.W	0.68	0.69	22	皿状	—
I-3区	C22	SF-11	横円形	N-75°.E	0.78	0.70	21	皿状	—
I-3区	C22	SF-12	横円形	N-8°.W	0.58	0.55	7	皿状	—
I-3区	C22	SF-13	横円形	N-43°.W	0.92	0.86	14	皿状	—
I-3区	C22	SF-14	横円形	N-65°.E	0.94	0.88	30	皿状	—
I-3区	C22	SF-15	不整形	N-89°.W	0.74	[0.60]	19	皿状	調査区外
I-3区	C22	SF-16	不整形	N-85°.W	1.07	[0.55]	17	皿状	調査区外
I-3区	C22	SF-17	長横円形	N-39°.W	0.78	0.70	21	皿状	—
I-3区	C21・C22	SF-18	不整形	N-38°.W	1.25	[1.10]	29	皿状	SF10と切り合う
I-3区	C21	SF-19	不整形	N-19°.E	[1.10]	0.86	23	皿状	SF9と切り合う
I-3区	C21	SF-20	長横円形	N-49°.E	0.77	0.69	15	皿状	—
I-3区	C21	SF-21	横円形	N-13°.E	1.14	1.05	13	皿状	—
I-3区	C20	SF-22	長横円形	N-50°.W	0.98	0.43	12	皿状	—

表7 1-1区 ピット計測表

調査区	グリッド	通過番号	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	備考
1-1区	A26	SP1	長楕円形	0.53	0.42	34	—
1-1区	A26	SP2	楕円形	0.53	0.50	28	—
1-1区	A26	SP3	楕円形	0.42	0.38	23	—
1-1区	A26	SP4	楕円形	0.32	0.31	19	—
1-1区	A26	SP5	長楕円形	0.54	0.48	23	—
1-1区	A26	SP6	楕円形	0.40	0.38	18	—
1-1区	A26	SP7	楕円形	0.37	0.34	16	—
1-1区	A26	SP8	楕円形	0.53	0.46	29	—
1-1区	A26	SP9	楕円形	0.47	0.44	16	—
1-1区	A26	SP10	楕円形	0.30	0.22	9	—
1-1区	B26	SP11	楕円形	0.50	0.36	30	—
1-1区	B25	SP12	楕円形	0.44	0.43	29	—
1-1区	B25	SP13	楕円形	0.48	0.43	28	—
1-1区	B25	SP14	楕円形	0.42	0.37	30	—
1-1区	B25	SP15	圓角方形	0.54	0.43	35	—
1-1区	B25	SP16	楕円形	0.30	0.28	25	—
1-1区	B25	SP17	楕円形	0.44	0.42	25	—
1-1区	B24	SP18	不整形	0.36	0.25	33	SP17と切り合う
1-1区	B24	SP19	楕円形	0.52	0.45	46	SP20と切り合う
1-1区	B24	SP20	不整形	[0.51]	0.43	50	SP19と切り合う
1-1区	B24	SP21	楕円形	0.37	0.31	12	—
1-1区	B25	SP23	楕円形	0.55	0.53	19	—
1-1区	A24	SP25	不整形	[0.54]	0.39	19	—
1-1区	A24	SP27	楕円形	0.35	0.32	23	SH3と切り合う
1-1区	A24	SP28	長楕円形	0.50	0.31	25	—
1-1区	A24	SP29	楕円形	0.38	0.34	18	—
1-1区	A24	SP30	圓角方形	0.38	0.24	12	—
1-1区	A24	SP31	楕円形	0.30	0.26	5	—
1-1区	A24	SP32	楕円形	0.27	0.25	5	—
1-1区	A24	SP33	不整形	[0.47]	0.44	18	撒乱に切られる
1-1区	A25	SP34	不整形	[0.23]	0.23	17	SP33と切り合う
1-1区	A25	SP35	楕円形	0.31	0.29	20	—
1-1区	A25	SP36	楕円形	0.40	0.34	17	—
1-1区	A25	SP37	楕円形	0.39	0.36	12	—
1-1区	A25	SP38	異楕円形	0.54	0.41	24	—
1-1区	A25	SP39	楕円形	0.47	0.43	16	—
1-1区	A25	SP40	円形	0.34	0.34	13	—
1-1区	A25	SP41	楕円形	0.48	0.36	9	—
1-1区	A25	SP42	楕円形	0.55	0.48	15	—
1-1区	A25	SP43	楕円形	0.29	0.25	12	—
1-1区	A25	SP44	楕円形	0.36	0.31	16	—
1-1区	A25	SP45	楕円形	0.34	0.33	19	—
1-1区	A25	SP46	楕円形	0.40	0.37	18	—
1-1区	A25	SP47	楕円形	0.36	0.31	22	—

表8 1-3区 ピット計測表

調査区	グリッド	通過番号	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	備考
1-3区	B22	SP1	楕円形	0.39	0.34	10	—
1-3区	C22	SP2	楕円形	0.48	0.41	23	—
1-3区	C22	SP3	楕円形	0.44	0.37	26	—
1-3区	C22	SP4	楕円形	0.55	0.52	21	—
1-3区	C20	SP5	楕円形	0.30	0.21	5	—
1-3区	C20	SP6	楕円形	0.35	0.32	19	—
1-3区	C20	SP7	不整形	[0.46]	0.36	21	切り合う
1-3区	C20	SP8	楕円形	0.46	0.36	29	—
1-3区	C20	SP9	楕円形	0.44	0.40	17	—

第2節 2-1区の調査

1 2-1区の概要 (第70図 図版19)

原分古墳東側の調査区を2-1区とした。当初は原分古墳に関連する遺構や古墳などが想定されたが、検出された遺構は溝状遺構16基、土坑20基、ピットなどであった。遺構はDグリッドより南側に分布しており、標高35.4mラインで遺構は検出されている。これらの遺構からは遺物の出土は少なく、また土師器・須恵器の細片であるため、明確な時期を決定することはできないが、7世紀後半以降であると考えられる。したがって、現段階では原分古墳と直接関連する遺構は検出されておらず、この古墳に関わる集落はみつかっていない。調査前は畠地であり、比較的良好に土層が堆積しており、第V層上面で遺構検出作業を行った。地形はE8グリッド周辺から原分古墳のある方向に低く傾斜しており、緩やかな谷状あるいは窪地状となっている。

土坑 (第71図～第73図)

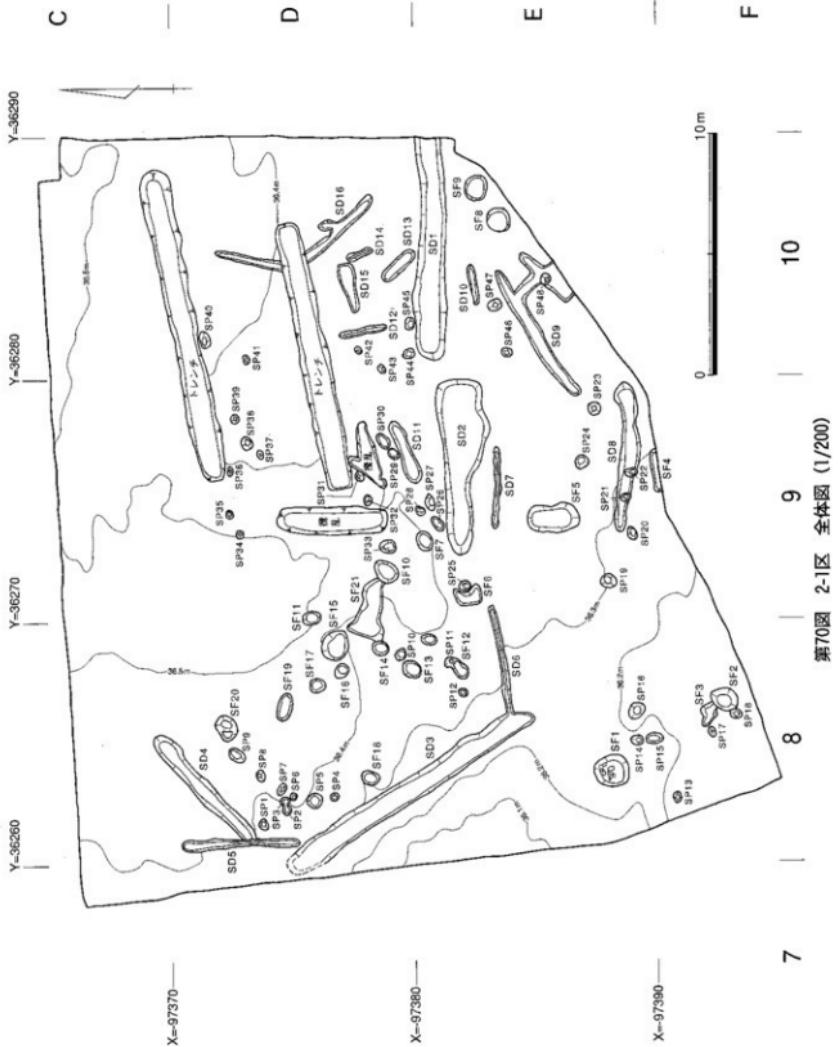
2-1区では20基の土坑を検出した。覆土は1層のみで、溝状遺構同様、粘性の弱い黒色土が堆積しており、焼土、骨粉などは検出されていない。遺物は土師器・須恵器の細片が出土しているのみで、時期を断定することはできない。この調査区の包含層から出土している遺物などから8世紀以降のものであろう。土坑の平面形は、SF1、SF8、SF9などの円形やSF5、SF4といった長楕円形の2種類がみられる。平面形による性格の違い、出土遺物による時期差は見いだせず、性格については不明である。特にSF1は他の土坑と異なり、底部には人頭大の礫が数個出土している。遺物は出土していないため、時期は不明であるが、東部地域でみられる中近世の土坑の可能性もある。なお、長楕円形の土坑について土坑墓としての性格が考えられるため、土坑の計測表に主軸方位を付した。

溝状遺構 (第74図～79図)

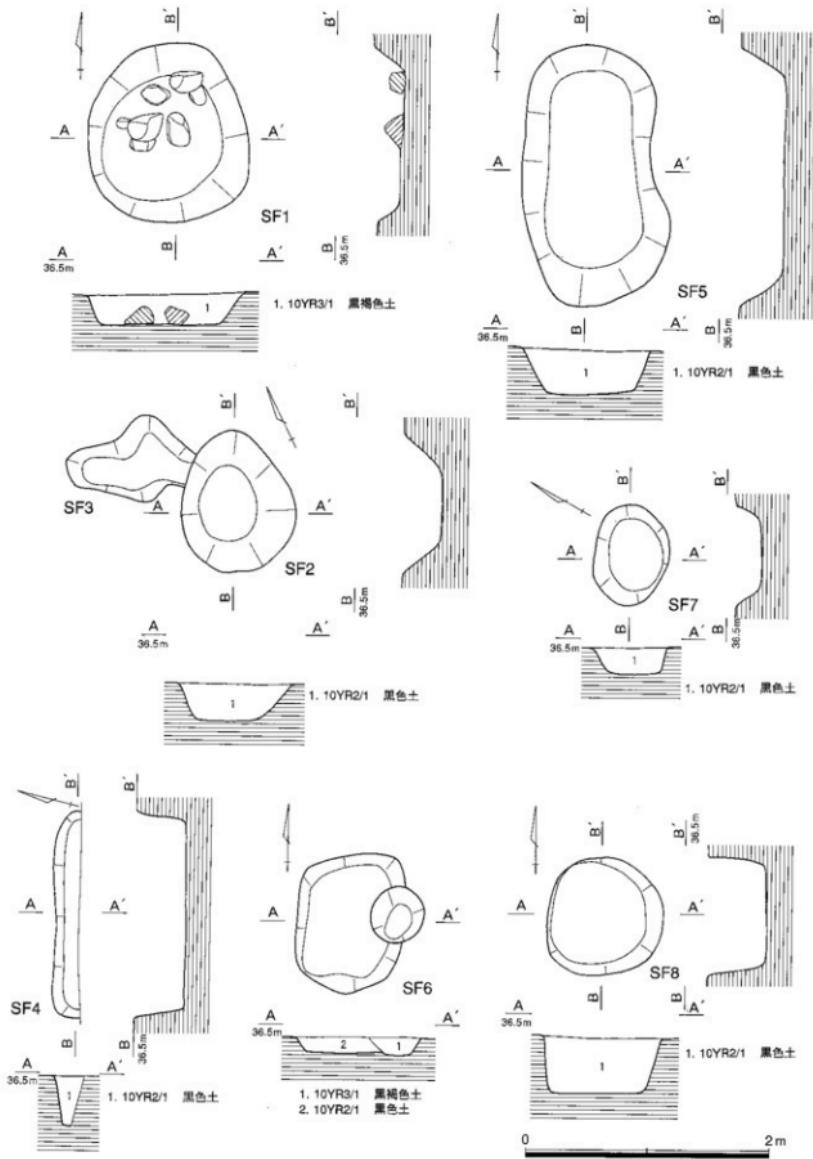
2-1区では16基の溝状遺構を検出した。ほとんどの遺構の覆土は1層のみで、覆土は粘性の弱い黒色土・黒褐色土の2種類ほどに分けられる。しかし、出土する遺物が土師器の細片であるため、この覆土の時期差は明確にできなかった。また、西隣の原分古墳の築造時期に近似する時期の遺物はみられないことから8世紀以降のものであると考えられる。SD1は長大なもので幅1.1m、残存長は8.85mを測り、本来は調査区の東側へ延びていたと考えられる。主軸方向は東西方向を示している。SD2は長さ7.25m最大幅2.1mを測る。土師器片が出土しており、7世紀後半以降のものと考えられる。溝状遺構の方向に関して規則性はなく、この周辺でみられる西に5°傾く地割に関連する遺構や道路状遺構などは検出されていない。

表9 2-1区 土坑計測表

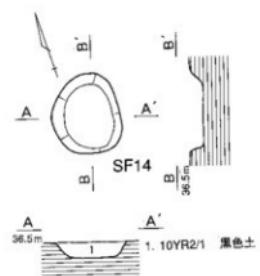
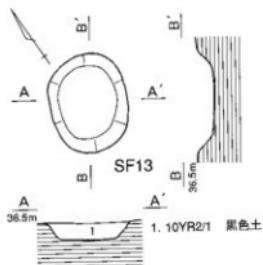
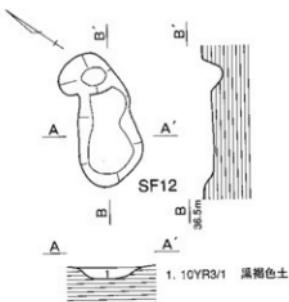
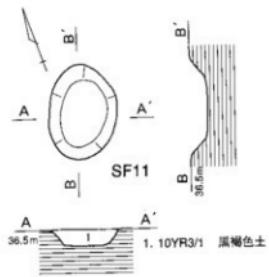
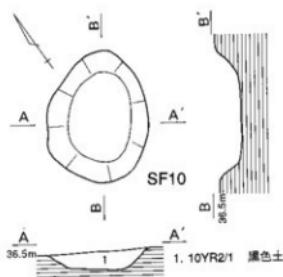
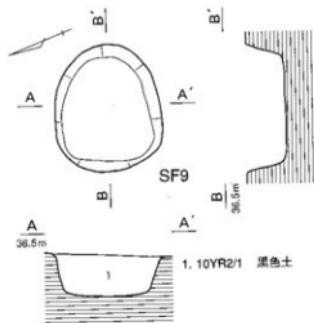
調査区	グリッド	遺構番号	平面形	主軸方位	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	断面形	備考
2-1区	E8	SF-1	円形	N-16°-W	1.48	1.30	25	直状	深を含む
2-1区	E8	SF-2	長楕円形	N-36°-E	1.16	0.94	28	直状	—
2-1区	E8	SF-3	不整形	N-59°-W	[1.00]	0.76	25	直状	—
2-1区	E8	SF-4	不整形	N-77°-E	[1.70]	—	15	直状	調査区外
2-1区	E9	SF-5	長楕円形	N	2.13	1.68	37	直状	—
2-1区	E9	SF-6	不整形	N-16°-W	1.12	[0.74]	9	直状	—
2-1区	E9	SF-7	円形	N-58°-E	0.84	0.61	15	直状	—
2-1区	E10	SF-8	楕円形	N-78°-W	0.98	0.95	44	直状	—
2-1区	E10	SF-9	長楕円形	N-71°-W	1.06	0.87	28	直状	—
2-1区	D9	SF-10	長楕円形	N-35°-E	1.07	0.83	15	直状	—
2-1区	D9	SF-11	長楕円形	N-17°-W	0.77	0.57	8	直状	—
2-1区	E8	SF-12	不整形	N-55°-E	[0.74]	0.46	8	直状	SPI1と切り合う
2-1区	D8-E8	SF-13	円形	N-35°-E	0.80	0.64	12	直状	—
2-1区	D8	SF-14	円形	N-14°-E	0.67	0.56	8	直状	—
2-1区	D8	SF-15	長楕円形	N-60°-W	1.27	1.06	21	直状	—
2-1区	D8	SF-16	椭円形	N-50°-W	0.62	0.49	15	直状	—
2-1区	D8	SF-17	円形	N	0.65	0.57	17	直状	—
2-1区	D8	SF-18	長楕円形	N-14°-E	0.76	0.55	10	直状	—
2-1区	D8	SF-19	長楕円形	N-77°-W	1.17	0.57	24	直状	—
2-1区	D8	SF-20	不整形	N-88°-E	1.06	0.78	28	複雑	—



第70回 2-1区 全体図 (1/200)

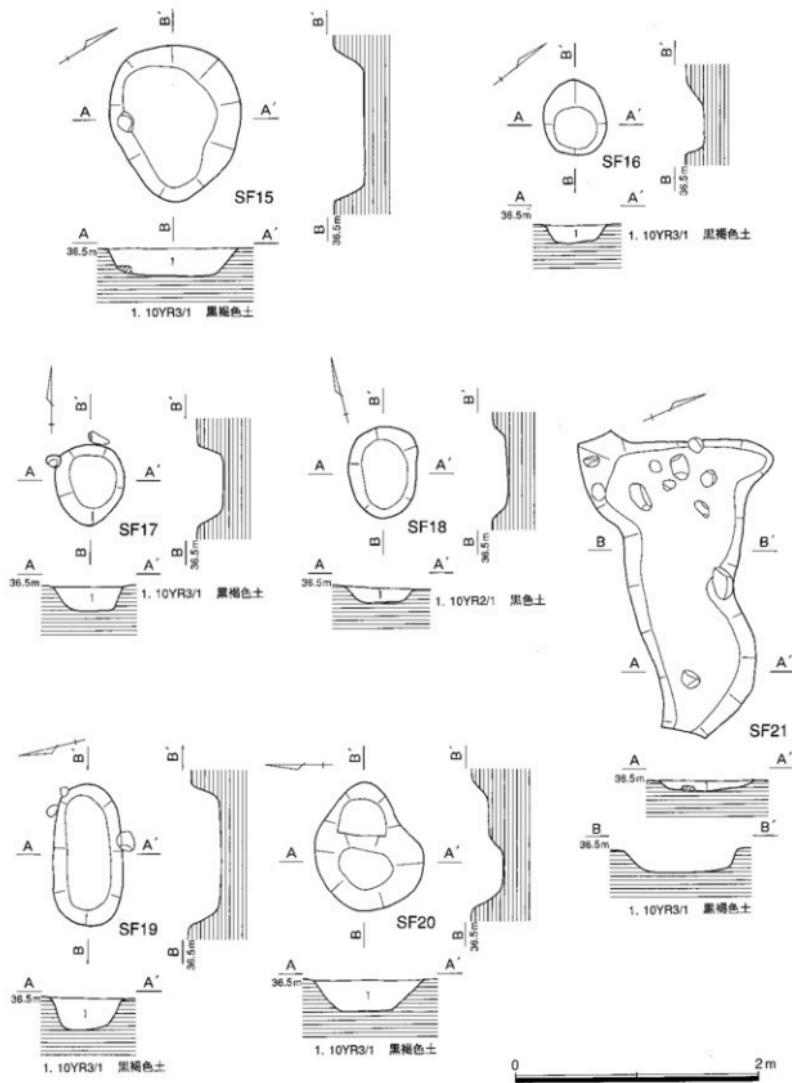


第71図 2-1区 土坑実測図(1) (1/40)

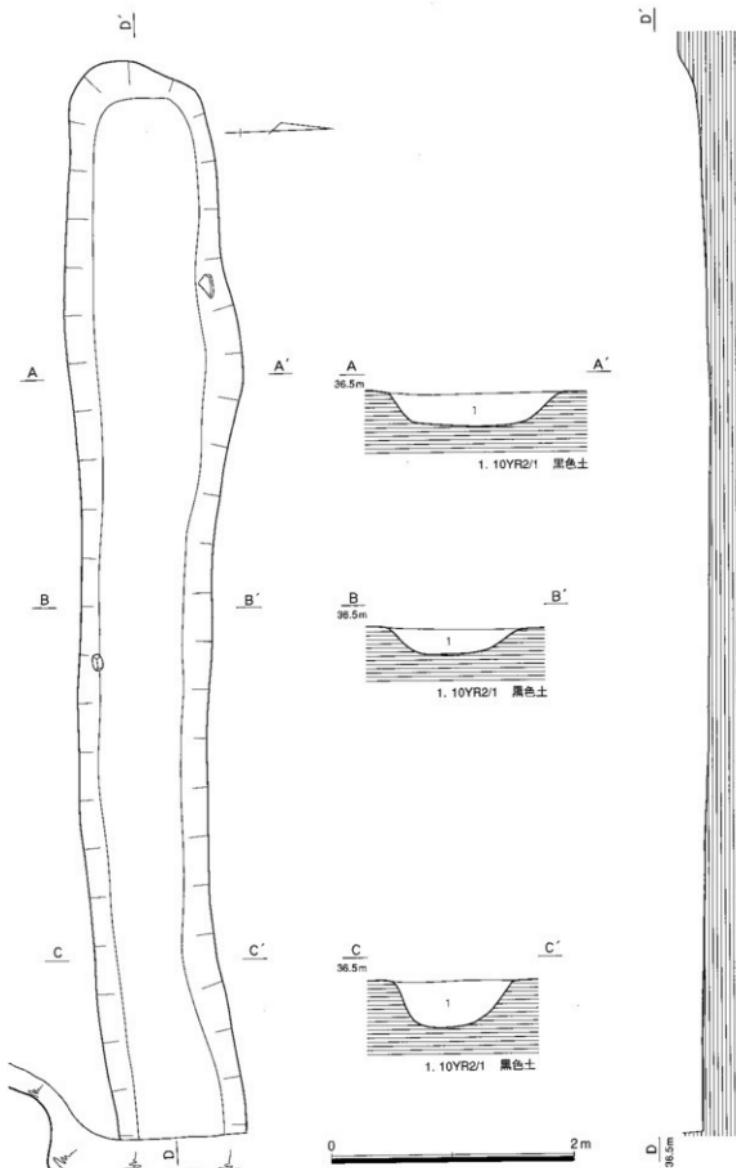


0 2m

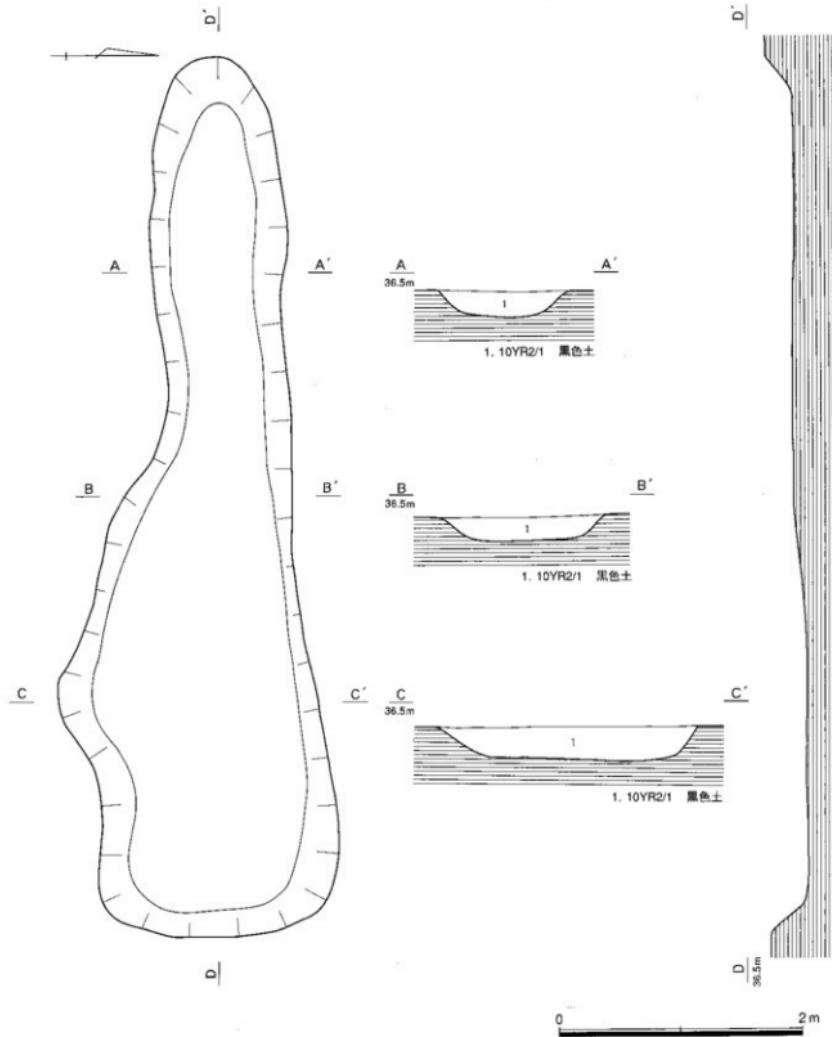
第72図 2-1区 土坑実測図(2) (1/40)



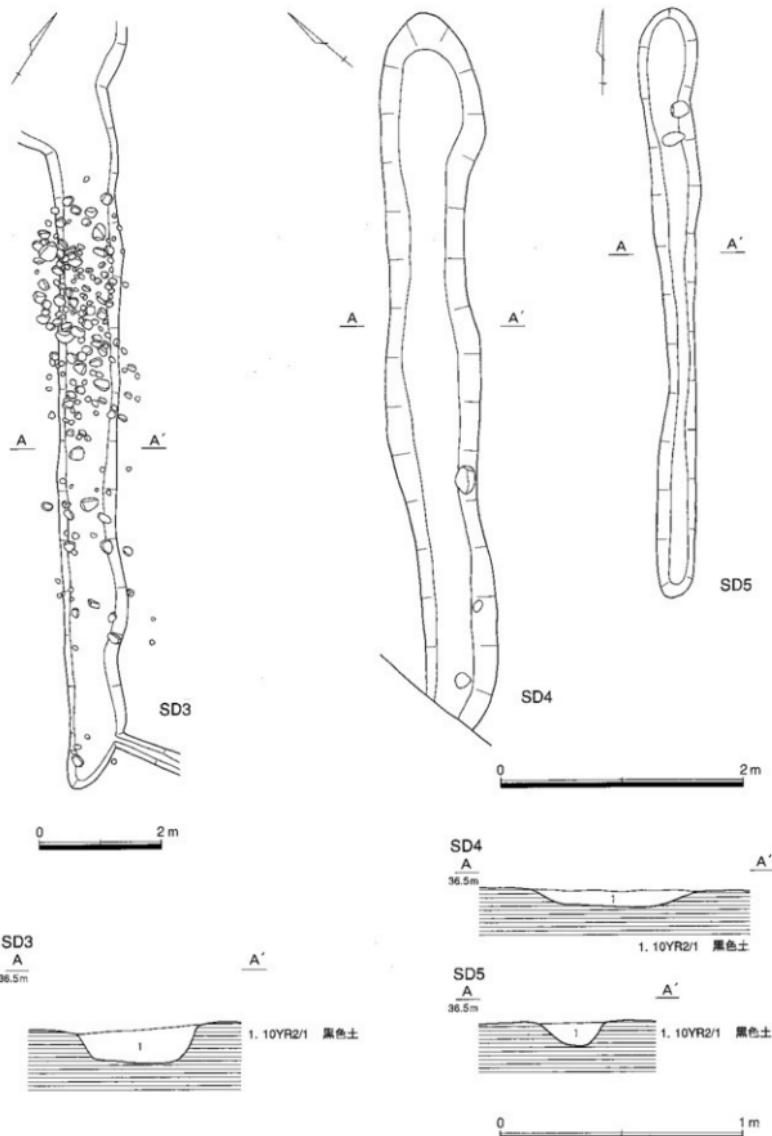
第73図 2-1区 土坑実測図(3) (1/40)



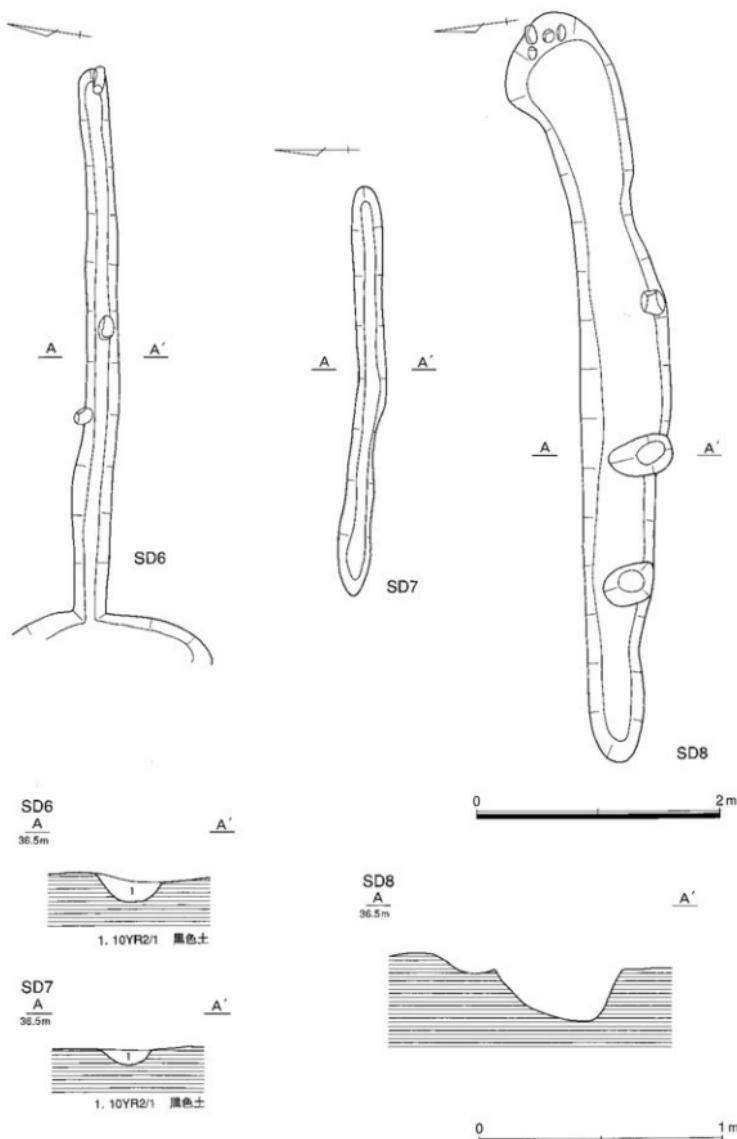
第74図 2-1区 SD1実測図 (1/40)



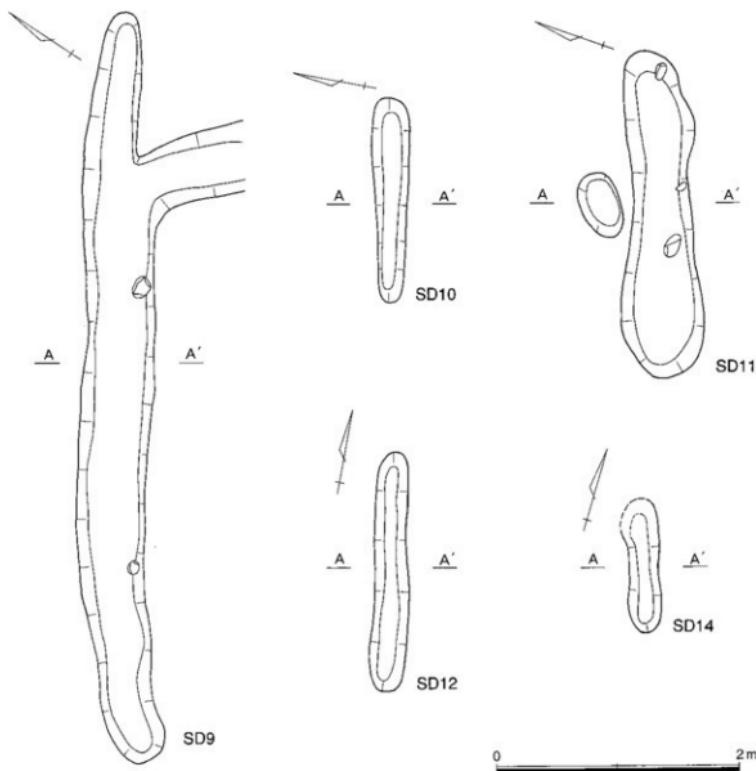
第75図 2-1区 SD2実測図 (1/40)



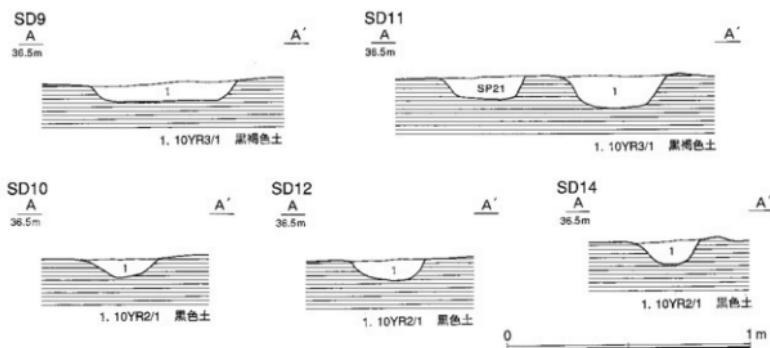
第76図 2-1区 SD3～5実測図 (1/80・1/40・1/20)



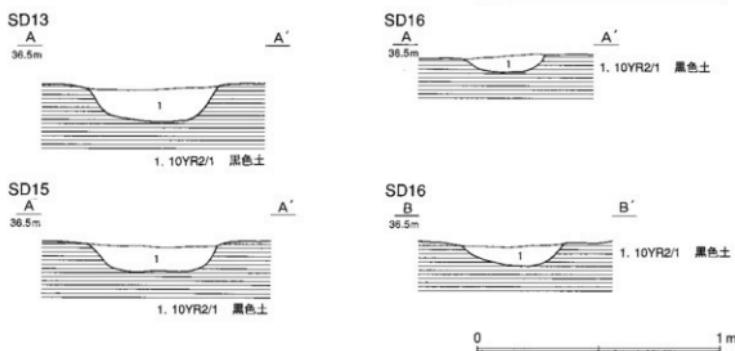
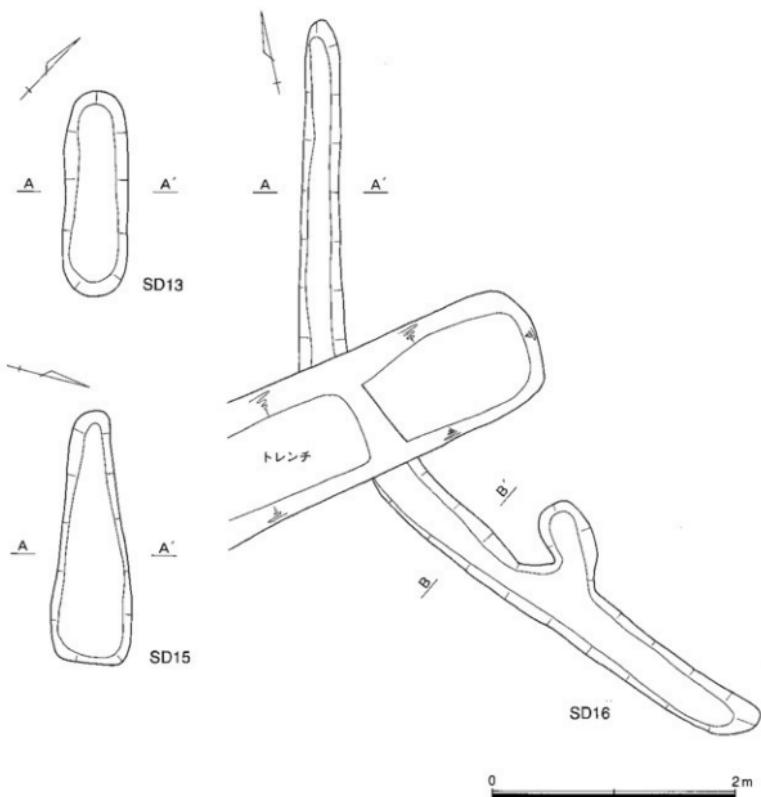
第77図 2-1区 SD6~8実測図 (1/40・1/20)



0 2 m



第78図 2-1区 SD9~12・14実測図 (1/40・1/20)



第79図 2-1区 SD13・15・16実測図 (1/40・1/20)

表10 2-1区 溝状遺構計測表

調査区	グリッド	遺構番号	主軸方位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	断面形	備考
2-1区	E10	SD-1	N-89°-E	[8.85]	1.40~1.05	20~26	皿状	—
2-1区	E9	SD-2	N-89°-E	7.25	2.10~0.98	14~9	皿状	土解溝片
2-1区	D8 - E8	SD-3	—	—	—	—	皿状	—
2-1区	D8 - C8	SD-4	N-47°-E	[5.65]	0.85~0.55	13~8	皿状	頭蓋骨片
2-1区	D8	SD-5	N	4.81	0.40~0.20	10~6	皿状	頭蓋骨片
2-1区	E8	SD-6	N-81°-E	[4.45]	0.35~0.25	8~5	皿状	—
2-1区	E9	SD-7	N-89°-W	3.33	0.22	7~6	皿状	—
2-1区	E9	SD-8	N-89°-W	6.15	0.75~0.55	13~7	皿状	頭蓋骨片
2-1区	E10	SD-9	N-56°-E	6.14	0.58	8~6	皿状	—
2-1区	E10	SD-10	N-81°-E	1.67	0.32~0.22	6	皿状	—
2-1区	E9 - D9	SD-11	N-69°-E	2.67	0.67~0.47	9~6	皿状	—
2-1区	D10	SD-12	N-8°-W	1.95	0.26	8~6	皿状	—
2-1区	D10	SD-13	N-43°-W	1.67	0.50	10	皿状	—
2-1区	D10	SD-14	N-19°-W	[1.11]	0.25	5	皿状	—
2-1区	D10	SD-15	N-76°-E	2.08	0.66~0.36	7	皿状	—
2-1区	D10	SD-16	N-12°-E ~ N-48°-W	7.64	0.41	10~6	皿状	—

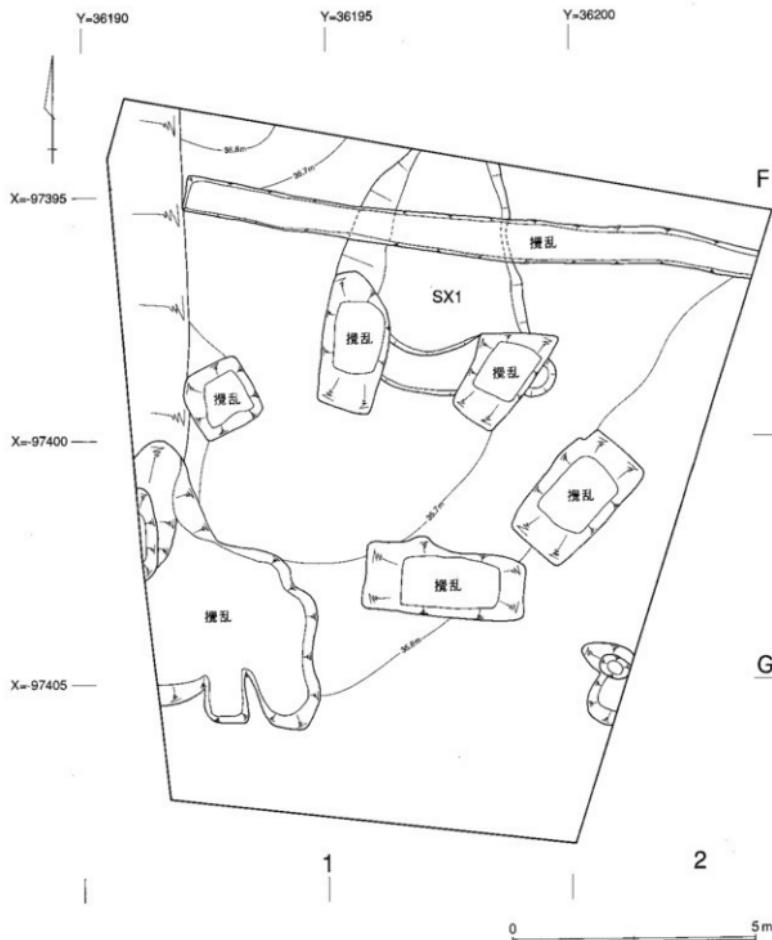
表11 2-1区 ピット計測表

調査区	グリッド	遺構番号	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備考
2-1区	D8	SP-1	橢円形	0.47	0.35	17	—
2-1区	D8	SP-2	不整形	0.37	—	14	SP2と切り合う
2-1区	D8	SP-3	不整形	0.40	—	16	SP2と切り合う
2-1区	D8	SP-4	橢円形	0.36	0.31	7	—
2-1区	D8	SP-5	橢円形	0.66	0.63	8	—
2-1区	D8	SP-6	橢円形	0.31	0.24	25	—
2-1区	D8	SP-7	長楕円形	0.55	0.30	12	—
2-1区	D8	SP-8	橢円形	0.46	0.33	14	—
2-1区	D8	SP-9	長楕円形	0.76	0.45	11	—
2-1区	D8	SP-10	橢円形	0.50	0.39	10	—
2-1区	E8	SP-11	長楕円形	0.78	0.57	8	—
2-1区	E8	SP-12	円形	0.38	0.35	8	—
2-1区	F8	SP-13	橢円形	0.44	0.32	8	—
2-1区	E8	SP-14	橢円形	0.67	0.56	8	—
2-1区	E8	SP-15	長楕円形	0.74	0.46	7	—
2-1区	E8	SP-16	橢円形	0.62	0.49	13	—
2-1区	F8	SP-17	橢円形	0.65	0.57	17	—
2-1区	F8	SP-18	不整形	[0.43]	0.37	19	SP2と切り合う
2-1区	E9	SP-19	橢円形	0.54	0.61	28	—
2-1区	E9	SP-20	長楕円形	0.56	0.35	25	—
2-1区	E9	SP-21	橢円形	0.40	0.33	28	—
2-1区	E9	SP-22	長楕円形	0.52	0.32	21	—
2-1区	E9	SP-23	円形	0.53	0.52	38	—
2-1区	E9	SP-24	橢円形	0.55	0.48	16	—
2-1区	E9	SP-25	橢円形	0.45	0.43	13	—
2-1区	E9	SP-26	長楕円形	0.68	0.35	8	—
2-1区	E9	SP-27	長楕円形	0.70	0.38	12	—
2-1区	E9	SP-28	橢円形	0.40	0.36	24	—
2-1区	D9	SP-29	長楕円形	0.55	0.33	5	—
2-1区	D9	SP-30	長楕円形	0.67	0.40	6	—
2-1区	D9	SP-31	不整形	[0.35]	0.34	13	複雑と切り合う
2-1区	D9	SP-32	橢円形	0.47	0.33	10	—
2-1区	D9	SP-33	橢円形	0.65	0.55	16	—
2-1区	D9	SP-34	橢円形	0.34	0.28	24	—
2-1区	D9	SP-35	橢円形	0.36	0.31	16	—
2-1区	D9	SP-36	橢円形	0.36	0.25	19	—
2-1区	D9	SP-37	橢円形	0.36	0.27	10	—
2-1区	D9	SP-38	橢円形	0.54	0.46	14	—
2-1区	D9	SP-39	円形	0.39	0.32	10	—
2-1区	D10	SP-40	長楕円形	0.68	0.41	28	—
2-1区	D10	SP-41	橢円形	0.37	0.27	11	—
2-1区	D10	SP-42	橢円形	0.35	0.26	14	—
2-1区	D10	SP-43	橢円形	0.37	0.30	20	—
2-1区	D10	SP-44	橢円形	0.49	0.40	16	—
2-1区	E10	SP-45	橢円形	0.49	0.38	10	—
2-1区	E10	SP-46	橢円形	0.49	0.33	11	—
2-1区	E10	SP-47	橢円形	0.50	0.45	28	—
2-1区	E10	SP-48	橢円形	0.50	0.45	19	—

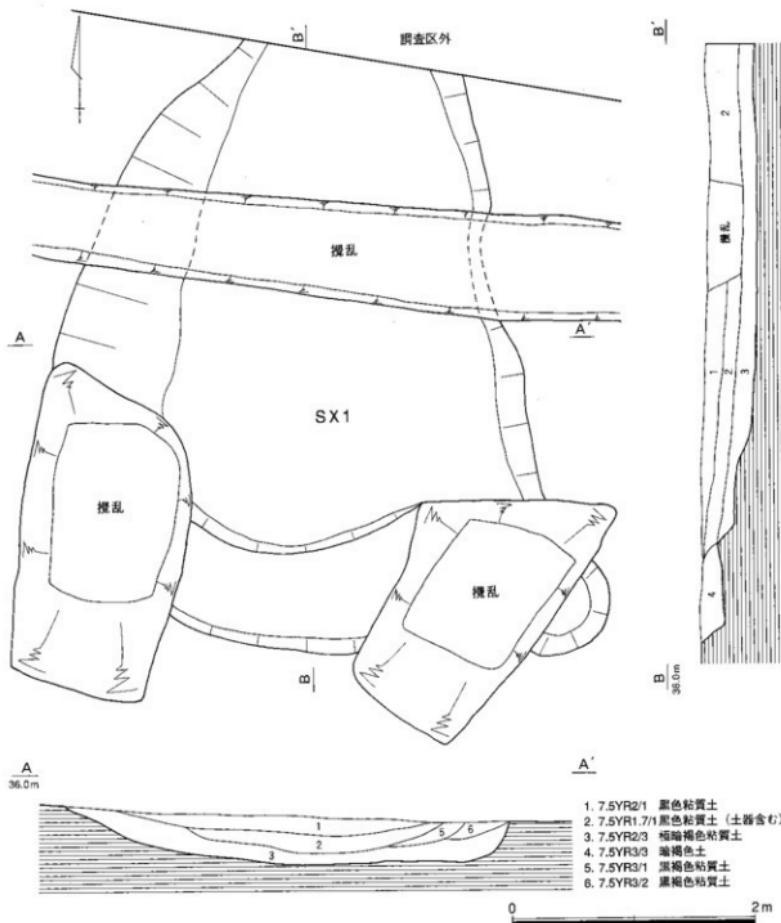
第3節 3-1区の調査

1 3-1区の概要 (第80図)

JR御殿場線の西側を3-1区とした。第III層を除去したのちV層上面で遺構検出を行った。狭い調査区であるが、遺構はSX-1の1基のみであった。地形は南東方向へ低く傾斜している。南側は以前宅地であったため、攪乱が及んでおり、遺構、遺物は検出されなかった。このSX-1の時期は覆土からの遺物



第80図 3-1区 全体図 (1/100)



第81図 3-1区 SX-1実測図 (1/40)

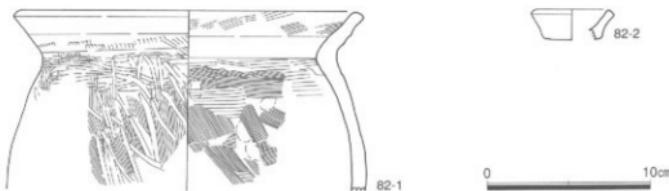
から8世紀後半と推定される。その他、東側の原分古墳に関連する遺構は検出されていない。周辺の地形は3区から西側にかけて低く緩やかに傾斜しており、遺跡はさらに西側に広がる可能性がある。2-1区の遺構の検出状況とあわせると原分古墳と同時期の集落は存在せず、8世紀代に集落が形成され始めたと考えられる。さらに1区で検出した集落とは一段高い段丘面に位置することから別の集落の存在を想定することができる。

不明遺構 SX-1 (第81図)

3-1区の北側中央に位置する。遺構は調査区北側にのびる。平面形は不整形な橢円形を呈する。南北残存長4.9m、東西は最大で3.8mを測る。土層はレンズ状の堆積を示しており、1層から3層にかけて土師器が出土している。遺構の性格は不明であるが2-1区で検出したSD-2と同じ形態をもつものと思われる。

不明遺構 SX-1出土遺物 (第82図 図版26)

82-1・2はともに2層から出土している。1は鞍束型の甕で器壁は厚く、やや長胴状を呈する。胸部外面は縦位のハケ調整後、縦位のミガキ調整が施される。頸部は横位のミガキ調整で、内面は荒い横位のハケ調整のあと細かいハケ調整を施す。頸部には接合痕が残る。口縁部は横ナデ調整。2は手捏土器で器壁はやや薄い。底部は平底を呈し、木葉痕はみられない。



第82図 3-1区 SX-1出土遺物実測図 (1/3)

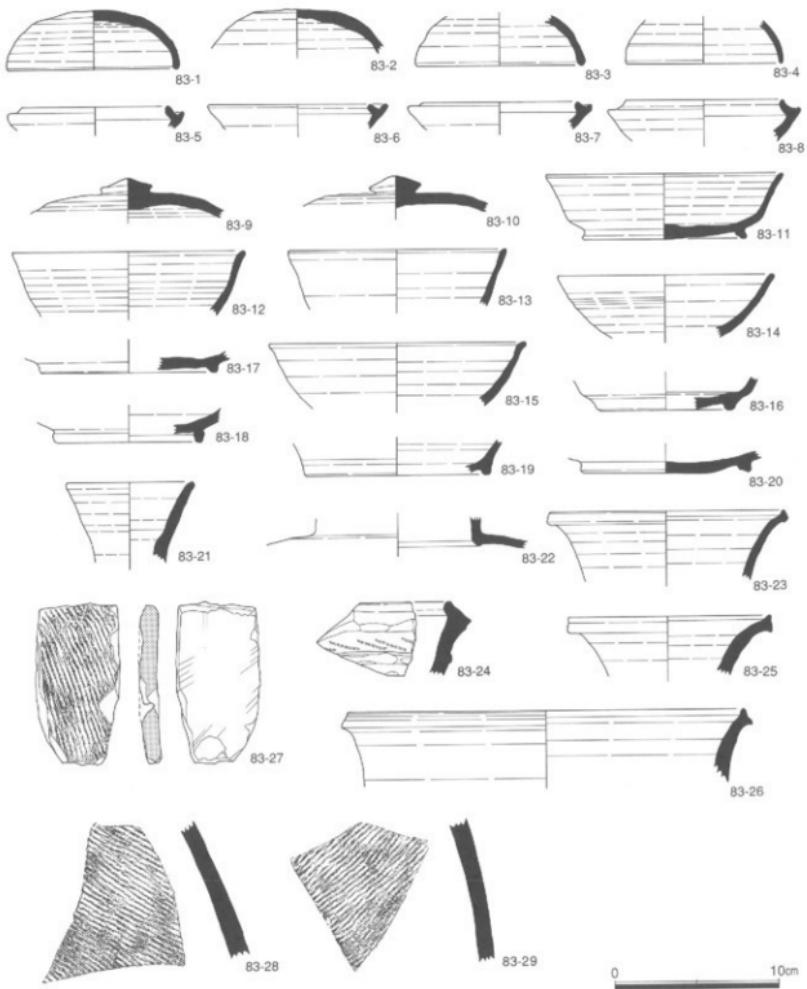
第4節 攪乱・包含層出土遺物

1 須恵器 (第83図 1~29 國版26・27)

83-1~4は須恵器の坏蓋である。1は口径10.2cmで、天井部は時計回りのケズリ調整が施される。口縁端部はやや内湾する。4は天井部と口縁部の境に沈線が1条施される。5~8は須恵器の坏身である。9、10は摘み蓋である。9は扁平な宝珠を有し、径は3cmである。天井部に時計回りのケズリ調整が施される。10は外面に自然軸が付着している。11・16~20は高台付坏である。11は口径14.3cm、器高3.95cm、高台径9.8cmを測る。底部外面は反時計回りのケズリ調整が施される。底部から明瞭な稜をもつように屈曲し、やや外反しながら立ち上がる。高台部は三角形状を呈し、底部が高台より突出する。19は屈曲部分に低い高台が付く。20は外面底部に反時計回りのケズリ調整が施され、高台よりも突出する。21は平瓶の口縁部である。22は短頸壺の肩部である。23・25は壺の口縁部で三角形状の断面を有する。24は口縁部下に凸帯を有し、口縁部との間には斜位に列点文が施される。27は壺の胴部片の側面部に底面が確認され、破片を砥石として再利用している。26は壺の口縁部片である。28・29は壺の胴部片で、外面はタタキ痕が残り、内面はナデ調整で消されている。

2 土師器 (第84・85図 國版27・28)

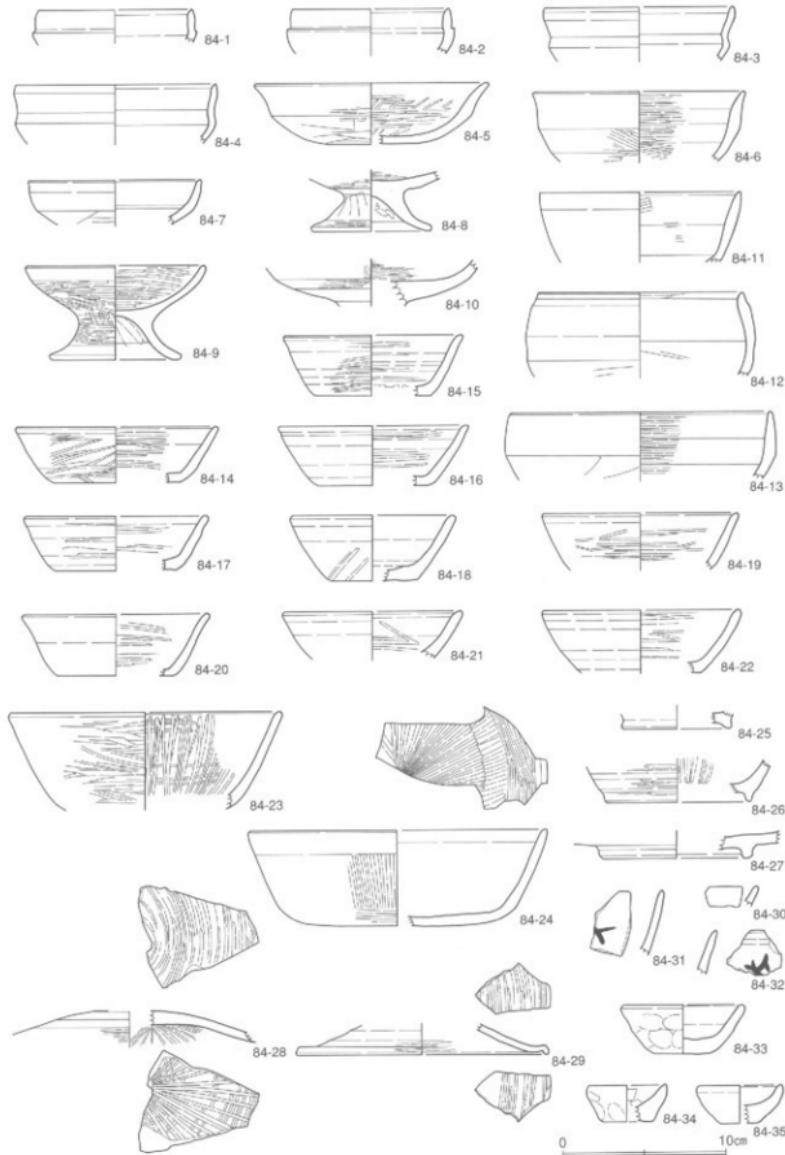
84-1・2は須恵器摸倣の土師器坏身である。受部の張り出しは短い。口縁部は横位のナデ調整で、体部外面はケズリ調整が施される。3・4は屈曲口縁の坏である。体部から口縁部にかけてやや屈曲し、内湾しながら立ち上がる。端部の整形と屈曲部に横位のナデ調整が施される。外面の一部は、黒色化している。5は口縁部が屈曲し、外反する。口径に対し器高は低く、皿状を呈する。6の口縁部はやや屈曲し、外反しながら立ち上がる。内面と体部外面にミガキ調整が施される。7はやや内湾する口縁で横位のナデ調整が施される。8~10は高坏である。9は内湾する口縁部に脚部がつく。内外面に横位のミガキ調整、内面はミガキ調整が施される。脚部の内面にはナデ調整が残る。10は体部と接合する脚部にケズリ調整が施され、脚部は外方へ広がる。内面はミガキ調整が施される。11は駿東型の坏である。外面は剥落しており、調整は明瞭ではないが、内面はハケ状工具による横位の調整が施されており、ミガキ調整の前段階のものであろうか。色調はにぶい橙色を呈する。12の口縁部は内湾し、端部は上につまみ上がる。横位のナデ調整がみられ、体部下位にミガキ調整が施される。13の口縁部は内湾し、屈曲部分は肥厚する。内面は横位のミガキ調整が施される。外面は横ナデ。14~22は駿東型の坏である。14の口縁部の内外面に横位のミガキ調整が施され、底部は内面が放射状のミガキ調整、外面はケズリ調整が施される。15は内外面ともに横位のミガキ調整が施される。16は口径11.6cm器高3.65cm底径6.8cmを測る。内面に横位のミガキ調整、底部内面に放射状のミガキ調整が施される。17の口縁端部はやや外反する。外面は精緻なミガキ調整で、内面は横位のミガキ調整が施される。18は小型に属する駿東型の坏である。口径9.6cm底径5.6cm器高4cmを測る。内外面にミガキ調整、底部外面はヘラケズリ調整。20の口縁部はやや外反する。内面は横位のミガキ調整、底部はケズリ調整が施される。21は内外面に横位のミガキ調整が施される。外面口縁端部と中位に横位のミガキ調整が施され、ミガキ調整は粗雑である。22は内面に粗雑な横位のミガキ調整が施される。23・24は甲型の坏である。23は外面に横位のミガキ調整が精緻に施される。内面は横位のミガキ調整の後、縦位のミガキ調整が2本ないし3本で1単位の放射状のミガキがジクザク状に施される。24の外面は縦位のミガキ調整が精緻に施される。底部内面は放射状のミガキ調整、体部の内面は横位のミガキ調整が精緻に施される。底部外面にも不定方向のミガキが精緻に施される。28・29は須恵器摘み蓋摸倣の土師器坏蓋である。28の外面は同心円状にミガキ調整がみられ、内面には同心円状のミガキ調整後、放射状にミガキ調整が施される。29は端部を折り曲げているが、高さは低い。25~27は高台がつく土師器坏である。26は外面に横位のミガキ調整、内面には縦位のミガキ調



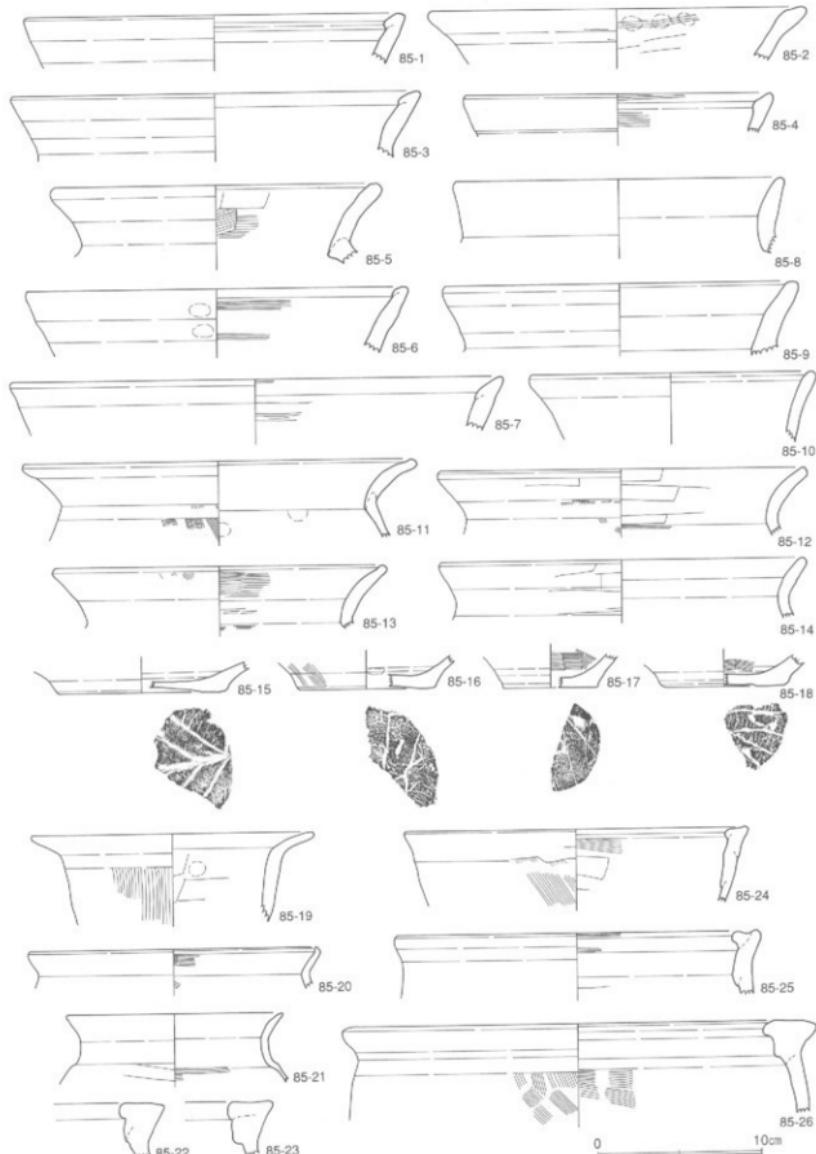
第83図 1区・2区 出土須恵器実測図 (1/3)

整が施される。30は朱塗り土器の口縁部片である。31・32は墨書き土器で駿東型壺の外面に施される。破片のため判読は不明である。33～35は手捏土器である。33は平底を呈し、木葉痕が残る。口縁部は外方にのび、外面は指頭痕が残る。34・35は平底で、口縁部は内湾しながら立ち上がる。

85-1～10は駿東型の球胴状の壺である。11～14は駿東型の長胴状壺の口縁部である。15～18は壺の底部で木葉痕が残る。15は球胴状壺の底部片である。16～18は胴部の立ち上がりから長胴状の壺と考えら



第84図 1区・2区 出土土師器実測図(1) (1/3)

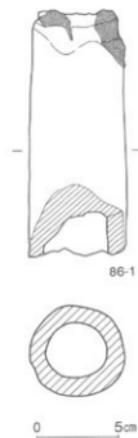


第85図 1区・2区 出土土師器実測図(2) (1/3)

れる。19は口縁部が強く屈曲し、外方へのびる。胴部外面は縦位のハケ調整が施される。内面は横ナデ調整。胎土は硬質で、色調はにぶい橙色を呈する。20・21は薄手の土師器甕である。20は、端部を上方につまみ上げている。口縁部内面に横位のハケ調整が施される。胎土は21とよく似ている。21は外方に口縁部がのびる。胴部と頸部の境は屈曲し、胴部には横位のケズリ調整が施される。頸部から胴部には外面に煤が付着している。22～26は堀型土器である。22・23は口縁部が肥厚し、断面は三角形状を呈する。ともに口縁部外面に煤が付着する。22は内面にハケ調整後、横位のナデ調整が施される。23は内面にハケ調整が施される。24・25は口縁部がやや肥厚し、端部が内面に突出する。24は外面に粘土帯を貼り付け、肥厚させており、内面にハケ調整が残る。端部の幅は2.5cmを測る。25は内面に粘土帯を貼り付け、肥厚させている。内面は強い横位のナデ調整が施される。端部の幅は2.5cmを測る。26は口縁部が内湾し、肥厚して外方にのびる。断面は三角形状を呈し、端部は内面に突出し、幅は3.3cmを測る。内面に稜をもつ。外面はハケ調整後、横位のミガキ調整が一部にみられる。

3 土製品（第86図1 図版28）

輪の羽口で、1-2区の表土中より出土している。残存長14.9cmを測り、羽口の形状は円筒形である。先端部側がややすぼまり、端部はやや丸くおさめる。外面は輪積み痕もわずかに観察され、長軸方向に平行してハケ状工具により整形している。先端部は溶着済が付着し、先端部の口径は4.6cmである。最大径は5.9cmを測る。時期は不明であり、集落遺跡から鍛冶遺構などは検出されていない。



第86図 1区 濃糞出土土製品実測図(1/3)

表12 土器觀察表(1)

調査番号	調査名	調査区	種 別	測量	口径 底径 深さ (mm)	色 調	残 留	胎 上	機会	備考
第11回-1	SB1 覆土	1-1区	漆器器	环身	(7.8) (2.0)	5.5B6/1青灰色	口縁部1/4残存	粗砂粒	良好	最大径(9.6)
第11回-2	SB1 籠内	1-1区	漆器器	环身	(8.8) (2.05)	5.5B5/1青灰色	口縁部～全体1/4残存	白色粒子 砂粒	良好	最大径(11.0)
第11回-3	SB1 覆土	1-1区	漆器器	盖	(9.8)	5.5Y6/1灰白色	口縁部～全体1/4残存	白色粒子 小礫	良好	壺部径(3.05) 内面直角輪付苔
第11回-4	SB1 覆土	1-1区	漆器器	盖	(3.15)	7.5Y5/1灰色	口縁部破片	白色粒子 小礫	良好	瓶石に再利用
第11回-5	SB1 覆土	1-1区	土器器	甕	(4.0) (2.2)	(外)10Y3/1墨褐色 (内)10Y3/5にいぶす角色	瓶部1/4残存	白色粒子 石英 小礫	良好	木臺痕
第11回-6	SB1 覆土	1-1区	土器器	甕	(8.65) (3.25)	(外)10Y7/4にいぶす青褐色 (内)10Y7/3にいぶす青褐色	口縁部3/4～全体1/5残存	白色粒子 壤色粒子 小礫	良好	甕A類 最大径(10.0)
第11回-7	SB1 覆土	1-1区	土器器	甕	(12.0) (3.6)	7.5Y17/4にいぶす褐色	口縁部～全体1/8残存	白色粒子 透明粒子 砂粒少量	良好	
第11回-8	SB1 覆土	1-1区	土器器	甕	(12.7) (2.1)	7.5Y17/6/4にいぶす褐色	口縁部1/12残存	胎身 砂粒	良好	甕B類
第11回-9	SB1 覆土	1-1区	土器器	甕	(4.6) (3.4)	10Y16/3にいぶす青褐色	口縁部～全体1/9残存	透明粒子 砂粒	良好	甕B類
第11回-10	SB1 覆土	1-1区	土器器	甕	(5.5) (4.56)	7.5Y17/6/4にいぶす褐色	口縁部1/8残存	白色粒子 小礫	良好	壺部径(13.4)
第11回-11	SB1 覆土	1-1区	土器器	甕	(7.0) (5.6)	5Y15/4にいぶす赤褐色	口縁部1/9残存	白色粒子 黑色粒子 小礫	良好	壺部径(14.0)
第11回-12	SB1 底床	1-1区	土器器	甕	(8.65) (3.0)	5Y18/5赤褐色 7.5Y15/3にいぶす褐色	口縁部1/4、壺部1/2残存	白色粒子多量 透明粒子少量	良好	甕A類 壺部径(17.8) 木葉痕
第13回-1	SBS 電池	1-1区	漆器器	瓶み透	(15.0) (2.65)	2.5Y17/1灰白色	全体の3/5残存	陶 白色粒子 透明粒子少量	良好	瓶み透2.9
第13回-2	SBS 電池	1-1区	漆器器	甕	(2.2) (4.2)	N6/0灰色	口縁部破片	陶 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第13回-3	SBS 電池	1-1区	漆器器	高台平	(10.2) (1.4)	2.5Y7/2灰黄色	底部～高台部1/5残存	陶 白色粒子 透明粒子多量	良好	高台径(10.2)
第13回-4	SB2 覆土	1-1区	土器器	甕	(2.25) (0.0)	(外)10Y7/3にいぶす黄褐色 (内)N2/0灰褐色	全体の3/5残存	陶 白色粒子 透明粒子多量	良好	甕B類
第13回-5	SBS 電池	1-1区	漆器器	甕	(10.0) (1.35)	7.5Y3/1灰褐色	口縁部破片	陶 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	
第13回-6	SB2 覆土	1-1区	土器器	甕	(2.25) (0.0)	5Y15/4にいぶす赤褐色	口縁部破片	陶 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	
第13回-7	SB2 覆土	1-1区	土器器	甕	(16.6) (0.0)	(外)2.5YR5/6明赤褐色 (内)10YR5/3黄褐色	口縁部1/5残存	陶 白色粒子 透明粒子少量	良好	甕A類
第13回-8	SNS 留土	1-1区	土器器	甕	(25.1) (3.3)	7.5Y16/4にいぶす褐色	口縁部1/7残存	陶 白色粒子 透明粒子少量	良好	甕C1類
第14回-1	SB3 覆土	1-1区	漆器器	环身	(1.32) (1.6)	N6/0灰色	口縁部～全体破片	陶 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第14回-2	SB3 覆土	1-1区	漆器器	甕	(16.4) (3.3)	7.5Y16/1灰白色	口縁部1/8残存	陶 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第14回-3	SB3 覆土	1-1区	土器器	甕	(3.05)	2.5Y7/1灰白色	口縁部破片	陶 白色粒子 石粉多量	良好	甕E類
第14回-4	SB3 底	1-1区	土器器	甕	(3.2) (0.0)	(外)10YR5/2灰褐色 (内)7.5YR5/3にいぶす褐色	口縁部破片	陶 白色粒子 透明粒子 石粉少量	良好	甕D類
第14回-5	SB3 覆土	1-1区	土器器	甕	(2.7) (12.7)	5YR5/4にいぶす赤褐色	口縁部破片	陶 白色粒子多量 透明粒子 細白粒子少量	良好	甕E類
第14回-6	SBS 電池	1-1区	土器器	甕	4.6	(外)10YR5/2灰褐色 (内)7.5YR5/3にいぶす褐色	全体の1/2残存	陶 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第14回-7	SBS 電池	1-1区	土器器	甕	(11.9) (3.65)	(外)10YR5/2灰褐色 (内)5YR6/5褐色	底部1/8残存	陶 白色粒子 透明粒子 石粉多量	良好	ミガキが比較的交差している
第14回-8	SB3 覆土	1-1区	土器器	甕	(2.75)	5YR5/3にいぶす赤褐色	口縁部破片	白色粒子 透明粒子多量	良好	
第14回-9	SB3 覆土	1-1区	土器器	甕	(2.5) (2.45)	7.5YR6/2灰褐色	口縁部破片	白色粒子 透明粒子 石粉多量	良好	
第14回-10	SB3 覆土	1-1区	土器器	甕	(3.2) (2.45)	7.5YR6/4にいぶす褐色	口縁部破片	白色粒子 透明粒子 石粉多量	良好	
第14回-11	SB3 覆土	1-1区	土器器	甕	(3.9) (2.3)	2.5YR6/6褐色	底面部残存	陶 白色粒子 透明粒子 石粉多量	良好	
第14回-12	SB3 底	1-1区	土器器	甕	(2.3)				半不良	

表13 土器觀察表(2)

測量番号	遺跡名	調査区	種別	器種	口徑 底径 高さ (cm)	色 調	残 存	胎 土	施成	備 考
第1887-1	SB4 底下?	I-1区	須恵器	环身	(10.0) (3.7)	5Y6/1灰色	全体の1/3残存	密 白色粒子	良好	天井部(5.1)
第1887-2	SB4 覆土	I-1区	須恵器	环身	9.8 (3.6) (12.5) (3.2)	N7/0灰白色	全体の1/4残存	密 白色粒子少量	良好	
第1887-3	SB4 竪付足	I-1区	須恵器	环	— (3.2)	10Y5/1灰色	口縁部1/4残存	密 白色粒子少量	良好	
第1887-4	SB4 窓内	I-1区	須恵器	凸唇壺	— (3.2)	(外)7.5YR6/0にぶい褐色 (内)5Y5/1灰白色	底部破片	密 白色粒子	良好	信濃產 窓部径(15.2)
第1887-5	SB4 床直	I-1区	須恵器	壺	9.2 (4.05)	(外)SYR4/2灰褐色 (内)2.5Y5/1黄灰色	底部残存	密 白色粒子	良好	信濃產?角切り痕 高台径6.2
第1887-6	SB4 窓付足	I-1区	土師器	环	— (3.15)	5YR6/4にぶい褐色	口縁部1/10残存	密 白色粒子 灰色粒子少量	良好	环B類
第1887-7	SB4 窓内	I-1区	土師器	环	(11.2) (3.7) (10.8) (3.4)	5YR5/4にぶい赤褐色	全体の1/6残存	密 白色粒子 灰色粒子少量	良好	环I類
第1887-8	SB4 床直	I-1区	土師器	环	3.9~3.5	5YR5/6明赤褐色	ほぼ完形	密 白色粒子 灰色粒子少量	良好	环I類 系切り痕
第1887-9	SB4 覆土	I-1区	土師器	环	(2.2) (17.3)	2.5YR5/6明赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	环I類
第1887-10	SB4 窓内	I-1区	土師器	鉢	— (4.3)	2.5YR5/4にぶい赤褐色	口縁部1/8残存	密 白色粒子 风化粒子少量	良好	
第1887-11	SB4 覆土	I-1区	土師器	筒びき壺	(15.5) (2.9)	(外)2.5YR6/3にぶい赤褐色 (内)5YR5/6明赤褐色	全体の1/6残存	密 白色粒子 风化粒子少量	良好	
第1887-12	SB4 覆土	I-1区	須恵器	無合环	(7.8) (3.7)	(外)10YR6/3にぶい赤褐色 (内)2.5YR6/3灰黄色	底部1/3残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第1887-13	SB4 覆土	I-1区	土師器	高台付 P27	(0.3) (1.7)	(外)5YR6/4にぶい赤褐色 (内)2.5YR5/6明赤褐色	底部1/3残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	高台径(8.3)
第1887-14	SB4 窓内	I-1区	土師器	小型甌	(12.6) (3.5)	(外)7.5YR5/3にぶい赤褐色 10YR6/4灰黃色	口縁部1/4残存	密 白色粒子 灰色粒子少量	良好	窓C2類 頸部径(11.7)
第1887-15	SB4 床直	I-1区	土師器	甌	(22.0) (3.7)	7.5YR5/3にぶい赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 灰色粒子少量	良好	窓C1類
第1887-16	SB4 窓内	I-1区	土師器	甌	(23.3) (3.1)	7.5YR6/4にぶい赤褐色	口縁部1/6残存	密 白色粒子	良好	窓C1類
第1887-17	SB4 窓内	I-1区	土師器	小型甌	(25.4) (3.5)	(外)7.5YR5/3にぶい赤褐色 10YR6/4灰黃色	口縁部破片	密 白色粒子	良好	窓C1類
第1887-18	SB4 窓内	I-1区	土師器	甌	(27.2) (3.2)	5YR5/4にぶい赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	窓C1類
第1887-19	SB4 覆土	I-1区	土師器	甌	(4.4) (4.5)	(外)10YR4/2灰黃色 (内)7.5YR6/4にぶい赤褐色	底部1/3残存	密 白色粒子 风化粒子少量	良好	窓C1類 木漆痕
第1887-20	SB4 覆土	I-1区	土師器	甌	(7.6) (2.9)	(外)10YR5/3にぶい赤褐色 (内)7.5YR6/3にぶい赤褐色	底部1/3残存	密 白色粒子 风化粒子少量	良好	窓C1類 木漆痕
第1887-21	SB4 窓内	I-1区	土師器	甌	8.8 (8.4)	(外)7.5YR4/2灰褐色 (内)7.5YR6/3にぶい赤褐色	底部～脚部2/3残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	窓C1類 木漆痕
第2087-1	SB6 覆土	I-1区	須恵器	环身	— (1.6)	N6/0灰色	口縁部破片	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	
第2087-2	SB6 覆土	I-1区	須恵器	高台付 环	(0.0) (1.66)	5Y7/1灰白色	底部～高台破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	高台径(8.0)
第2087-3	SB6 覆土	I-1区	須恵器	高台付 环	(7.86) (2.3)	(外)7.5Y6/1灰白色 (内)5Y7/2灰白色	底部～高台破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	高台径(7.85)
第2087-4	SB6 覆土	I-1区	須恵器	高台付 环	(10.1) (2.95)	5Y7/1灰白色	底部～高台破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	高台径(10.1)
第2087-5	SB6 覆土	I-1区	須恵器	高台付 环	(11.6) (1.8)	5Y8/1灰白色	底部～高台1/4残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	高台径(11.6)
第2087-6	SB6 覆土	I-1区	須恵器	高环	— (2.5)	5Y6/2灰オーリーブ色	底部～高台破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第2087-7	SB6 覆土	I-1区	須恵器	环	— (2.85)	5Y6/1灰褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第2087-8	SB6 覆土	I-1区	須恵器	环	— (3.35)	N6/0灰色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第2087-9	SB6 覆土	I-1区	須恵器	环	— (3.3)	5Y6/1灰褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第2087-10	SB6 覆土	I-1区	須恵器	环	— (3.45)	(外)N5/0灰色 (内)2.5Y5/1灰白色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第2087-11	SB5 覆土	I-1区	土師器	环	— (3.05)	5YR6/6褐色	口縁部破片	密 白色粒子 赤色粒子多量	良好	

表14 土器観察表(3)

団体番号	遺構名	調査区	種別	種類	口径 縦径 横径 高さ (cm)	色 調	残 存	胎 土	焼成	備 考
第2005-12	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	— (2.85)	10YR5/4に近い黄褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	壺B類
第2005-13	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	— (2.5)	5YR5/4に近い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	壺B類
第2005-14	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	— (2.6)	7.5Y5/4に近い褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	壺B類
第2005-15	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	— (2.65)	7.5YR5/4に近い褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	壺B類
第2005-16	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	— (2.45)	7.5YR5/4に近い褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	壺E類
第2005-17	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	— (2.5)	5YR4/灰褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子 褐色粒子多量	良好	壺D類
第2005-18	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	— (2.55)	5YR5/6明赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粉多量	良好	壺D類
第2005-19	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	— (18.55) (5.8) 2.25	2.5YR4/3に近い赤褐色	壺部～底部1/3残存	密 白色粒子 透明粒子 褐色粒子多量	良好	壺D類
第2005-20	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	(17.1) (6.4) 5.75	2.5YR5/6明赤褐色	口縁部～底部1/6残存	密 白色粒子 透明粒子 石粉多量	良好	壺D類
第2005-21	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	(12.15) (5.55)	7.5YR6/4に近い橙色	口縁部～網上半部破片	密 白色粒子 石粉多量 褐色粒子 褐色粒子多量	良好	壺頭径(10.5)
第2005-22	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	(8.2) (2.05)	5YR6/6褐色	底部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粉多量	良好	木葉底
第2005-23	SB6 覆土	I-1区	土師器	壺	(8.3) (2.55)	(外)5YR4/3に近い赤褐色 (内)5YR4/4に近い褐色	底部破片	密 白色粒子 透明粒子 褐色粒子 こげ茶色粒子多量	良好	木葉底
第2005-24	SB6 覆土	I-1区	須恵器	壺	— (11.4)	(外)5.7YR5/2灰褐色 (内)5Y4/4灰褐色	側部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第2005-25	SB7 窓内	I-1区	土師器	甕	19.85 6.0 2.3	10YR7/2に近い黄褐色	肩部1/3～底部3/4欠損	小環 黄母 白色粒子	良好	甕D類 瓶部最大径18.6
第2205-1	SB7 覆土	I-1区	須恵器	壺	— (2.1)	(外)2.5Y5/1黄灰色 (内)2.5Y5/2灰白色	天井一部残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第2205-2	SB7 覆土	I-1区	須恵器	高台付 甕	(10.0) (1.9)	2.5Y8/2灰白色	底部～高台破片	密 白色粒子	良好	高台径(10.0)
第2205-3	SB7 覆土	I-1区	須恵器	無台 甕	(8.2) (0.9)	10YR8/1灰白色	底部～一部残存	密 白色粒子	やや良	
第2205-4	SB7 覆土	I-1区	土師器	壺	(1.0) 5.0 4.9	(外)5YR4/3に近い赤褐色 (内)5YR4/4に近い赤褐色	全体の1/3残存	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	壺I類
第2205-5	SB7 覆土	I-1区	土師器	鉢	(1.0) (5.65)	5YR5/4に近い赤褐色	底部1/5残存	密 白色粒子 透明粒子 灰色粒子少量	良好	
第2205-6	SB7 覆土	I-1区	土師器	小型甕	(1.0) (3.5)	10YR5/4に近い赤褐色	口縁部1/3残存	密 白色粒子	良好	甕C2類
第2205-7	SB7 覆土	I-1区	土師器	小型甕	(1.5) (3.4)	7.5YR5/6橙色	口縁部1/4残存	密 白色粒子	良好	甕C2類
第2205-8	SB7 覆土	I-1区	土師器	小型甕	(15.1) (6.3)	(外)10YR6/3に近い黄褐色 (内)7.5YR5/3に近い褐色	口縁部1/12残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	甕C2類
第2205-9	SB7 覆土	I-1区	土師器	甕	(23.0) (4.5)	7.5YR5/3に近い褐色	口縁部1/12残存	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	甕C1類
第2205-10	SB7 覆土	I-1区	土師器	甕	(6.1) (4.5)	(外)5YR5/6明赤褐色 (内)7.5YR6/4に近い褐色	底部1/4残存	密 白色粒子	良好	甕C1類
第2205-11	SB7 覆土	I-1区	土師器	甕	(6.2) (5.9)	(外)10YR5/3に近い黄褐色 (内)7.5YR6/4に近い褐色	底部1/2残存	密 白色粒子	良好	甕C1類
第2205-12	SB8 覆土	I-1区	土師器	甕	— (3.25)	7.5YR5/3に近い褐色	口縁部破片	密 白色粒子 石粉多量 透明粒子 少量	良好	木葉底
第2205-13	SB8 覆土	I-1区	土師器	甕	(8.7) (2.85)	5YR5/3に近い赤褐色	底部1/4残存	密 白色粒子 石粉多量 透明粒子 少量	良好	木葉底
第2205-14	SB8 覆土	I-1区	土師器	甕	(8.0) (2.65)	5YR5/4に近い赤褐色	底部1/4残存	密 白色粒子 透明粒子 褐色粒子 石粉多量	良好	木葉底
第2205-15	SB8 覆土	I-1区	土師器	甕	(7.65) (2.35)	5YR5/4に近い赤褐色	底部1/4残存	密 白色粒子 石粉多量 透明粒子 褐色粒子少量	良好	木葉底
第2205-16	SB8 覆土	I-1区	土師器	甕	— (5.95)	2.5YR5/4に近い赤褐色	網上半部1/布残存	密 白色粒子 透明粒子多量 褐色粒子少量	良好	甕B1類 瓶部径(21.15)
第2205-17	SB8 覆土	I-1区	土師器	甕	— (7.65)	(外)10YR6/6明赤褐色 (内)5YR4/4に近い赤褐色	網上半部1/6残存	密 白色粒子 石粉多量 透明粒子 少量	良好	甕B1類
第2205-18	SB8 覆土	I-1区	手削土	手削土	5.5 3.5 2.3~2.5	(外)10YR5/4に近い褐色 (内)5YR4/4明赤褐色	完形	密 白色粒子 灰色粒子 透明粒子少量	良好	木葉底
第2405-1	SB9 窓内	I-1区	土師器	手削土	—	—	—	—	—	—

表15 土器觀察表(4)

表16 土器観察表(5)

図版番号	遺構名	調査区	種別	番號	□縦 感径 厚 (cm)	色 調	残 存	胎 土	焼成	備 考
第30回-5	SB12 廻土	1-1区	須恵器	高台付 环	(12.1) (9.0) 4.15	2.5Y6/2灰黄色 (内)5Y7/1灰白色 (内)5Y5/1灰白色	全体の1/10残存	白色粒子	良好	高台径(9.0)
第30回-6	SB12 廻土	1-1区	須恵器	环	(12.7) — (3.7)?	(外)5Y7/1灰白色 (内)5Y5/1灰白色	口縁一部残存	白色粒子	良好	
第31回-1	SB13 廻土	1-1区	土師器	环	(12.8) — (3.0)	7.5YR3/5暗褐色 (内)5Y5/4灰褐色	口縁部1/12残存	白色粒子	良好	环B類
第31回-2	SB13 廻土	1-1区	須恵器	环	(11.7) 2.5	2.5Y6/1灰灰色 (内)5Y5/4灰褐色	口縁部1/10残存	白色粒子	良好	
第31回-3	SB13 廻土	1-1区	土師器	甕	— —	5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5Y5/4にぶい赤褐色	口縁一部残存	白色粒子 透明粒子少量	良好	
第31回-4	SB13 廻土	1-1区	土師器	甕	— —	5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5Y5/4にぶい赤褐色	口縁一部残存	白色粒子 透明粒子少量	良好	
第31回-5	SB13 廻土	1-1区	土師器	甕	— —	2.5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5Y5/4にぶい赤褐色	口縁一部残存	白色粒子	良好	
第31回-6	SB13 廻土	1-1区	土師器	甕	(8.0) (2.7)	7.5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5Y5/4にぶい赤褐色	底部1/4残存	白色粒子 灰色粒子 透明粒子少量	良好	木葉痕
第33回-1	SB14 廻土	1-1区	須恵器	环身	(11.8) —	5Y5/1灰白色 (内)5Y5/1灰白色	全体の1/8残存	密 白色粒子	良好	愛群径(13.8)
第33回-2	SB14 廻土	1-1区	須恵器	环	— —	2.5Y6/1黄褐色 (内)5Y5/1黄褐色	天井部分近底段	密 白色粒子	良好	
第33回-3	SB14 廻土	1-1区	土師器	环	(12.8) (2.8)	7.5YR5/3にぶい赤褐色 (内)5Y5/3にぶい赤褐色	口縁部1/12残存	密 白色粒子	良好	环H類
第33回-4	SD14 廻土	1-1区	土師器	环	(17.9) (10.6) 5.1	2.5YR5/3暗褐色 (内)5Y5/3暗褐色	全体の1/2残存	密 白色粒子	良好	甕B類
第33回-5	SB14 廻土	1-2区	土師器	甕	20.8 — 15.5	(外)5YR3/3暗赤褐色 (内)5YR3/3にぶい赤褐色 (内)5YR5/3にぶい赤褐色	口縁部～胴上部残存	白色粒子 小繖	良好	胴長大径27.85
第33回-6	SB14 廻土	1-1区	土師器	甕	(7.0) 3.1	(外)10YR4/3にぶい赤褐色 (内)7.5YR5/3にぶい赤褐色	底部1/4残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	木葉痕
第36回-1	SB16 廻土	1-1区	須恵器	环蓋	— —	5Y6/1灰白色 (内)5Y6/1灰白色	天井一部残存	白色粒子	良好	
第36回-2	SB16 廻土	1-1区	須恵器	环蓋	(15.6) 2.0	2.5Y6/2灰黄色 (内)7.5YR5/2にぶい赤褐色	口縁部1/8残存	白色粒子	良好	
第36回-3	SB16 廻土	1-1区	須恵器	环	— — 2.8	2.5YR6/2灰白色 (内)7.5YR5/2にぶい赤褐色	口縁部1/8残存	白色粒子	良好	
第36回-4	SB16 廻土	1-1区	須恵器	高台付 环	(9.2) — 1.1	5Y7/1灰白色 (内)5Y7/1灰白色	底面1/2残存	白色粒子	良好	
第36回-5	SB16 廻土	1-1区	土師器	环	(12.2) — 3.4	7.5YR4/3褐色 (内)7.5YR4/3褐色	口縁部1/7残存	白色粒子	良好	环I類
第36回-6	SB16 廻土	1-1区	土師器	环	(10.9) — 3.2	5YR5/5暗赤褐色 (内)5YR5/5暗赤褐色	口縁部1/5残存	白色粒子 灰色粒子	良好	环I類
第36回-7	SB16 廻土	1-1区	土師器	环	(9.6) 2.0	(外)5YR4/3にぶい赤褐色 (内)5YR4/3暗褐色	底部1/5残存	白色粒子 透明粒子少量	良好	环I類
第36回-8	SB16 廻土	1-1区	土師器	环	(8.2) 2.1	5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5YR5/4にぶい赤褐色	底面1/4残存	白色粒子多量	良好	环I類
第36回-9	SB16 廻土	1-1区	土師器	环	(7.6) 1.0	(外)7.5YR5/4にぶい赤褐色 (内)7.5YR5/4にぶい赤褐色	底部1/4残存	白色粒子多量	良好	环I類
第36回-10	SB16 廻土	1-1区	土師器	甕	(18.8) — 4.4	(外)10YR4/4にぶい赤褐色 (内)7.5YR6/4にぶい赤褐色	口縁部1/10残存	白色粒子	良好	甕C1類
第36回-11	SB16 廻土	1-1区	土師器	甕	— —	5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5YR5/4にぶい赤褐色	口縁一部残存	白色粒子多量	良好	
第36回-12	SB16 廻土	1-1区	土師器	甕	(25.2) (3.0)	(外)10YR4/4灰黃褐色 (内)7.5YR5/3にぶい赤褐色	口縁部1/7残存	白色粒子	良好	甕C1類
第38回-1	SB17 窓内	1-1区	須恵器	环身	(8.5) — 2.2	7.5Y6/1灰白色 (内)7.5Y6/1灰白色	口縁部～体部1/8残存	密 長石 透明粒子少量	良好	最大径(10.4)
第38回-2	SB17 窓内	1-1区	須恵器	环身	(9.0) — 2.15	10Y6/1灰白色 (内)10Y6/1灰白色	口縁部～体部1/10残存	密 長石 透明粒子少量	良好	最大径(11.05)
第38回-3	SB17 窓内	1-1区	須恵器	环蓋	(11.7) — 2.3	5Y6/1灰白色 (内)5Y6/1灰白色	口縁部1/10残存	密 白色粒子少量 微砂粒	良好	
第38回-4	SB17 窓内	1-1区	須恵器	环	(14.8) — 2.5	5Y6/1灰白色 (内)5Y6/1灰白色	口縁部1/12残存	密 白色粒子 頸砂粒	良好	
第38回-5	SB17 窓内	1-1区	土師器	环	(13.4) — 4.9	(外)5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5YR5/4にぶい赤褐色	底部1/5残存	密 白色粒子 小繖	良好	环D類
第38回-6	SB17 廻土	1-1区	土師器	环	(13.2) — 4.25	(外)10YR4/4灰褐色 (内)7.5YR4/4灰褐色	口縁部～体部1/4残存	密 白色粒子 小繖	良好	环D類

表17 土器觀察表(6)

因版番号	遺構名	発生区	種別	器種	口縁部 底盤部 裏面 (cm)	色 調	残 存	胎 土	焼成	備 考
第3886-7	SB17 裏内	I-1区	土師器	环	—	(外)7.5YR5/4にぶい薄色 (内)5YR5/3明赤褐色	口縁部破片	密 小織 白色粒子	良好	坏C類
第3886-8	SB17 裏内	I-1区	土師器	手捏土器	—	10YR5/3にぶい薄褐色	口縁部破片	密 小織 白色粒子	良好	坏C類
第3886-9	SB17 裏付	I-1区	土師器	环	—	(外)7.5YR5/4にぶい薄色 (内)5YR1.7/1褐色	口縁部破片	密 小織 黑母	良好	坏C類
第3886-10	SB17 裏付	I-1区	土師器	环	(12.8) 2.95	5YR5/4にぶい薄褐色	口縁部1/6残存	密 白色粒子 小織	良好	
第3886-11	SB17 裏土	I-1区	土師器	环	(10.8) 2.9	7.5YR5/4にぶい薄褐色	口縁部~底部1/8残存	密 茶褐色粒子	良好	坏D類 外面黒色共様? または茶色付青白あり
第3886-12	SB17 裏付	I-1区	土師器	小型壺	—	(外)10YR6/4にぶい黄褐色 (内)5YR6/3にぶい褐色	口縁部破片	密 小織 長石	良好	捷C類
第3886-13	SB17 裏土	I-1区	土師器	壺	—	5YR5/3にぶい赤褐色	口縁部破片	白色粒子 小織 石英	良好	
第3886-14	SB17 裏付	I-1区	土師器	小型壺	(11.6) 3.5	7.5YR4/2灰褐色	口縁部1/6残存	密 小織 白色粒子 透明粒子	良好	捷C類
第3886-15	SB17 裏付近	I-1区	土師器	壺	(25.26)	(外)5YR3/2暗赤褐色 (内)10YR3/3暗褐色	肩部~腹部1/4残存	白色粒子 小織 黑母	良好	捷B1類 外面黒付青頭部大径(25.8)
第4242-1	SB18 裏土	I-1区	須恵器	环身	(8.2) (3.7)	2.5GY5/1オリーブ灰色	口縁部~体部1/5残存	白色粒子 砂粒	良好	捷大径(10.4)
第4242-2	SB18 裏土	I-1区	須恵器	环身	(5.05) 3.9	N6/0灰色	口縁部~体部1/5残存	白色粒子 砂粒	良好	
第4242-3	SB18 裏付近	I-1区	須恵器	環蓋	9.63 2.8	7.5Y1/1灰白色	口縁部1/5欠損	白色粒子 黒色粒子 小織	良好	捷大径(11.0)
第4242-4	SB18 裏土	I-1区	土師器	环	(12.5) (4.0)	2.5YR5/5橙色	口縁部1/2体部1/8残存	白色粒子 小織	良好	
第4242-5	SB18 裏土	I-1区	土師器	环	(11.2) 3.35	7.5YR6/4にぶい橙色	口歎部1/8 体部~底部1/4残存	赤褐色粒子 小織	良好	坏D類
第4242-6	SB18 裏土	I-1区	土師器	环	(11.25) (3.2)	7.5YR7/4にぶい橙色	口歎部~体部1/12残存	小織	良好	坏D類 口腹部内面赤褐色付有り
第4242-7	SB18 裏土	I-1区	土師器	环	(11.2) 3.6	(外)7.5YR6/4にぶい橙色 (内)5YR3/3暗褐色	口歎部1/3体部1/2 底盤4/5残存	小織	良好	坏B類
第4242-8	SB18 裏付	I-1区	土師器	高杯	(10.85) 7.5 5.85	10YR8/2灰褐色	口縁部~全体1/4 底盤横筋付斜面無1/5残存	密 小織 白色粒子 黑母	良好	接合部径(4.1)
第4242-9	SB18 裏底	I-1区	土師器	高杯	11.2 5.5	10YR3/1墨禪色	口歎部斜ア 脚部斜脚付	密 小織 白色粒子 透明粒子少量	良好	接合部径(4.0)
第4242-10	SB18 裏窓六	I-1区	土師器	小型壺	17.15 7.3 14.5	5YR5/4にぶい赤褐色	完形	白色粒子多量 小織	良好	捷B1類 木漆底
第4242-11	SB18 裏窓六	I-1区	土師器	壺	(21.6)	5YR4/4にぶい赤褐色	口縁部~脚部残存	白色粒子 黑母 小織	良好	捷B1類 木漆底大径(25.8)
第4242-12	SB18 裏内 窓六	I-1区	土師器	壺	(20.1) (6.75)	(外)7.5YR6/4にぶい黃褐色 (内)10YR3/2暗褐色	口縁部1/2~肩部1/5残存	白色粒子 黑母 小織	良好	捷B1類 木漆底径(17.5)
第4242-13	SB18 裏底	I-1区	土師器	壺	17.9 (10.15)	7.5YR6/4にぶい黃褐色	口縁部2/3~肩部2/3残存	長石 南褐色粒子 小織	良好	捷A1類 腹部径15.5
第4343-1	SB18 裏土	I-1区	土師器	壺	— (3.2)	7.5YR5/4にぶい薄褐色	口縁部破片	白色粒子 黑色粒子 黑石 小織	良好	
第4343-2	SB18 裏底	I-1区	土師器	壺	— (4.1)	5YR5/4にぶい赤褐色	口縁部破片	白色粒子 小織	良好	
第4343-3	SB18 窓六 付近	I-1区	土師器	壺	(20.5) — (3.2)	7.5YR5/4にぶい薄褐色	口歎部1/3残存	白色粒子 小織	良好	頭部径(16.6)
第4343-4	SB18 裏土	I-1区	土師器	壺	— 10.15	7.5YR5/4にぶい橙色	脚部1/7残存	密 小織 白色粒子	良好	捷B3類 腹部大径(23.3)
第4343-5	SB18 裏窓六	I-1区	土師器	壺	9.35 9.6	(外)10YR6/4にぶい黄褐色 (内)10YR3/2暗褐色	底部脚下部1/3残存	密 小織 長石 黑母	良好	木漆底 底部外側黒付有り
第4343-6	SB18 裏土	I-1区	土師器	壺	(7.1) (3.15)	(外)5YR4/2灰褐色 (内)5YR5/3明赤褐色	底部2/5残存	密 小織 長石 白色粒子 黑色粒子 少量	良好	木漆底
第4343-7	SB18 裏土	I-1区	土師器	壺	(7.5) (3.15)	(外)5Y4/1灰褐色 (内)5YR5/3にぶい黃褐色	底部1/5残存	白色粒子 小織	良好	木漆底
第4343-8	SB18 裏土	I-1区	土師器	壺	(7.1) (2.85)	10YR4/2灰褐色	底部1/6残存	白色粒子 小織多量	良好	木漆底
第4343-9	SB18 裏窓六 付近	I-1区	土師器	壺	(5.6) 8.0	7.5YR5/3にぶい薄褐色	底部1/6残存	密 小織 白色粒子 石英	良好	外側黒付有り 木漆底 田園地帯灰塗
第4343-10	SB18 裏付近	I-1区	土師器	壺	(8.1) (7.65)	(外)5YR4/2灰褐色 (内)5YR5/3にぶい薄褐色	底部1/4残存	白色粒子 黑色粒子 小織	良好	木漆底 外面黒付有り

表18 土器觀察表(7)

試査番号	遺物名	調査区	種 別	部位	口径 底径 厚さ (cm)	色 観	残 存	地 土	焼成	備 考
第438-11	SB18 壺土	1-1区	土師器	壺	(7.4) 9.8	5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5YR4/赤褐色 (外)5YR5/4にぶい褐色	底部1/3 底部下部1/6残存	密 小溝 白色粒子 長石	良好	木葉模 保付着
第438-12	SB18 壺土	1-1区	土師器	壺	7.55 12.2	—	底部2/3残存	密 小溝 白色粒子多量	良好	
第438-13	SB18 壺土	1-1区	土師器	壺	—	5YR4/4にぶい赤褐色	把手	密 小溝 白色粒子	良好	
第438-14	SB18 壺土 壺内 付近	1-1区	土師器	壺	—	5YR4/4にぶい赤褐色	把手	密 小溝 白色粒子	良好	
第464-1	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(12.0) (3.8)	(外)7.5YR2/1黒褐色 (内)7.5YR4/2赤褐色	全体の1/3残存	密 白色粒子	良好	坏B類
第464-2	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(12.4) — (4.1)	(外)7.5YR2/1黒褐色 (内)7.5YR2/2赤褐色	全体の1/5残存	密 白色粒子	良好	坏B類
第465-3	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(13.0) (3.4)	5YR6/6褐色	口縁部1/8残存	街 白色粒子 灰色粒子少量	良好	坏B類
第465-4	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(11.4) (3.6)	(外)2.5YR6/6褐色 (内)2.5YR6/6褐色	口縁部1/4残存	南 白色粒子 透明粒子少量	良好	坏B類
第465-5	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(12.6) — (3.05)	(外)10YR5/2赤褐色 (内)10YR3/1黒褐色	全体の1/6残存	密 白色粒子 透明粒子	良好	坏D類
第465-6	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(12.0) (3.25)	7.5YR6/4にぶい褐色	口縁部1/7残存	密 白色粒子	良好	坏D類
第465-7	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(12.4) (3.5)	7.5YR5/4にぶい褐色	全体の1/5残存	密 灰色粒子多量	良好	坏D類
第465-8	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	—	(外)7.5YR6/4にぶい褐色 (内)7.5YR6/4にぶい褐色	底部付近1/5残存	密 白色粒子	良好	坏C類
第465-9	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	—	(外)5YR5/4にぶい赤褐色 (内)5YR2/2赤褐色	底部付近1/5残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	坏C類
第465-10	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	—	5YR6/6褐色	底部付近1/4残存	南 白色粒子 灰色粒子少量	良好	坏C類 木葉痕?
第465-11	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	11.4 4.5	2.5YR6/6褐色	ほぼ完形	密 白色粒子 灰色粒子	良好	坏C類 木葉痕
第465-12	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	12.5 — 4.9-5.0	(外)5YR7/6褐色 (内)10YR2/1黒色	全体の2/3残存	密 白色粒子 灰色粒子	良好	坏C類 木葉痕
第465-13	SB19 壺内	1-1区	土師器	壺	(11.7) (4.1)	(外)5YR5/4にぶい褐色 (内)5YR7/6褐色	全体の1/4残存	南 白色粒子 灰色粒子 小溝少量	良好	木葉痕
第465-14	SB19 壺土	1-1区	土師器	萬壺	(7.3) 0.9	2.5Y4/1黄褐色	脚部1/4残存	密 砂粒 白色粒子	良好	
第465-15	SB19 壺土	1-1区	土師器	萬壺	—	10YR5/3にぶい黄褐色	接合部残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	接合部径4.5
第465-16	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(8.2)	5YR6/6褐色	11断部破片	密 白色粒子 灰色粒子	良好	壞B1類
第465-17	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	— (3.35)	10YR6/3にぶい黄褐色	口縁部破片	密 白色粒子多量	良好	
第465-18	SB19 壺内	1-1区	土師器	壺	(3.1)	7.5YR5/4にぶい褐色	口縁部破片	南 白色粒子 灰色粒子多量 透明粒子少量	良好	
第465-19	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	—	5Y6/6褐色	11断部破片	密 白色粒子	良好	
第465-20	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	— (3.7)	(外)5YR5/4にぶい赤褐色 (内)7.5YR6/6褐色	口縁部破片	密 白色粒子	良好	
第465-21	SB19 壺内	1-1区	土師器	壺	18.0 8.8 29.5	10YR4/2赤褐色 7.5YR6/6褐色	完形	白色粒子 小溝多量 石英	良好	壞B2類 脚部最大径29.5 木葉痕
第475-1	SB19 壺内	1-1区	土師器	壺	17.6 (12.5)	7.5YR5/3にぶい赤褐色	口縁部1/5～脚部2/3残存	白色粒子 小溝	良好	壞B1類 壊部径16.1
第475-2	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(19.3) 6.2	(外)5YR5/4にぶい赤褐色 (内)10YR4/4灰褐色	口縁部1/4残存	南 白色粒子多量 透明粒子	良好	
第475-3	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(18.6) — (3.8)	7.5YR5/4にぶい褐色	口縁部1/8残存	密 白色粒子多量	良好	
第475-4	SB19 壺土	1-1区	土師器	壺	(20.0) (3.8)	10YR5/3にぶい黄褐色	口縁部破片	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	
第475-5	SB19 壺内	1-1区	土師器	壺	6.9 14.5 (11.7)	(外)5YR5/4にぶい赤褐色 (内)2.5Y5/2灰褐色	底部3/5脚部2/3残存	密 小溝 白色粒子 長石	良好	脚部最大径21.65 木葉痕
第475-6	SB19 壺内	1-1区	土師器	壺	—	5YR4/4にぶい赤褐色	脚部1/6残存	密 小溝 長石 白色粒子	良好	壞A1類 脚部最大径(27.2)
第475-7	SB19 壺内	1-1区	土師器	壺	— (3.45)	5YR5/4にぶい赤褐色	脚部1/6残存	密 小溝 白色粒子 長石 黑色粒子	良好	壞A1類 脚部最大径(28.8)

表19 土器観察表(8)

目次番号	遺物名	調査区	種類	器種	口径 底径 高さ 最高 最低 (cm)	色 調	残 存	胎 土	焼成	備 考
第47図-8	SBI9 窓内	I-1区	土師器	甕	(7.4) 9.65	7.5Y3/3青褐色	底部1/4残存	密 小縫 露母 石英	良好	木葉底
第47図-9	SBI9 窓土	I-1区	土師器	甕	(10.4) (2.3)	(外)SYRS4/4にぶい青褐色 (内)7.5YR5/4にぶい青褐色	底部1/4残存	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	木葉底
第47図-10	SBI9 窓土	I-1区	土師器	甕	(7.6) (5.2)	(外)10YR4/2灰青褐色 (内)SYRS4/4にぶい青褐色	底部1/4残存	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	木葉底
第47図-11	SBI9 窓土	I-1区	土師器	甕	(8.3) (4.3)	(外)10YR4/2灰青褐色 (内)SYRS4/4にぶい青褐色	底部1/3残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	木葉底
第48図-1	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(10.8) (3.6)	7.5YR4/3褐色	口縁一部~全体1/6残存	白色粒子 砂粒	良好	坏C類
第48図-2	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(12.0) (3.6)	7.5Y3/3青褐色	口縁部~全体1/5残存	白色粒子 小縫	良好	坏C類
第48図-3	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(13.5) (4.65)	7.5YR6/4にぶい褐色	口縁部1/12~全体1/6残存	小縫	良好	壞A類
第48図-4	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(6.0) (2.05)	(外)10YR5/4にぶい黄褐色 (内)7.5YR5/5褐色	底部1/4残存	歩道色粒子 小縫	良好	
第48図-5	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(12.4) (4.55)	7.5YR5/4にぶい褐色	口縁部~全体1/6残存	白色粒子 小縫	良好	壞B類
第48図-6	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(10.0) (3.0)	SYR7/6褐色	口縁部1/元残存	小縫	良好	坏B類
第48図-7	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(6.8) (2.35)	SYR5/5にぶい青褐色	底部1/3残存	白色粒子 小縫	良好	坏C類
第48図-8	SBS- II層上	I-1区	須恵器	甕	(5.4)	7.5Y7/1灰白色	口縁部破片	白色粒子 砂粒	良好	外表面自然剥付着
第48図-9	SBS- II層上	I区	土師器	甕	(6.2) (2.95)	(外)SYR5/4にぶい青褐色 (内)10YR5/3にぶい黄褐色	底部1/4残存	白色粒子 小縫 長石	良好	木葉底
第48図-10	SBS- II層上	I区	土師器	甕	(8.1) (4.4)	(外)2.5Y3/3灰褐色 (内)7.5YR5/5にぶい褐色	底部1/6残存	白色粒子 小縫	良好	木葉底
第48図-11	SBS- II層上	I区	土師器	甕	6.9 2.6	7.5YR5/4にぶい褐色	底部残存	透明粒子 小縫 長石	良好	木葉底
第48図-12	SBS- II層上	I区	土師器	甕	(20.5) (3.5)	7.5YR5/4にぶい褐色	口縁部1/5残存	白色粒子 小縫	良好	
第48図-13	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(19.0) 6.15	10YR4/2灰黄褐色	口縁部1/モロ残存	密 小縫 白色粒子	良好	壞B類
第48図-14	SBS- II層上	I区	土師器	甕	(20.8) (4.5)	7.5YR5/4にぶい褐色	口縁部1/10残存	白色粒子 小縫	良好	
第48図-15	SBS- II層上	I区	土師器	甕	(25.5) (6.05)	(外)SYR5/4にぶい橙色 (内)10YR2/2灰黃褐色	口縁部1/6残存	白色粒子 小縫 黒色粒子少量	良好	壞B類 頸部係(21.9)
第48図-16	SBS- II層上	I区	土師器	甕	(21.7) (3.05)	7.5YR4/3褐色	口縁部1/10残存	白色粒子 小縫	良好	
第48図-17	SBS- II層上	I区	土師器	甕	(—) (5.0)	(外)SYR5/4にぶい青褐色 (内)5Y4/1灰褐色	口縁部破片	白色粒子 小縫 長石	良好	壞A類
第48図-18	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(32.2) (3.5)	7.5YR5/3にぶい褐色	口縁部破片	密 小縫 白色粒子 透明粒子 黃石	良好	壞A類
第48図-19	SBS- II層上	I-1区	土師器	甕	(2.5) (4.1) 3.1~3.3	(外)7.5YR5/3にぶい褐色 (内)SYR5/4にぶい青褐色	口縁部1/8残存	密 小縫 白色粒子	良好	壞B類 外面輝石着
第50図-1	SB20 床底	I-1区	須恵器	身舟	(11.6) (3.9)	5Y6/1灰色	光形	密 白色粒子多量 透明粒子	良好	受部係10.2
第58図-1	SBI 窓土	I-3区	土師器	甕	(13.2) (2.8)	(外)10YR5/2灰青褐色 (内)10YR2/2褐色	全體1/5残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	坏B類
第58図-2	SBI 窓土	I-3区	土師器	甕	(13.2) (2.8)	(外)7.5YR5/3にぶい褐色 (内)7.5YR2/1褐色	口縁部1/3残存	密 白色粒子	良好	坏B類
第58図-3	SBI 窓土	I-3区	土師器	甕	(11.8) (3.5)	(外)2.5Y4/1青褐色 (内)10YR2/1褐色	口縁部破片	密 白色粒子	良好	坏B類
第58図-4	SBI 窓土	I-3区	土師器	甕	(12.4) (2.9)	(外)10YR5/3にぶい黄褐色 (内)7.5YR5/3にぶい褐色	口縁部1/10残存	密 白色粒子	良好	坏C類
第58図-5	SBI 窓土	I-3区	土師器	甕	(15.1) (4.2)	10YR5/2灰黄褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	坏C類
第58図-6	SBI 窓土	I-3区	土師器	甕	(—) (—)	7.5YR5/3にぶい褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第58図-7	SBI 窓土	I-3区	土師器	甕	(13.5) (2.75)	10YR5/3にぶい褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	坏E類
第58図-8	SBI 窓土	I-3区	土師器	甕	(11.9) (3.2)	(外)7.5YR5/4にぶい褐色 (内)7.5YR5/6褐色	口縁部破片	密 白色粒子	良好	

表20 土器観察表(9)

回収番号	遺物名	調査区	種 別	器種	口径 底径 厚さ (cm)	色 調	残 存	胎 土	焼成	備 考
第58回-9	SBI 甕上	I-3区	土師器	环	(11.4) — (2.55)	7.5YR6/6褐色	口縁部破片	密 白色粒子	良好	坏B類
第58回-10	SBI 甕上	I-3区	土師器	环	— —	10YR6/3に近い黄褐色	体部破片	密 白色粒子	良好	
第58回-11	SBI 甕上	I-3区	土師器	高环	(5.0) 2.75	10YR5/3に近い黄褐色	脚部1/4残存	密 白色粒子	良好	接合部径(4.0)
第58回-12	SBI 甕上	I-3区	須恵器	环盖	(10.8) 3.35	(外)5Y6/1灰褐色 (内)5Y8/2灰白色	口縁部1/6残存	密 白色粒子	良好	天井部径(5.0)へテ記号
第58回-13	SBI 甕上	I-3区	須恵器	环蓋	— —	5Y6/1灰褐色	天井部～体部の一部残存	密 白色粒子	良好	
第58回-14	SBI 甕上	I-3区	須恵器	环蓋	(11.0) 3.5	5Y7/2灰白色	口縁部破片	密 白色粒子	良好	天井部径(5.6)
第58回-15	SBI 甕上	I-3区	須恵器	环身	(6.6) —	5Y6/1灰褐色	口縁部破片	密 白色微粒子	良好	受部径(11.2)
第58回-16	SBI 甕上	I-3区	須恵器	环身	(5.5) 1.9	5Y6/1灰褐色	14縁部1/2残存	密 白色粒子	良好	受部径(11.4)
第59回-1	SBI 甕内	I-3区	土師器	甕	(20.8) 8.5 30.65	(外)7.5YR6/4に近い褐色 (内)7.5YR6/3に近い褐色	ほぼ完形	白色粒子 小礫多量 雲母	良好	甕A1部 底部最大径29.4 木葉模
第59回-2	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(19.2) — 3.4	(外)7.5YR6/6灰褐色 (内)7.5YR6/3に近い黄褐色	口縁部1/8残存	密 白色粒子多量	良好	
第59回-3	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(17.6) 4.7	5YR6/5に近い赤褐色 2.5YR6/5褐色	口縁部1/3残存	密 白色粒子 金色粒子	良好	脚部径(15.5)
第59回-4	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(17.6) — 5.1	5YR6/4に近い赤褐色 (内)5YR5/4に近い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子多量	良好	
第59回-5	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(19.0) — 3.5	5YR6/4に近い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子多量	良好	頸部径(15.2)
第59回-6	SBI 灰陶	I-3区	土師器	甕	(19.0) — 6.1	5YR6/4に近い赤褐色 10YR6/3Cに近い灰褐色	口縁部1/8残存	密 白色粒子多量	良好	頸部径(16.3)
第59回-7	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(18.2) — 6.9	5YR5/3Cに近い赤褐色 7.5YR5/3Cに近い褐色	口縁部1/4残存	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	頸部径(15.8)
第59回-8	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(20.5) — 4.7	(外)10YR5/3Cに近い黄褐色 (内)7.5YR6/4Cに近い褐色	底部1/8残存	密 白色粒子多量	良好	頸部径(16.6)
第59回-9	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(18.0) — 3.45	7.5YR6/4に近い褐色	口縁部1/8残存	密 白色粒子多量	良好	
第59回-10	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(18.3) — 4.4	7.5YR5/3Cに近い褐色	口縁部1/8残存	密 白色粒子 少量 透明粒子少量	良好	頸部径(16.1)
第59回-11	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(18.0) — 4.3	(外)10YR6/4Cに近い黄褐色 (内)7.5YR6/4Cに近い褐色	口縁部破片	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	
第59回-12	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(18.0) — 4.5	(外)5YR6/4に近い赤褐色 10YR6/3Cに近い赤褐色	口縁部1/10残存	密 白色粒子 多量 透明粒子少量	良好	頸部径(15.0)
第59回-13	SBI 甕 付属	I-3区	土師器	甕	(8.5) — 7.5	(外)7.5YR5/3Cに近い褐色 (内)7.5YR6/4Cに近い褐色	底部3/4残存	密 白色粒子 水色粒子 透明粒子多量	良好	木葉模
第59回-14	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	7.5 — 2.5	(外)10YR6/2灰褐色 (内)7.5YR6/2灰褐色	底部1/1残存	密 白色粒子	良好	木葉模
第59回-15	SBI 甕上	I-3区	土師器	小煎甕	(5.1) — 2.5	(外)7.5YR5/4に近い褐色 (内)7.5YR6/4Cに近い赤褐色	底部2/5残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	木葉模
第59回-16	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(7.6) — 2.3	(外)7.5YR4/4灰褐色 (内)7.5YR5/4に近い褐色	底部5/5残存	密 白色粒子 灰褐色粒子多量	良好	木葉模
第59回-17	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(8.2) — 2.6	(外)2.5YR5/2灰褐色 (内)10YR6/3Cに近い黄褐色	底部1/5残存	密 白色粒子 水色粒子多量	良好	木葉模
第59回-18	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(7.7) — 3.9	10YR5/3に近い黄褐色	底部1/5残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	木葉模
第59回-19	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(7.5) — 3.25	(外)7.5YR4/4Cに近い褐色 (内)7.5YR5/4Cに近い黃褐色	底部1/5残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	木葉模
第59回-20	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(7.7) — 3.25	(外)2.5YR4/4Cに近い褐色 (内)7.5YR5/4Cに近い褐色	底部1/3残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第61回-1	SBI 甕上	I-3区	須恵器	高台付 环	(15.0) — 5.5	5Y6/1灰褐色	口縁部～底部破片	密 白色粒子	良好	高台径(5.4)
第61回-2	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(15.0) — 4.1	7.5YR5/3に近い褐色	口縁部1/8残存	密 白色粒子 多量 金色粒子少量	良好	甕C2類
第61回-3	SBI 甕上	I-3区	土師器	甕	(18.0) — 3.5	(外)7.5YR4/2灰褐色 (内)10YR6/2灰褐色	口縁部1/5残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	甕C1類 頸部径(15.6)
第69回-1	SP23 甕上	I-1区	土師器	环	(13.6) — (4.0)	7.5YR6/4に近い褐色	口縁部1/6残存	白色粒子	良好	

表21 土器観察表(10)

測定番号	遺物名	調査区	種 別	器種	口径 底径 器高 (cm)	色 調	残 存	胎 土	焼成	備 考
第69器 2	SP23 甕土	I-1区	土師器	甕	—	5YRA/4に近い赤褐色	口縁一部残存	白色粒子	良好	
第69器 3	SP1 甕土	I-2区	土師器	甕	(3.0)	7.5YR5/3に近い褐色	口縁部破片	密 白色粒子	良好	
第69器 4	SP27 甕土	I-1区	土師器	甕	—	10YR5/3に近い黄褐色	口縁一部残存	白色粒子	良好	
第69器 5	SP15 甕土	I-1区	土師器	甕	—	5YR5/4に近い赤褐色	口縁一部残存	白色粒子 灰色粒子少量 透明粒子少量	良好	
第69器 6	SP16 甕土	I-1区	土師器	甕	(9.8) 2.5	5YR5/4に近い赤褐色	口縁部1/8残存	白色粒子 透明粒子少量	良好	
第69器 7	SP11 甕土	I-2区	土師器	甕	(10.0) (2.5)	2.5YR4/4に近い赤褐色	口縁部1/10残存	密 白色粒子	良好	
第69器 8	SP15 甕土	I-1区	土師器	甕	—	5YR4/4に近い赤褐色	口縁一部残存	白色粒子 灰色粒子	良好	
第69器 9	SP16 甕土	I-1区	須恵器	甕	(12.4) 3.3	2.5Y6/1黄褐色	口縁部1/16残存	白色粒子	良好	
第69器 10	SP14 甕土	I-1区	土師器	甕	(0.6) 1.8	7.5YR5/4に近い褐色	底部一部残存	白色粒子多量	良好 木葉痕	
第69器 11	SP19 甕土	I-3区	土師器	甕	—	2.5YR4/4に近い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第69器 12	SP15 甕土	I-3区	土師器	甕	(0.0) 2.5	10YR5/3に近い黄褐色	底部1/5残存	密 白色粒子	良好 木葉痕	
第69器 13	SP15 甕土	I-1区	甕	小型甕	—	7.5YR5/4に近い褐色	口縁一部残存	白色粒子多量	良好	
第69器 14	SP65 甕土	I-1区	土師器	甕	—	5YR4/3に近い赤褐色	口縁一部残存	白色粒子 灰色粒子	良好	
第82器 1	SK1 甕土	3-1区	土師器	手捏土罐	20.3 (4.5) 1.85	5YR5/4に近い赤褐色	口縁部3/5～原上部1/2残 現存	小腰	良好 頸A2環 頸部径17.75	
第82器 2	SX1 甕土	3-1区	土師器	手捏土罐	10.2 (4.5) 1.85	7.5YR5/4に近い褐色	口縁部～各部1/8部一部残存	白色粒子 小腰	良好 大底径(5.0)	
第83器 1	機皿	I-1区	須恵器	环瓶	— 3.5	5Y4/1灰白色	はび完形	密 白色粒子 透明粒子多量	良好 天井部径3.45	
第83器 2	機皿	I-1区	須恵器	环瓶	(2.8)	5Y7/1灰白色	天井部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粉多量	良好 天井部径5.25	
第83器 3	機皿	I-1区	須恵器	环瓶	(10.1) (3.0)	7.5Y5/1灰白色	口縁部～瓶部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第83器 4	機皿	I-1区	須恵器	环瓶	(9.4) (2.5) (6.8)	7.5Y6/1灰白色	口縁部～瓶部1/5残存	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第83器 5	機皿	I-1区	須恵器	环身	— 1.4	2.5Y5/2灰褐色	口縁部1/5残存	密 白色微粒子	良好 受擦傷(10.8)	
第83器 6	機皿	I-1区	須恵器	环身	(0.0) 1.5	5Y6/1灰白色	口縁部1/5残存	密 白色微粒子	良好 受擦傷(11.0)	
第83器 7	表揮	2-1区	須恵器	环身	(5.4) (1.6)	5Y6/1灰白色	口縁部1/12残存	密 白色粒子	良好 受擦傷(11.2)	
第83器 8	表揮	3-1区	須恵器	环身	(5.6) 2.55	5Y6/1灰白色	口縁部1/5残存	密 白色粒子	良好 受擦傷(11.8)	
第83器 9	機皿	I-1区	須恵器	輪み蓋	— (2.4)	7.5Y5/1灰白色	拂み、天井部破片	密 白色粒子 透明粒子多量 黑色粒子少量	良好	
第83器 10	機皿	I-1区	須恵器	輪み蓋	(2.15)	(5.6)7.5Y6/2灰オリーブ色 (5.6)5Y6/1灰白色	拂み、天井部破片	密 白色粒子 透明粒子多量 黑色粒子少量	良好 撥锈3.05	
第83器 11	機皿	I-1区	須恵器	高台付 环	(14.3) (8.0) (3.95)	5Y6/1灰白色	口縁部～瓶部1/4残存	密 石英 黑石多量	良好 高台径(9.8)	
第83器 12	機皿	I-1区	須恵器	环	(13.8) (4.0)	5Y6/1灰白色	口縁部～瓶部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第83器 13	機皿	I-1区	須恵器	环	(13.1) (3.55)	5Y6/1灰白色	口縁部～瓶部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第83器 14	機皿	I-1区	須恵器	环	(13.0) (3.8)	5Y6/1灰白色	口縁部～瓶部破片	密 白色粒子 透明粒子 黑色粒子少量	良好	
第83器 15	機皿	I-1区	須恵器	环	(16.45) — (3.95)	5Y6/1灰白色	口縁部～瓶部破片	密 白色粒子 透明粒子多量 石粉少量	良好	
第83器 16	機皿	I-1区	須恵器	高台付 环	(7.9) (2.9)	5Y7/2灰白色	底部破片	密 石英 黑石多量	良好 高台径(7.9)	
第83器 17	機皿	I-1区	須恵器	高台付 环	(10.4) (1.25)	5Y6/1灰白色?	底部破片	石英 黑石多量	良好 高台径(10.4)	

表22 土器観察表(1)

図版番号	遺構名	調査区	種類	器種	口径 底径 高さ (cm)	色 調	残 存	胎 土	焼成	備 考
第83回-18	日層	1-1区	須恵器	高台付 环	— (8.5) 2.1	5Y6/1灰褐色	高台部～底部1/5残存	密 白色粒子	良好	
第83回-19	擾乱	1-1区	須恵器	高台付 环	(10.0) (2.15)	5Y7/2灰白色	底部破片	密 石英 長石多量	良好	高台僅(30.0)
第83回-20	擾乱	1-1区	須恵器	高台付 环	(10.1) (1.3)	5Y6/1灰褐色	底部～高台1/4残存	密 石英 長石多量	良好	高台僅(30.1)
第83回-21	擾乱	1-1区	須恵器	平瓶	(7.6) (5.85)	7.5Y6/2灰オリーブ色 7.5Y7/1灰白色	口縁部～底部1/2残存	密 白色粒子 透明粒子 黒色粒子多量	良好	
第83回-22	擾乱	1-1区	須恵器	壺	(外)7.5Y7/2灰オリーブ色 (内)5Y6/1灰褐色	底部破片	密 白色粒子 透明粒子多量 黒色粒子少量	良好	脚部僅(10.1)	
第83回-23	擾乱	1-1区	須恵器	壺	(14.1) (3.7)	5Y6/1灰褐色 (内)7.5Y7/2灰オリーブ色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第83回-24	日層	2-1区	須恵器	甕	— (外)12.5Y7/1灰白色 (内)12.5Y7/2灰黄色	口縁部破片	密 白色粗粒子	良好		
第83回-25	表探	1-1区	須恵器	長颈壺	(12.1) (3.6)	5Y6/1灰褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第83回-26	表探	1-1区	須恵器	甕	(24.1) (3.8)	5Y6/1灰褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第83回-27	表探	1-1区	須恵器	甕	— (9.9)	(外)7.5Y6/2灰オリーブ色 (内)5Y6/1灰褐色	肩部破片	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	縦(5.2)厚さ(1.1) 砾石に転用
第84回-28	擾乱	1-1区	須恵器	甕	(8.4)	5Y7/2灰白色	側部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第83回-29	擾乱	1-1区	須恵器	甕	(5.9)	5Y6/1灰褐色	底部破片	密 白色粒子 透明粒子多量 砂粒少量	良好	
第84回-1	擾乱	1-3区	土師器	环	(9.4) — 1.9	SYR5/6明赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	环A類
第84回-2	擾乱	1-3区	土師器	环	(9.6) — 2.8	SYR4/5赤褐色	口縁部1/2残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	环A類
第84回-3	擾乱	1-1区	土師器	环	(11.35) — (3.3)	SYR5/4にぶい赤褐色	口縁部破片	密 透明粒子多量 白色粒子 塗色粒子少量	良好	环B類
第84回-4	擾乱	1-1区	土師器	环	(12.1) (3.5)	7.5YR5/4にぶい褐色	口縁部破片	密 透明粒子 褐色粒子少量	良好	环B類
第84回-5	表探	1-1区	土師器	环	(14.15) (6.4) (1.7)	7.5YR5/3にぶい褐色	口縁部～底部1/4残存	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第84回-6	擾乱	1-1区	土師器	碗	(12.7) (4.3)	SYR5/4にぶい赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第84回-7	擾乱	1-1区	土師器	环	(10.4) — (2.6)	10YR4/2灰黃褐色	口縁部破片	密 白色粒子 褐色粒子少量	良好	环E類
第84回-8	擾乱	1-1区	土師器	高环	(3.6) (10.7) — 5.55	SYR5/4にぶい赤褐色	脚部～底部残存	密 透明粒子多量 白色粒子 塗色粒子多量	良好	脚部僅(7.1)接合部僅3.8
第84回-9	擾乱	1-1区	土師器	高环	— (12.15)	10YR5/3にぶい黄褐色	环部1/3～脚部1/2残存	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	脚部僅(7.7)接合部僅4.5
第84回-10	擾乱	1-1区	土師器	高环	(2.75)	7.5YR5/4にぶい褐色	底部破片	密 透明粒子多量 石粒少量	良好	接合部僅(4.0)
第84回-11	擾乱	1-1区	土師器	环	(12.5) (4.25)	7.5YR5/4にぶい橙色	底部～口縁部破片	密 白色粒子多量 石粒 透明粒子少量	良好	
第84回-12	擾乱	1-1区	土師器	环	(12.4) (3.1)	10YR6/4にぶい黄褐色	口縁部～剥落わずかに残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	廣B類
第84回-13	擾乱	1-1区	土師器	环	(15.6) (4.05)	10YR6/3にぶい黄褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第84回-14	日層	1-1区	土師器	环	(12.0) (7.6) — 3.4	2.5YR5/6明赤褐色	全体の1/5残存	密 白色粒子 灰色粒子少量	良好	
第84回-15	日層	1-1区	土師器	环	(10.7) (3.7)	2.5YR5/4にぶい赤褐色	全体の1/7残存	密 白色粒子 灰色粒子少量	良好	环I類
第84回-16	擾乱	1-1区	土師器	环	(11.5) (6.8) 3.65	2.5YR5/4にぶい赤褐色	全体の1/3残存	密 白色粒子	良好	环I類
第84回-17	擾乱	1-1区	土師器	环	(11.0) (7.6) (3.3)	(外)7.5Y3/2赤褐色 (内)5YR5/4にぶい赤褐色	口縁部1/5残存	密 白色粒子	良好	环I類
第84回-18	擾乱	1-1区	土師器	环	(5.6) (5.6) 4.0	2.5YR5/4にぶい赤褐色	全体の1/5残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	环I類
第84回-19	日層	1-1区	土師器	环	(11.8) (3.4)	2.5YR5/6明赤褐色	口縁部1/5残存	密 白色粒子 灰色粒子少量	良好	环I類
第84回-20	擾乱	1-1区	土師器	环	(11.1) (7.0) (3.75)	5YR5/4にぶい赤褐色	底部～口縁部破片	密 白色粒子 石粒多量 透明粒子少量	良好	环I類

表23 土器観察表(12)

試査番号	遺構名	調査区	種別	器種	口絞 底膨 高さ (cm)	色 調	残 存	黏 土	焼 成	備 考
第84区-21	擾乱	I-1区	土師器	环	(10.5) (2.9)	SYR5/4に赤い赤褐色	口縁部1/4残存	密 白色粒子 灰白色粒子少量	良好	
第84区-22	底層	I-1区	土師器	环	(11.7) (7.4) (3.8)	(外)2.5YR5/4Cに赤い赤褐色 (内)2.5YR5/4明赤褐色	全体の1/9残存	密 白色粒子多量	良好	
第84区-23	正型	I-1区	土師器	环	(16.4) (5.9)	(外)SYR5/4Cに赤い赤褐色 (内)2.5YR5/4明赤褐色	全体の1/8残存	密 白色粒子 透明粒子	良好	环口類
第84区-24	擾乱	I-1区	土師器	环	- 5.85	2.5YR5/6明赤褐色	口縁一部破片	密 白色粒子 灰色砂粒	良好	环口類
第84区-25	表層	2-1区	土師器	高台付 环	- (6.5) (1.05)	SYR5/4に赤い赤褐色	高台部～底部1/5残存	密 白色粒子少量	良好	高台径(6.5)
第84区-26	擾乱	I-1区	土師器	高台付 环	(8.6) (2.6)	2.5YR5/4に赤い赤褐色	底部1/5残存	密 白色粒子	良好	
第84区-27	擾乱	I-1区	土師器	高台付 环	(8.8) (1.66)	SYR5/4に赤い赤褐色	高台部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	高台径(8.8)
第84区-28	擾乱	I-1区	土師器	环底	- (1.96)	(外)2.5YR4/2Cに赤い赤褐色 (内)2.5YR5/1暗赤褐色	体部破片	密 白色粒子 透明粒子 赤色粒子多量	良好	
第84区-29	擾乱	I-1区	土師器	环底	- (1.96)	2.5YR5/6明赤褐色	口縁部～体部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第84区-30	擾乱	I-1区	土師器	朱塗り	- (1.15)	10YR5/6赤色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第84区-31	擾乱	I-1区	土師器	墨書き	- (3.9)	SYR5/4に赤い赤褐色 (外)5YR5/1暗赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	环口類
第84区-32	表層	2-1区	土師器	墨書き	-	SYR4/6赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子	良好	环口類「太」カ
第84区-33	擾乱	I-1区	土師器	手捏土器	(7.2) (3.6)	(外)SYR5/4Cに赤い赤褐色 (内)7.5YR5/4に赤褐色	全体の1/4残存	密 白色粒子	良好	手捏瓶
第84区-34	正型	I-1区	土師器	手捏土器	(4.7) (3.3) (2.2)	(外)2.5YR4/4に赤い赤褐色 (内)10YR5/3に赤い赤褐色	全体の1/8残存	密 白色粒子	良好	
第84区-35	擾乱	I-1区	土師器	手捏土器	(5.0) (2.3)	7.5YR5/4に赤い赤褐色	口縁部～底部破片	密 白色粒子	良好	
第85区-1	擾乱	I-1区	土師器	甕	(22.5) (3.1)	SYR5/3に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第85区-2	擾乱	I-1区	土師器	甕	(22.6) (3.2)	7.5YR5/2深赤褐色	II縫部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第85区-3	擾乱	I-1区	土師器	甕	(24.6) (4.0)	SYR5/3に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粒少量 黑色粒子少量	良好	
第85区-4	擾乱	I-1区	土師器	甕	(18.6) (2.45)	7.5YR5/4に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子	良好	
第85区-5	擾乱	I-1区	土師器	甕	(16.5) (4.8)	7.5YR5/3に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	甕部径(16.5)
第85区-6	擾乱	I-1区	土師器	甕	(22.0) (3.95)	SYR5/4に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粒多量	良好	
第85区-7	擾乱	I-1区	土師器	甕	(28.7) (1.3)	7.5YR5/3に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粒少量	良好	
第85区-8	擾乱	I-1区	土師器	甕	(19.5) (4.6)	7.5YR5/3に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量 黑色粒子少量	良好	
第85区-9	擾乱	I-1区	土師器	甕	(21.1) (3.95)	(外)SYR4/6赤褐色 (内)10YR5/4明赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粒多量	良好	
第85区-10	擾乱	I-1区	土師器	甕	(17.1) (3.95)	SYR5/4に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粒多量	良好	
第85区-11	擾乱	I-1区	土師器	甕	(23.4) (4.75)	7.5YR5/3に赤い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子多量 透明粒子少量	良好	甕C2類
第85区-12	擾乱	I-1区	土師器	甕	(22.1) (4.25)	SYR5/5明赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	甕C2類
第85区-13	擾乱	I-1区	土師器	甕	(19.0) (3.95)	SYR4/6赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 黑色粒子 透明粒子多量	良好	甕C2類
第85区-14	擾乱	I-1区	土師器	甕	(21.7) (4.45)	SYR5/6明赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量 石粒少量	良好	甕C2類
第85区-15	擾乱	I-1区	土師器	甕	(9.95) (1.3)	10YR5/3に赤い赤褐色	底部1/4残存	密 白色粒子 石粒多量	やや 木炭痕	
第85区-16	擾乱	I-1区	土師器	甕	(8.2) (2.6)	(8.5)10YR3/1深赤褐色 (9.9)7.5YR5/4に赤い赤褐色	底部1/4残存	密 白色粒子 透明粒子 石粒多量	良好	木炭痕
第85区-17	擾乱	I-1区	土師器	甕	(5.7) (2.85)	(外)7.5YR5/2深赤褐色 (内)7.5YR5/4に赤い赤褐色	底部1/3残存	密 白色粒子 透明粒子 石粒多量	良好	木炭痕

表24 土器観察表(1)

因版番号	遺構名	調査区	種類	層位	口縁 底径 厚さ (cm)	色 調	残 存	胎 土	焼成	備 考
第85號-18	擾乱	I-I区	土師器	裏	(7.2) (1.8)	10YR5/3に近い黄褐色	底部1/4残存	密 白色粒子 透明粒子 石粒多量 黒色粒子少量	やや薄	木葉痕
第85號-19	擾乱	I-I区	土師器	裏	(17.0) (5.5)	7.5YR6/4に近い橙色	口縁部～胴上部破片	密 白色粒子 透明粒子 石粒多量	良好	
第85號-20	擾乱	I-I区	土師器	裏	(17.2) (2.5)	7.5YR5/3に近い褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	
第85號-21	擾乱	I-I区	土師器	裏	(13.0) (4.2)	(外)7.5YR4/2灰褐色 (内)7.5YR5/4に近い褐色	口縁部1/4残存	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	
第85號-22	正層	I-I区	上縁器	輪	— (3.4)	— 2.5YR5/4に近い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 灰色粒子多量 透明粒子少量	良好	埴A類
第85號-23	表浜	I-I区	土師器	端	— (3.4)	(内)7.5YR4/2灰褐色 (外)7.5YR5/4に近い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 灰色粒子多量 透明粒子少量	良好	埴B類
第85號-24	擾乱	I-I区	土師器	端	(20.7) (4.6)	5YR5/4に近い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	埴A類
第85號-25	擾乱	I-I区	土師器	端	(21.8) (3.9)	5YR5/4に近い赤褐色	口縁部破片	密 白色粒子 透明粒子多量	良好	埴A類
第85號-26	擾乱	I-I区	上縁器	端	(23.8)? (5.65)?	5YR5/2灰褐色	口縁一部残存	密 白色粒子 透明粒子少量	良好	埴B類

表25 石製品計測表

因版番号	遺構名	調査区	種 别	層位	最大長 最大幅 厚さ (cm)	石 材	重 量(g)	備 考
第16號-13	SB3	I-I区	石製品	カマフラ	21.7 6.8 —	中粒砂岩	1140.5	4面の面取りがみられる。
第22號-12	SB7	I-I区	石製品	カマフラ	(13.55) 8.3	凝灰質砂岩	737.6	断面は10~12面の多角形を呈する。
第26號-13	SB10	I-I区	石製品	カマフラ	20.5 9.9 —	凝灰質砂岩	1460.1	断面は方形状を呈する。
第38號-16	SB17	I-I区	石製品	カマフラ	(27.75) 10.4	凝灰質砂岩	1828.4	断面は円形を呈する。
第49號-3	SB19	I-I区	石製品	カマフラ	(26.45) 9.4 —	軽粒砂岩	1838.3	断面は方形状を呈する。
第58號-17	SB1	I-3区	石製品	カマフラ	(18.15) 8.5 —	凝灰質砂岩	920.5	断面は六角形を呈する。
第58號-18	SB1床	I-3区	石製品	砾石	8.1 3.8 0.96~0.9	漂砾岩	92.6	4面の面取りが確認され、穿孔が施される。
第58號-19	SB1床	I-3区	石製品	砾石	19.4 12.3 8.2	多孔質玄武岩	1623.2	側面部に低面が確認される。

*石材については静岡大学名譽教授伊藤達次先生及び森嶋富士夫氏に鑑定して頂いた。

表26 鉄製品計測表

因版番号	遺構名	調査区	種類	層位	全長 幅 厚さ (cm)	備 考
第18號-22	SB4	I-I区	鉄製品	釣針	(2.6) — 0.35~0.65	頭部は欠損している。断面は方形を呈する。
第18號-23	SB4	I-I区	鉄製品	鉄錠	(4.5) 0.6 0.2~0.25	鉄錠の頭部と思われる。
第20號-26	SB6	I-I区	鉄製品	釣針	4.0 1.0 0.35	断面は方形を呈する。細錐である。
第43號-15	SB18	I-I区	鉄製品	刀子	(4.4) 0.5 0.25	本質が残存する。
第49號-1	SB19	I-I区	鉄製品	鉄錠	(0.5) 1.8 0.35~0.4	広根系錠が三角形錠。茎部に本質が残存する。
第49號-2	SB19	I-I区	鉄製品	鍔	(11.0) 0.6~2.1 2.6	基部に折れしがり、先端部はやや丸みをもつ。刃部と柄の部分の区別がある。
第58號-29	SB1	I-3区	鉄製品	鉄錠	15.0 — 0.2~0.4	細根系錠鉄錠。錠身部16cm。片丸錠で錠状開を有する。

第IV章 まとめ

第1節 遺構と遺物の変遷

1 集落の変遷

今回の調査では古墳時代後期～平安時代にいたる23軒の住居跡、7棟の掘立柱建物跡が検出され、概ね継続的に営まれた集落であったと考えられる。I区の東側では長泉町が調査を行い、同様の住居跡を検出していることから、この範囲を併せると集落規模は東西幅100mの範囲に広がり、この黄瀬川扇状地上の集落としては中規模程度の集落であるといえる。さらに2-1区、3-1区で検出した遺構は1区より高位の段丘上に位置しており、原分古墳の周囲には別の集落が存在していた可能性が強い。ここでは1区で検出した住居跡について住居の規模、形態、カマドや住居配置などを大まかにみていく。今回、調査区全域において攪乱が及んでおり、住居の平面構造に不明確なものが多いため、特にカマド構造に着目し、検討する。

第1期（7世紀中葉～後葉）

1-1区SB1が該当する。調査区の北西端に位置する。住居の南側は調査区外にかかっているため、全体は明らかでないが、カマドは北壁に設置される。カマドの構築材には砂岩を用いる。この時期が本遺跡の開始期であると考えられる。

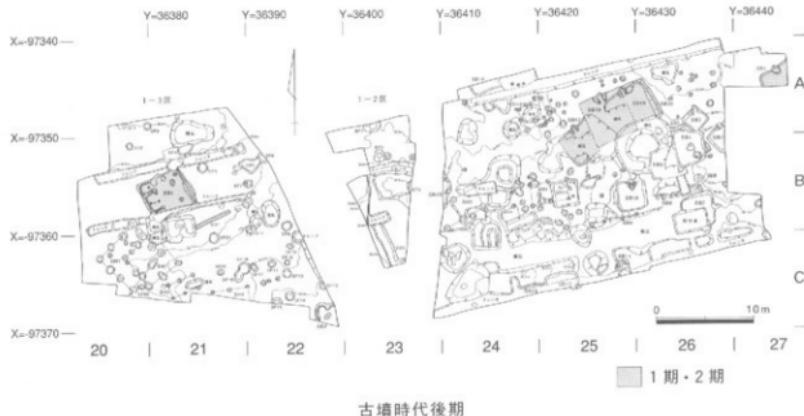
第2期（7世紀後葉～末葉）

1-1区SB5、SB8、SB13、SB17、SB18、SB19、SB20、1-3区SB1が該当する。カマドは北壁中央に位置し、主軸方位は西に10°～30°傾くものが多く、10°前後と25°前後に集中してみられる。このように住居配置に規制が強く働いていたと考えられる。住居規模について詳細は不明であるが、5m前後と3.5m前後のものがみられ、なんらかの格差があると思われる。また、1-3区SB1では4本住穴が検出され、住居の西側部分で仕切溝が確認されている。

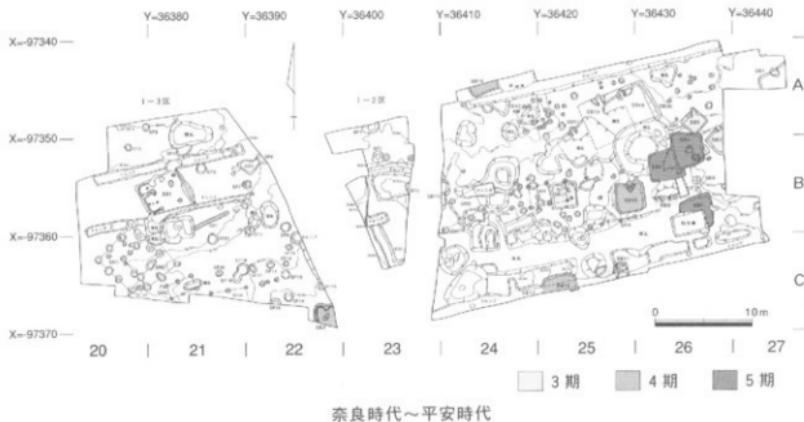
カマド構造は基本的には袖や天井部に構築材として礫を使用し、焚口付近の両袖内に礫を1個ずつ設置している。石材は砂岩や玄武岩などを用いる。さらにSB19、1-3区SB1では左袖内に球胴状の壺、前方部に礫を構築材として使用しており、この時期、集落内において共通のカマド構築技法を用いていると考えられる。これらの住居跡は5m前後の規模を有することから単位群中における中核的な住居に壺を構築材として使用していると思われる。また、SB18のカマドの右脇には貯蔵穴が設置され、ここから多くの土器が出土している。カマド内の土器・床面の土器・貯蔵穴からの土器にそれぞれ接合関係がみられることから意図的に分置された可能性もある。

第3期（8世紀前半～中葉）

1-1区SB3、SB9、SB10、SB11、SB14が該当する。カマドは北壁に設置される例が多い。袖内には礫を使用し、これにはSB9、SB10が挙げられる。特にSB9カマド袖内から手捏土器が出土しており、カマド祭祀として注目される。SB10は3×3mのはば正方形を呈し、前時期と比べると小型化を呈する。当住居にはカマドの作り替えが行われており、北壁中央に設置されている。この新カマドには焚口付近の袖部に礫を使用している。SB3は小型の住居跡であるが住居面積に対してカマドの規模は大きい。SB3・SB10のカマド燃焼部内には石製支脚が残置されていた。意図的に置いたかどうかは不明であるが、本遺跡では支脚がそのまま燃焼部に残っている例が多いように思われる。SB14のカマドは完全に破壊されていたが、カマドの構築材と思われる礫が住居内に廃棄されており、天井あるいは袖に粘土、礫を使用していたと考えられる。SB14のカマド右脇には埋壺のように胴部以下を欠く球胴状の壺を設



古墳時代後期



奈良時代～平安時代

第87図 竪穴住居跡変遷図

置しており、類例としてあまり知られていない。一般的にこの位置には貯蔵穴が設置されるが、別な用途を考える必要もあるう。

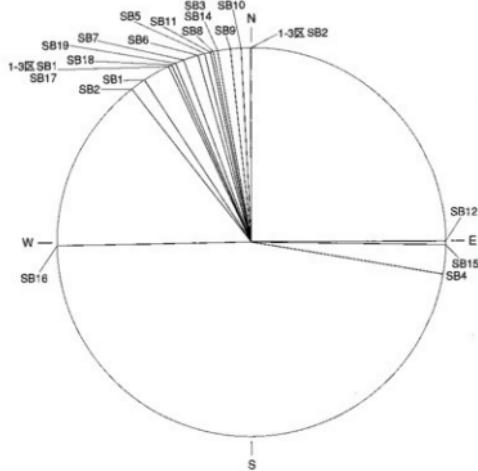
第4期（8世紀後半）

1-1区SB2、SB12、SB16、1-3区SB2が該当する。SB2はやや横長の長方形を呈し、北壁にカマドが設置されている。SB12のカマドは東壁に設置され、粘土主体で構築されている。SB16のカマドは西壁に設置され、この住居はおよそ3.3mの規模を有し、柱穴は検出していない。主軸方位は西壁、南東隅などさまざまな方位を示しており、集落内における住居設置における規範が弛緩したものと考えられる。

第5期（8世紀末葉～9世紀初頭）

1-1区SB4、SB6、SB7が該当する。カマドは石組が主体で構築され、特にSB4は石組のみが残存しており、砂岩・玄武岩、安山岩を主体に多くの礫を使用している。カマド位置は住居の南東隅に設置されている。SB6のカマドは北壁東寄りに設置され、SB7のカマドが完全に破壊されていたが、北壁西寄りに設置されている。全体的にカマドの規模は住居面積に対して小型化していると考えられる。

以上の場遺跡の住居跡を時期ごとに概観した。時期別にみると古墳時代後期9軒、奈良時代～平安時代12軒不明1軒となる。集落の継続時期は7世紀中葉から開始し、7世紀後葉に住居数は増加する。そして奈良時代前期に入ると減少し、奈良時代後半から再び増加傾向で平安時代初頭に終焉を迎える集落といえる。各住居の配置は住居が全体に及んでいないことや攪乱により詳細は明らかでないが、SB18～20のように重複あるいは何度も同じ場所に建て替え等を行っているようである。住居規模からSB18・19の1辺5m前後とSB17・SB5の1辺2.7m前後の住居がみられ、この組合せから住居群を構成していた可能性がある。カマドは北壁に設置され、構築材に礫と粘土の使用が認められる。主軸方位の近似性や共通した構築材の使用から集落内において住居配置・カマド構造に規範があったことを伺わせる。



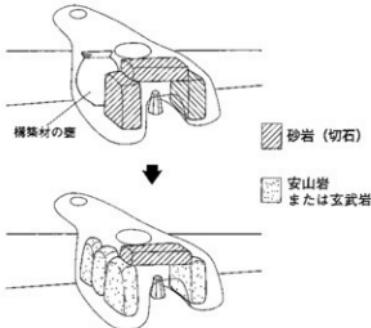
第88図 積穴住主軸方位図

奈良時代に入ると調査区の南側の低い場所に展開する。また1区の東隣の調査区は長泉町が調査を行っており、奈良時代～平安時代の住居跡が主体とされることから集落の中心は東へ移動したと考えられる。住居規模について1辺3.5mのものと2.7m前後のものがみられ、方形、横長の長方形を呈するものが存在する。住居規模は古墳時代と比べると全体的に小型化傾向である。カマドは北壁、西壁、東壁などに設置され、構築材として礫を多用するようになる。奈良・平安時代の住居内に柱穴などが検出されていない例が多いが、これは住居を構築する際の下層の地形的条件や構造によるものであろう。奈良時代の住居跡からは官衙に関連するような特殊な遺物や大型の掘立柱建物跡などをもたないことから東駿河地域において一般集落であると考えられる。

カマドの基本構造

本遺跡におけるカマド構造は上述したように時期差により構築材の使用に少なからず差異が認められるにせよ基本的には礫と粘土から構築される。礫は砂岩による切石と黄瀬川周辺で採取される安山岩や玄武岩が認められ、この石材はカマドの袖、天井、支脚などに多く用いられる。切石が多用されるのは加工が容易であることや石材産出地と近接した場所に立地しているからであろう。

そこでカマドの構築順序としてまず住居全面に貼床構築土として一旦整地される。次に袖の芯に見合うピットが掘られ、次に切石や安山岩の礫を設置する。礫は広口面を燃焼室側に向け、縦位に設置する例が多く、焚口付近の両袖のみに1個ずつ設置する例もみられる。天井石は燃焼部上部に設置されていたと考えられ、煙道部分に掛けられた痕跡はみられない。



第89図 的場遺跡におけるカマド変遷模式図

古墳と集落の関係について

当遺跡は7世紀中葉から開始する集落であり、周辺には長泉町原分古墳、長泉町土狩長塚、長泉町御蔵上古墳などの後期古墳群が群在している。中でも原分古墳は2-1区の西側に位置しており、平成12年度の確認調査の結果、径23~24mの円墳で石室長約10m、幅2mを有する無袖式の横穴式石室であると考えられる。東駿河地域では最大規模の石室長、石室幅を有することから、下土狩西1号墳のように石室内には家形石棺を有している可能性が高い。この黄瀬川流域では伊豆凝灰岩製の家形石棺は5例ほど見つかっており、石棺が集中する地域である。下土狩古墳群・的場古墳群は当地域における有力な古墳群と考えられる。

家形石棺は静岡市賤機山古墳、静岡市駿河丸山古墳などの駿河中部地域の有力な古墳や田方平野南部地域の有力な横穴群である伊豆長岡町大師山横穴群に採用されている。3地域の有力な古墳・横穴群に同様の石材で家形石棺を有することから首長間による交流があったと考えられる。

原分古墳の明確な築造時期に関しては本調査に依らねばならないが、周辺の古墳群の規模等から6世纪末~7世纪前半に比定される。今回調査した集落は7世纪中葉から開始されるため、直接原分古墳の築造や被葬者に関わる集落の可能性は低いといえる。しかし、黄瀬川扇状地上の集落遺跡の周辺には今回の的場遺跡と的場古墳群、天神原遺跡と天神原古墳群といったように近接した位置に集落と古墳群が混在した地域が何箇所かみられる。集落の立地に関して起伏に富む地形で水利に恵まれた場所に選地し、古墳群はその場所よりも標高の高い段丘上などに位置している。現段階では集落と古墳群の被葬者と直接結びつけることは困難であるが、少なからず関連があったと思われる。

2 的場遺跡における土器の推移

本遺跡からは古墳時代後期～平安時代の土器が出土しており、圧倒的に多いのが奈良時代の土器で、次に古墳時代後期の土器である。中でも土師器壺、壺が多く、わずかに須恵器が伴う。土師器と須恵器の出土量の割合は9対1程度であり、古墳時代後期と奈良時代～平安時代とはほぼ同様の比率である。また、本遺跡において灰釉陶器は全く出土していない。遺物の大半は1区からの出土であり、特に1-1区は攪乱が全域に及んでいたが、これらの土器はテンパコにして30箱分であった。ここでは今回は1期～5期(7世紀中葉～9世紀初頭)に分け、器種ごとに土器群の変遷や的場遺跡における全体的傾向をつかむこととした。

なお、土器の変遷をのべるにあたり以下の分類の基準を設けた。分類は土師器壺、高壺、甕に限り、その他の土器については量が少ないと各期の中で説明する。

土師器

供膳形態 (壺・塊・高壺・手捏土器)

- 壺A類** 須恵器壺身を模倣したものである。外面はケズリ調整が施される。
- 壺B類** 「内湾口縁壺」あるいは「屈曲口縁壺」とも呼ばれ、内外面が黒色化し、体部外面にケズリ調整、内面にミガキ調整が施される。
- 壺C類** 口縁部が内湾する壺で、内外面に横位のミガキが施される。
- 壺D類** 口縁部が内湾する壺で、外面はケズリ調整、内面は板ナデ調整が施される。
- 壺E類** 口縁部下に稜をもち、口縁部は直立、外傾する。扁平な丸底を呈し、木葉痕を残す。
- 壺F類** 口縁部が内折し、丸底を呈する。内面に斜位のミガキが施され、底部に木葉痕を残す。
- 壺G類** 口縁部が強く屈曲し、底部に木葉痕を残す。軟質で橙色を呈し、静清平野に多く分布する。
- 壺H類** 甲斐型の壺 ロクロ整形で平底の壺
- 壺I類** 駿東型の壺 ロクロ整形で箱形を呈する壺
- 塊A類** 内湾する塊で内外面ともにミガキ調整が施される。
- 塊B類** 内湾する塊で内外面に板ナデ調整が施される。
- 高壺** 内湾する口縁を有し壺部にミガキ調整が施される。
- 手捏土器** 平底を呈し底部に木葉痕を残す。

煮沸形態 (甕・堀・瓶)

- 甕A類** 古墳時代のいわゆる「駿東甕」の系譜をひき胴部は丸みを帯び、やや長胴を呈するもの
- 甕A1類** 脇部にハケ調整が施される。
- 甕A2類** やや長胴状を呈し、体部にハケ調整後ミガキ調整が施される。
- 甕A3類** 小型の甕で、長胴状を呈し、胴部にミガキ調整が施される。
- 甕B類** 球胴状を呈し、端部は肥厚する。器壁は厚く、胎土は赤褐色を呈する。
- 甕B1類** 外面にハケ調整が施される。
- 甕B2類** 外面にハケ調整後ミガキ調整が施される。
- 甕B3類** 小型の甕でハケ調整が施される。
- 甕B4類** 小型の甕で口縁部は直立ぎみで、胴部はハケ調整後ミガキ調整が施される。
- 甕C類** 長胴状を呈する甕 器壁は薄く、胎土は明褐色を呈する。
- 甕C1類** 外面にハケ調整が施される。
- 甕C2類** 小型の甕で外面にハケ調整が施される。
- 甕D類** 遠江系の水平口縁を有する長胴状の甕
- 堀形土器A** 口縁部内側に凸帶を貼り付け、肥厚するもの。

壺形土器B 口縁部の断面が三角形状を呈し、肥厚するもの。
瓶 扱手がつき、外面はハケ調整で内面はミガキ調整が施される。

1期の土器（7世紀中葉～後葉）

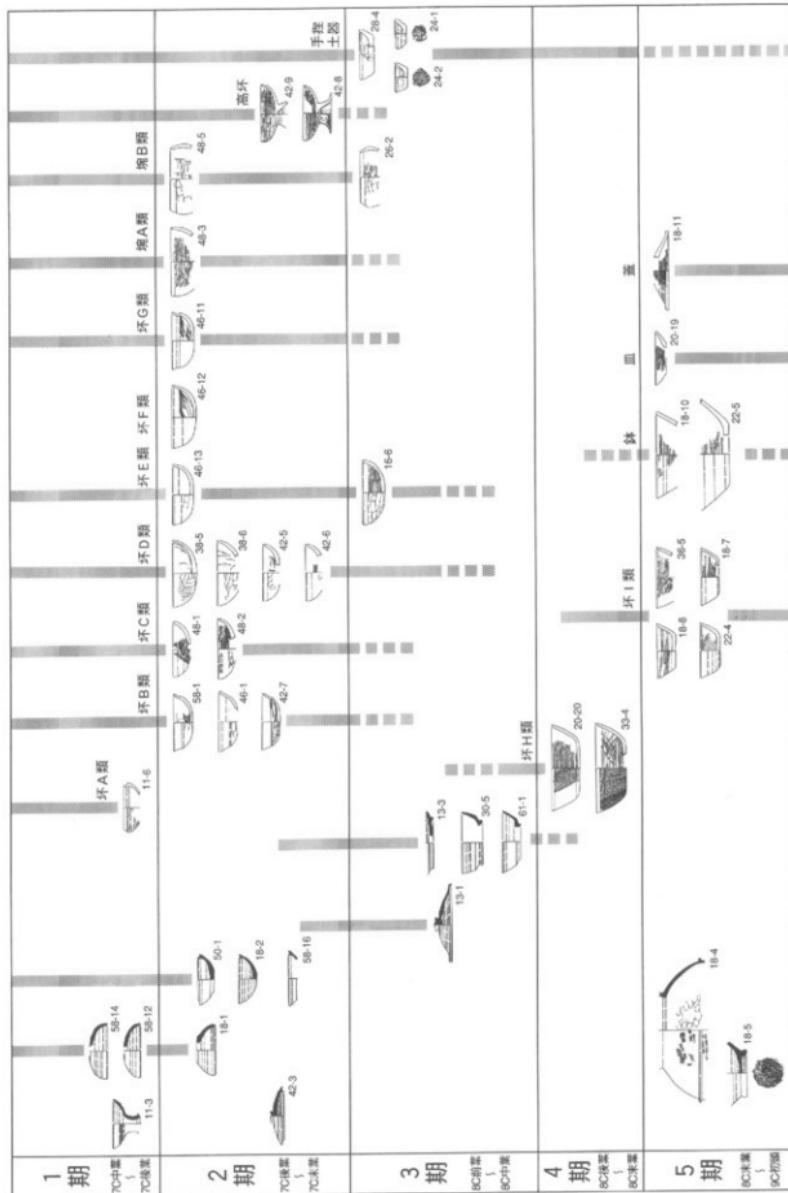
1-1区SB1が該当する。須恵器模倣壺である壺A類（II-6）はSB1より1点出土している。口縁部下の縫は明瞭で外面はケズリ調整が施される。壺A類は前代から続いているものであるが、この時期は体部が浅く、口径が縮小する。この時期で終焉すると思われる。甕A1類（II-12）はSB1の床面から出土している。器形はやや長胴を呈し、胴部中位より上に最大径がくる。口縁端部は内側に肥厚し、器壁がやや薄いことからこの時期に含めた。

2期の土器（7世紀後葉～7世紀末葉）

1-1区SB5、SB8、SB13、SB17、SB18、SB19、SB20、1-3区が該当する。住居の切り合い関係からさらに細分が可能である。器種構成は須恵器長頸壺の蓋（42-3）須恵器环蓋（18-1）、須恵器环身（50-1・18-2）、土師器壺B類（58-1・46-1・42-7）、C類（48-1・48-2）D類（38-5・38-6）、E類（46-13）、F類（46-12）、G類（46-11）、甕A類（48-3）甕B類（48-5）高环（42-9・42-8）、甕A1類（59-1・42-13）、甕B1類（42-11）甕B2類（46-21）甕B3類、甕B4類（42-10）壺形土器A類（48-17・48-18）壺形土器B類（48-19）瓶（43-13・43-12）がみられる。土師器環類のバリエーションは豊富であるが壺B類、C類が主体を占め、塊形態は少ない。甕は球胴状を呈し、ハケ調整が施されるもの、ミガキ調整が施されるものがみられ、小型の甕も若干出土している。

壺B類（58-1・46-1・42-3）は外面へラケズリ、内面はミガキ調整が施される。内外面とも黒色処理される。壺C類（46-1・46-2）は丸底を呈する。黒色処理が施され、内外面にミガキが施される。壺D類（38-5・38-6）は基本的に壺C類と同様の器形であるが、口径が大きいこと内外面の調整がケズリ・板ナデ調整であることから壺C類と分離した。SB17出土の38-5・38-6は体部が深く、外面はケズリ調整がみられる。SB18出土の42-5と42-6をみると口径・器高とともに縮小傾向で、皿状を呈してくる。調整は外面がナデ調整、内面は板ナデがみられる。壺E類（46-13）は從来8世紀にはいって、出現すると考えられてきたが、今回、SB19より出土している。少なくとも7世紀末葉にはすでに認められていたことになり、この土器は8世紀末葉まで続くとされる。外面はナデ調整が施されている。壺F類（46-12）は口縁端部が内折し、内面は黒色処理がなされ、斜位のミガキ調整が施される。当地域ではあまり類例は知られていないため系譜は不明である。G類（46-11）は静清平野で多く分布する壺で、歓質で焼成はあまりよくない。本遺跡では2点確認されている。本類は富士市東平遺跡、富士市沢東A遺跡で一定量収入されている。48-3は内湾口縁を呈し、壺C類の塊形態であろう。48-5は内湾口縁を有し、壺D類の塊形態であろう。高环は壺C類の壺部に短い脚部がつくもので、内外面に横位のミガキが施される。脚部には外面がケズリ調整により面取りがなされ、裾部は外傾する。富士市沢東A遺跡で壺B類（屈曲口縁）の壺部に高い脚部と低い脚部がつくものが出土している。このように量的には少ないが、形態にバリエーションを持っている。いずれにしてもこれらは7世紀末で終了すると思われる。

甕A1類（59-1）は前代と比べて球胴化がすすみ、胴部最大径が中位にくる。体部下部にはナデ調整が施され、口縁端部は内側に肥厚する。甕B1類（42-11）は球胴化がさらにもすすみ、外面はハケ調整が主体で、下部にナデ調整が施される。口縁部の器壁は厚くなり、端部の肥厚はみられない。甕B2類（46-21）は外面にハケ調整後ミガキ調整が施され、口縁部に縦位のミガキが装飾的にはいる。口縁部の立ち上がりは直立ぎみである。甕B3類（47-5・43-4）は甕B1類の小型の甕である。胴部外面はハケ主体で胴部最大径は中位にくると思われる。甕B4類（42-10）はB2類の小型の甕である。口縁部は直立ぎみに立ち上がる。外面は横位のミガキ調整が密に施され、口縁部内側には装飾的に縦位にミガキ調整が施される。



第90図 納場遺跡における土器の推移(1)

胴部最大径はやや上位にくる。

42-12は瓶であり、復原はできなかったが、把手がつくタイプであると考えられる。外面はハケ、内面はミガキ調整が施される。東駿河地域では瓶の出土が少なく、三島市中島下舞台遺跡、三島市金沢遺跡、函南町十二天遺跡などでみられる。把手が付くタイプと付かないタイプが存在し、外面調整はハケ・ケズリのものからハケ・ミガキへ変化していくと考えられる。

壺形土器は口縁部の断面から2類に分けた。壺形土器A類は口縁部内側が肥厚するもので、外面はハケ調整が施される。壺形土器B類は口縁部が断面三角形状を呈する。本遺跡からの出土数は少なく、外面はハケ調整である。この土器の時期は7世紀末～10世紀に及ぶとされ、(瀬川1980) 沼津市藤井原遺跡から集中的に出土している。用途は鰯を煮るための壺と想定している(瀬川・小池1990)。

3期の土器(8世紀前半～中葉)

1-1区SB3、SB9、SB10、SB11、SB14が該当する。器種構成は須恵器高台付坏(13-3・30-5・61-1)、摘み蓋(13-1)、坏E類(16-6)、塊B類(26-2)、手捏土器(24-1, 24-2)、小型甕A3類(13-7)、甕B2類(33-5, 26-12)などがある。この時期に相当する住居数は少なく、遺物の量が少ないため、8世紀前半～8世紀中葉までとした。特に土師器坏類について量的に少なく、判然としない。甕はA類・B類とともにミガキ調整が主体となり、あらたに長胴状の甕が加わると思われる。

坏E類(16-6)は外面がケズリ調整、内面はミガキ調整が施される。塊B類(26-2)は内湾し、内外面とも板ナデ調整が施される。手捏土器は平底で、底部に木葉痕が残る。

甕は駿東型の甕が主体を占め、中でもB2類が多い。A3類(13-7)はA2類の小型甕で、やや長胴を呈するものと思われる。13-7はやや長胴を呈し、頸部にミガキ調整が施される。端部は肥厚せず、器壁自体が厚手である。甕B2類(26-12)は肩部に横位のミガキが施される。33-5はハケ調整後、弧を描くようミガキ調整が密に施され、胴部中位に最大径がくる。

4期の土器(8世紀後葉～末葉)

SB2、SB12、SB16、I-3区SB2が該当する。器種構成は須恵器高台付坏(30-5)、土師器坏H類(33-4、20-20)、甕B1類(20-21)、B2類(13-8)、その他朱塗土器などがある。土師器坏類の出土は少なく判然としないが、甲斐型土器がはいってくるようになる。甕はA類・B類の出土は少なく、C類が大半を占める。

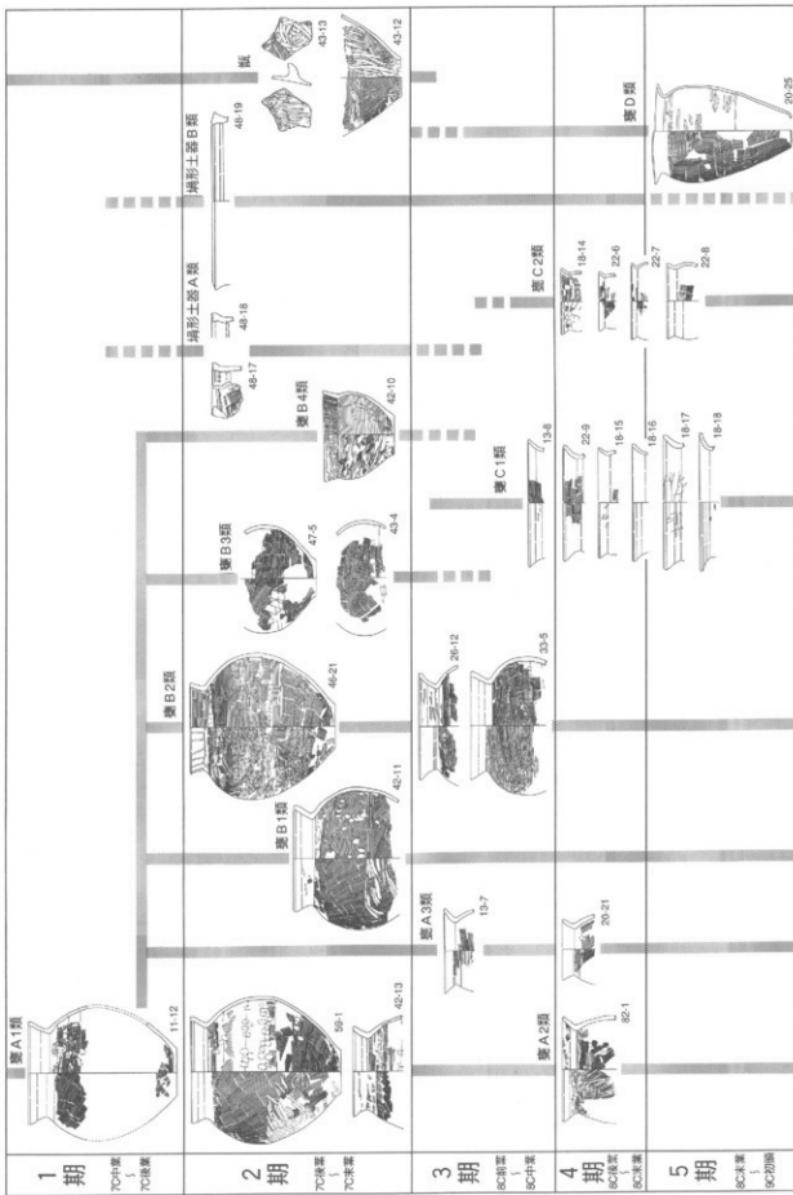
坏H類(33-4、20-20)は甲斐型の坏である。外面は縦位のミガキ、内面は横位のミガキが丁寧に施される。甲斐V期に比定される。甕B1類はやや長胴を呈し、外面に縦位のミガキが施される。甕A2類(82-1)はやや長胴を呈し、外面は縦位のミガキが施される。口縁端部は肥厚せず、器壁が厚い。

甕A3類(20-21)はやや長胴状を呈する小型甕であり、頸部に横位のミガキ調整が施される。13-8は甕B2類で器壁は薄く、色調は明褐色を呈する。甕は長胴状の甕が主体を占める。破片資料であるため、明確ではないがハケ調整主体の甕と考えられる。

5期の土器(8世紀末葉～9世紀初頭)

SB4、SB6、SB7が該当する。器種構成は須恵器凸帶付甕(18-4)、土師器坏I(18-7、18-8)、鉢(18-10、22-5)、土師器蓋(18-11)、小型甕B2類(18-14、22-8)、甕B2類(22-9)、甕C類(20-25)がある。土師器は坏I(駿東型坏)、甕C類(田方平野系)が主体を占める。

坏I類は内外面にミガキ調整が施されたもの内面に施されるものが混在する。底部に糸切痕が残る。皿(20-19)は内外面ともに横位のミガキ調整が施されており、駿東型坏と同系譜と思われる。鉢(18-10、22-5)なども出土している。類例は少ないが、富士市東平遺跡16地区、三島市田頭山遺跡などで出土している。横位のミガキが施されていることからこれも駿東型坏の系譜と考えられる。蓋(18-11)は須恵器の擬宝珠状の摘み蓋と思われる。内外面ともミガキ調整が施される。



第91図 的場遺跡における土器の推移(1)

本遺跡ではこの時期は球胴状の甕はみられず、長胴状の甕が大半を占める。いずれも破片資料のため明確ではないが口縁部は外傾してくるようである。C2類の小型の甕(22-8)は外面がナデ調整のみである。焼成は硬質で、胎土は明褐色を呈する。三島市中島下舞台遺跡13号住居や三島市春田町遺跡18号住居よりナデ調整主体の甕が出土しており、ハケ主体の甕とナデ主体の甕が混在するようである。8世紀末から田方平野を中心にナデ調整主体の長胴甕が散見され、富士地域ではハケ調整が主体である。

SB4のカマド内から肩部～胴部にかけての破片であるが、凸帶付壺が1点出土している。外面は平行タキ、内面はナデ調整がみられる。凸帶付四耳壺の可能性もあるが、肩部から胴部の境に凸帶が1条巡る。この土器は 笹沢 浩氏により信濃地域で凸帶付四耳壺の集成・分類が行なわれている(笹沢1986)。この分類によれば、8世紀末～9世紀初頭とされ、その他の出土遺物からみても、時期的な差異はそれほどない。従来、須恵器は静岡県内で生産・流通したものと考えられてきたが、今回の信濃産の搬入須恵器の出土で、土師器の甲斐型土器の流入だけでなく、当地域が信濃地域をも含む広域流通圏の一角を担っていた可能性も指摘される。

SB6から甕D類(20-25)が1個体出土している。色調はにぶい黄橙色を呈し、器壁は駿東型の甕と比べても薄く、遠江地方でつくられたものであろう。外面は継位のハケ調整、内面はナデ調整がみられる。東駿河地域では東平遺跡、御幸町遺跡など官衙関連遺跡及びその周辺の集落に8世紀前半には搬入され、後半に本類や小型の甕が本格的に導入される。分布の東限は小山町上横山遺跡まで広がる。

墨書き土器について

墨書き土器は3点出土し、このうち住居跡から出土したものはSB4からの1点である。この1点は駿東型壺の外面に「岑」と記されており、県内の類例として島田市居倉遺跡で1点出土し、「岑」は灰釉陶器に記されている。居倉遺跡では津としての性格をもつといわれており、水上交通の要所としての遺跡である。この文字の意味するところは「山」との合文字の可能性が高く、生業によるものとされる(平川1999)。

供膳具について

以上の場遺跡における土器の推移をみていったが、7世紀中葉～末葉に属する土師器壺類はバリエーションが豊富であり、特に屈曲口縁壺・内湾口縁壺が主流を占め、塊形態は少ない傾向であった。この屈曲口縁壺は甲斐地域、本地域、相模地域あたりまで分布範囲を示し(長谷川1988・山本1995)、駿河西部や遠江ではほとんどみられないことから東国的な色彩が強い壺といえよう。また、静清平野を中心とする壺も少量出土しており、駿河西部地域とも密接な交流があったことが伺える。しかし、8世紀に入るとこれらの土器の系譜は判然としないが、大半はこの時期で終焉を向かえると思われ、平底化しながらも壺C類、壺E類、塊B類などに限定されてくるようである。

煮沸具について

今回出土した甕には球胴甕(駿東型甕)、長胴甕(田方平野系)、水平口縁長胴甕(遠江系)がみられる。古墳時代後期から系譜をひく駿東型甕は7世紀末には長胴状でハケ主体、球胴状でハケ主体、球胴状でミガキ主体の3者がみられる。このように形態・技法が多様化しながらも在地の甕として8世紀以降も継続していく。また、堀形土器は7世紀末には出現しており、瓶はこの時期で終焉すると思われる。東駿河地域では長胴甕は8世紀前半に出現しているとされ、本遺跡では8世紀後半から多くみられる。また、ナデ主体のものもみられ、田方平野に多く分布する長胴甕が大半を占めており、球胴甕は減少傾向にある。球胴化から長胴化への甕の変化とカマドのような加熱施設との関連には注意が必要であるが、何らかの相関関係が存在していたと考えられ、甕の用途を特定するとともにこれらについては実証的な検討が必要であろう。

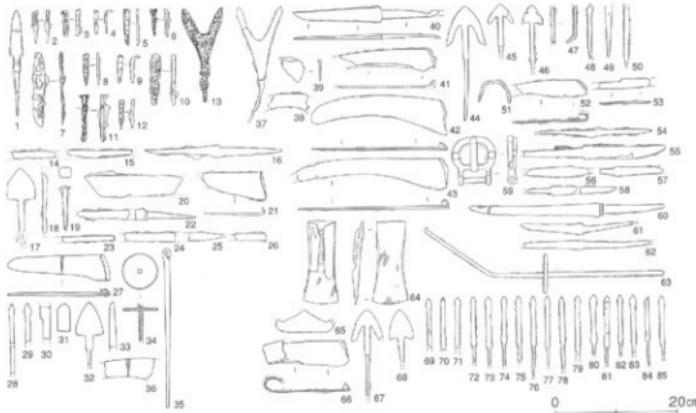
第2節 東駿河地域の古墳時代後期～平安時代の鉄製品

1 穫穴住居内における鉄製品の所有

的場遺跡では23軒のうち3軒の住居跡から6点の鉄製品が出土している。周辺地域では集落から鉄製品の出土が少ないため、東駿河地域の古墳時代後期～平安時代の住居跡出土の鉄製品について集成を試みた。報告書には包含層、表土から多くの鉄製品が出土しており、本来は多くの住居跡に鉄製品を所有していたと考えられる。住居跡から出土の場合、覆土と床面直上の遺物を分離して検討しなければならないが、同一に扱い集成した。また、紙幅が限られているため、今回は個別の検討はせず、大まかに住居内における鉄器所有（種類・量）について簡単に触れたい。

管見に触れる限り、遺跡の立地状況に左右されるが、8遺跡45軒の住居跡から鉄製品が認められる。遺跡別でみると東駿河地域では富士市東平遺跡の住居跡から圧倒的に多く出土している。7世紀代の資料は少ないと、富士市沢東A遺跡で鉄鎌が1点出土している。

8世紀にはいると集落内で多くの鉄製品が使用されるようになる。種類別にみると最も多いのは鉄鎌、刀子、鎌の順で1住あたり鉄鎌が1～2本、工具である刀子が1～2本出土し、これらの多くは日常に使用されたものと考えられる。また、農具である鎌は、古墳時代中期と比して飛躍的に増加しているが、刀子と比較すると出土量は限定される傾向がある。さらに、鋤先にかんしては現状では1点もみられない。鋤先は官衙に関連する集落遺跡などで出土しており、有力者による耕地開発に関わるものであろうか。通有の集落において農工具は刀子と鎌が一般的であったと考えられる。この農工具のセットを所有する住居（所有者）には、鉄鎌の所有が少ないことを指摘することができ、居住者の性格を示す可能性



1 破魔射場 SB11 2~4 深間林 SB2 5~6 浅間林 SH-28 7~8 浅間林 SB28 9~10~13 浅間林
SB3 11~12 浅間林 SB7 14 上横山 SB1 15~17~19~22~24~26 上横山 SB20 16~20 上横
山 SB22 21 上横山 SB12 25 上横山 SB19 27~28 天間代山 SB2 29~32~35 天間代山 SB7
31 天間代山 SB3 36~37 東平 SB1 38~41 東平 SB90 39~40~46 東平 SB91 42 東平 SB37
43~58 東平 SB107 44~45~47~54 東平 SB129 48 東平 SB28 49 東平 SB39 50 東平
SB60 51~53 東平 SB27 60~85 東平 SB125

第92図 奈良・平安時代竪穴住居出土鉄製品集成図（東駿河地域）

がある。その他の鉄製品として火打金、紡錘車、斧などの出土は非常に少なく、これらは多くの鉄製品を所有する住居に伴っている。特に、鉄製紡錘車は富士山麓の集落を中心に比較的多く出土しており、集落内における織布生産などの手工業生産を示すものとして興味深い。

鉄器の所有を考える上で東平遺跡の125号住居跡が挙げられる。この住居跡は焼失住居であり、鉄製品、木製品など遺物の残存状況が良好であるにもかかわらず、鉄鎌、刀子、鎌、紡錘車、斧、火打金など多くの鉄製品を所有し、他の住居と比べても種類、量的に豊富である。住居廃棄時に鉄製品が持ち去られた可能性もある通常の住居と焼失住居を同一に扱うことは危険であるが、東平遺跡125号住居跡のように多くの鉄製品を所有し、鉄製武器、農具、工具などを集中的に管理するといった特定の居住者が想定される。その管理下のもと鎌、刀子などの農工具が数本分与された住居(集団)、鉄鎌のみを所有する住居(集団)、さらにはまったく持たない住居(集団)が存在する可能性を指摘しておく。

2 穴住居内出土の鉄鎌

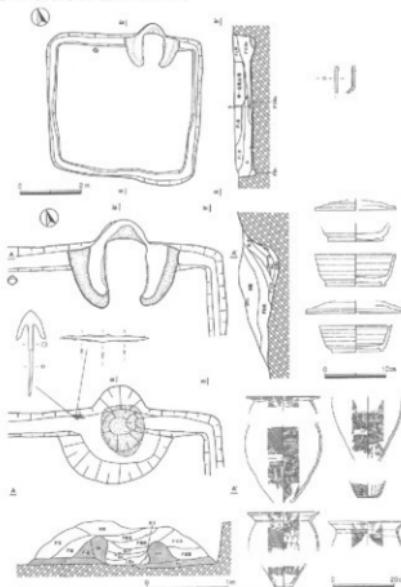
上述したように住居内から出土する鉄鎌は量的に少なく、本遺跡からも1-3区SB1の南西の柱穴の覆土から細根系盤筒鎌が1点、SB18より広根系腸抉三角形鎌が1点出土している。管見に触れる限り、東駿河地域の7世紀末～9世紀における集落で鉄鎌は5遺跡15軒からの住居跡で確認される。ここでは住居内の出土状況から鉄鎌のもう一つ祭祀的側面について触れたい。

1住居あたり鉄鎌の数量は1本ないし2本程度であり、資料も少ないため、広根系・細根系とともにセットとして規則性は見出しづらい状況である。広根系鎌では腸抉の発達した三角形鎌、雁又鎌・飛燕形、細根系の鎌では盤筒鎌などがみられ、奈良・平安時代のごく一般的にみられるものである。また、古墳時代後期に当地域の特徴の一つであった五角形鎌の出土や片刃鎌は少ない。一方で、富士市東平遺跡125号住居跡から出土している鉄鎌は広根系三角形鎌が2本、細根系盤筒鎌17本が出土している。特に細根系盤筒鎌は形態・長さなど規格性のあるものを集中保有している。

3 出土状況からみた鉄鎌

堅穴住居跡における鉄製品の出土状況を示す良好な資料は東駿河地域では富士市東平129号住居跡が挙げられる。129号住居跡は8世紀後半に比定され、規模は3.3×3.1mの台形に近い形であり、カマドは北壁に設置されている。これは集落内において特殊な例ではなく一般的な住居であると考えられる。この鉄鎌は広根系腸抉三角形鎌で、刀子は刀闌が山形を呈するものである。カマドの袖内から1本ずつ並べて設置されていた。この出土状況からカマド構築時あるいはカマド破壊時により埋められた可能性が高い。

住居跡から出土する鉄製品の種類・量などをあつかう場合には廃棄時に持ち去られた可能性などを考慮する必要がある。また、本来は鉄鎌は狩猟・武器としての性格を帯びていたと考えられるが、通有の住居から1本～2本程度の出土量やその出土状況から鉄鎌の用途については住居構築に伴う祭祀行為という見



第93図 富士市東平遺跡129号住居鉄製品出土状況

解もある。(池上1982、松村1995) 県内では本遺跡での南西柱穴からの鉄鏃の出土と東平遺跡129号住居跡のカマド袖内の出土例のみで、これらをただちに住居内における祭祀行為とみなすことは不十分であるが、千葉県山田水谷遺跡では住居の南西・北東の柱穴から雁又鏃、方頭斧箭式の鏃が出土している。松村恵司氏は、この出土状況から建物の棟上式に見られる東北隅に鏃矢を、南西隅に雁又の矢を放つ動作を推定している。そして弓弦の儀式の例から柱穴出土の鉄鏃には住居建築に伴う儀礼用としての用途と想定している(松村1995)。

いずれにしても、竪穴住居跡を丹念に掘れば、鉄製品の種類と住居を構成する柱穴、床下、カマドなどの出土状況から単に住居内に放置されたものだけでなく、竪穴住居に関わる鉄製品の儀礼的・祭祀的側面が頗推されることを指摘しておきたい。

第3節 手捏土器を用いるカマド祭祀

1 竪穴住居内出土の手捏土器

竪穴住居内のカマド祭祀については從来から多くの研究がある。特にカマドの廃棄過程において土器を倒位に設置し、カマドの封印を行なう行為やカマド構築材を解体し、その上で灯明皿による灯明行為、そして千葉県庄作遺跡から「竈神」と記された土器の出土から各地域でカマド解体に結びついた竈神信仰の存在が明らかになっている。今回、的場遺跡ではSB9カマドの両袖に1個体ずつ正位・逆位の状態で出土しており、これらの遺物はカマドの構築材としての機能よりもカマドに関わる祭祀としての性格が強いと思われる。そこで手捏土器の出土状況からこの遺物のもつ意味とカマドについて検討する。

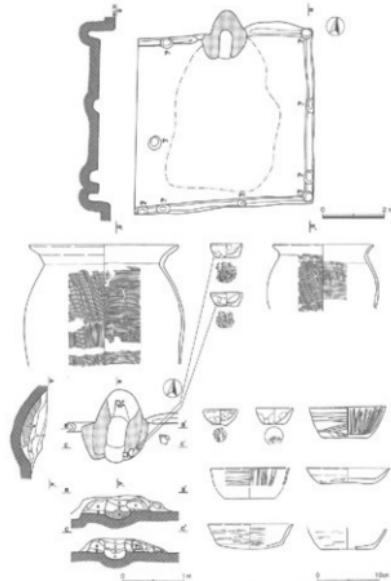
反畠遺跡第3地点(三島市徳倉)

反畠遺跡は扇状地の扇頂付近にあたり、箱根山西麓の舌状台地上に位置する。奈良時代の住居跡が軒検出されている。住居の規模は南北4.24×東西(4.4m)でやや横長を呈する。主軸は西に10°傾き、カマドは北壁中央に設置される。壁溝は全周し、壁溝内より8本の柱穴が検出され、壁立ちの建物と考えられる。

カマドの袖は粘土のみで構成される。右袖内より手捏土器が合わせ口の状態で2点確認された。さらに手捏土器2点、駿東型壺、甲斐型壺、長胴壺、小型壺などが出土しており、この住居の所属時期は8世紀後半に位置付けられている。当遺跡は伊豆北部地域での丘陵上における奈良時代の集落遺跡として初例である。

中島下舞台遺跡(三島市中島)

中島下舞台遺跡は三島市を流れる御殿川の流域の微高地に立地し、弥生時代～平安時代の集落遺跡である。遺跡の中心は古墳時代後期～平安時代にかけて26軒の住居跡、掘立柱建物跡1棟を確認している。この住居跡のカマド内の遺物を観察すると、16軒の住居跡からカマド内に駿東型の球胴状の甕が2個体ないし3個体分が出



第94図 三島市反畠遺跡1号住居手捏土器出土状況図

土している。次いで多いのが壺・塊類であり、手捏土器は14号住居、7号住居、27号住居で確認されている。特に27号住居では4点の手捏土器が出土しており、鉢形1点と丸底のものが3点みられる。

伊豆通信病院敷地内遺跡（函南町平井）

伊豆通信病院敷地内遺跡は函南町平井に所在し、箱根山西麓の低台地に広がる古墳時代後期～平安時代にかけての大規模な集落遺跡である。現在も継続的に調査が行なわれているが、昭和56年の調査では竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡2棟、その他溝状構造ビットなどが検出されている。そのうちカマド内から土器が出土した竪穴住居は15軒に及ぶ。カマド内からは甕の出土が多く、1個体なし2個体の甕が含まれる。15号住居跡からは小型の甕が4点、手捏土器は1点出土している。

東平遺跡（富士市伝法）

東平遺跡は富士山麓の扇状地に位置し、古墳時代末～平安時代にかけて官衙関連の遺跡である。昭和54年、昭和55年に発掘調査が行われ、竪穴住居跡129軒、掘立柱建物跡53棟を検出している。現在も周辺で調査が行われており、集落の様相が明らかになりつつある。129軒の住居跡の中で63号住居跡は調査区の北端に位置する。規模は東西3.9m南北3.6mを測り、ほぼ正方形を呈する。集落内において平均的な大きさである。カマドは北壁や東寄りに設置され、焚き口、掛け口、煙出し穴等がいずれも検出され、完全な形で残存していた。時期は8世紀初頭に比定される。報告書によればカマド付近の床面から手捏土器が4点出土しているとされる。このようにカマドが破壊されず、完全な状態においても手捏土器による祭祀行為が行われていたと考えられる。

カマド内の手捏土器の出土状況

住居跡からの手捏土器の出土状況がわかるものとして東駿河地域では先ほど上述した三島市反畠遺跡1号住居跡をはじめ中島下舞台遺跡27号住居跡、伊豆通信病院敷地内遺跡15号住居跡などが挙げられる。他にも包含層や土坑、溝内からの出土を含めれば16遺跡で100点以上出土しており、カマド祭祀だけでなく、様々な儀礼・祭祀行為に手捏土器が用いられたと考えられる。報告書による遺物の出土状況が不明なため、詳細な検討はできないが、住居跡から出土している甕や壺などを逆位に設置する例が少なく、むしろ住居内から手捏土器が多く出土していることを併せれば本地域において手捏土器がカマド祭祀として用いられた可能性が強い。

カマドの構築から廃棄過程

東駿河地域で奈良時代～平安時代の住居跡を掘ると袖や天井を構築していたと考えられる粘土・礫が残存する箇所があり、その中心部に焼土や炭化物が集中している状況（すでに崩落・破壊）からカマドと想定し、トレーナーを入れて、カマド構造を把握する調査方法が主流である。その結果、大半がカマドの両袖部、カマドの掘り方のみである場合といった状況で、完全に旧状を保った状態で検出される例は少なく、甕を掛け口に設置された例はみられない。また、燃焼部内から出土する土器は以外と少なく、いずれも甕や壺の破片程度で、完形の土器などはカマド袖の両脇ないしは前方付近で出土している事例が多くみられる。支脚はカマド燃焼部に残っている場合や住居内に廃棄・移動されたものが存在する。

堀 隆氏は竈廃絶のあり方を検討し、検出されるカマドからほぼ旧状を保つもの、自然崩壊するもの、人為的破壊を受けたものに分け、自然崩壊と人為的に区別は困難であるとしながらも、確実に人為的に破壊された例があることを指摘している。そして、カマドのさまざまな様相からカマドを解体する過程を提示し、これは住居廃絶時における普遍的な通過儀礼という性格をもつことを指摘している（堤1990）。

2 手捏土器の分類

手捏土器の分類に関してはすでに渡辺康弘氏が行っており、主に塊・壺形態をミニチュア化したものとして大きく丸底タイプと平底タイプに分けている（渡辺1986）。最近、資料が増加しているので、渡辺分類をもとに若干資料を付け加えた。

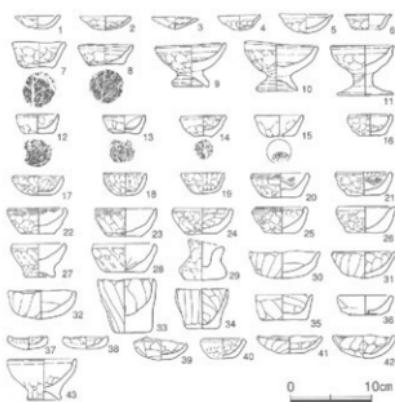
ここでは、丸底タイプをA類、その中でやや尖底状を呈するものをA1類、皿状を呈するものA2類とし平底タイプをB類、脚付きをC類、壺タイプをD類、鉢をE類とした。さらに、口縁部の状態で直口口縁・内湾口縁・外反口縁などの細分が可能である。



第95図 手捏土器分類図

手捏土器の地域性

地域別にみると富士山麓周辺にはA1類、B類、黄瀬川流域ではB類、C類、田方平野はA2類、B類、E類の手捏土器が分布する。数量的に最も多いのは、全地域を通じて共通のB類の手捏土器である。この土器は底部に木葉痕が残り、駿東型の球胴状の壺と胎土が近似する。口径は5cm前後のものと7~8cmのものが認められる。主に狩野川・黄瀬川流域の集落遺跡からの出土が多い。次いで多いのがA類で一定の住居跡に限定的に出土しており、A1類は東平遺跡の住居跡にみられる。A2類は伊豆通信病院敷地内遺跡で出土している。C類は基本的にB類の壺に脚部が付いたもので、清水町外原遺跡で出土例がある。これはカマド祭祀に用いられたものかは不明であるが、その可能性は高いと思われる。住居から出土する個数をみると2個ないし4個と複数の出土が認められる。これらは通常、1住居内からは同種の手捏土器が出土している。富士山麓周辺の住居跡で複数出土している場合にはそれぞれA類・B類とも同種の手捏土器が出土し、A・B類の組合せで住居内から出土は認められない。これは他地域でも同様の傾向を示す。このように東駿河全域で共通する手捏土器（B類）とさらに狭い小地域で独自の手捏土器（A1・A2類・C類・D類など）あるいは古墳時代からみられる伝統的なもの（E類）が認められ、それぞれ集落内の規範により同種の手捏土器を用いる祭祀行為が行われていたと考えられる。竪穴住居内からの手捏土器の出土は6世紀後半段階にすでに認められるが、7世紀末から急激に増加し、8世紀代はピークを迎える、9世紀まで残る。



1 東平 SB87 2 東平3次 SB1 3 東平 SB72 4 天間代山
SB7 5・6 東平3次 SB6 7・8 外原Ⅱ SB1 9~11 外原Ⅱ
SB2 12~15 反畠 SB1 16 御幸町 SB73 17~19 御幸町
SB43 20~22 御幸町 SB146 23~27 御幸町 SB314 28
御幸町 SB159 29 上横山 SB12 30~33 中島下舞台 SB27
34 中島下舞台 SB7 35・36 中島下舞台 SB19 37・38 中
島下舞台 SB6 39 伊豆通信 K SB4 40 春嶽 SB7 41・
42 伊豆通信 SB15 43 春嶽 SB3

第96図 手捏土器集成図（東駿河地域）

3 手捏土器を用いるカマド祭祀

的場遺跡1-1区SB9や反畳遺跡第3地点の1号住居ではカマドの袖内より手捏土器が出土しており、これはカマド構築時によるものと考えられる。

一方で、伊豆通信病院敷地内遺跡15号住居のようにカマドを解体した燃焼部の覆土より壺が正位の状態で設置されていたことからカマド廃棄に伴う祭祀行為が行なわれていたと想定されている。また、手捏土器の煤の付着状況からカマド廃棄に伴いそこで灯明行為が行なわれた可能性もある（渡辺1986）。

カマド祭祀は各地域でそれぞれ多様な祭祀行為が行なわれており、特に関東地方を中心にカマド廃棄時におけるカマド祭祀について積極的に論じられている。今回、東駿河地域ではカマドへの祭祀行為は廃棄時には甕や壺を使用する例は少なく、むしろ手捏土器を用いる例が多いことがわかり、また、構築途中における祭祀行為も手捏土器を使用している。カマド神信仰の浸透により東駿河地域では7世紀末～9世紀にかけてさかんに手捏土器によるカマド祭祀を行なっていると考えられる。

今回は手捏土器を中心に構築時と廃棄時におけるカマド祭祀について検討してきたが、カマドの祭祀行為は手捏土器以外にも甕・壺・鉄鎌などの鉄製品などを使用しており、実に多様な面をもっている可能性があり、特に、カマド祭祀を行なっている住居と行なっていない住居間に階層差・出自の差があるのかより集落内・地域内における位置づけが重要になってくるものと思われる。

参考文献

- 長泉町教育委員会 1965 「長泉町郷土誌」
沼津考古学研究所 1970 「本宿上の段古墳」研究報告第3冊
伊豆長岡町教育委員会 1981 「鳥井前遺跡」
小山町教育委員会 1983 「上横山遺跡」
河津町教育委員会 1992 「春蕨遺跡発掘調査報告書」
函南町教育委員会 1984 「間宮川内遺跡」
函南町教育委員会 1995 「伊豆通信病院敷地内遺跡」
函南町教育委員会 1995 「仲道遺跡第1・2・3地点」函南町埋蔵文化財発掘調査報告書II
函南町教育委員会 1996 「大土肥塙B第1地点」函南町埋蔵文化財調査報告書III
函南町教育委員会 1999 「伊豆通信病院敷地内遺跡・十二天遺跡第8地点」函南町埋蔵文化財発掘調査報告書V
三島市教育委員会 1958 「三島市誌」
三島市教育委員会 1983 「中島下舞台遺跡」
三島市教育委員会 1989 「安久遺跡」
三島市教育委員会 1990 「伊豆国分寺開基遺跡」I
三島市教育委員会 1991 「三島大社境内遺跡」
三島市教育委員会 1992 「上才塚第1地点」
三島市教育委員会 1993 「金沢遺跡」
三島市教育委員会 1993 「輪田遺跡」
三島市教育委員会 1994 「反畳遺跡第3地点」三島市埋蔵文化財発掘調査報告書III
三島市教育委員会 1995 「大場川遺跡」大場川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
三島市教育委員会 1995 「箱根田遺跡」三島市埋蔵文化財調査報告IV
三島市教育委員会 1999 「長伏六代田遺跡」
三島市教育委員会 2002 「青木B遺跡」三島市埋蔵文化財発掘調査報告VII
清水町教育委員会 1994 「上長沢遺跡」
清水町教育委員会 1997 「外原遺跡」I
清水町教育委員会 1998 「外原遺跡」II
清水町教育委員会 1998 「清水町史」資料編 II 考古編
沼津市教育委員会 1961 「沼津市誌」上巻
沼津市教育委員会 1978 「藤井原遺跡発掘調査報告 I (構造編)」沼津市文化財調査報告書 第13集
沼津市教育委員会 1979 「御幸町遺跡第1次発掘調査概報」沼津市文化財調査報告書 第17集
沼津市教育委員会 1980 「御幸町遺跡第2次発掘調査概報」沼津市文化財調査報告書 第21集
沼津市教育委員会 1981 「御幸町遺跡第3次発掘調査概報」沼津市文化財調査報告書 第25集
沼津市教育委員会 1985 「豆生田遺跡」沼津市文化財調査報告書 第35集
沼津市教育委員会 1985 「台畠遺跡」沼津市文化財調査報告書 第35集
沼津市教育委員会 1994 「双葉町遺跡(第1次・第2次調査)」沼津市文化財調査報告書 第58集
沼津市教育委員会 1995 「下道遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書 第57集
沼津市教育委員会 1998 「御幸町遺跡発掘調査報告書」遺物篇 (土器)

沼津市教育委員会	1999『沼津市史』資料編 自然環境
沼津市教育委員会	1999『東畠毛遺跡』(第4次)発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 第72集
沼津市教育委員会	2000『下石田原田遺跡』沼津市文化財調査報告書 第74集
富士市教育委員会	1977『天間代山遺跡』
富士市教育委員会	1983『東平遺跡』
富士市教育委員会	1991『宇多川東ABC地区発掘調査概報』
富士市教育委員会	1991『船久保遺跡六丁目地区・溝下遺跡』
富士市教育委員会	1992『東平遺跡第3次調査』
富士市教育委員会	1997『沢東A遺跡・第V地区』
富士市教育委員会	1998『沢東B遺跡』
富士市教育委員会	2001『東平遺跡』第28地区発掘調査報告書
富士市教育委員会	2002『東平遺跡』第16地区(三日市廃寺跡)・第27地区発掘調査報告書
富士市立教育委員会	1991『浅間林遺跡』富士川町文化財調査報告書 第15集
静岡県考古学会	1999『ものとひとの移動』追加資料
静岡県教育委員会・富士市立教育委員会	1995『木ノ行寺遺跡』静岡県文化財調査報告書 第48集
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	1998『大平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査報告 第94集
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	2001『富士川SA関連遺跡』遺構編・遺物編 静岡県埋蔵文化財調査報告 第123集
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	2002『大平遺跡II』静岡県埋蔵文化財調査報告 第129集
第二章 第1節	
山形秀樹	2001『付属 放射性炭素年代測定』『大平遺跡II』
第二章 第2節	
佐野五十三	2001『V章 多呂ノ前遺跡道路状遺構の検討—伊豆国府域の復元をめざして—』『多呂ノ前遺跡』
第三章 第2節	
加藤雅功	1976『静岡東部の条里遺構』『沼津市歴史民俗博物館紀要』I
第四章 第1節 2	
池谷初恵	1995『伊豆国における奈良・平安時代の土器様相』『大場川遺跡群』三島市教育委員会
岡本範之	1983『古墳時代から奈良時代の土器』『伊豆通信病院敷地内遺跡』函南町教育委員会
甲斐型土器研究グループ	1992『甲斐型土器—その編年とその年代』山梨県考古学協会
北川恵一	1988『駿東型の變の初現と終末』『沼津市博物館紀要』12 沼津市歴史民俗資料館・明治資料館
木ノ内義昭	2002『須恵器流入以降～律時代の土器類の様相 主として富士郡推定域の遺物から』『東平遺跡第16地区(三日寺庵寺跡)』
笛沢 浩	1986『凸帯付四耳壺考』『長野県考古学会誌』51 長野県考古学会
佐野五十三	1987『浅間林遺跡・水原分派遺跡の土器検討』『静岡県埋蔵文化財調査研究所紀要』II
佐野五十三	1992『駿河国における甲斐型壺・駿東窯の成立』『山梨県考古学協会誌』第5号 山梨県考古学協会
佐野五十三	1992『駿河国における官衙・集落の土器—須恵器を中心にー』『向坂綱二先生還暉記念論文集』 II
佐野五十三	1994『遠江・駿河・伊豆の古代土器—土器類を中心としてー』静岡県史研究 第9号
佐野五十三	1996『遠・駿・豆における古代の煮沸具』『鍋と甕のデザイン』第4回 東海考古学フォーラム
瀬川治市郎	1980『藤井原の大鉢』『沼津市歴史民俗資料館紀要』4 沼津市歴史民俗資料館
平川 南	1993『屏書き土器論』『山梨県史研究』創刊号
平川 南	2000『墨書き土器の研究』吉川弘文館
平野吾郎	1991『遠江・駿河における歴史時代土器の成立と背景』『古代の探求』III
山本恵一	1988『静岡県東部の古墳時代の土師器について』『沼津市博物館紀要』13 沼津市歴史民俗博物館・明治資料館
山本恵一	1994『駿河湾東部の古墳時代の土師器について』『地域と考古学』向坂先生還暉記念論文集
山本恵一	1995『静岡県下の6~7Cの土師器—駿河東部と伊豆北部の現状についてー』『東国土器研究』第4号 東國土器研究会
第四章 第2節	
池上 恒	1982『後期古墳時代集落出土鐵鏡に関する若干の問題』『東京考古』I
土井義夫	1971『関東地方における住居址出土の鐵製農具について』『物質文化』考古学民俗研究18 物質文化研究会
高橋一夫	1976『製鐵遺跡と鐵製農耕具』『考古学研究』 第22巻第3号 考古学研究会
古庄宏明	1994『古代における鐵製農工具の所有形態—6世紀から10世紀の南関東を中心にー』考古学雑誌第79巻第3号 日本書古学協会
平野 修	1989『奈良・平安時代集落出土の鐵鏡をめぐる若干の問題—山梨県内を中心としてー』帝京大学山梨文化財研究所報告 第1集
松村恵司	1991『古代集落と鐵器所有』『日本村落史講座4 政治 I』雄山閣
松村恵司	1993『鐵鏡と建築遺跡』『山梨縣考古學協會誌』7号 山梨県考古学協会

山田直樹	1977	「第三章 Ⅲ出土鉄製品の集成と考察」『山田水呑遺跡』日本道路公団・山田遺跡調査会
第IV章 第3節		
青木 敏	1999	「竈座施考—多摩市和田西遺跡からみた検討—」『土壁』 第3号 考古学を楽しむ会
小林清隆	1989	「カマド内の出土遺物の意味について」研究連絡誌 第24号 千葉県文化財センター
杉井 健	1993	「竈の地域性とその背景」考古学研究 第40巻第1号 考古学研究会
田形孝一	1996	「集落から村落へ(1) 古代東国村落復原へのアプローチ」『研究連絡誌』 第47号 千葉県文化財センター
谷 匠	1982	「古代東国のかまど」『千葉県文化財センター研究紀要』 7 千葉県文化財センター
堤 隆	1991	「住居廃絶における竈解体をめぐって」『東海史学』 25
堤 勝	1995	「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古學協會誌』 第7号 山梨県考古学協会
寺沢知子	1986	「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』 第16号 雄山閣
寺沢知子	1992	「カマドの祭祀的行為とカマド神の成立」『考古学と生活文化』 同志社大学考古学シリーズV
松前 健	1973	「古代宫廷竈神考」『古代文化』 第25巻2・3号
渡辺康弘	1993	「竈神の祭祀」『二十一世紀への考古学』 桜井清彦先生古希記念論文集 雄山閣
御代田町教育委員会	1987	『前田遺跡』
御代田町教育委員会	1987	『十二遺跡』
御代田町教育委員会	1987	『根岸遺跡』
御代田町教育委員会	1993	『川原田遺跡』

謝 辞

的場遺跡の調査・資料整理にあたって、多くの方から御指導・御教示をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。(敬称略五十音順)

池谷初恵 石川武男 伊藤通玄 柴田 稔 鈴木敏中 富永樹之 平野吾郎 廣瀬高文 森嶋富士夫

写 真 図 版



1 1-1区 全景（西より）



2 1-1区 全景（南東より富士山を望む）

図版 2



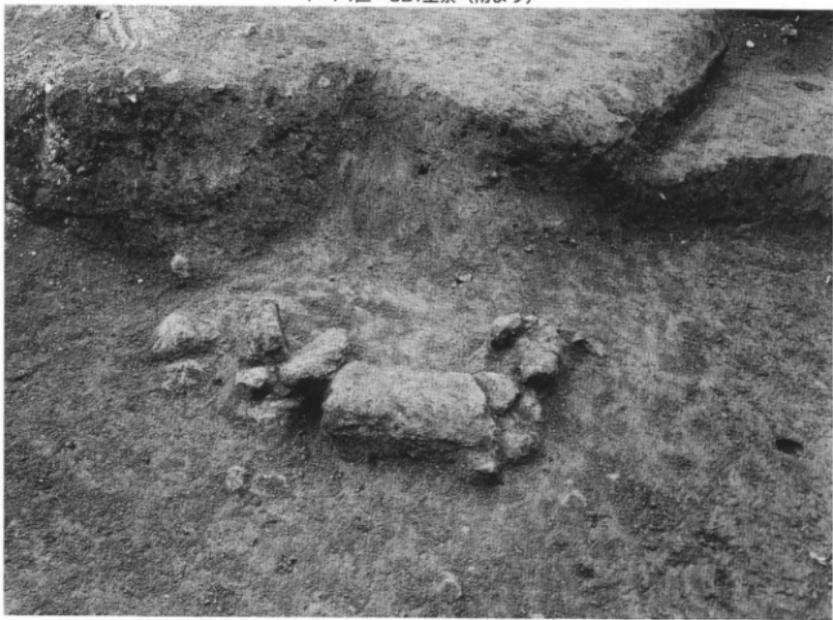
1 1-1区 竪穴住居全景（西より）



2 1-1区 全景（北東より）



1 1-1区 SB1全景（南より）



2 1-1区 SB1カマド完掘状況（南より）

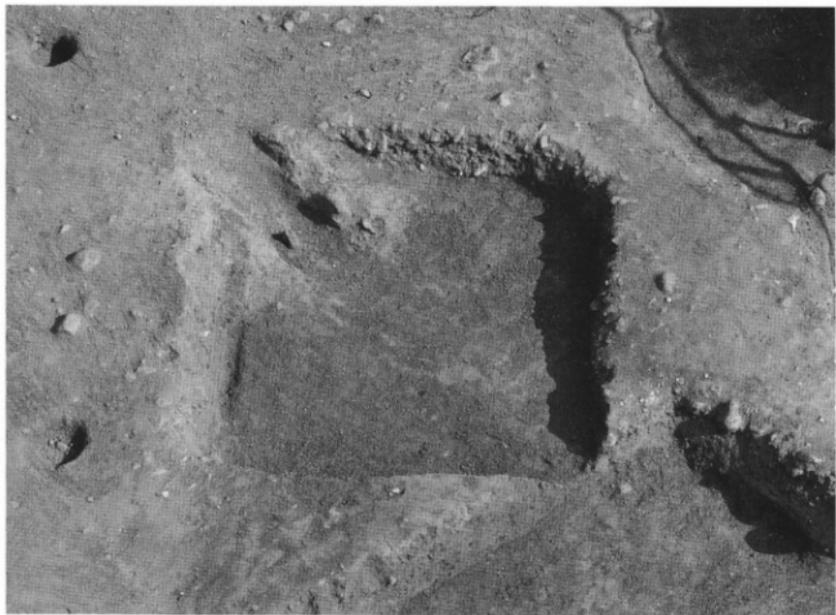
図版 4



1 1-1区 SB2全景（西より）



2 1-1区 SB2カマド全景（南西より）

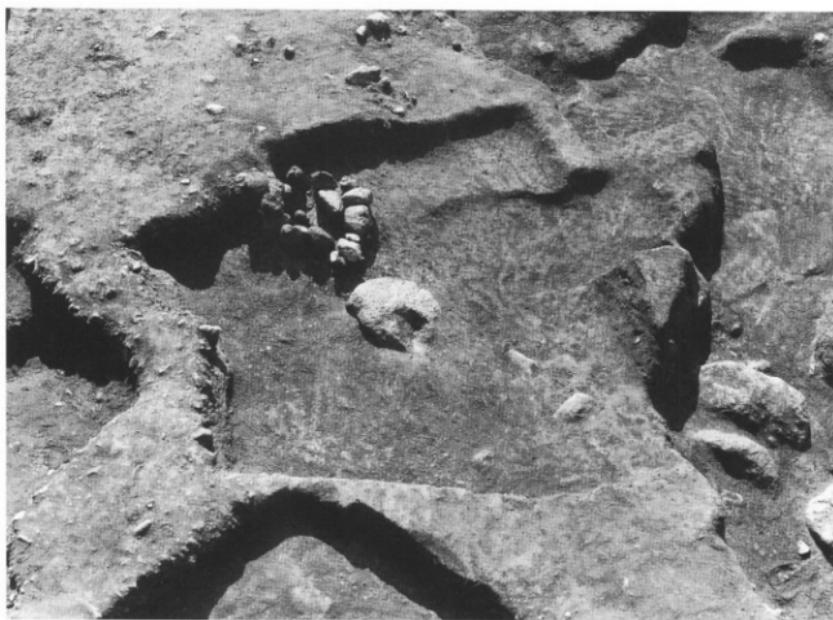


1 1-1区 SB3全景（西より）



2 1-1区 SB3カマド全景（南より）

図版 6



1 1-1区 SB4・5全景（北より）



2 1-1区 SB4カマド全景（北より）



1 1-1区 SB6全景（南より）



2 1-1区 SB6カマド全景（南より）

図版 8



1 1-1区 SB9全景（南より）



2 1-1区 SB9カマド全景（南より）



3 1-1区 SB9カマド袖内手捏土器出土状況（南より）



1 1-1区 SB10全景（南より）



2 1-1区 SB10カマド全景（南より）

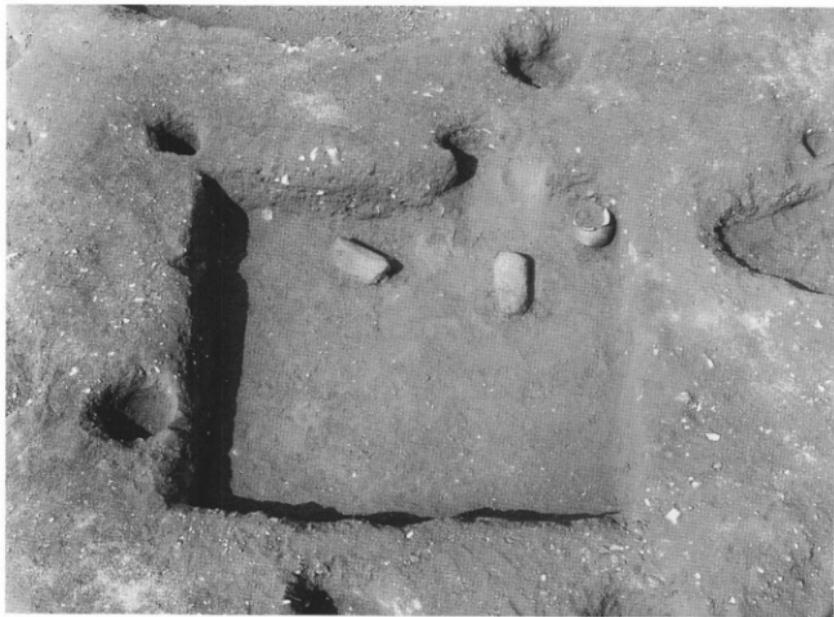
図版10



1 1-1区 SB11カマド全景（南西より）



2 1-1区 SB13全景（南西より）



1 1-1区 SB14全景（南より）



2 1-1区 SB14カマドと貯蔵穴（南西より）

図版12



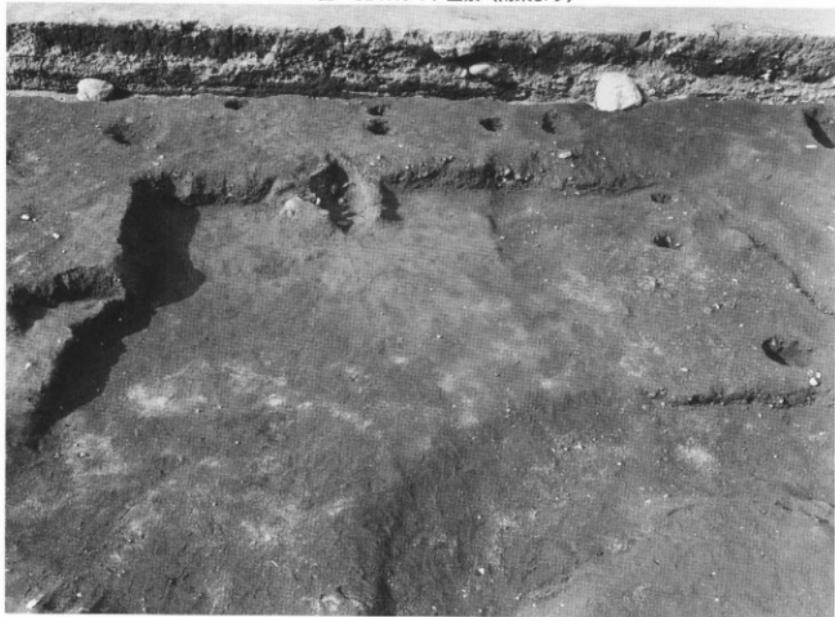
1 1-1区 SB16全景（南より）



2 1-1区 SB17全景（南より）



1 1-1区 SB17カマド全景（南東より）



2 1-1区 SB18~20全景（南より）

図版14



1 1-1区 SB18貯蔵穴内土器出土状況（東より）



2 1-1区 SB18カマドと貯蔵穴（南東より）



3 1-1区 SB18カマド内土器出土状況（南より）



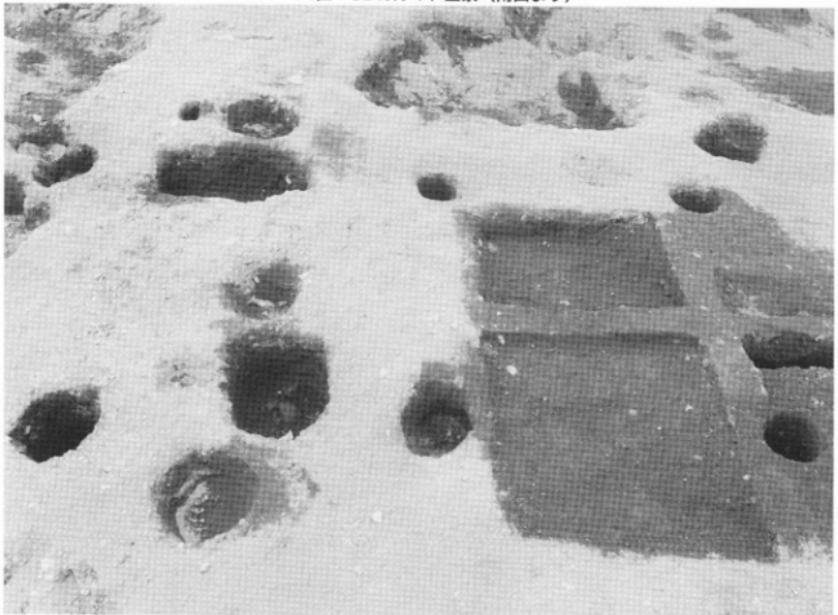
4 1-1区 SB18床面土器出土状況（南東より）



5 1-1区 SB19全景（南より）



1 1-1区 SB19カマド全景（南西より）



2 1-1区 SH-1完掘状況（南より）

図版16



1 1-2区 全景（南東より）



2 1-3区 全景（西より）



1 1-3区 SB1完掘状況（南より）



2 1-3区 SB1カマド全景（南東より）

図版18



1 1-3区 SB2完掘状況（北西より）



2 1-3区 SH-1・SH-2全景（西より）



1 2-1区 全景（東より）



2 原分古墳全景（富士山を望む）

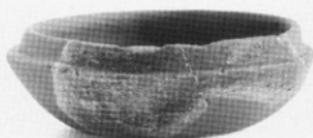
図版20



SB1 11-3



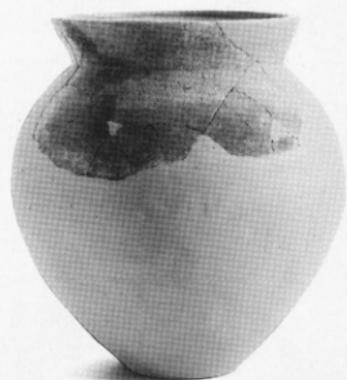
SB3 16-6



SB1 11-6



SB4 18-2



SB1 11-12



SB4 18-4



SB2 13-1



SB4 18-5

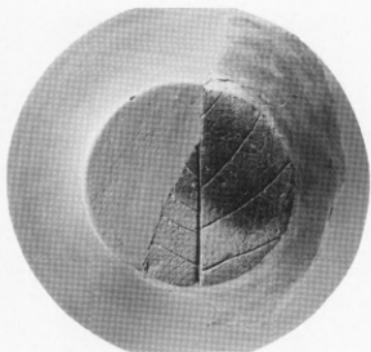
1-1区 SB1~4出土土器



SB4 18-8



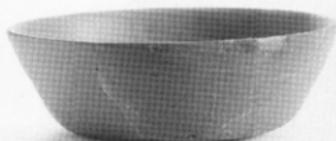
SB4 18-9



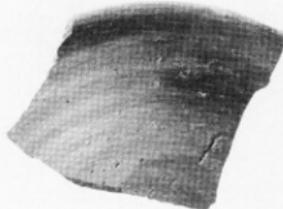
SB4 18-21



SB4 18-13



SB6 20-20



SB4 18-11



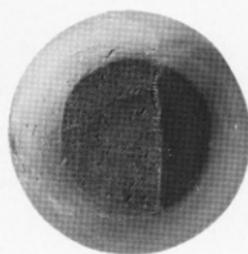
SB4 18-14



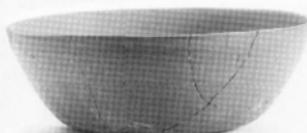
SB6 20-25

1-1区 SB4・SB6出土土器

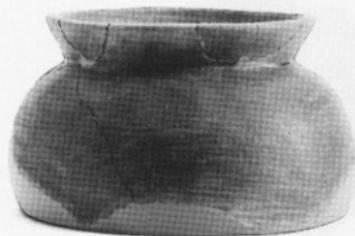
図版22



SB9 24-1



SB14 33-4



SB14 33-5

SB9 24-2

1-1区 SB7・SB9・SB11・SB14出土土器



SB14 33-1



SB18 42-8



SB17 38-5



SB18 42-9



SB18 42-3



SB18 42-10



SB18 42-5



SB18 42-11

1-1区 SB14・SB16～SB18出土土器

SB18 42-7

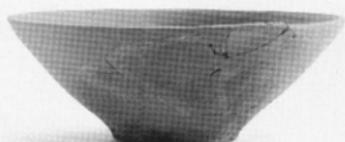
図版24



SB18 42-13



SB18 43-12



SB18 43-5



SB19 46-1



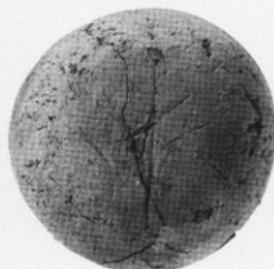
SB18 43-6



SB19 46-2

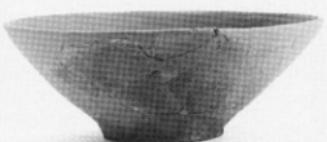
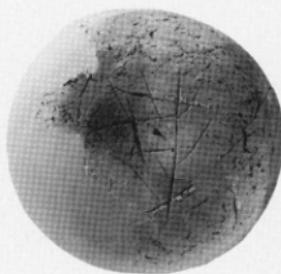
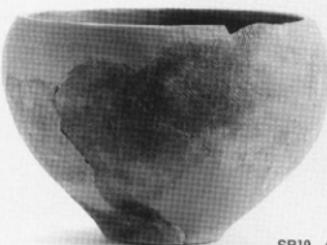
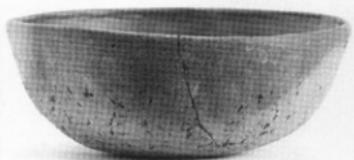


SB18 43-13



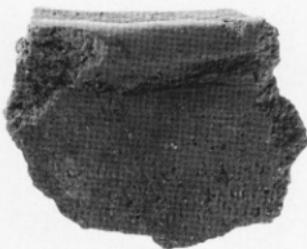
SB19 46-11

1-1区 SB18・SB19出土土器



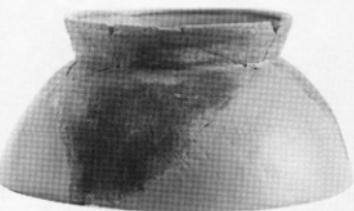
SB19 46-12

SB19 47-5



SB19 46-21

SB18・19 48-17



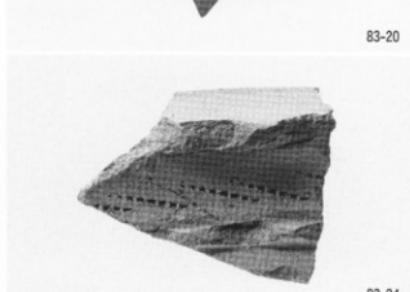
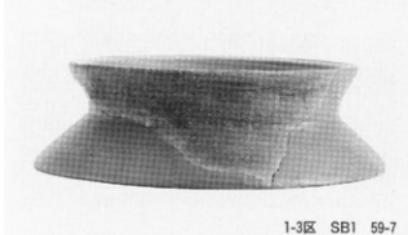
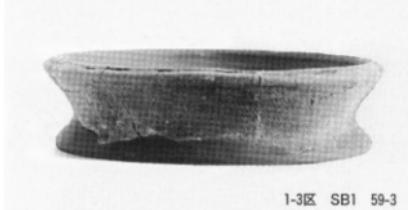
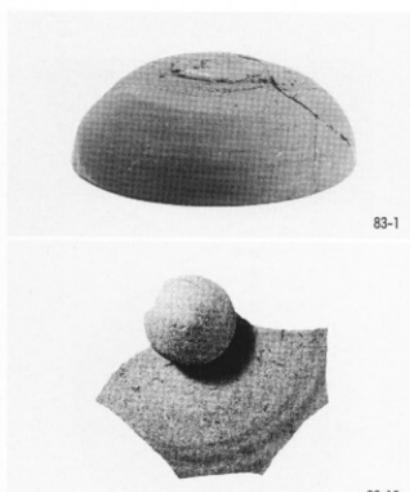
SB19 47-1

SB20 50-1

1-1区 SB19・20・1-3区 SB1出土土器

1-3区 SB1 58-1

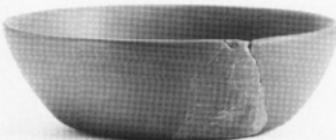
図版26



1-3区 SB1・1-3区 SX-1・攢乱出土土器



83-27



84-24



84-5



84-31



84-9



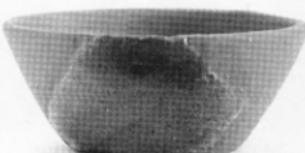
84-32



84-16



84-33



84-18

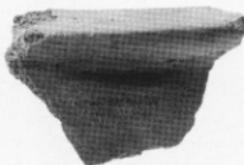


84-34

図版28



85-21



85-26



1-3区 SB1 58-19



SB19 49-1



1-3区 SB1 58-20



SB4 18-23



SB6 20-26



86-1



SB19 49-2



1-3区 SB1 58-18

1区 掘乱出土土器・鉄製品・石製品・土製品



1 石製支脚集合写真



2 1-1区 SB19土器集合写真

報告書抄録

ふりがな	まとばいせき
書名	的場遺跡
副書名	平成12年度 都市計画道路沼津三島線緊急地方道路整備事業(街路B)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第140集
編著者名	井鍋營之
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261㈹
発行年月日	西暦2003年3月25日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 (世界地図)	東経 (世界地図)	調査期間	調査面積	調査原因
まとばいせき 的場遺跡	静岡県駿東郡 長泉町下土狩 字薄原	22342	35度 07分 12秒	138度 53分 31秒	20001201 ~ 20010331	2,645m ²	都市計画道路沼 津三島線緊急地 方道路整備事業 (街路B) に伴う埋蔵文化 財発掘業務

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
的場遺跡	集落	古墳時代後期末	竪穴住居跡 9軒	須恵器 (环身・坏蓋、蓋、甕) 土師器 (模倣坏、屈曲口縁坏、内 湾坏、高坏) (球胴状甕、瓶、壺形土器) 刀子1点、鐵鐵2点、鐵 鎌1点、砥石2点	黄瀬川扇状地上の 古墳時代後期～平 安時代の集落遺跡
		奈良時代前半	竪穴住居跡 5軒	須恵器 (坏蓋、坏、高台付坏) 土師器 (坏、長胴状甕、球胴状甕、 手捏土器10点)	
		奈良時代後半	竪穴住居跡 4軒	墨書き土器1点 土師器 (甲斐型坏、長胴状甕)	
		奈良時代末 平安時代初頭	竪穴住居跡 3軒	須恵器 (凸帶壺1点) 土師器 (駿東型坏、蓋、長胴状甕) (遠江系水平口縁長胴甕1点) 鐵鐵1点、鉄製釣針1点	
			竪穴住居跡 2軒 掘立柱建物 跡7棟 土坑 ピット 溝状遺構	フイゴの羽口1点 石製支脚6点 須恵器転用砥石1点 壺形土器 墨書き土器2点	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第140集

的 場 遺 跡

平成12年度 都市計画道路沼津三島線
緊急地方道路整備事業（街路B）に伴う
埋蔵文化財発掘調査

平成15年3月25日

編集発行 財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20
TEL 054-262-4261代
印 刷 所 松本印刷株式会社 沼津営業所
〒410-0311 静岡県沼津市原町中1丁目7番11号
TEL 055-967-6155